

DB
797
1992
④

寄	贈
中野目徹氏	平成 年月日

政
教
社
の
研
究

中
野
目
徹

95004070

政教社の研究 目次

序章 政教社研究の課題と方法 6

第一節 「政教社の祝宴」

——本稿の問題意識—— 7

第二節 先行研究の動向 22

註 33

第一章 明治十五年の書生社会 43

第一節 「書生社会」の視角 44

第二節 東京大学文学部

——三宅雄二郎の場合—— 55

第三節 札幌農学校

——志賀重昂の場合—— 65

第四節 秋田師範学校

——内藤虎次郎の場合—— 74

註 83

第二章 「国粹主義」の思想形成

——三宅雄二郎に即して—— 97

第一節	東京大学と進化論	98
第二節	フェノロサの哲学史講義	107
第三節	「進歩」と「漸進主義」の思想	115
第四節	政談と学術	123
註		132

第三章	政教社の設立	143
第一節	学士誕生	144
第二節	設立の時期と背景	152
第三節	「同志」と政教社	164
第四節	雑誌『日本人』とその後継誌	176
註		189

第四章	「国粹主義」の理論と実践	202
第一節	志賀重昂における「日本の開化」	203
第二節	三宅雄二郎の「哲学」と「日本人」	215
第三節	「国粹主義」と「大同団結」	226
第四節	条約改正反対運動の一翼	234
註		246

第五章 政教社の変貌 258

第一節 「西而奮同人」制への移行 259

第二節 「帝国の拡大」と「亜細亜」 269

第三節 対外硬運動と政教社 289

第四節 「我観」と「風景」の視線 302

註 315

第六章 日清戦後社会と政教社 334

第一節 第三次『日本人』の発行 335

第二節 「世界主義」と「国家主義」 344

第三節 在野党合同と政教社 357

第四節 「初期政教社」の終焉 373

註 386

終章 政教社の思想的境位 401

註 408

関連年表

史料及び参考文献一覧

凡 例

- 一、本文、引用史料及び参考文献ともに、現在通行の用字・用語による。ただし、固有名詞や史料の仮名使い等はこの限りでない。
- 一、引用史料はできるだけ原本を忠実に再現するよう努めるが、書簡の改行などには整理を加えることとする。
- 一、引用史料中の傍点（圈点）及びルビは原則として省略する。
- 一、引用史料及び参考文献等の註記は、初出の場合を除いて刊行年等を省略して表記する。
- 一、元号と西暦は適宜併用するが、参考文献の刊行年は西暦を用いて表記する。
- 一、人物の雅号は、頻出する三宅雪嶺の場合を除いて、とくに使用開始時期を意識しないで用いる。
- 一、図・表・写真には、註記で掲げたものを含めて掲出頁順に通し番号を付す。
- 一、敬称は原則として省略させていただく。
- 一、巻末に「関連年表」と「史料及び参考文献一覧」を付す。

序章 政教社研究の課題と方法

第一節 「政教社の祝宴」

——本稿の問題意識——

明治二十一年（一八八八）四月三日夕方五時のことである。東京永田町の星ヶ岡茶寮では、「当代の学士、紳士、知名の人士」を招いて政教社の祝宴が始まろうとしていた。当日創刊された雑誌『日本人』の門出を祝う宴である。

星ヶ岡茶寮は、日枝神社境内すなわち星ヶ岡公園の東南隅に建てられ、昭和二十年（一九四五）の空襲で焼けるまで会席料理を供したという。現在、茶寮の跡にはホテルが建ち、神社そのものすら林立するビルに囲まれてしまい、府下有数の景勝地として知られた星ヶ岡一帯の往時を忍ぶのも容易なことではない。しかし、いまでも社殿前の神門に掛かる額には「皇城之鎮」とあり、明治になってから日枝神社が負わされてきた役割を垣間見せてくれる。四月三日が神武天皇祭日であったことを考え合わせると、「国粹主義」を標榜する雑誌創刊の祝宴としては象徴的な舞台設定であったといえよう。そこで以下本節では、この祝宴の様子から政教社の原形と初心を確認しておくとともに、それを手がかりに政教社研究の課題と方法を本稿の問題意識に即して述べておきたい。先行研究の動向を整理することは次節で行う。

さて、『日本人』第二号所載の「政教社の祝宴」なる雑報記事によると、この日招かれて出席したのは次のような肩書きをもつ者たちであった。

文部編輯局長伊沢修二、大日本教育会理事西村貞、文科大学教頭外山正一、国民之友記者徳富猪一郎、大内青巒居士代人佐治実念、丸善商社書店支配人小柳津要人、時事

新報記者渡辺治、元老院議員加藤弘之、「スチューデント」記者兼東京夜学校幹事理
学士吉岡哲太郎、官報局次長高橋健三、博言家高橋五郎、絵入自由新聞記者高橋基
一、学海之指針記者中川重麗、教育報知記者日下部三之介、東京電報記者陸実、理科
大学教授矢田部良吉、やまと新聞記者・欧米政典集誌記者股野時中、毎日新聞記者肥
塚龍、東京絵入新聞記者浅野乾、公論新報記者荒井清、今日新聞記者広岡豊太郎、物
価新報記者木村清四郎、絵入朝野新聞記者清水義崇、報知新聞記者箕浦勝人、改進黨
聞記者枝元長辰、報知新聞記者森田文蔵、理学士宮崎道正(ノ)

まず注目しなければならないのはこの招待者たちの範囲の広がりであるが、彼らは大き
く二つのグループに分けることができるかもしれない。一つは、学界・教育界関係者とで
もいうべきグループで、祝宴を主催した「政教社一同」にとつては恩師又はかつての同僚
にあたる。もう一つは、いわば言論界関係者のグループで、新たに彼らの同業者となつた
グループである。雑誌の宣伝、波及効果も狙つた人選であつたろうが、この二つのグルー
プが政教社設立の母体となつた社会集団や知的環境をも示唆しているといえよう。

祝宴は「政教社一同」を代表して『日本人』編輯人志賀重昂が挨拶をして始まつた。こ
のときの挨拶は、同誌第二号の巻頭論文「『日本人』が懐抱する処の旨義を告白す」とな
つた重要な演説で、政教社の思想的課題を明確にしようという意図からなされたものであ
る。その中で志賀は、「予輩が懐抱する処の大旨義は実に日本の国粹を精神となしこれを
骨髄となし、而して後能く機に臨みて進退去就するにあり」(一)とし、「国粹」には Nat
ionality を対応させた。彼のいう「国粹主義」(二)は以後政教社の思想運動と同義のも
のとして流通することになつたが、その内容を理論化する試みは実はこのとき以来始めら

れたものといえよう。続いて起つた前東京大学総理、東京学士会院会長の加藤は、志賀の挨拶を承けて「其旨趣余ノ考ト符合スヲ以テ余ハ深く此ノ雑誌ノ発行ヲ悦ブナリ」(4)との祝辞を述べ、それより佐治、日下部、矢田部、外山、高橋五郎が順に演説を試み、最後に「政教社一同」から三宅雄二郎が出て半ばユーモラスな謝辞で締め括つたようだ(5)。一同が散会したのは午後九時前後という。

では、こうして創刊された『日本人』はいかなる性格の雑誌であることが期待されて誕生したのだろうか。創刊号は、開巻劈頭「創刊の辞」ともいべき一文を掲げて、その冒頭で次のような決意を披瀝している。

当代ノ日本ハ創業ノ日本ナリ。然レバ其経営スル処転ダ錯綜湊合セリト雖モ、今ヤ眼前ニ切迫スル最重最大ノ問題ハ、蓋シ日本人民ノ意匠ト日本国土ニ存在スル万般ノ困外物トニ恰好スル宗教、教育、美術、政治、生産ノ制度ヲ撰択シ、以テ日本人民ガ現在未来ノ嚮背ヲ裁断スルニ在ル哉。吁嗟斯ノ千歳一遇ノ時機ニ際シ白眼以テ世上ヲ冷視スルハ、是レ豈ニ日本男兒ノ本色ナランヤ。(6)

ここに述べられている「眼前ニ切迫スル最重最大ノ問題」、すなわち日本に相応しい諸制度を選択し、日本人の現在から未来を方向づけることが、以後の政教社にとって中心課題となつていく。そのような課題意識は、明治二十一年という時期を考慮に入れたとき、次のような二つの時代的要請に応えようとする政教社の覚悟と言ひ換えることができるであろう。その一つは、幕末の開国以来三十年という時点において、なお物心両面わたり多大の影響を及ぼしている「西洋の衝撃」に対峙しうる日本独自の文明観を提示することである。福沢諭吉によれば、三十年間の「国勢進歩」に「意外の世変」をもたらしたのは西

洋起源の「有形物の文明」であつて、学問、教育、政治、法律等「無形に属する者」の功績はなお不十分であるという⁽⁷⁾。もしそうならば、精神的な側面において文明化の方向を指し示めすことが、政教社の「同志」たちに課せられた役割であつたといえよう。もう一つは、維新以来二十年という時点において、「明治国家体制」の確立期と重なる中でそれを批判的に相対化していく政治姿勢を構築することである。中江兆民によれば、明治二十一年は国会開設を二年後に控えて「何ゾ政治思想ノ今日ニ養フ可ラザル有ラン」⁽⁸⁾、つまり新しい政治思想の隆盛が待たれるときであつた。『日本人』誌上で論議される「時務時事」は兆民のいう「政治思想」に関する点が中心となるであろうと予測できる。そのような意味において「当代ノ日本ハ創業ノ日本」なのであり、政教社の言論はまさに右の二つの時代的要請との間に生じた思想的葛藤を軸に展開することになるであろう。したがって、政教社の歴史的な役割を評価していく軸もひとえにここに存するといえよう。

創刊を告げる文章が、さらに「日本人」ハ正當ノ順序ト手續トヲ経歴シテ発行スル者也。故ニ各自ガ良心ノ追随スル処ニ遵ヒ時務時事ヲ論窮スルノ権利ヲ保有ス」と続き、最後に「余輩同志ハ「日本人」ノ隆替ト進退去就ヲ俱ニシ、始終全力ヲ極尽シテ之ニ関繋スル万般ノ事業ヲ斡旋シ、兼テ平生懐抱スル処ノ精神ヲ姓名ト共ニ定時刊行雜誌上ニ告センコトヲ誓約スル者也」と結ばれていることにも注目したい。『日本人』は、「同志」意識で結ばれた社員が「各人ノ良心」にしたがつて自由に執筆できる雑誌であつて、各論説に氏名を付すことで「良心」に対する責任を果たそうとしている点でも、思想を伝達する場合の新しい性格の媒体を指向していたといえそうである。この点では、例えば『明六雑誌』が明六社「同志」の談論を筆記して「同好ノ士」に頒つものだったのに較べ⁽⁹⁾、言論

という場において自己の主張を展開すべく組織された結社（政教社）と媒体としての雑誌（『日本人』）は、より密接不可分に結合していたといえるのではないか。

「誓約」に基づく「同志」として前掲の「創刊の辞」ともいべき一文に署名したのは、次の十一名であった。

文学撰科卒業	加賀秀一
農学士	今外三郎
	島地黙雷
東京英語学校教頭	松下文吉
文学士	辰巳小次郎
文学士	三宅雄二郎
農学士	菊池熊太郎
文学士	杉江輔人
文学士	井上円了
文学士	棚橋一郎
農学士	志賀重昂

主義をめぐって「誓約」を交わしている点からいっても、政教社は新しい形態の思想集団であったことを示している。なお、このほか杉浦重剛と宮崎道正の二人を「実質的同人」とみなす見解もあるが（¹⁰）、私は右の十一名に限定して祝宴を主催した「政教社一同」と考えておきたい（表1参照。表にはその後の拡大メンバーも含む）（¹¹）。

表 1 政教社設立の「同志」

本名	号	生没年	出身地 (階層)	卒業校 (専攻)	卒業年	政教社結成までの経歴等
口賀 秀一	央堂	1865～?	岐阜 (士)	帝国大学文科大学選科 (哲学)	明治20年	私立東京外国語学校、学習院
今 外三郎	夢卜	1865～1892	青森 (士)	札幌農学校 (農学)	18	長野中学 (上田支校)
島地 黙雷	雨田	1838～1911	山口 (僧)			浄土真宗 (本願寺派) 僧侶、洋行
公下 丈吉	鬼窟	1859～1931	福岡 (士)	慶応義塾 (英学)	11	東京大学予備門、第一高等中学
長巳小次郎	塵舎	1859～1929	東京 (士)	東京大学文学部 (哲学、政治学)	14	東京大学予備門、第一高等中学
三宅雄二郎	雪嶺	1860～1945	石川 (医)	東京大学文学部 (哲学)	16	東京大学編纂所、文部省編輯局
菊池熊太郎	東巍	1864～1904	岩手 (平)	札幌農学校 (農学)	17	千葉中学、福岡中学
江 輔人	雲外	1862～1905	広島 (士)	東京大学文学部 (政治及び理財学)	17	会計検査院、宮城師範兼中学
井上 円了	甫水	1858～1911	新潟 (僧)	東京大学文学部 (哲学)	18	哲学書院、哲学館
朋橋 一郎	竹莊	1863～1942	東京 (平)	東京大学文学部 (和漢文学)	17	第一高等中学校、東京府中学校
志賀 重昂	矧川	1863～1927	愛知 (士)	札幌農学校 (農学)	17	長野中学 (長野本校)、南洋巡航

本稿は、こうして出発した政教社が明治中期の時代状況の中で占めた思想的境位を、主として三宅、志賀の二人を中心に、思想集団としての存在形態と彼らの主張した「国粹主義」の帰趨に即して解明することを目指している。次に、そのような本稿の課題と方法について、それがどのような問題意識に関わるのかという点を意識しながら、以下三点にまとめてみたい。

政教社については、従来から明治二十年代における新しい思想主体の一方の旗手といわれながら、組織の変遷や雑誌の発行状況など、基本的と思われる事項の解明が意外なほど遅れてきた⁽²⁾。このことは、昨今の徳富蘇峰及び民友社に関する史料集の刊行や個別研究の蓄積と対比したとき、より一層目立ってくる。そこで本稿では、まず政教社の「同志」的結合の実態を明らかにするとともに、彼らがその隆替と進退去就を俱にすることを誓約した雑誌『日本人』とその後継誌の全貌を把握することを、第一の課題としたい。これはいわば思想の生産、流通現場を、それを取り巻く社会集団や知的環境との関わりにおいて捕捉していくための基礎作業といえよう。明治二十年代は「日本ではじめて全国的な「コミュニケーション市場」とも呼びうるものが成立した」⁽³⁾時期とされる。ここで全国的なコミュニケーション市場すなわち言論社会の成立を前提に政教社の組織と媒体の具体像を把握しておくことは、ついで思想内容と思想活動の歴史的位相を問うていく場を設定する意味で重要になってくる。

本稿の第二の課題は、政教社の主張した「国粹主義」の思想構造を基底的な思考方法のレベルで定位することである。従来の研究動向として、陸羯南が主に新聞『日本』に拠って展開した「国民主義」と政教社の「国粹主義」は、厳密に区別されずに一括されて我が

国近代におけるナシヨナリズム思想という評価を与えられることが多かった。確かに祝宴の席における志賀の挨拶にもあったように、政教社のいう「国粹」がナシヨナリティを意味することは、設立当初から「同志」たちの間である程度共通に認識されていたに違いはない。しかし、ナシヨナリズムの理念型をあらかじめ措定し、それとの整合性を測って「国粹主義」の健康性又は限界を指摘するという思想把握の方法は、本稿の問題意識とは別のものである。次節で改めて述べたいと思うが、ナシヨナリズムの概念そのものが曖昧で、かつ研究状況に応じて多義的に用いられてきた経緯がある。むしろ本稿では、政教社が「国粹主義」の思想内容を理論化していく過程で、彼らの行つた知的作業に規制を加えていたと思われる進化論的な発想に依拠する思考方法の特質に注目していきたい。

ところで、右に挙げた二つの課題は相互に不可分な関連性を有することは確かながら、実際の歴史研究を前提としたときそれを一貫する方法で検討していくのは存外難しい。政教社のように実践的な運動とも関わつた集団の思想史を構想する場合、時代状況の中における思想の機能的側面と思想に内在する構造的特質を架橋する新たな思想・史学の領域が設定されるべきだろう。つまり、創刊の辞でも予告されていたように、政教社が言論の対象とした「時務時事」は「宗教、教育、美術、政治、生産」の各方面に及んでいたのである、それらさまざまな分野において政教社の行なつた実践活動と思想内容の相互関連を解明していくのが本稿の第三の課題となる。

思想史というからには、思想それ自体による自律的な展開の可能性を認める立場を共有している。しかしながら、我が国の近代思想史に関する限り、例えば朱子学的な思惟様式を規範意識と捉えて内在的な論理構造を分析していくような方法だけに拠つては、極めて

限定的な頂点思想家しか研究対象にできないことになってしまふ。一方、民衆思想史の成果も、そこで明らかにされた個性、多様性と時代思潮との関連を説明する方法論的自覚には乏しいように思われる。このような状況をふまえて、本稿における以上三つの課題を整理するならば、「思想を思想たらしめている社会的・制度的基盤への注目」⁽¹⁴⁾、あるいは「思想史の研究は、政治史や外交史の研究と密接な関係を保ってきたが、今後の新しい方向の一つは、精神活動の具体的な場を重視することかもしれない」⁽¹⁵⁾といった指摘からも示唆を得ながら、まず思想集団としての政教社の存在形態を規定した組織と媒体を解明すること、ついで「時務時事」に関する言論の内容と姿勢を規定した原理的な思考方法を析出すること、その上で、政教社の言論が明治二十年代に我が国の直面していた時代的要請にどう応えているのか、実際活動と思想内容の相互関連の解明に重点を置いて考察することにある⁽¹⁶⁾。なお、右に述べた課題については、次節において先行研究の動向を整理する中で、さらに視点を換えて考えてみたい。

以上のような問題意識で政教社を取り上げる本稿は、「同志」的結合の原核が形成される明治十五年（一八八二）から、それが最終的に解体する三十三年（一九〇〇）までの約二十年間を対象に据えて、全体をクロノロジカルな構成としている。このうち第一章から第三章までは、「同志」たちの結集をもたらした内的な必然性を「書生社会」の視角を導入して把握していくことに努め、政教社設立に至る経緯を主として組織の面から明らかにしていく。続いて設立以後の政教社を扱う第四章から第六章までの各章は、組織と媒体の変化、時代思潮への対応及び「政治」の分野における実践を画期に区分された三期を対象

に、それぞれの時期に政教社が、いかなる問題状況の認識の下に解決課題を設定し、それに応じる思索と実践を試みたかを、前述の三つの課題に即して検討していくような構成になっている。

ところで、本稿で扱う時期の政教社は、昭和二十年（一九四五）まで続いた政教社全体の歴史からみると、初期の一時期にすぎないということになろう（¹⁷）。先行研究のうちで、主に雑誌『日本人』及びその後継誌の発行状況に基づいて時期区分を試みているのは、前掲の塚本三夫と有山輝雄の二人である（註¹⁸参照）。二人の見解は基本的には一致しているので、ここでは有山の区分を紹介しておく（¹⁹）。

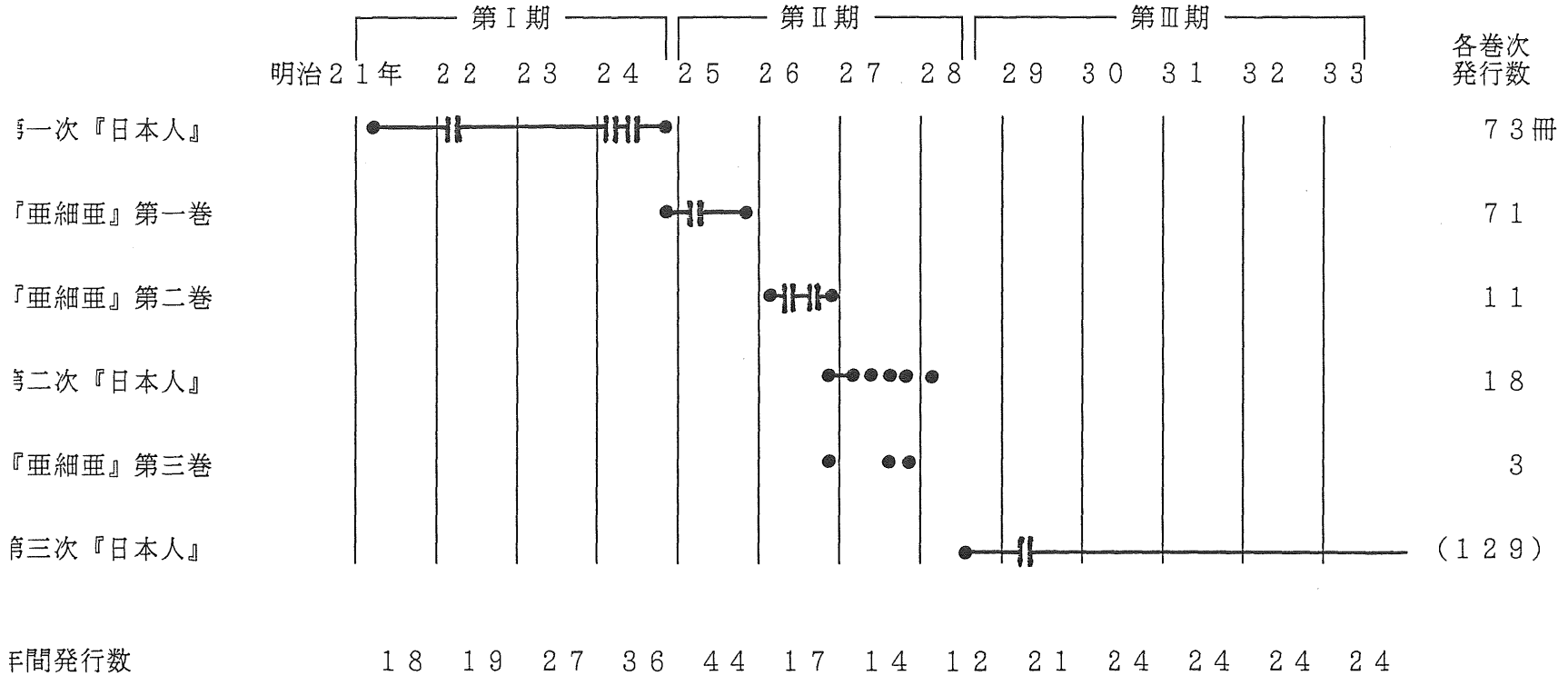
第一期 『日本人』 『亜細亜』 （明治二十一〜三十九年）

第二期 『日本及日本人』 （明治四十〜大正十二年）

第三期 昭和期 『日本及日本人』 （大正十二〜昭和二十年）

この時期区分にしたがっていると、本稿の検討範囲は第一期政教社のさらにその一時期ということになる。確かに雑誌という媒体のみから判断すると右のような区分になるのであるが、すでに述べたような他の理由も加味して判断するならば、明治三十三年以降、設立の「同志」が三宅一人を残して皆去ってしまった政教社は、すでに「国粹主義」を主張しなくなっていたことも相まち、もはや本稿と同じ問題意識で論じることができないと考えられるのである。そこで、本稿ではこの間つまり明治二十一年から三十三年までを「初期政教社」と捉え、それをさらに組織と媒体の特質を組み合わせた判断によって、表2のI〜IIIのような三期に細分化して検討したい。なお念のためにいえば、第四〜六章はこの第I〜III期に対応している。

表 2 雑誌『日本人』と後継誌の発行状況



では、「政教社の研究」と題し、右のような課題と構成を設定した本稿はいかなる史料を前提に立論できるのか。思想史を歴史研究の一分野と位置づけたとき、史料批判が方法論の基礎的な部分を成すはずである。すでに明らかのように、第一の課題として掲げた組織と媒体は単に歴史的な実態概念であるだけでなく、政教社の思想を説明していくためのいわば分析概念といえるものである。したがって、『日本人』とその後継誌の誌面分析が中心になるにせよ、それを非人称的なテキストとして扱うのではなく、いわゆる周辺史料まで含めてできるだけ広範囲の史料を渉猟することにより、「同志」たちの主体性と関連させて把握することに努め、むしろ彼らの言論活動を歴史状況の中に位置づけていくことに力点を置きたいと考えている。個々の史料批判は適宜引用箇所¹⁹の註記等で行なうとして、本節では次にそのような〈組織〉と〈媒体〉各々に関する史料について総論的な見通しを示しておきたい（巻末の「史料及び参考文献一覧」参照）。

〈組織〉すなわち政教社の構成員、所掌分担、財政等の問題は、別の言い方をすればグループのメンバー・シップとマネジメントの問題であるが、本稿ではとくに結集の過程を究明することを重視し、そのために前半三章を割いている。明治期に「社」を名乗る集団は、明六社、愛国社から玄洋社、平民社まで、様々な目的の実現のために同志が集結した思想集団あるいは運動集団であった。政教社も単に雑誌『日本人』とその後継誌を発行するための発行所というようなものではなく、そのような「社」の系列に連なるものである²⁰。そこでまず、政教社が〈組織〉の運用に伴って作成した記録（archives）の残存可能性はどうかという点、残念ながらほとんど期待できない。知り得る限りでも、政教社は三度の火災に遭っているし、大正十三年（一九二四）以降の三宅退社後の政教社には〈組

織の連続性そのものに疑問がある。

したがって次に、政教社のメンバー各個人に即して史料を蒐集する必要が生じてくる。もう一度表1、3に戻って、本稿が対象とする政教社の「同志」たちとその後の拡大メンバーを確認してほしい。このうち、ともかく全集があるのは志賀、島地、杉浦、内藤の四人であり、井上には選集がある。もつとも、単に著作だけでなく書簡、日記まで収めた全集となると、杉浦と内藤のものだけということになる。自伝、遺稿や回想録も、松下のほか井上、杉浦、宮崎、内藤についてはいくつものものが残されているものの、政教社の中心と考えられる志賀と三宅について本格的な評伝がないのは寂しい。本稿ではそれらを適宜利用していくのはいうまでもないが、さらに三宅、志賀、棚橋、井上、杉浦、宮崎に関しては御子孫（あるいは後述の学校等）が守ってこられた文書や遺品等を拝見させていただく機会を得たので、可能な限りその成果を取り入れていきたい。活字史料にないそれらの価値はいうまでもなく、生前の彼らを直接、間接に知る御子孫のお話を窺うことから、歴史的に人物像を再構成するに当って貴重な示唆を得られるものである。

また、「同志」たちの経歴をみれば判るように、島地を除いた彼らはすべて維新以後に高等教育を受けた世代であり、卒業後は棚橋が郁文館、井上が哲学館（現在の東洋大学）、杉浦が東京英語学校（現在の日本学園）の創立者あるいは有力者である上に、残る「同志」たちもすべていずれかの学校で教鞭を執っていたのであるから、学校史料と政教社の（組織）の関係は当然に重視されなければならない。その点で、最近各後継校がそれぞれの百年史編纂事業によって未知の関連史料を発掘したことは高く評価される。

ところで、自伝とはいえないけれども、三宅の『同時代史』は彼の生涯に政治史を軸と

した近代史全体を重ねた「壮大なる歴史叙述」⁽²⁰⁾で、「雪嶺著作の最後の大きな記念塔」⁽²¹⁾ともいわれている。同書は主に新聞記事を材料にそれを記憶に基づいて編年体に構成したもので、少なくとも明治十年（一八七七）くらいからは、直接、間接に見聞したことを交えた回想録ということもできる。評論の部分と事実の部分に厳密な区分が必要なはいうまでもないが、「何事も突発ならず。突発と見ゆるは由りて来れる所あるも、準備期間は眼に映ぜず。準備の漸く熟し、漸く整ひ、愈々形態の成る時、往々突発なるを覚ゆ」⁽²²⁾という雪嶺一流の時代の読み方は鋭く、本稿では終始これを「座右の史書」として利用することができるであろう⁽²³⁾。

視点を換えて「媒体」すなわち思想の伝達手段と運動の根拠地としての雑誌メディアに着目したとき、従来は文献として論じられることが多かったため、新聞などと較べても史料論の対象にはなりにくかったように思われる。しかし、例えば三宅が「新聞は一日を念とするも、雑誌は然らず。或は半月、或は一月、或は一層久しきを期す。後日書籍と為るべきを雑誌に分載するは屢々見る所なり。登載当日ほどの効用なくとも、必しも其の当日に限るとせず」⁽²⁴⁾ というように、論説の書き手によって新聞と雑誌の違いが自覚されていたとすれば、やはり雑誌の史料としての独自性も十分考慮しなければならないのである。本稿の対象時期よりは下るが、三宅はまた「雑誌豈に新聞の附属たるべきか。憶ふに新聞、雑誌、書冊、これ当代に於ける思想交換の大機関、雑誌は他二者の中間に位して双方の趣味を帯び、隨て雑誌にして新聞に類し、新聞にして雑誌に類するありと雖ども、而も雑誌其物は自ら雑誌としての特長を失ふことあるべからず」⁽²⁵⁾と書き、雑誌が「思想交換の大機関」の中で特長をもったものだとして述べているのである。

なお、そのような点からいっても、政教社研究にとって朗報といえるは、雑誌『日本人』の複製版と、有山輝雄による目次総覧の完結ということであろう。

『日本人』の複製は、主に東京大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵の原本により、創刊号から明治三十九年（一九〇六）十二月二十日の通巻四四九号まで、つまり先の時期区分でいえば有山という第一期の分を公刊したものである（一九八三年、日本図書センター）。判型をすべてA5判にしまつてしまっている点と別巻の解説、人名索引には問題を残しているけれども、本文は写真版複製なので信頼できよう。本書の『日本人』及びその後継誌からの引用もすべてこの複製版によっている。

また、有山による目次総覧は、前引の解題を付して全五冊にまとめられて発刊されたもので（一九七七〜八四年、日本近代史料研究会）、政教社と『日本人』及びその後継誌の大概を知るには至便である。ただ、この目次総覧を通覧したとき気になるのは、年とともに無署名論説が増え、著者の特定が難しくなってくることである。これは発行停止処分にあらかじめ対応する措置と考えられるが、当時の読者はごく自然に著者を推測できたのではないかと思うと、雑誌や新聞の無署名記事の著者特定は、近代の史料論では重要な解決課題だといえよう⁽²⁶⁾。そのほかにも、発行部数や読者層の特定など、へ媒体への具体的な解明には残された課題が多いものの、本稿では可能な限りそれらにも論及していきたい。以上、四月三日の祝宴を手がかりに、政教社研究の課題と方法について本稿の問題意識との関わりを中心に述べてきた。それをなお一層明確にするために、次節ではナショナルリズム論を軸に蓄積されてきた先行研究を、とくにその歴史意識の側面に注目して整理してみたい。

第二節 先行研究の動向

政教社については、従来から多くの研究が積み重ねられてきている。本節では、それらのうちから今日なお学ぶべき論点を含んでいる代表的な先行研究のいくつかを取り上げ、その動向を整理することを通して、前節で設定した本稿の課題と方法が研究史上で主張しうる意義を再確認していきたい。

先行研究を概観したときにまず気づくことは、政教社の「国粹主義」と陸羯南の「国民主義」とが明確に区分されずに扱われ、二つのグループに共通する思想は「健康なナショナリズム」¹⁾と評価されてきたことである。また、政教社の中でも三宅雪嶺や志賀重昂など一部メンバーの初期著作を分析することによって得られた思想像が、比較的安易に政教社全体の思想像に置き換えられてきたように思われる。本稿が、第一に克服すべき課題として政教社という思想集団の〈組織〉と〈媒体〉の実態解明を挙げたことは、そのような先行研究の傾向を意識してのことである。

しかしながら、以下で行う整理においては、右に述べたような先行研究のあり方についてはひとまず問わず、広い意味での研究動向あるいは問題意識を取り上げることとする。そこでまず注目しなければならないのは、従来の政教社研究がナショナリズム論として蓄積されてきたということであろう。そのことが孕んでいる問題性は、研究史の出発点に遡って考えてみると、「国粹主義」及び羯南の「国民主義」の思想が、我が国を今次大戦に導いたとされる「超国家主義」の幻影とともに想起されるゆえに、極めて慎重な取り扱いを受けてきたということに由来する。とりわけ敗戦後まもない状況においては、いささか

でもナショナルな臭味を帯びたものに向つて冷静な対応をすること自体、かなりの困難を伴っていたらしい。そのような中であつて、いち早く陸羯南の評価を試みた丸山真男は、次のように述べている。

言葉もまたその運命を持つ。日本精神とか国粹とかいう名は、ついさきごろまで、あらゆる価値の源泉であり、すべての主張ないし運動はその名において己れを合理化しようと競つていたのに、いまやそれは無知と蒙昧と誇大妄想のシノニムとして侮蔑と嘲笑のうちに歴史的過去の彼方に遺棄せられようとしている。今日「日本」イデオロギーと封建的反動との結合はほとんどアプリオリであるかにみえる。しかしどのような兇悪な犯罪人も一度は無邪気で健康な少年時代を経てきたように、日本主義の思想と運動も、大正から明治と遡つてゆくと、最近の日本型ファシズムの実践と結びついた段階とはいちじるしくちがつた、むしろ社会的役割において対蹠的といひうるほどの進歩性と健康性をもつたものにゆき当るのである。明治二十年代の日本主義運動がそれであり、その最も輝けるイデオログの一人がここに叙べようとする陸羯南である。(28)

「日本型ファシズム」がまだ「最近」に属する時点において、「日本精神」や「国粹」と羯南の「日本主義運動」を厳密に腑分けすることから始めた丸山をもつて、研究史上の出発点とすることができるだろう。もちろん同氏以前にも、明治二十年代の「国粹主義」を視野に入れようとした研究はみられた。清原貞雄、鳥井博郎、桑木巖翼らが、それぞれの著書の中で「国粹主義」の簡略な紹介を試みている。このうち、例えば清原が、西村茂樹の『日本道徳論』（一八八七年、私家版）を「二十年代に於ける国粹主義の先駆」(29)

と位置づけたことなどは、今日なお傾聴に値する指摘である。しかしながら、本稿の課題に沿っていえば、敗戦後の占領下で「第二の開国」を意識しながら「真の近代国家」を建設しようと模索していたときに、「近代国家は国民国家と謂われているように、ナシヨナリズムはむしろその本質的屬性であった」⁽²⁰⁾との認識から、主体的に明治二十年代へと遡っていたのは、やはり丸山をもつて嚆矢とする。

羯南の「国民主義」を含めて政教社の「国粹主義」をナシヨナリズムの一類型、とりわけその「進歩性と健康性」を属性とみなす見解は、今日でも広く浸透しかつ一面では妥当なものにちがいない。しかしその場合でも、二つの問題がどうしても気になる。一つはナシヨナリズムの概念規定が曖昧であること、もう一つは日本を含む戦後世界におけるナシヨナリズムの存在状況が研究内容にまで影響を及ぼしていること、である。

いったいナシヨナリズムとは何であるのか。フランス革命に起因するとされる古典的形態から、二度の世界大戦を経て植民地独立をもたらした民族主義まで、様々な様態を有効に総括する定義は存在しないとみてよい。したがって、従来多用されてきた「ナシヨナリズム」は、多分に各研究者のイメージにもとづく不確かな定義が一人歩きしたものにすぎないというべきだろう。本稿と関連する近代日本のナシヨナリズムについても明確な規定が乏しい現状において、例えば橋川文三による「懐しい山河や第一次集団への本能に似た愛情ではなく、より、抽象的な実体、即ち新しい政治的共同体への忠誠と愛着の感情（傍点原著者）」⁽²¹⁾という定義は、とりあえずの道標になるであろう。ここで「新しい政治的共同体」というのは、先に丸山がいった「国民国家」としての「近代国家」を指すものといえる。しかしこれは、あくまでも西欧型の国民国家をモデルとした一つの理念型として

のナシヨナリズムであつて、いまや世界的にいえばそれが特殊な擬制的概念であることは明白であり、現実の歴史過程におけるさまざまな「国家」意識の発現形態を常に包括することはできないのである。

ナシヨナリズムをめぐるもう一つの難しい問題は、それが過去にだけ属するものではなく、常に研究者をとりまく状況として現在進行形で顕れるということである。例えば、昭和二十六年（一九五一年）といえばサンフランシスコ講和条約の年であるが、この年に丸山は、「過去のナシヨナリズムの精神構造は消滅したり、質的に変化したというより、量的に分子化され、底辺にちりばめられて政治的表面から姿を没したという方がヨリ正確であろう（傍点原著者）」⁽²⁾と述べて、払拭されるべきナシヨナリズムの残滓への警戒を怠っていない。要するにナシヨナリズムは、古典的近代国家のモデルに通有な理念型としてはへ正のイメージで歴史にその健全な発現形態が求められると同時に、戦後我が国の研究者をとりまく状況としてはへ負のイメージとして揚棄されるべき過去の遺物とみなされるという、一見矛盾する傾向が指摘されよう。その後、吉本隆明の「大衆ナシヨナリズム論」やいわゆる民衆思想史の成果を加えながらも、ナシヨナリズムをめぐるこのような問題は現在でも基本的には払拭されていない⁽³⁾。

以上二点の問題を含みながらも、ナシヨナリズム論として出発した政教社研究はさまざまな展開を見せながら今日に至っている。やはり政教社ではなく陸羯南を論じたものであるが、植手通有によって、日清戦争後における羯南の対内論が「立憲主義的ないし自由主義的側面が前面に打出されてくる」ことにより「軍国主義」批判へと向つたのに対し、対外論では「帝国主義」批判及び平和主義の論理が貫徹せず、日本の軍事的膨張主義を有効

に批判することができないのは「不可解」であるとされているのは(24)、初期羯南のナシヨナリズムがもっていた「立憲主義的ないしは自由主義的側面」を高く評価した結果、のちに状況の変化に応じて唱えられた彼の「帝国主義」論を、同じ評価基準で捉えていくのが難しくなってしまったことを示している。このような問題意識を前提とするかぎり、政教社「国粹主義」の思想像は、ナシヨナリズムとしての健康性又は限界を指摘する地点から抜け出せないことになろう。その点では、政教社の思想的課題を国民国家の実現にみるいわば国民国家論からするアプローチも(25)、西欧型の「近代国家」を念頭においているかぎり、ナシヨナリズム論と同じ地点に立っているものである。

そこで本稿では、多分に擬制的なナシヨナリズムやそれに付随するとされる概念を前提とするようなパラダイムをいったん除去して、むしろ個々の発言状況に即した政教社のもつ「幅」をそれとして認める地点から出発したいと考えている。本稿の第二の課題、すなわち「国粹主義」の思想構造を基底的な思考方法のレベルで把握していこうとする問題意識は、以上述べたようなナシヨナリズム論として蓄積されてきた先行研究の動向を、少しでも流動化させることを目指して設定されたものである。

さて、ナシヨナリズム論として出発した政教社研究の具体的な成果としては、他に色川大吉、岩井忠熊、鹿野政直、本山幸彦(26)らの仕事を挙げることができる。

このうち鹿野は、当初政教社を自由民権運動「挫折」後に観念論化した「市民的変革思想」のうちの「体制改良派」と位置づけ、「国粹主義」のことは、権力による「天皇制理念の権力主義的造形」に対して「秩序におぼれていこうとする意識」の体系とみなしてい

た。彼が基盤とする階層として指名したのは、養蚕業と茶業を代表とする土着産業の経営者＝弱小ブルジョア＝であって、日清戦争を契機に「権力の論理」との対決点が曖昧となり階級的性格とされたものが変質すれば、「国粹主義」の基本構想も破綻をきたし、のちには「官民一致」を説く国家社会主義へと転回、屈折し、天皇の神聖化を媒介に「右翼反動」への途をも拓いていった、とされる。このような思想把握の方法は、近代思想史上に政教社「国粹主義」を位置づけることに主要な関心が置かれ、その点では一つの見通しを提示しているものの、歴史状況の中で占める思想的境位の実相が見えにくくなっている点では問題を残している。しかし同時に、鹿野が次のような文明論的な視点を準備していたことには留意しなければならない。

欧米の世界制覇への対抗の思想としての国粹主義は、欧米人にたいする日本国民の正当な権利の主張＝ナシヨナリズム＝となり、また欧米列強へのアジアの一国としての正当な権利の主張＝（裏をかえせば）アジアとの連帯意識となる。それが国粹主義の本来の対外意識であった。そうしてそれが権力にたいする場合とおなじように屈折するというのは、ナシヨナリズムがたんなる排外主義になる可能性をもっていたということであり、アジアとの連帯意識にもかかわらず日清戦争を支持したことをさすのである。(37)

その後鹿野は、三宅を論じる文章の中で「雪嶺の主張は明確であって、ヨーロッパの優越が先験的でありしたがって絶対的であるとの認識を、うちやぶろうとしているのである」(38)とみなし、また、羯南を含めた政教社の思想を「国粹主義の思想家たちの提起した課題は、基本的には、欧米文明の世界制覇という“世界史の法則”に懐疑の念を呈し、ベ

つのかたちの文明への道をさぐろうとするにあつた。それは、アジアの主体性による近代化への模索であつたといつてもよいであろう」(29)と評価するなど、文明論的な視点を意識しつつづけている。ただし鹿野の場合、右にいう「国粹主義」がアジアとの連帯意識を挺子に「欧米の世界制覇」的な秩序に対して日本独自の文明論の構築を模索していく端緒を活性化できているだろうか。

実はこの点が本稿の第三の課題と関連してくると思われる。松浦玲によれば、晩年の勝海舟は「西洋文明にしか過ぎない「文明」を鼻に掛けて、アジアを侮蔑的にあしらう」ことを忌み嫌い、したがって政府や軍部が行う対朝鮮政策、さらに日清戦争には「ことごとく反対」であつたといふ(30)。松浦の指摘は、文明観の問題と現実の政策とが一体であつたことを教えている点で重要である。すなわち、政教社の場合も、彼ら言論の対象とした「時務時事」の各分野、とくに「政治」の分野における実際活動と、「国粹主義」の思想内容とが相互に関連する位相において、その思想活動全体の評価がなされるべきなのではないか。この問題は本稿第四く六章の中心課題となつている。

次に色川大吉による一連の仕事を取り上げておきたい。色川は、やはり民族の独立(ナシヨナリズム)を分析し評価基準の一つとする地点から出発して、自由民権運動を継承する明治二十年代の思想・文化は「在野的なナシヨナリズム」を共通のエトスとし豪農Ⅱ中農層を基盤とみなした上で、そのような「新思想主体」としては蘇峰が代表する民友社(西欧派)と政教社(国粹派)を挙げる(31)。

このうちまず、基盤についていえば、岩井忠熊も政教社の基盤を耕地地主Ⅱ豪農にみて

いるが、色川と岩井は、政教社の「国粹主義」を知識人による耕地地主＝豪農＝中農層の懐抱する排外主義的でない在地のナシヨナリズムを理論化したものと捉え、そのような基盤とする階層が没落、分解するときはそれに伴って思想の機能ばかりか構造までが変質してしまうと考える。それぞれ若干ずつニュアンスの違いはあるけれども、この点では、先に検討を加えた鹿野政直の初期の仕事の中にも同様の傾向が色濃く認められる。しかしこの基盤と担い手については、岩井が「『日本人』『日本』のグループは知識人であり言論人であつて、彼ら自身の生活が、特定の階級に根ざしていたわけではない」(4)と述べ、両者の間に距離を認めていることは妥当であろう。

そこで担い手についていえば、色川は民友社と政教社の両社(派)を、「明治の青年の第二世代」という一種の世代論を導入することによって特徴づけている。すなわち、一八五〇年代生れの「明治の青年の第一世代」が主とし実際の政治活動に参加していったのに対し、一八六〇年代生れの「明治の青年の第二世代」は「明治文化の創始者」と呼ぶにふさわしい人々だとして、この世代の誕生によって「日本知識階級」が成立したことを次のように述べている。

これらの人びとは一八八〇・九〇年代にそれぞれの分野で独自の先駆的役割をはたすが、このころになると、わが国社会にも各種学校などで数千人の文化専従者が養成され、特定の受容層もうまれて、本格的な「知識階級」が成立したことをみとめることができる。ただ、この知識階級は、先にものべたように明治維新や自由民権運動によって育てられた新しい地方知識人を主流としたものではない。むしろ農村からの都市への逃亡者、立身出世のための移住者が、地方城下町出身の知識人と共に、東京を

舞台とした都市知識人のプールに合流したところに形成されたものである。(43)

政教社の「同志」や拡大メンバーは、三宅も志賀も内藤もおおむねみな色川という第二世代に属することとなり、彼らには「知識階級」という立場が与えられることになる。

知識階級、知識人あるいはインテリゲンチヤについては、すでに戸坂潤が『日本イデオロギー論』（一九三五年、白揚社）において、一九二〇年代のマルクス主義興隆期にその概念が普及したときから混乱や錯誤が入り交じっていると論じ、その後もいわゆる転向の問題から戦後の「進歩的知識人」像の定着まで、紆余曲折を経ている。前述したナシヨナリズム同様、有効な定義などなしえないうちに、最近ではもはや論じられることすら少なくなってしまうた。色川がいうように、明治十年代になると高等教育機関が整備されるのに伴い、我が国でも近代的な知識人層が堆積を開始したことは確かであろう。それならば、明治の思想、文化の担い手となった青年たちをより実態に即したものととして把握できる方法はないのだろうか。

政治社会学というエリート理論も確かに一つの示唆を与えてくれる(44)。明治二十年前後の日本は、少数の「統治エリート」が目まぐるしく「周流」する、その意味では極めてフレキシブルな社会であった。政教社に結集した青年たちは、このあと第一、二章で順に明らかにしていくように、「統治エリート」として養成され、そのような自意識をもつ者たちであった。このような社会集団としての特徴は、彼らの「国粹主義」の思想にも影響を与えないでは措かなかつたと思われる。K・マンハイムがいうように、「教養によつて得られた精神財を共通にもつ」ということは、門閥や身分や職業や富の相違をますますなくし、また教養という特徴を通して形成された個々のひとたちを結びつける傾向をもつてい

る」(56)とすれば、本稿ではそのような柔軟に推移する結びつきの実態を書生社会から学士社会の生成過程にみて、その中でいわゆる下部構造からも比較的自由に形成されていた思想世界を捉え、そこに政教社設立の基盤を見いだしていくこととしたい。

最後に、その他の研究動向にも触れておこう。

政教社をはじめとする明治二十年代の新しい思想主体は、その出発点において単に鹿鳴館に象徴される軽佻な欧化に対する反動にのみ突き動かされたのではなかったと思われる。後述するように、政教社の「同志」たちは当時における最も正統的な西洋文明の受容者としての側面を有していたのである。本稿が政教社の研究を通して、明治二十年代の時代像にも言及しようとする場合、帝国憲法を軸として制度的には「明治国家体制」が確立されたとするならば、すでに所与の存在となりつつある現実の国家体制と対峙したとき、その作為性を看破した上でいかに本質的な国家批判が可能なのかということ、思想を評価する場合の根拠にしていかなければならないのではないか(56)。それは政治体制の問題だけでなく、近代社会のあり方を選択していく文明論的な課題とも関わっている。

この点では、K・B・パイルが、民友社と政教社の対抗(Dival)関係をカルチュラル・アイデンティティ(文化的同一性)の問題として社会心理学的に扱って、それを明治二十年代特有の時代的要請とみなしているのは、検討に値する成果である(57)。また別に、磯田光一が「文芸史」の立場から、近代日本の特質を「欧化とナシヨナリズムの両極にまたがっている鹿鳴館の象徴性は、狭い意味での「鹿鳴館時代」が終幕したのちにも、さまざまなかたちをとって生きのびざるを得なかった」(58)と述べ、いわば欧化すら伝統

にしてしまう日本人の特性を明治二十年代のもつ柔軟性として捉えたのも、既存の時代像を流動化させた功績は小さくないと思われる。このような視座の転換は、担い手たちの思想的葛藤の意味を考えると、魅力的な課題設定を可能にしてくれる。前田愛の文学史にも共通するものだが、言語、象徴、空間等の視点を縦横に駆使した磯田の方法は、現在の歴史学が社会史的発想を無視しえなくなったことともあいまち、歴史学の方法論として洗練されてもよいのではないか。

我が国でも一九七〇年代以降、近代化論の批判的超克、マルクス主義の退潮、文化相対主義の浸透などを経て、歴史学の周辺でも、民俗学の見直し、文化人類学の衝撃、社会史の導入などが、歴史学そのものの方法や対象に変革を迫っているといえよう。歴史学の分野における研究態度としては、多分に流行的要素を含む幾筋もの潮流に足をすくわれることのないよう留意するのは勿論だが、それらの動向が知的認識の枠組みに及ぼしつつある影響を無視することはできなくなっている。本稿が、政教社の思想集団としての歴史的な存在形態に注目し、〈組織〉と〈媒体〉といういわば思想構造と思想運動の中間領域において政教社の言論が有した思想性を把握、評価していこうとするのは、以上のような歴史意識の動向を課題と方法に反映させていこうとする意図に発しているのである。

そこで次の第一章では、以上述べてきたような問題意識をふまえて、政教社という思想集団への結集を必然ならしめた書生社会の解明から始めてみたい。

序章 註

- (1) 「政教社の祝宴」、『日本人』第二号（一八八八年四月十八日）三〇—三一頁。
- (2) 志賀重昂「日本人」が懐抱する処の旨義を告白す」、同右一頁。
- (3) Nationality を表現するための名辞は、第四章註3にも挙げたようにさまざまに変化を遂げている。改変の理由は重要であるが、本稿ではそれらを代表させて「国粹主義」とする。
- (4) 「『日本人』創刊祝宴における演説筆記」」（志賀家所蔵）二頁。ただし、この筆記では日下部三之介の演説が欠けている。
- (5) 同右二二頁。全文は次の通りであるが、それによると政教社の活動には設立当初から財政的な危惧を伴っていたことが判る。
- 余ハ他ヲ言ハズ、単ニ日下部君ノ芳意到着ナルヲ謝ス。然レドモ其会計向一条ニツイテハ、余ハ君ノ御安心ヲ得ルコトヲ希望ス。元来政教社ハ富メルニ非ズ。然レドモ其力乃限、此席ニテ呈上セル御馳走ヨリハマダマダ立派ノ御馳走ヲ呈上スル事ハ出来ルナリ。故ニ政教社会計向ノ事ハ御氣遣御無用ナリ。聊カ日下部君ニ対フ。
- (6) 「『日本人創刊の辞』」『日本人』第一号（一八八八年四月三日）表紙裏頁。
- (7) 福沢諭吉「文明の利器に私なきや」、慶応義塾編『福沢諭吉全集』第一一巻（一九七〇年、岩波書店）四二二頁。初出は、明治二十一年三月二日付『時事新報』。
- (8) 中江兆民「政治思想の張弛」、『中江兆民全集』第一四卷（一九八五年、岩波書

店〕一九三頁。初出は、明治二十一年三月二十日付『東雲新聞』。

(8) 「〔明六雜誌発行趣旨〕」、『明六雜誌』第一号〔一八七四年〕表紙裏頁。

(10) 有山輝雄「雜誌「日本人」・「日本及日本人」の変遷」、日本近代史料研究会編刊『雜誌「日本人」・「日本及日本人」目次総覧』I〔一九七七年〕五―六頁。

(11) その理由は次の通りである。

(1) 杉浦と宮崎は志賀や三宅などにとって先輩、恩師であり、世代や立場を異にする。

(2) 宮崎は前述した「政教社の祝宴」で招待者に含まれている(註1参照)。

(3) 『日本人』第三号(一八八八年五月三日)の記事の中で、杉浦は政教社のことを指して「貴社」と呼んでいる(同誌三〇頁)。

(4) 『日本人』第八号(一八八八年七月十八日)の記事の中に、「社友杉浦重剛氏並びに社員菊池が云々」とある(同誌二七頁)。

しかしながら、前引の「〔『日本人』創刊祝宴における演説筆記〕」五頁所収の矢田部良吉の演説には「政教社ノ社員モ其十三人中十一人ハ大学卒業ノ学士ナリ」とあり、この場合杉浦と宮崎も含めているように思われる。この間の事情をより鮮明にするために、『日本人』に掲載された「あいさつ」「祝詞」等の執筆者を一覧する表3を作成した。これによると、政教社は明治二十二、三年にかけて杉浦、宮崎、中原を加えて拡大していったのであり、二十四年になって長沢と内藤が登場するに及んで変貌の兆しが見えはじめるのである。

(12) 政教社に関する基礎的な研究としては、前掲の有山による解題論文(註10)のほ

表 3 政教社の「同志」と拡大メンバー

年.月.日	『日本人』	加賀	今	島	松	辰	三	菊	杉	井	棚	志	宮	杉	中	長	内
明治		秀一	外三郎	地黙雷	下丈吉	巳小次郎	宅雄二郎	池熊太郎	江輔人	上円了	橋一郎	賀重昂	崎道正	浦重剛	原貞七	沢説	藤虎次郎
21. 4. 3	第1号 「同志」	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●					
21.11. 3	第15号 天長節祝詞		●	●	●	●	●	●	●	洋	●	●					
22. 1. 3	第19号 年頭祝詞		●	●	●	●	●	●	●	行	●	●					
22. 5. 7	第24号 改刊の辞	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●				
23. 1. 3	第38号 年頭祝詞	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
23. 4. 3	第44号 「四月三日」	●	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●	●		
24. 1. 6	第65号 年頭祝詞	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

かに、次のものが挙げられる。

- (1) 松本三之介「『日本及日本人』」、『文学』第二四卷第四号（一九五六年）。
- (2) 植手通有「『国民之友』・『日本人』」、『思想』第四五三号（一九六二年）。

- (3) 塚本三夫「『政教社』における組織とイデオロギー」、『東京大学新聞研究』所収「紀要」第一七号（一九六八年）。

- (4) 明治文学全集三七『政教社文学集』（一九八〇年、筑摩書房）所収の松本三之介「解題」並びに佐藤能丸編「年譜」「参考文献」及び「政教社文学年表」。

- (5) 佐藤能丸「政教社の成立」、『季刊日本思想史』第三〇号（一九八八年）。

(13) 加藤秀俊「明治二〇年代ナショナリズムとコミュニケーション」、坂田吉雄編『明治前半期のナショナリズム』（一九五八年、未来社）三一五頁。

(14) 山室信一「〔近現代〕六」、『史学雑誌』第九二編第五号（一九八三年）一四六頁。のち、『近代日本の知と政治』（一九八五年、木鐸社）に収録。

(15) 園田英弘「〔近現代〕五」、『史学雑誌』第九三編第五号（一九八四年）一六五頁。

(16) 本稿では、思想の把握方法という点で、対象にこそ「思想」と「信仰」という違いはあるものの、「信仰者は何よりも信仰の原理的基盤において問われるべきである。そのためには、信仰をささえた基盤のありかた、教会の性格が検討されねばなるまい」（大濱徹也『明治キリスト教会史の研究』（一九七九年、吉川弘文館）四頁）という問題意識から多くの示唆を得ている。同時に、ここで「基盤のありかた

「といわれているものと「信仰」そのものの問題をどのように関連づけて捉えることができるかという課題については（このような指摘については、松沢弘陽「（書評）大濱徹也著『明治キリスト教会史の研究』」（『日本宗教史研究年報』四（一九八一年、佼正出版社）所収）参照）、思想に内在する構造的要素とその存在形態の関連という課題に置き換えて、以下本稿全体の中で考えていきたい。

(17) 都築七郎『政教社の人びと』（一九七四年、行政通信社）二七九頁以下参照。同書によれば、現在発行されている『日本及日本人』（日本及日本人社）と消滅時の政教社との間には人的な関係があるらしい。

(18) 前掲（註10）有山「雑誌「日本人」・「日本及日本人」の変遷」の内容を整理したものの。

(19) そのような結社の系譜について山室信一は、「明治維新後に生まれた結社は、集団形成を罪悪視する見方を否定することからはじまって、地域や階層・職業によって分断されていた人びとを共通の理念や利害によって全国的規模で結びつけることを目的とし、集団の成員に対等な権利と義務を賦与することを謳って自発的に結成されたという点で特徴がある」（「解説」、日本近代思想大系一一『言論とメディア』（一九九〇年、岩波書店）五三二頁）と述べている。

(20) 田中浩「三宅雪嶺『同時代史』を読む」、『図書』第四三七号（一九八六年）四八頁。田中によると、同書の分量は全体で六六、〇〇〇枚（四〇〇〇字）に及ぶという（同四九頁）。

(21) 大久保利謙「（書評）三宅雪嶺著「同時代史」」、『史学雑誌』第六〇編第六号

〔一九五一年〕七〇頁。大久保によれば、「この書を読んで見ても、どれ一ツとして希覯な史料を使用していない」が、「雪嶺が見聞したことが随所に織りこまれ、そのうちには他の書物にも見出されない珍しい記事が少なくない」とされる（同七二―七三頁）。

(22) 三宅雪嶺『同時代史』第三卷〔一九五〇年、岩波書店〕一〇二頁。

(23) このような視点で『同時代史』の記述に着目したのが、麻生三郎『竜の軌跡』第一部〔一九七六年、ラテイス〕であろう。明治十一年の竹橋事件に関する三宅の見聞を引いている。

ところで、『同時代史』の主たる材料が新聞であろうということは、雪嶺の令孫三宅立雄氏から窺った。同じく新聞を材料とした柳田国男『明治大正史世相編』〔一九三一年、朝日新聞社〕と比較したとき、両書の対象と叙述スタイルの違いには興味をそそられる。

(24) 三宅『想痕』〔一九一五年、至誠堂〕序二―三頁。

(25) 小谷保太郎編『雪嶺漫筆』〔一九〇三年、吉川弘文館〕四四頁。

(26) 最近では、中江兆民の無署名新聞雑誌論説に関する松永昌三「無署名論説認定の方法と基準」(『中江兆民全集』第一四卷〔一九八五年、岩波書店〕所収)が参考となろう。これに対して後藤孝夫により批判が寄せられ、その後も応酬があった。

政教社についていえば、現代日本文学全集第五編『三宅雪嶺集』〔一九三一年、改造社〕に収められている八太徳三郎による「年譜」には、三宅が『日本人』等に寄稿した無署名論説が挙げられていて参考となる。八太は三宅の口述筆記を担当し

た社員で、大正十二年には三宅とともに政教社を退社している。しかし、その中には明らかに三宅以外の者が書いた論説も含まれているので、取り扱いに注意を要することはいうまでもない。そもそも三宅は「時々論文と雖も、多くは門生に口授筆記せしめ、自ら執筆せらるる論文極めて少なし」（怪庵（香川）「風聞録」、第三次『日本人』第九七号（一八九九年八月二十日）三九頁）という状態で、三宅家においても原稿の草稿などは見当たらないという。志賀の場合も原稿などの大部分は戦災で消失しているということで、志賀家にも草稿類はごく少ない。したがって、この二人が執筆したと考えられる『日本人』『亜細亜』の無署名論説の特定作業は非常に難しい。

(27) 前掲（註²（4））松本「解題」、四二四頁。

(28) 丸山真男「陸羯南」、『戦中と戦後の間』（一九七六年、みすず書房）二八一頁。初出は『中央公論』昭和二十二年（一九四七）二月号。

(29) 清原貞雄『明治時代思想史』（一九二一年、大鏡閣）一一二頁。

(30) 丸山「超国家主義の論理と心理」、『増補版 現代政治の思想と行動』（一九六四年、未来社）一二頁。初出は『世界』昭和二十一年（一九四六）五月号。

(31) 橋川文三『ナシヨナリズム』（一九七八年新装版、紀伊国屋書店）三七頁。

(32) 丸山「日本におけるナシヨナリズム」、前掲（註²⁰）一六七頁。初出は『中央公論』昭和二十六年（一九五一）一月号。同じ年の歴史学研究会の大会テーマが「歴史における民族の問題」であったというのも、そのような動向を反映したものであろう。

(33) 例えば、渡邊一民『ナシヨナリズムの両義性』(一九八四年、人文書院)四三頁など。なおそれとは別に、Edward H. Carr, *Nationalism and After*, 1945. カー、大窪憲二訳『ナシヨナリズムの発展』(一九五二年、みすず書房)、及び松本健一『挾撃される現代史』(一九八三年、筑摩書房)が提示する「原理主義(ファンダメンタリズム)」という「思想軸」が参考となった。

(34) 植手通有「解説」、近代日本思想大系四『陸羯南集』(一九八七年、筑摩書房)五三一頁。

(35) 山室信一は「国民国家・日本の発現」(『人文学報』第六七号(一九九〇年)所収)において、「「国民国家」日本の自己証明(identification)の模索」という視点から、「ナシヨナリテイの立論構成」を解明する試みを志賀重昂をはじめとする政教社の「国粹主義」を取り上げて行ない、その中で「風土論的国粹論から万世一系の天皇の存続を国粹とする国体論への立論構成の変化」によって「ナシヨナリテイの焦点は国民から国家へと轉移した」ことを「最も不毛」としている(九九〜一〇〇頁)。もちろん山室においても、「立論構成と正当化根拠に焦点を絞るにしても、それがいかなる状況の中で、いかなる発論に対してなされたか、を無視することはできない」(同八五頁)ことは承知されている。

他に国民国家論からする政教社へのアプローチとしては、佐藤能丸「国民意識の形成」(鹿野政直・由井正臣編『近代日本の統合と抵抗』一(一九八二年、日本評論社)所収)を挙げることができる。

(36) 本山幸彦『明治思想の形成』(一九六九年、福村出版)、同「解説」(近代日本

思想大系五『三宅雪嶺集』（一九七五年、筑摩書房）所収）は、三宅や志賀個人の思想に焦点が合っていて、思想集団としての政教社を取り上げる本稿とはやや視点を異にしているため、ここで紹介するにとどめる。

(37) 鹿野『資本主義形成期の秩序意識』（一九六九年、筑摩書房）四二一～四三二頁。

(38) 鹿野「ナシヨナリストたちの肖像」、日本の名著三七『陸羯南 三宅雪嶺』（一九七一年、中央公論社）四五頁。あるいは『日本近代化の思想』（一九七二年、研究社）八〇頁。

(39) 鹿野「明治時代の思想」、石田一郎編『思想史』Ⅱ（一九七六年、山川出版社）二八五頁。

(40) 松浦玲『明治の海舟とアジア』（一九八七年、岩波書店）一五九～一七四頁。

(41) 色川大吉「明治二十年代の文化」、岩波講座『日本歴史』一七近代四（一九六二年、岩波書店）二八七頁以下。このような方法が失敗に終わった事情は、講談社学術文庫版『明治精神史』（下）（一九七六年）三三二頁に記されている。他に、「日本のナシヨナリズム」（岩波講座『日本歴史』一七近代四（一九七六年、岩波書店）所収）参照のこと。

(42) 岩井忠熊『明治国家主義思想史研究』（一九七二年、青木書店）一三二頁。

(43) 色川『明治の文化』（一九七〇年、岩波書店）二一五頁。

(44) T.B. Bottomore, *Elites and Society*, 1964. ホントモナ、綿貫讓治訳『エリートと社会』（一九六五年、岩波書店）及び C. Wright Mills, *The Power Elite*, 19

56. ミルズ、鶴飼信成・綿貫讓治訳『パワー・エリート』上下（一九六九年、東京大学出版会）参照。

(45) Karl Mannheim, *Ideologie und Utopie*, 1929. 鈴木二郎訳『イデオロギーとユートピア』（一九六八年、未来社）一四七頁。

(46) ジャーナリズムのそのような機能変化に触れたものに、岡利郎「明治国家体制とジャーナリスト」（田中浩編『近代日本のジャーナリスト』（一九八七年、御茶の水書房）所収）がある。

(47) Kenneth B. Pyle, *The New Generation in Meiji Japan*, 1969. 五十嵐暁郎訳『新世代の国家像』（一八八六年、社会思想社）。このような視点は、前掲（註45）山室「国民国家・日本の発現」にも共通している。

(48) 磯田光一『鹿鳴館の系譜』（一九八三年、文藝春秋）二四頁。

第一章 明治十五年の書生社会

第一節 「書生社会」の視角

「政教社の研究」と題する本稿をいつから説き起こすべきなのだろうかと考えたとき、実は『日本人』が創刊された明治二十一年からでは全く不十分なのであって、以下本章で明らかにしていくような理由によれば、私はそれを六年遡った明治十五年から始めてみたのである。「同志」たちはなぜ政教社を設立し「国粹主義」を主張するに至るのか、その必然性を解明する鍵は思想集団への結集を促した人脈形成と思想形成の過程の中に見いだすことができるであろう。

明治十五年（一八八二）——のちに三宅によって「政府は大隈一派を放逐せる後、極度に緊張し、殆ど逆上せるが如し」（*ノ*）と回想されているこの年は、前年秋のいわゆる明治十四年の政変が各方面にその翳を落としているのを見ることが出来る。開拓使の廃止、伊藤博文の欧州派遣、立憲改進黨の結成などは政変の落し子といえるし、それを機に松方デフレ政策の遂行に伴う農民層の分解、自由民権運動の退潮が始まったことも、決して偶然ではない。当時の歴史像は、明治十四年における「明治政府」と「在野民権陣営」の対立が、前者の「勝利」後者の「敗北」に終わることによって、「国家権力の形態上」は「絶対主義的有司専制」の本質を維持しながら「立憲制」的修正を施していくという路線が確定したと把握されている（*二*）。

しかし、本稿で取り上げる人物たちは、右のような対立の構図とは一見関係のない明治十五年を送っていた。政教社を設立した「同志」たち、あるいはそれに杉浦や内藤を含めて「初期政教社」に関係した“十数人の青年たち”に共通しているのは、むしろ彼らの多

くがこの時期に「書生」の境遇に身を置いていたことであろう。その頃書かれた遊学案内書の中で、田口卯吉は「諸生は人生の花なり」(3)と断言しているけれども、書生としての時期に培った人脈と学んだ知識とが彼らの生涯を貫いて、政教社の性格にも色濃く反映していると考えられるし、また「国粹主義」の思想内容と支持基盤の拡がりの根拠もそこに求められるのではないかという仮説を立てることができる。とりわけ政教社の場合、「同志」たちが学窓を出てから数年以内に結成された、その意味ではかなり均質な組織だったといえる。したがって、当時の青年層の志向をめぐる社会状況を明らかにすることがきわめて重要であるとの認識から、本章と次章では「書生社会」の視角を導入して、政教社が結成されるに至った交友関係と共通の思想的基盤の形成過程を明らかにしていきたいのである。そのためには、史料制約を克服するとともに、彼らが我が国ではじめて近代的な高等教育を受けた世代として、学術を通じて西洋文明と邂逅することになったという側面に注目していく必要がある。

従来も例えば、教育史の分野での成果のほか、各大学の百年史やいくつかの興味深い個別研究が蓄積されていて、私たちの描く書生像に示唆を与えてくれる。あるいは、文学作品——要するに坪内逍遙の『当世書生氣質』——によっても、この時期の書生社会の相貌を垣間見ることができらるだろう。しかしながら、明治二十年前後の「書生」は単に学生の同義語ではなくて、後述するように一種独特の社会集団を形成していたと思われるが、そのことも含めていわば「書生社会」論を展開した研究業績は管見の及ぶ限り皆無である。

以下本節では「書生社会」論が政教社研究において果たす意義について考えていきたい。そもそも「書生」という言葉が今ではほぼ完全に死語となっている。元来書生というの

は書を読む人の謂いで、古くは『後漢書』にも見え、我が国では古代東大寺で写経をする者を指したり、幕末昌平黌で陪臣等の入門を許して書生寮と称したりした例があり、一般には老書生などという使い方もされる。また、幕末志士出身の伊藤博文や大隈重信らの政権は「書生政治」と呼ばれていた。広くは青年層一般を指すこともある。現代の私たちが受け入れやすい語感からいうと、書生とは要するに食客、とりわけ有力者の玄関番をする苦学生あるいは貧乏学生というものであろう。だが、論証はしにくいのが、このような書生像が定着していくのは日清戦争を境とした時期以降のようだ（女）。

私が注目するのは、このような食客としての書生ではない。ここで想定している書生とは、中等学校以上に在籍するかあるいはそれらに入学するための受験勉強をしている者たちである。彼らは卒業後に、「中人以上ノ業務ニ就ク」か又は「高等ノ学校ニ入ル」（と）ことが期待されるという一面をもっていた。このような限定を加えても、明治二十年当時、東京の書生だけで六万人を数えたという。全国ではおそらく十万人に達していたであろう（男）。ところで、ここでもう一度、序章第一節に掲げた政教社設立の「同志」たちの肩書きに注目してみると、彼らが文学士又は農学士を名乗っていることの意味は決して小さくないと思われる。なぜならば、一見して政教社が同時代の書生社会の頂点に立っていることが明瞭になっているからである。民友社に一人の学士もいなかったことと比較すれば、このことはもっと強調されてよい政教社の特質といえるのではないか。政教社が学士によって構成されていたということは、「同志」たちが政教社に結集していく必然性を解明する鍵が、学士を頂点とする書生社会そのものの中に潜んでいたということを予測させるものである。

そこでまず、「書生社会」の視角に全体的な見通しを与えるために、さしあたりその始期と終期を設定しておこう。終期については、前述したように書生が食客の意味を強く帯びるようになる明治二十七、八年の日清戦争期がそれに当る。始期は、次に挙げる理由によつて、明治十二、三年頃を想定している。一つには、同年公布された教育令によつて中等学校以上の各種学校が整備され、県庁所在地クラスの地方都市にまで書生社会が澎湃として勃興してきたこと。二つには、彼らが直接の維新経験を持たず、明治政府によつて制度化された教育システムの中で育つた世代に属すること。三つには、この時期の学問は西洋起源のものが圧倒的に優勢であつたため、それを外国人教師から直接摂取するには語学中心となり、最後の仕上げにはやはり「洋行」(2)が必要であつたこと。そして四つには、書生社会に先行する貢進生のほとんどが、この十二、三年頃までには学窓を巣立つてゐることである。

このうち、四番目の理由には補足が必要であろう。貢進生は、維新後の明治三年に各藩——廃藩置県前なのである——からその規模に応じて東京大学の前身の大学南校に「貢進」された俊秀才ちであつて、前掲書の中で唐沢も「貢進生はたしかに藩政時代の学生像より近代的学生像への転換期における学生として、学生史上重要な意味をもつてゐる」(3)と述べている。貢進生の中には、政教社の設立とも深く関わつた杉浦重剛(膳所藩)と宮崎道正(大野藩)もいた(4)。一般に書生社会といつたとき、東京大学の学生に限定するのは不適当だが、多くの学士を擁した政教社を検討しようとする場合には有効な視点を提示してくれる。例えば、書生社会を世間から際立たせる「弊衣破帽」(5)に代表されるいわゆる蛮カラ風俗も、この貢進生から東京大学や第一高等学校(のちの“一高”)の学

生・生徒に引き継がれ、しだいに地方の書生社会にまで広がって“伝統”化していったものであろう。書生のライフ・スタイルの原型を貢進生に認めることは確かに可能である。

貢進生の書生社会への影響はもちろんそのような風俗の面だけに限らない。むしろ“参議熱”となって現れた強烈な政治志向の“伝統”がこの場合より重要であろう。一例を挙げれば、のちに外務大臣となる小村寿太郎はやはり貢進生の一人だったが、彼こそ「同学から参議と呼ばれたのみならず、亦自ら未来の参議を以て任じていた」(11)という。貢進生にとって「参議熱は当時の流行病であつて、学生にして此病気に罹らぬものは殆ど無いといつても可い位であつた」(12)といわれる。書生社会の周囲が自由民権運動を背景とした政治の季節に蔽われていた明治十年代、“参議熱”が引き続き高歌放吟の対象となつていたことは有名な書生節によつて知りうるのである。

書生々と軽蔑するな 明日は太政官のお役人

書生々と軽蔑するな フランスのナポレオンも元書生

書生々と軽蔑するな 大臣参議はみな書生(13)

ところが、この頃の“参議熱”は単に書生たちが気炎を吐くだけのものではなかつた。

明治十三年十二月、当時はまだ東京大学文学部の生徒だつた都築馨六が、大学総理加藤弘之の紹介状を携えて参議・外務卿の井上馨を訪ねるといふことがあつた(14)。加藤の紹介状によると、都築の訪問理由は「理財上之事ニ付御教示ヲ仰度義有之」(15)といふことだつたらしい。これだけの理由で参議が一書生と面会するというのは、要するに両者の距離が実質的にきわめて近かつたことを示す証左といえよう。同書簡にはさらに「同学科卒業生和田垣某(謙三、引用者)も参館種々御教示被下候よし」(16)とあるから、このような

ことは特別な例外というのではなしに起こりえたのである。同じ十三年の夏のはじめ、上京中の徳富猪一郎も井上馨の門を叩いている⁽⁷⁾。参議井上は、東京大学の生徒だけでなく、のちに回想の中で蘇峰自らいう「蓬頭乱髪の田舎書生」⁽⁸⁾とも会っていたのである。そのような点では、書生社会の政治志向には確たる根拠があったといえ、彼らにとつても「参議熱」は手応えを感じられるものだったのであろう。

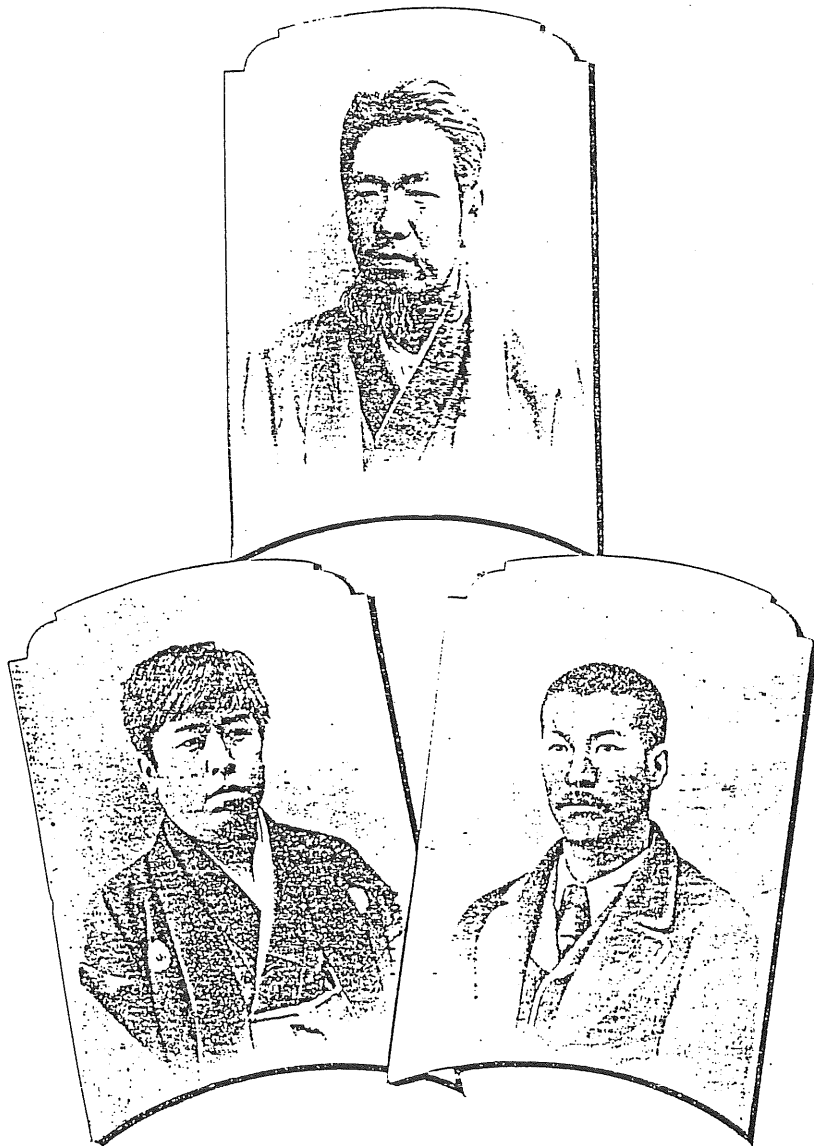
「書生社会」においては、それに先行する貢進生の「伝統」を継承しながら、おそらく以上のような政治志向が潜在的に卓越していた。やがて政教社に結集していく者たちは皆、このような書生の境遇に身を置いていたと考えられる。彼らがその後間もなく雑誌『日本人』に拠つて、政治評論を軸に、宗教、教育などの諸問題を論じるに至る必然性は、この書生社会の志向性の中に胚胎していたといえよう。

ところが、「同志」の中でも最も年少の加賀秀一が東京大学文学部撰科を卒業した明治二十年は、書生社会にとって目には見えない大きな転換期を迎えていたように思われる。この年に書かれた前掲の遊学案内書の中で、著者の本富安四郎は、「当時東京書生ノ気風ハ、三、四年前浮動喧噪ノ反動ニ由リ、一般ニ頗ル沈静ニシテ眠レルガ如ク、稍々不活発ノ傾キアリ」⁽⁹⁾と述べているのである。この二十年前後の時期の我が国は、ちょうど国家体制の整備と社会の序列化が急速に進んだ時期に当たっている。よく知られているように、華族令（明治十七年）、内閣制度（十八年）、大日本帝国憲法（二十二年）、国会開設（二十三年）などはいずれもその徴証といえよう。書生社会に隣接する教育の分野でも、文部大臣森有礼によつて主導された諸学校令の制定等一連の国家主義教育の施策によつて、学校、試験、学位等の制度化が進み、さらにそれが官吏任用制度の整備と連動し

て、「参議熱」に代表される政治志向は徐々に逼塞を余儀なくされたと考えられる(20)。
制度化の進む社会の中では一歩ずつ地歩を固めるのが「成功」を獲得するための要諦である。例えば、明治十七年に東京大学文学部を卒業した阪谷芳郎のように、大蔵省に入省後累進して主計局長、次官、大臣になるような専門官僚としての処世こそ、「着実な」成功を約束する(21)。それは、「官吏任用の特権的ルートの設定は、見事に、従来の法学部・文学部学生のあり方を変革し、国家権力への急速な接近の傾向をもたらした」(22)ともいえよう。もつとも、そのような点からいえば、政教社を設立する「同志」たちも、書生としては形成途上にあつた「明治国家体制」構想の内側の存在であつて、教育行政家や講壇学者として応分の「成功」をする見込みがあつたのである(序章表1参照)。

その彼らが、明治二十一年の初頭までに、公職を擲つて雑誌の創刊に踏み切つた意味は大きいと思われる。政教社の「同志」となつたことは、制度化に対する最も早い逸脱の一例といえるのではないか。しかし同時に、逸脱によつて比較的早く社会——とりわけ書生社会——に知られる端緒をつくつたという一面もある。例えば、『太陽』で有名な博文館から刊行されていた『少年世界』は、明治二十八年(一八九五)、「文壇三名士」として写真1のような三人を掲げている(23)。阪谷が大蔵大臣になるのが三十九年(一九〇六)のことであるから、三宅や志賀は「文壇」に進むことでいち早く「少年世界」の「名士」となりえたともいえよう。

磯田光一は、学生を「画期的な遊民層」とし、「国論を左右さえする総合雑誌は、「学生」とその延長上に位する知識層なしには成立の余地さえなかつたのである」(24)といっている。そういえば、二十年代の文学の魁となつた森鷗外、石橋忍月、尾崎紅葉、山田美



小川一真寫真彫銅版及印刷

三宅重三 志賀重昂 志賀重一

妙、正岡子規らも皆、東京大学（帝国大学）あるいは第一高等中学校の出身又は在籍者であった。二十二年頃になると、法科大学に在学中の忍月や紅葉が卒業を放棄して創作活動に入ることに先鋭的に象徴されるように、書生社会の志向は制度化に対する逸脱というよりも、むしろしだいに政治熱が冷めて分解に向かったといえるかもしれない⁽²⁵⁾。もしそうならば、逸脱あるいは分解に向かった書生社会の志向を把束して批判知へと結晶させていくのが、二十年代の思想主体にとっての課題となろう。

同時に、国会の開設を目前にして、大同団結運動から条約改正反対運動へと展開した政治社会に、いわば政治を専門にする「壮士」が登場したこの意味も加味されよう。二十年頃を境にして、書生は少なくとも表面的には政治社会の第一線から退いたようにみえる。愛卿学人・末兼八百吉こと宮崎湖処子は、「壮士、青年、少年」と題する一文の中でこのような書生社会の志向の転換を評して、まず壮士を「要するに其日暮の人たらざる可からざるなり」⁽²⁶⁾として排し、次に明らかに忍月や紅葉を指しながら、「著述の流行」と「倶楽部の設立」に代表される「名誉乞食の青年」⁽²⁷⁾をも厭い、両極分解の道避けた少年こそ「世の花なり。家族に於ける快樂の天使、社会に於ける道德の人形なり」⁽²⁸⁾とする。『日本人』誌上でも、社友の宮崎道正が「其責任に当るの青年輩は今日官私立学校に入り、現に学問に従事する、僅少の学生に限るべし」⁽²⁹⁾と述べて、壮士的な運動を戒めている。

二十一年に創刊され小学校教師を読者層に想定した雑誌『文』は、創刊の辞といえる巻頭言において「文は教育制度ノ改良ヲ望ムナリ。教育制度ノ変革ヲ望マザルナリ」⁽³⁰⁾と述べている。書生社会を取り巻く雰囲気がこのような現状肯定的なものになっていけば、

書生たちの志向もおのずと逼塞していくことは免れまい。二十年代の半ばともなると、書生たちは「老成ぶり」⁽³¹⁾、あるいは「今や洵に志を得ずして沈澱す」⁽³²⁾というありさまだという。制度化からの逸脱も矮小化され、風俗の面に限定されて社会問題化される傾向を生じた。その一例として、日清戦争前後に書生の間で娘義太夫が異常に流行したことを挙げておこう。「どうする連」と呼ばれた彼らをはじめ、書生の中には奇抜な風体で琵琶を弾き流したり、銘酒屋、楊弓場への出入り、果ては吉原、洲崎の遊廓通いという者が現れた。そのために、親元からの仕送りを費やしてしまい、さらには辞書や冬着まで質入する始末だという。これを紹介した『風俗面報』の論者も、「書生の風俗にして正しからざれば、教育上に弊害あるのみならず、延きて社会全般の風紀をして、頽然として乱れしむるの基本を開かむとす」⁽³³⁾と述べて、しきりに慨嘆している。日清戦後の「書生社会」に訪れたこのような状況に際会したとき、自らを「書生」という蘇峰は「書生社会に勝てば社会活動し、社会書生に勝てば社会腐敗す」⁽³⁴⁾と述べ、書生の奮起を促した。しかし三十一年（一八九八）頃、「参議熱」を煽る書生節はもはや「過し古歌」となり、替わって次のようなホーカイ節が謡われたという。

書生さん月琴習つて何にする 金が無い時分に立つ ホーカイ⁽³⁵⁾

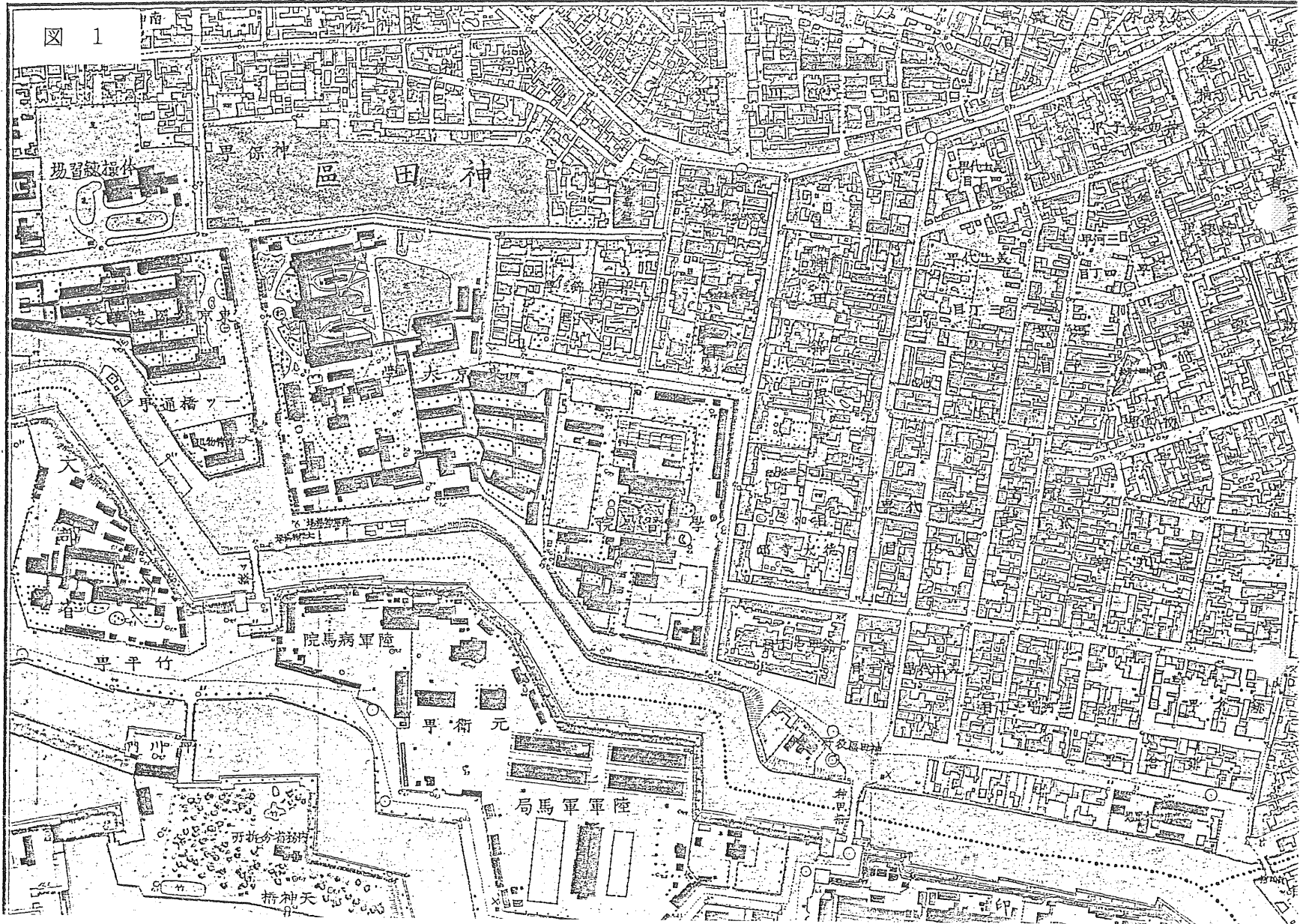
「書生社会」の視角を導入することによって、政教社の設立と展開過程の背景におよそ以上のような見通しを得ることができないのではないだろうか。もちろん、以上概観した東京の「書生社会」とは別に、上京熱にうなされる地方の「書生社会」が存在し、独特の社会集団を形成していたと思われる。本章では、このような視角に立つて、政教社の「同志」たちを輩出した「書生社会」の具体像を、次節以下で順に三宅、志賀、内藤をそれぞれ

中心として探っていく中で、政教社そのものの結成を促した内的必然性と言論活動の基盤を浮き彫りにしていきたい。また、そのうちとくに三宅の場合に即して「国粹主義」思想の形成過程を跡づける作業は次章で行うこととする。

まず、参謀本部が明治十六年に測量して作成した地図（図1）から見ていきたい。図の中心が東京大学法理文三学部と予備門で、今の学士会館を含む神田錦町三丁目一帯を占めている。明治十五年といえ、杉浦が予備門長、松下と辰巳が予備門の教職員であり、三宅、杉江、中原、棚橋、井上の四人が文学部学生、加賀が予備門生徒であった。三宅以下の六人は同じ敷地内にあった寄宿舎の入居者でもあった。あとで紹介する棚橋一郎などのように東京府下に自宅がある者は、日曜日ごとに帰宅していたようだが、例えば三宅などは明治九年（一八七六）に上京して開成学校に入学して以来、放課後や休日の外出を除いてこの木柵に囲まれた東京の一週に限って寄居していたことになる。M・フーコーがいうように、「しばしば規律・訓練は、閉鎖を、つまり他のすべての者には異質な、それじたいのために閉じられた場所の特定化を要求する」⁽³⁷⁾のであるとしたら、そのような点からいっても彼らが一種独特な書生社会を形づくっていたことは想像に難くない。

当時の東京は、前年の明治十四年に初めて上京した田山花袋によって、「泥濘の都会」⁽³⁷⁾「呑気な野蛮な無智な都会」⁽³⁸⁾と回想されているが、図1に見るように、東京大学の西側には現在の白山通りを挟んで東京外国語学校、東側には板塀を隔てて学習院、一ツ橋の架かる日本橋川の向こうには文部省という具合に、神田の一ツ橋から錦町にかけては日本の文教の中心を形づくっていた。そしてこの地区の北側には、書肆、出版社、印刷所、書生の下宿などが集中しつつあった神保町や小川町がいわば後背地として控えていた

明治十六年三月
第二期第一測四



のである⁽⁹⁾。東京大学の文学部で三宅より一年先輩だった市島謙吉は、神田を「文化町」⁽¹⁰⁾と呼んで回顧している。当時の神田区の一般的特徴は、「商店櫛比し頗る繁華の地なり。殊に公私立の諸学校多しとす。人烟稠密なること浅草区に亜げり」⁽¹¹⁾とされ、「商人・職人の小さな家がつまっていた地域」⁽¹²⁾であるとともに、区内に九十二の学校を有する「学校の街」⁽¹³⁾でもあった。明治十五年の統計によれば、人口一〇四、八三八人は全十五区中最多で、このうち本籍が神田の者八三、四六三人であった。就業者三二、七五六人、寄留者二一、三七五人で、これらの数字は書生の聚住を予測させる。

明治十年代東京の、それも神田の書生社会といえば、まず思い浮かぶのは先述の逍遙作『当世書生気質』であろう。同書の舞台は明治十五、六年の東京の書生社会というだけでなく、逍遙こと坪内雄蔵は三宅とは愛知英語学校以来の同窓生であり、東京大学文学部の卒業も同じ明治十六年である。したがって、『当世書生気質』の描く世界は、はしなくも政教社結成の母体となった書生社会の雰囲気伝えてくれている。作中、「第九回 一得あれば一失あり一我意あれば一理もある書生の演説」に登場する「桐山」というスイカを拳固で割って食べる書生は、三宅がモデルだという指摘もある⁽¹⁴⁾。それはともかく、ここで、東京の書生となるまでの三宅の足跡を、ある程度同世代の東京大学在籍者を代表するものとみなした上で、本稿で必要と思われる限り辿っておきたい。

三宅は、万延元年（一八六〇）加賀国（石川県）金沢城下新豎町に生れた⁽¹⁵⁾。『同時代史』もこの年をもって始まっている。新豎町は城の南東、犀川に近く、大工町などの町人街とも隣接する地域であった。現在、生誕地の新豎町小学校の校庭の一番奥まったところには、レリーフのはめ込まれた記念碑が建てられている。

三宅の父恒は立軒と号し、前田家家老の本多家から七十石を給される侍医であつて、一面阪谷朗廬等と詩文の交わりをする儒才の持ち主でもあつた。母方の伯父黒川良安は、長崎遊学経験を持つ著名な蘭学者である。幼い雄二郎をめぐる知的雰囲気が想像されるわけだが、兄恒徳も明治十二年に増島六一郎らとともに東京大学法学部を卒業した法学士であつた。三宅家が子弟の教育に熱心だつたことは確かであろう⁽⁴⁶⁾。

数え年八歳で維新を迎え、十三歳で学制頒布に遭遇した三宅が、上京して東京大学に学ぶまでの道のりは、いわば初等教育が旧教育、中等教育以降が新教育という特異な世代に属するものといえよう。この点では、他の政教社「同志」たちもほぼ同じ歩みを踏んでいると考えられる。三宅の場合、七歳で櫻園・河波有道⁽⁴⁷⁾の塾で四書五経の素読から始めたことは前者の教育に当たり、十二歳で金沢の仏語学校、続いて英語学校⁽⁴⁸⁾に入學し、明治八年(一八七五)十五歳で愛知英語学校に転学したというのは、後者の教育に該当するであろう。いわゆる漢学的素養と欧米の新學問を重層的に蓄積し得たことは、福沢諭吉のいう「一身二生」の経験をした最後の世代に属する特権ともいえ、彼らの思想的特徴を形作る共通の要素となつていく。しかし、漢学の素養は十分な完成をみず、彼らの世代的特質を画するのは、あくまでも体系的な新教育によつて欧米の新學問を身につけた新知識たることにあると思う。

新知識の内容は、三宅の学んだ愛知英語学校⁽⁴⁹⁾の様子から知ることができる。同校は、「学制」に基づいて明治七年に設立された文部省の直轄学校で、名古屋城の大手門外にあつた評定所の建物を利用し(図2)、第四大学区(いまの中部地方)から選抜されて入学試験を経た「成業ノ目的アル」生徒約二五〇名を集めていた。同校では英語のみで講

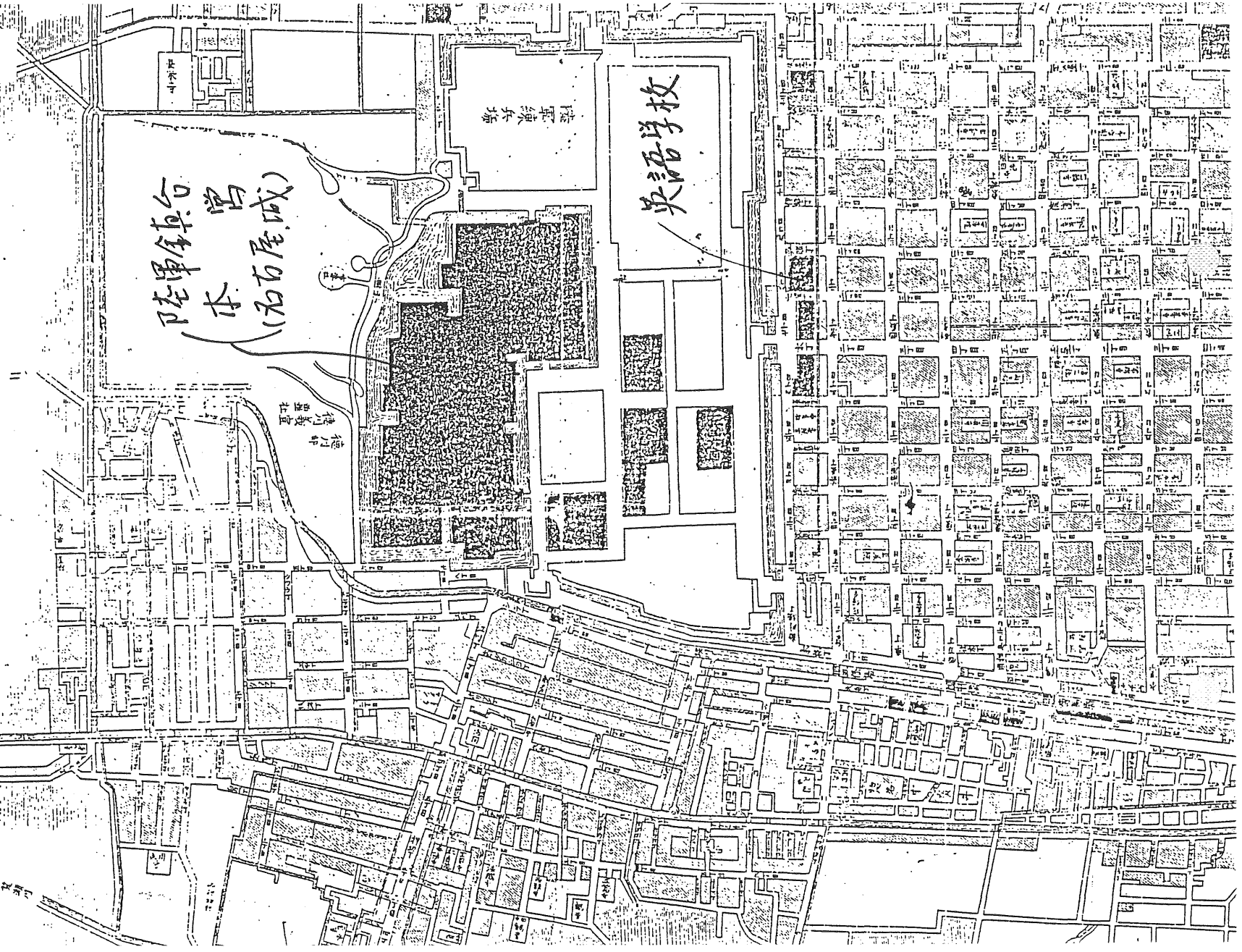


陸軍鎮台
本
(石右尾成)

陸軍練兵場

英語学校

徳行社
徳行社



義する科を正則、日本語の訳を交える科を変則と称していたことから判るように、欧米直輸入の教育が主流を占め、三宅自身のちに「語学と学問とが混同した」⁽⁵⁾と回想するような状態だった。表4に見るように、全学期を通して英語科目が五〇パーセントを切るものがなかった。ここで使用されたテキストは、ウィルソンのリーダーを基本とし、パリーの万国史やコーネルの地理書など、同時期の慶応義塾とも共通するものである。そして、生徒たちの日常生活は、「生徒ヲシテ他ニ耳目ヲ触レズシテ専ラ学業ニ従事セシメンガ為ニ設ケシモノ」⁽⁵⁾とされた寄宿舎の中になされ、外出は日曜・祝日と水曜の午後のみとされたのだから、閉鎖的なエリート集団としての書生社会ができあがっていく。これはまさにのちの東京の書生社会の縮図といえるかもしれない。その中には、坪内のほか、のちの首相加藤高明、海軍大将（海相）八代六郎、さらには政教社設立の「同志」となる加賀秀一らもいた。

ところが、学制改革の余波を受けて愛知英語学校が閉鎖されることになり、三宅は明治九年に初めて上京し開成学校に入学することとなる。同校が東京大学と改称されるのは翌明治十年のことであるが、彼はそこで何を学んだのだろうか、また語学Ⅱ学問という状態から脱却できたのだろうか。その内容については次章で検討するとして、いましばらく三宅に即して当時東京大学の学生だったことの意味について考えてみたい。

神田錦町の東京大学（法理文三学部）は、幕府開成所、維新後の大学南校、開成学校の流れをくむ我が国の最高学府として明治十年に設置された。「文明開化のシヨウ・ケース」⁽⁵⁾ともいえる我が国唯一の総合大学であった。幕府医学所、維新後の大学東校、東校の流れをくむ医学部は元来別系統の学校というべきで、この年名目的に統合され、のちに

表 4 愛知県英語学校学科課程表（一週間時間数）

	語学 口授	読方 綴字	読方 綴字	綴字 綴字	読方 書取	習字	翻訳	翻読	文法	作文	日本 読書	その他
第1年第1期	6	6				6	6				3	体操
第2期	6		6	6		6	6				3	体操
第2年第1期	6		6	3		5		6			3	算術2 地理2 体操
第2期	6			3	6	3	6		2		3	算術2 地理2 体操
第3年第1期	5			3	3	3	6		3	1	3	算術3 地理3 体操
第2期	3			3	3		6		3	3	3	算術3 地理3 歴史3 体操
第4年第1期	3			3	3		6		3	3	3	算術3 地理3 歴史3 体操
第2期	3				3		6		3	3	3	算術3 地理3 歴史2 幾何2 代数2 体操

注) 『愛知県英語学校一覧』39～60頁より作成。第2年第1期の「翻読」は「翻訳」の誤りか。

現在の本郷地区に全学部が移転することによって、両系統は名実ともに合体した。この間にあつては、明治十四年の六月から七月にかけての、管理運営及び学内の組織編成に関する制度改編が、「東京大学の体制史の上で重要な位置を占める改革であつた」(53)とされる。このとき初めて置かれた総理職に就いたのは加藤弘之であつた。前節冒頭で述べたような、明治十四年が政治上の転換点であつたこととは直接関係ないものの、「明治国家体制」の形成期というものを想定したとき、この時期に東京大学が加藤弘之をトップに据えて制度改革を進めていくというのは、決して偶然とはいえない。

それが具体的な問題となつて現われたのが明治十五年の学位授与式であつた。コレヲ獮獮のため十月二十八日に延期して実施された同式で、総理の加藤は次のように述べた。

本学ニ於テ今日マデニ卒業シテ学士ノ称号ヲ得タルモノ三百余名ナリ。此等ノ諸氏ハ我日本ニ於テ最高等ノ學術ヲ学ビ得タル者ニシテ我邦ノ為ニ最モ有用ナル人々ナリ。

今日欧米諸国ガスクマデニ文明ヲ以テ鳴ルモ、全ク各種ノ學術ニ深奥ナル者多キニ依ル。然レバ則チ本学卒業生ノ数ノ年ヲ追テ多キニ至ルハ、誠ニ国家ノ為ニ賀スベキ事ナリ。(54)

以下各学部代表教授の祝辞のあと、フェノロサがいわゆる「学生の政治関与を諫める演説」を行ったのである(55)。その中では「学生が政事論に関係するは不可なり」とし、さらに具体的に「政党に加入するは臣民たる者の本分なりと思ふ如きは誤見も亦甚だしと謂つべし」といつている。ここで直接批判の対象とされているのは、この年卒業し立憲改進黨に入党した高田早苗たちであつた。フェノロサは続いて、「実着の事業を修め、以て国家の実益を計らむと決心するこそ遙に上策なるべけれ」と述べているが、この「実着の事

業」とは「当路者」を「補翼」することだとされる。

また、同じ十五年の七月に開設された古典講習科の開業式において、教授の小中村清矩は「此古典講習科ハ、醇然タル国学専門ノ学科ニテ、歴朝ノ事実、制度ノ沿革、並二古今言辭ノ変遷等ヲ弁明セン為ナレバ、上二述ベタル如ク従来諸家区々ナル学派ヲ集合シテ、悉ク研究スベキモノトシ、新ニ教則ヲ定メテ其主眼精神トスル所ハ、其学ビ得タル業ヲ以テ今日ノ實際ニ運用スルニアリ」(56)と演説した。このような古典講習科の設置目的は、「開成学校以来続けてきた欧米諸学の摂取という東京大学法理文三学部の間問傾向に対する一種の自己修正」(57)という側面があつたろう。同じ頃、文部少輔の九鬼隆一は学事演説の中で、「修身ヲ堅固ナラシム」「無形ノ学ヲ戒メ空論ノ害ヲ拒グ」「学风ヲシテ着実ナラシム」「実学実業ヲ増進スル」という四点を強調していた(58)。これらの背景にあつた政府の路線転換の方向とは、民権運動の昂まりを背景にした憲法制定に関する岩倉具視の意見書「大綱領」の中で「漸進主義」(59)と明示されていたものであろう。

さらに、東京大学出身の政教社「同志」がすべて文学部の卒業であるというのも、この思想集団を考える上で見逃すことのできない点である。明治十五年当時の文学部は、第一科が哲学、第二科が政治学及び理財学、第三科が和漢文学という学科構成からなり、学生数からいえばこのうち第二科が中心であつた。第二科は現在の法学部政治学コースと経済学部該当するわけだが、とにかく明治十年から十八年の「東京大学」時代の文学部全卒業生四十七名のうち、実に三十七名までが政治学又は理財学を主専攻とし、哲学又は和漢文学を専修したのはわずかに五名にすぎない。卒業生の進路をみると、法学部以上に現実政治に密着した学部だつたことが判る(60)。後年三宅は当時を振り返って「文学の混沌時

代」といつている(6)。

五名のうち、哲学を専修した三宅と井上、和漢文学を専修した棚橋の三人が政教社の設立に参画することになるといふのも、決して偶然ではなからう。彼らこそ、政治エリートを養成する政策科学の中にあつて、むしろ内省の学に関心が向いた希少価値だったのである。そのこの意味は、『当世書生氣質』と『小説神髓』によつて、「文学」を戯作者の手から学士のものとした坪内逍遙ですら、政治学及び理財学専攻だったことを考え合わせれば際立つてくる。辰巳を含めれば「同志」たちのうち四人までが哲学、文学を専攻したということも、政教社の言論活動とくに政治論を検討していくとき重要な要素となるであらう。

明治十五年の東京・神田錦町、すなわち東京大学の中に、政教社の原核の一つを認めることに異論はなからう。彼らがそこで培つた思想的基盤の形成過程については、本稿全体の中でも重要な位置を占めるので、次章で三宅に即して詳細に検討を加えることとし、次いで東京の北約千キロメートルの札幌に眼を転じてみよう。

第三節 札幌農学校

——志賀重昂の場合——

同じ年の札幌は、札幌教会建築の仕上げを急ぐ槌音で明けたことであろう。献堂式は一月八日であった。この教会が、札幌農学校教頭W・S・クラークの弟子たち、つまり同校の一期生、二期生たちによつて営まれ、彼らこそ我が国近代キリスト教の発生拠点の一つとして札幌バンドと呼ばれることは、それが内村鑑三や新渡戸稻造の名前とともに思い出されるがゆえに、余りにも有名なことに属する。内村によれば、教会独立の計画が初めて話題に上つたのは、前年すなわち明治十四年の四月三十日のことであつた(62)。

札幌農学校の四期生(年次的には五期生)としてまだ在学中だつた志賀重昂は、おそらく教会堂建築の様子を苦々しく見ていたであろう。志賀は、二期生の卒業式(明治十四年七月九日)で答辞を述べた内村に関して、日記の中に「嗚呼氏ハ耶蘇教ノ徒ナリ。故ニ常ニ吾輩ト仇敵タリシ」(63)と記し、反キリスト教の立場を示している。当時の札幌農学校には、この志賀のほか、化学担当の教授として宮崎道正、四期生つまり志賀の同級に菊池熊太郎、一年後輩の五期生に今外三郎がいて、のちに政教社に結集してくる「同志」たちの重要な供給源になっている(64)。そこで、右に紹介したような在学中の「日記」が残っている志賀を中心として、札幌の書生社会の人的交流と思想的基盤の形成過程を覗いてみたい。

来日後東京の第一印象に「混乱」を憶えたモースは、明治十二年夏に北海道を訪れたとき、「札幌町通は広くて、各々直角に交っている。全体の感じが我国の西部諸州に於る、

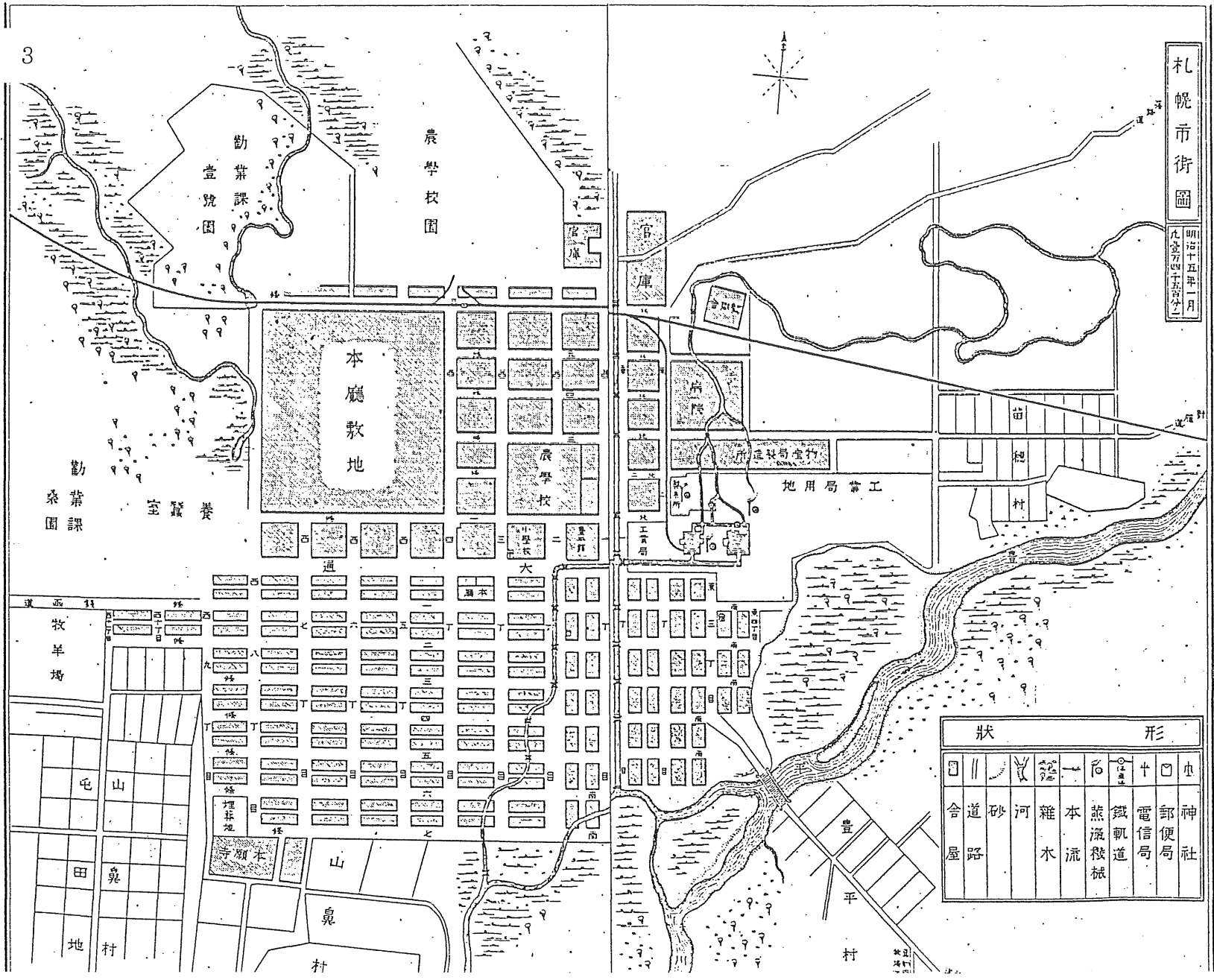
新しい、然し景気のいい村である」(65)と記し、むしろこの新開地へは違和感なく溶け込んだ様子が窺われる。札幌は、政策的意図に基づいて開拓事業の中心地と定められ、人工的な都市づくりが進められることで、ようやくこの頃になると人口も九千人に届いたが、この数字は道内でも早くから開けた函館の約三分の一にすぎない(図3参照)(66)。

札幌農学校は、このような札幌の街の重要な一面に場所を占め、「開拓使官吏養成」(67)を目的として明治九年に開設されたもので、我が国の高等教育機関の中では最も早く整備された学校といえる。学課程は本科四年のほかに三年制の予科があり、本科生の総定員は全体で五十名と定められ、原則的にすべてが官費生で、卒業後五年間は開拓使業務への従事が義務づけられていた。当初の入学生の特徴は、「一六〜一八歳で、士族であり、以前東京英語学校や大学予備門に学んでいた者が多かった」(68)と概括できよう。

この中には、前述の内村や新渡戸のほか、佐藤昌介、大島正健、宮部金吾、広井勇など、今日でもその名を知られる多くの人材が含まれている。したがって、どうしてもこれら一、二期生のもつイメージが、クラークら初期外国人教師たちと合わせて、「札幌農学校を象徴する人間像」(69)を形作ってしまう。禁酒禁煙を誓い、毎週祈禱会を営む彼らのピューリタンな生活こそ、札幌農学校の正統であるかのような印象を受ける。しかし、このような印象を逆転させて、一、二期生のうち「最も劇的な人生を送った」内村について、彼「こそが札幌農学校卒業生の異端的存在だった」と位置づけしなおすこともできる(70)。たしかに、三期生以降生徒たちの性向は徐々に変質したようで、キリスト教への入信者も減ってくる。志賀をはじめ政教社の「同志」となる者たちは、四、五期生としての入学である。

札幌市街圖

明治十五年一月
九分五十分



形		状	
神	社	郵	便
電	信	鐵	軌
蒸	氣	本	流
河	雜	水	路
砂	道	屋	舍

ここで、札幌農学校に学ぶまでの志賀の足跡を簡単に整理しておこう(2)。志賀重昂は文久三年(一八六三)徳川幕府の故地三河国岡崎城下に生まれた。幼名は廉という。儒者として知られる父重職は国事に奔走するなか、明治元年京都で客死している。その後の志賀家には苦勞が多かつたらしいが、岡崎における少年期の重昂については不明な点が多い。重昂は明治七年に上京して近藤真琴の攻玉社に入学する機会を得、十一年には東京大学習備門に転じている。したがって、後年政教社に結集する「同志」たちとは、このときすでに既知の間柄であつた可能性が高い。その予備門から札幌農学校四期生の募集に応じ渡道するのは十三年のことであつた。

こうしてはじまつた志賀の札幌生活について、松沢弘陽は「日記」から窺える志賀の関心から、第一に天下国家型の政治志向、第二にジャーナリズムへの関心、第三にさまざまな演説・討論の結社を作つたり参加したりすることに極めて熱心、という三点に特徴づけている(3)。いずれも後年志賀が活躍する領域との連関を多分に意識した特徴づけで、政教社とも直接に繋がってくるものとして首肯できるが、ただ一つだけ加えるならば、一書生という立場での志賀の関心は、ちようどいわゆる明治十四年の政変によつて開拓使が廃止され、農学校の存続そのものや所管が云々されている中で、自らの「志」の行く末を案じることに注がれていたようだ(4)。明治十四年政変の余波で、翌十五年三月に同校は農商務省に所管換えとなつたが、逆に卒業生の開拓使就職義務もなくなった。程度の差こそあれ、四期生以降の在校生たちの関心がおそらくそのあたりにあつたであろうことは、無視できないのではないか。これらの関心は、志賀という一人の人間の中で密接に関連し合つて存在していたわけで、次にそれを政治志向と「農学」に焦点を絞つて考えてみた

い。

開拓使の官有物払下事件を契機とする明治十四年の政変は、北海道にも政治の季節をもたらした。志賀の政治方面への関心も、この時期の自由民権運動によって惹起され、しだいに昇華していったものと考えられる。一般に、北海道において「自由民権」の声が起きるのはこの払下事件からで、その中心人物は本多新だとされる⁽²⁴⁾。志賀の「日記」明治十五年五月十六日の条には、「有名ノ狂自由党本多新ヲ大町・但木ト渡島通りノ高見沢ニ訪フ。会マ外出セントシタル時ナレバ此土曜日ヲ約シテ去ル」⁽²⁵⁾とあり、四日後には「約ノ如ク狂民権生ヲ訪フ。在ラズ。失敬千万カナ。(中略)誠ニハヤ困リ果テタル民権子カナ」⁽²⁶⁾と記している。この前後の「日記」中には、本多や他の遊説員のことが見え隠れするけれども、その書きぶりはいずれも揶揄的である。

ところが、志賀自身のちにいうように、翌明治十六年の夏休みには上京して福島事件の法廷を傍聴し、さらに自由党への入党をすら考えるまで彼の政治志向は急転回する⁽²⁷⁾。この間の事情は現存の「日記」からは詳らかにはしえないが、亀井が前掲論文で推測しているように『自由談誌』の訳出やその他の要件によつて、志賀の関心は「激化」民権へと傾斜していく。ただ私などには、志賀の場合、民権派に対する揶揄の裏返しとしての強い関心、あるいはのちにかんがりの親近感を抱きながらも、結局は現実の運動には参加せず傍観者に留まった点こそ重視されるべきではないかと思われる。この点では、次章で述べる三宅の場合も同じようなことがいえるだろう。つまり、彼らの政治志向が示した最初の実践活動はあくまでも明治二十年以降のいわゆる大同団結運動であつて、この時期の自由党への親近感はその一つの伏線といえるが、むしろここでは自由民権運動との“距離”を確

認しておくことが重要であろう。

明治十年代、書生の“参議熱”に象徴される政治志向は、僻遠の札幌農学校に学ぶ志賀をも捕えて放さなかつたものに違いない。しかし同時に、「日記」から受ける全体的な印象は、農学校生として日々の講義、実験、解剖、採集などにいそしむ姿、試験ともなれば準備のための勉強を呪詛する昔も今も変わらぬ学生気質である。私は、このいわば日常的な書生生活の中に志賀の思想形成を探る鍵が隠されていると思う。その場合何よりも彼が学んだ「農学」の内容が問われなければならない。

すでに述べたように、札幌農学校の当初の設置目的は北海道開拓に従事する官吏を養成することにあつた。その教科目は、初代教頭クラークを中心に編成されたことから判るように、アメリカ合衆国の農学校、具体的にはマサチューセッツ州立農科大学のそれを真似たものといわれ、ほとんどが英語で講義された⁽²⁾。農学校であるから自然科学系の講義がほとんどで、人文、社会科学系の科目は基礎教養の英語くらいしか準備されていない。当時の同校の蔵書目録を見ても、H・スペンサーやJ・S・ミルの著書などは見当たらない。ダーウィンの進化論については、「『種の起源』(The Origin of Species)は農学校の蔵書中にも開校後間もなく加えられ、ペンハローは植物学講義の中で自然淘汰に言及し、動物学を担当したカッターも講義の中で進化論の紹介をしている」⁽³⁾とされ、志賀の場合もここで生涯にわたり「ダーウィン先生を欽慕」⁽⁴⁾する素地がつけられたとみてよからう。卒業後の明治十九年、南洋航海の機会を得た志賀は、ダーウィンの『世界周航記』を携えて筑波艦に乗船したほどである。

講義の内容は、佐藤昌介、内田瀨らのノートによって知ることができる⁽⁵⁾。二期生の

新渡戸稻造は、やや異なつた視点から札幌農学校の「農学」をのちに一言で「官房学」と呼び、次のようにいつているのは参考とならう。

この「農学校」は、厳密な意味において、けつして農業の学校ではなく、そのように呼んだのは全くの誤りであつた。その真の目的は、われわれの見るかぎり、はるかに幅ひろく、実際のところ前世紀の後半から今世紀の始めにかけ、ドイツで熱心に行なわれたカメラリスティック・サイエンス〔Camerallistic Science Ⅱ「カメラ」学Ⅱ官房学〕の学校に類似しているように思われる。(P2)

明治十五年当時の教科目からも、「農学」が単なる農業技術の習得を目指したものでなく、「実際の農家を育成するのが、本校唯一の目的でも、また、主たる目標でもない」(P3)ことが看取できよう。その二年前に卒業した一期生たちは、「我等卒業生に授与せらるる学位が農学士であると聞いた一同は、そのやうな名称の学位は受けたくない、我々はバチエラー・オブサイエンス即ち理学士を要求する、といつて当局に強行にねじ込んだ」(P4)ほどであつて、以上から判断すると、札幌農学校の「農学」は米国流の英学を基本にした教養主義的な理学で、政策科学的な要素も含んでいたといえよう。現在残されている成績表から判断すると、志賀は全学年を通して成績は中位であるが、「英学」(P5)「演説」についてはトップ・クラスの成績を挙げている(P6)。以上から、農学校で学ぶ志賀の志向が、進化論的な素地を築く契機を得ながらも、必ずしも専門的な「農学」にあつたわけではないと判断できる。

しかし、「日記」から判明する事実はそれだけではない。前節で述べた東京の書生社会と札幌の書生社会との関係に注目して全編を丹念に読み通してみると、次に列举するよう

な接触の可能性が指摘できる。

(1) 明治十四年十月十五日の条―「午後北振社通信原稿ヲ久島氏ニ渡ス」

(2) 同年同月二十日の条―「東京大学ヨリ修交社ノ通信ヲ落掌ス。本月ノ委員ハ理学部鉱山学科式年生三浦(改増島)文次郎君ナリ。当社ノ委員ハ四年生久島重義ナリ」

(3) 同年十一月十八日の条―「東京大学文学部二年生莊清二郎氏ヨリ修交社ノ通信到ル。書中頼ル有要ノ事件アリ。本社今月ノ通信委員ハ伊

吹氏ナリ」

(4) 同年十二月三十一日の条―「東京大学及ピ安井鋭三氏ヨリ書来ル」

(5) 明治十五年一月十七日の条―「北振社通信ヲ書ク」

(6) 同年二月二十二日の条―「東京大学文学部青木氏ヨリ通信ヲ受取ル」

(7) 同年四月十一日の条―「修交社員江木氏ヨリノ通信ヲ落掌ス」

(8) 同年六月八日の条―「修交社通信二十四回ヲ東京大学文学部河野通章氏ヨリ得タ

リ」

これらから、東京大学と札幌農学校にはそれぞれ修交社と北振社という学生・生徒の通信結社があつて、月一度相互に情報を交換しあつていたことが窺える。このような通信は、農学校生徒の立場からすると、札幌という辺境に身を置いているという意識があるゆえに、書生一般の政治志向とも相まって、中央(東京)志向を育む役割も担っていた。

なお、棚橋一郎の「日記」第一号明治十五年十月三日の条には、「修交社通信を書き北海道に出す(原漢文)」とあり、彼もこの結社の一員であつたらしいことが判る。従

来、札幌農学校生の結成した団体というと、開識社のみがその実態をいまに伝えるだけとなつてしまつてゐるが、東京と札幌を結ぶ通信網として両社のもつ存在価値は格別の意味を有している。少なくとも、東京大学と札幌農学校の書生社会はすでに明治十五年という時期に連絡があり、その中には志賀と棚橋の關係にみるように、のちに政教社に結集する〈組織〉原核どおしの接触の可能性を認めることができるのである。

これより数年ののち、政教社に結集する集團の一つの萌芽的な様相は、志賀を中心にした札幌農学校の書生社会の中に、人脈形成、思想形成の両面ですでに現われはじめていたといえよう。

第四節 秋田師範学校

——内藤虎次郎の場合——

明治十五年、のちに政教社を結成する「同志」たちは、東京大学と札幌農学校というわが当時の書生社会の頂上に位置する二つの学校に所属していたのに対して、「初期政教社」の第二代といふべき湖南・内藤虎二郎、呂泣・畑山芳三、忘言・後藤祐助らが、皆秋田師範学校の卒業生であるというのは、無視できないことがらである。彼らの政教社入社事情は、後年三宅によつて次のように回想されている。

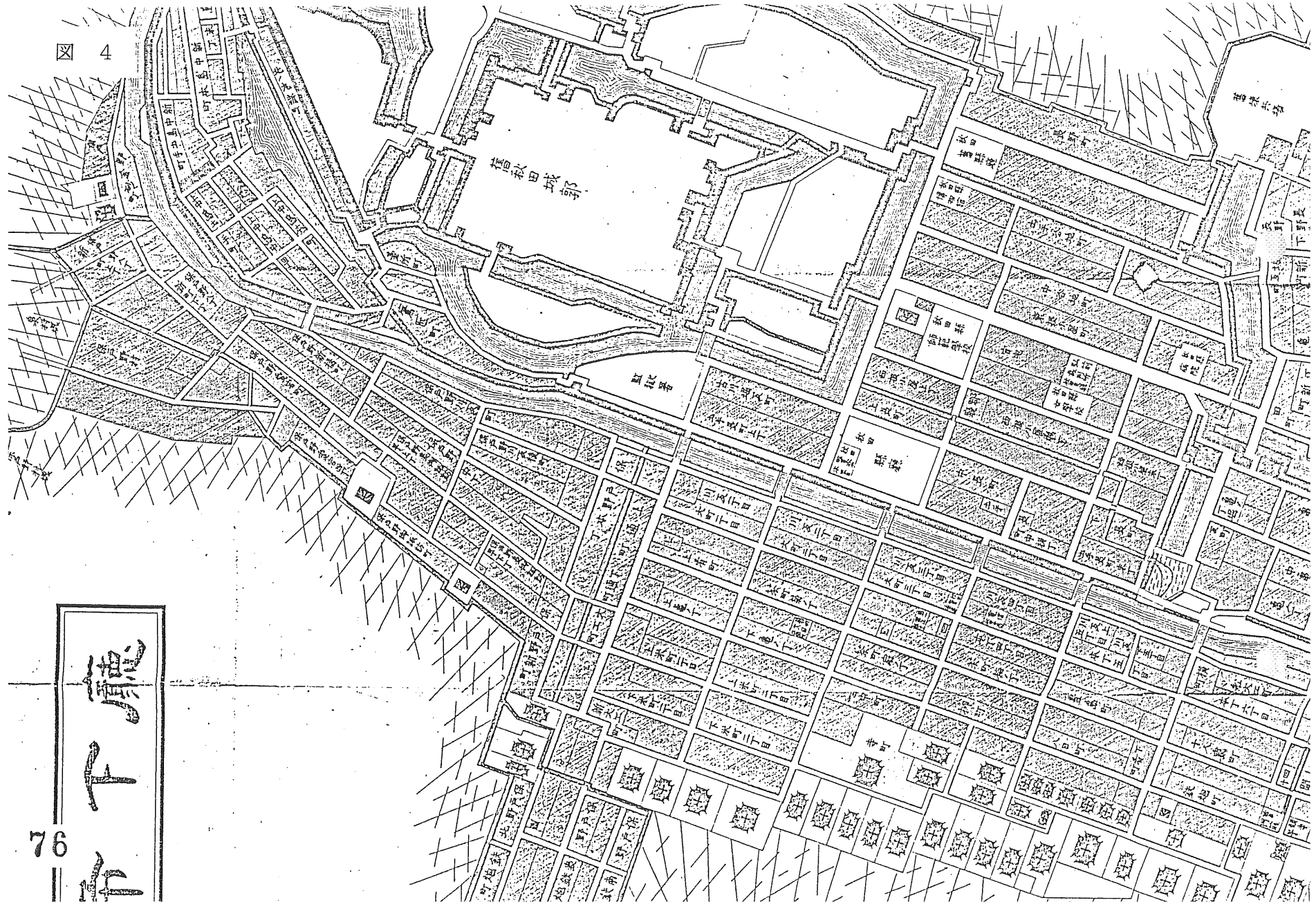
内藤君が雑誌「日本人」編輯に携はり、人の口授を筆記するにも、自ら執筆するにも、自由に出来るが上、郷里の友人を連れて来り、編輯が殆んど秋田県揃ひになつた。初めに畑山芳三氏を連れて来た。之は郷里の師範学校で同学とかいふことであつた。自身の文は呂泣と号して執筆した。浅水又次郎氏は南部八戸の人、南八と号し、秋田県で無けれど秋田県と似通ふところがあつた。それから秋田県人の後藤祐助氏も加はつた。何れも文章に長ずるのみならず、書に長じ、殊に内藤君と浅水氏が秀でた。

これによると、内藤はイモ蔓式に同郷・同学の友人を政教社に誘つたようで、一時期政教社の編集室は秋田出身者で占められたのである。そこで本節では、その内藤に焦点を合わせて、秋田師範学校に展開した書生社会の様子を明らかにすることから、のちに政教社入りし「国粹主義」に共感する「根」を探つてみたい。

秋田師範学校は、明治五年の学制頒布とともに設置された秋田伝習学校を起源と

し、のちに秋田県太平洋学校、秋田県師範学校と改称され、教育令下では小学校教員養成機関として同校自体は中等教育機関に位置づけられていた。現在の秋田大学教育学部の前身である。ただし場所は移っていて、藩校明德館の置かれていた東根小屋町（現在中通一丁目）の一面に位置していた（図4参照）。明治十四年には学科を高等（修業年限四年）、中等（二年半）、初等（一年）の三科に分け、翌十五年には秋田中学校を分離して、次第に体制が整えられてくる。内藤が秋田師範学校への進学を希望し受験勉強を始めたのは、この明治十五年末のことといわれる。彼が、試験を難なくパスして入学を許された翌十六年春、秋田師範学校では当時県内随一といわれた洋風二階建ての新校舎も完成した。内藤は、その頃一般に「県下」と呼ばれていた秋田に行き、校舎に続いて完成した寄宿舎の一室に入居する。

こうして始まった内藤の書生としての秋田生活を覗いてみたいのだが、その前に、決して平坦ではないそれまでの道のりについて、簡単に述べておかななくてはならない⁹⁰。慶応二年（一八六六）、南部藩領鹿角毛馬内館主桜庭氏に十五石（のち十七石）で仕える儒臣の家に生れた彼は、維新後はご多分にもれず貧窮の中で成長する。佐幕派に属する南部藩（盛岡）と官軍派の佐竹藩（秋田）の間には小規模な戦闘もあり、維新後鹿角地方は数度の変遷を経て秋田県に属することになる。敗れた南部藩はいち早く廃藩を申し出る有様であり、毛馬内の士族は帰農して暮らしを維持した。当時江刺県に属した花輪在勤の民政官吏であった田中正造は、「吏員等皆な詩を高吟し書を揮毫する杯、庁内宛かも浪人部屋の如き観を呈しぬ（中略）鹿角郡なる山間の各僻村は雪中薇の根を掘て之を喰ひ、又稗糠に塩を混じたる粥を啜りて僅かに露命を維ぐが如き、見るものをして実に惨憺の情に堪へ



下町

ざらしむるものあり」(82)と書き記している。

しかし、内藤家は困窮の中にあつても、虎次郎の祖父仙蔵(号天爵)、父調一(十湾)によつて、折衷学を基調とする「鹿角学」(82)の学統を「家学」として守り、引き継いできた。十湾は維新後鹿角周辺の小学校教員等をしながら虎次郎を育て、鹿角学と彼自身の傾倒する頼山陽の学問を、この非常に物覚えのよい次男に授けたのである。

明治十二年、内藤が満十三歳を迎えたとき——父子は尾去沢にあり、彼は又新学校という土地の小学校に学んでいた——の統計によれば、満十四歳以上の就学生徒は秋田県全体で五百四十八人(うち女子六人)しかおらず、このうち旧陸中の国に属する鹿角地方ではわずかに四十三人しかない(83)。要するに、ほとんどの子どもは初等教育を受けるのみであり、中等教育以上を受けることができたのはほんの一握りにすぎなかった。したがつて、内藤が秋田師範学校に進学できたのは、それだけでもかなりの幸運といわなければならぬ。かつ、当時の師範学校は授業料その他は公費で賄われ、寄宿生には生活費も支弁された。いわゆる没落士族の、しかし向学心に燃える子弟には、彼らの知識欲と出世欲を充たしてくれる当時の秋田県におけるほとんど唯一のチャンスが、秋田師範学校進学だったのである。

内藤が学んだころの秋田師範学校の状況は、教員十数名、在校生百名内外というごく小規模なものであつた。しかし、ちょうどこの「明治十六七ころには師範学校の各師範学科も設置をおわり、続々新教員を迎えて、学校の内容も新営の校舎とともに完成に近づいていた」(84)のであり、「拡充は一つの頂点に達した」(85)とみなされる。校長の関藤成

緒は頼山陽の系統を引く漢学者で人格主義者といわれたし、工部大学校、東京師範学校等

を卒業した教師たちがそれぞれの新知識とともに東京の書生社会の雰囲気を持ち込んでいたに違いない。より高度な学問と広い世界を求めて内藤の上京熱が煽られたとすれば、まずそれはこの時期のことである。

秋田師範学校当時の内藤の関心は、簡略な自伝と回想からのほか、二年半の間に父十湾あてに差し出された約四十通の書簡から知ることができる。その中で本稿の文脈上比較的注目しておきたいのは、第一に、その父から授けられた鹿角学の進展であり、第二に、進化論との接触と「哲学」志望であり、第三に、自由民権運動を接点とした政治への刮目である。

当時各府県に設置されていた師範学校の教科内容は、漢文中心という点ではいずれも大同小異といえよう。この頃からしだいに、ペスタロッチの開発主義が導入されたり、英語熱が起こったりして多様化してきたとはいえ、依然として漢文の比重が高い。秋田師範でも、高等師範科の場合、「修心」「読書」という漢文科目が全卒業単位の実に三割を占めていた。ところが、同級生からみても「漢文などは先生が教はるといふ位の天才」²⁶だった内藤にとっては、教師も教科書も物足りなく感じられ、結局は三田村泰助がいうように「師範入学当初にみられる湖南の学問の傾向は大体系学の延長とみてよい」²⁷だろう。後年、京都帝国大学教授として「シナ学」あるいは東洋史学の泰斗となる素地は着実に踏み固められつつあった。

ところが、師範学校の卒業も間近に迫った明治十八年になると、内藤の関心は進化論との接触を経て「哲学」に向かう。明治十年代の我が国の思想界を席卷した進化論は、東京師範学校出身の教師川名庸謹によってもたらされたもので、漢学一辺倒だった内藤の思考

回路に少なからぬ変換を促したようだ。彼の「哲学」は、いわば西洋の哲学概念によつて東洋の従来の哲学を捉え直すことだったようで、その見込みを父あてに次のように報じている。

当時書生の気象は、皆曰く理化学を研究せん、曰く工部大学に入らん、曰く法律を学ばん、曰く政治学を為さん、私は独り西洋人所謂哲学なるものに嗜好有之候（哲学の定義は万種学科に通ずる一定不変の理法を修むるものにして、一寸言はば仏法に似たり。能く考ふれば儒学の主義の如きものにて、深遠高妙なる心性上の学問と承り候）。附ては彼国の書をも読み、又仏法をも傍学し東洋従来の一大哲学を發揮せんならば、実に可喜事と存候。措大の妄言のやうなれ共深夜人定まり候後瞑想致候ば、実に万学科に通ずる一定の理法は不可誣。独自ら知りて他人に話しても他人は馬耳東風なること有之、私の心は哲学に適せる心なるやも不相知候間、漫りに右様の考申上候。（98）

以上の二つが、学内における彼の内面に即した関心領域だとすれば、第三に、明治十七年頃から政治への関心が開眼することを挙げなければならない。その直接の契機は、父十湾が明治十五年十月に結成された秋田改進黨に入党し、自由民権運動の戦列に加わつたことによるようだ。同党は大隈重信の立憲改進黨の系列で、翌十六年に機関紙『秋田日報』に犬養毅を招いて、一時期県政界をリードする勢力を有した。やはり父あての明治十七年十二月三日付の書簡の中では、自らを「草野の書生」になぞらえ、新聞記事で知り得た「茨城秩父の暴徒、諸方負債党の変報、自由党の解散等」に対する「杞憂」の念を表している（99）。内藤が、東京の三宅や札幌の志賀と全く同時に、自由民権運動を通して政治への

刮目を果たしたことも記憶しておきたい。

さらに、人脈形成という点でも、内藤の周りに政教社第二世代の原核とでもいうべき交際がはじまっていた。生涯酒も煙草も嗜まず、賭事その他およそ遊びに類することには関心を示さなかつたといわれる内藤は、すでにこの書生時代の生活からして絵に書いたように生まじめなものだったらしい。したがって、他の師範生の「遊蕩」ぶりは意に染まなかつたようで、父十湾あての書簡の中で「寄宿舎杯の風俗は殊に悪敷物にて、人と物言ふにも様付も不致、互に貴様がけにて、中には甚だ不心得の者も有之候」(100)と慨嘆している。このような中からのちに政教社に集う岸田(畑山)、後藤、奥山(中村)千代松らと出会う。とくに岸田については、「此間同級生岸田吉蔵と申者と相談、中学教員森某へ英学稽古に参る事に極め候。岸田は私同年にて気節・学問・文章と云ひ舎内一等の人物に御座候」(101)とみている。おそらく岸田も内藤に対して同じような思いを抱いたであろう。

「人物」を認め合つた交際は親友関係とみてよい。千葉三郎は内藤と岸田を「無二の親友」(102)といつている。この二人の関係について、私たちは、内藤の処女出版である『近世文学史論』(一八九七年、政教社)に、内藤が上京後「先生」と呼ぶ二人——雪嶺迂人を名乗る三宅雄二郎と大内青巒——に次いで序文を寄せたのが、畑山と改姓し呂泣と号する岸田その人だったことから知ることができる。秋田師範学校当時の内藤は、こと政教社との関連からいえば、岸田との交友を中心に、のちに政教社へイモ蔓方式に招き入れる後藤や奥山との出会いこそ重視されるべきであろう。すなわちここに、政教社の三つのへ組織の原核のうち最後の一つが、この秋田の地で形成されつつあったのを確認することができるのである。

ところが、内藤にとつてはいろいろな意味で準備期間といえる秋田での書生生活は、彼がわずか二年半で高等科の課程を修了してしまつたため、明治十八年夏には意外と早く終つてしまふ。就職先は北秋田郡の綴子小学校、首席訓導で月俸十円。前年札幌農学校を卒業した志賀が三十五円（まもなく四十円）、その前年東京大学を卒業した三宅が五十円だから、初任給に関して当時の学校間格差は歴然たるものである。

綴子は今でも戸数二百戸あまり、ひっそりとしたたたずまい集落である（*103*）。かつては羽州街道の宿駅として栄えたが、現在は鷹巣町に編入されている。秋田からは五条目街道を通つても約二十二里九十キロメートルの距離、岸田が母校師範学校の教壇に立ち、後藤が秋田に隣接する土崎小学校に赴任したのに較べると、内藤は内心愉しまなかつたかもしれない。まして二人が間もなく上京したと聞いてはなおさらであつたろう。しかし、彼とても拱手傍観して牧歌的な田舎教師に甘んじていたわけではない。むしろ、平穩な日常の逆説として鬱勃たる上京熱が昂じてくるのを押さえがたかつたのではないだろうか。二十年はじめ頃のことと思われるが、内藤は井上円了の『仏教活論序論』を読んで彼の考える仏教と西洋哲学の統一的な把握について決定的な示唆を得たらしい。それはおそらく、西洋哲学によつて仏教の意義が“再発見”されたことを述べた同書の次のような部分だつたろうと推測される。

一日大二悟ル所アリ、余ガ数十年來刻苦シテ渴望シタル真理ハ、儒仏両教中ニ存セズ、耶蘇教中ニ存セズ、独リ泰西講ズル所ノ哲学中ニアリテ存スルヲ知ル。時ニ余ガ喜殆ンド計ルベカラザルモノナリ。（中略）已ニ哲学界内ニ真理ノ明月ヲ発見シテ更ニ顧テ他ノ旧來ノ諸教ヲ見ルニ、耶蘇教ノ真理ニアラザルコト愈明カニシテ、儒教ノ

真理ニアラザルコト亦容易ク証スルコトヲ得タリ。独リ仏教ニ至テハ其説大ニ哲理ニ合スルヲ見ル。余是ニ於テ再ビ仏典ヲ閲シ益其説ノ真ナヲ知り、手ヲ拍シテ喝采シテ曰ク、何ゾ知ラン、欧州数千年来実究シテ得タル所ノ真理、早く已ニ東洋三千年前ノ太古ニアリテ備ハルヲ⁽¹⁰⁴⁾

このような思考経路は、「国粹主義」の思想形成にとって重要な意味をもっている。すなわち、内藤が上京して政教社に接近していくことの必然性は、彼の構想した右のような「哲学」の内容と深く関わっていたとみられるからである。

青江舜二郎によれば、綴子時代の内藤は二年続けて東京の高等師範学校の入学試験を受け、いずれも不合格だったという⁽¹⁰⁵⁾。もはや東京遊学の念は押さえがたかった。彼が文字どおり笈を負って上京し、かつての秋田師範学校長関藤成緒の門を敲くのは、その直後、明治二十年八月のことである⁽¹⁰⁶⁾。

第一章 註

- (1) 三宅雪嶺『同時代史』第二卷(一九五〇年、岩波書店)一八四頁。
- (2) 原口清『日本近代国家の形成』(一九六八年、岩波書店)二八五頁。
- (3) 本富安四郎『地方生指針』(一八八七年、嵩山房)序二頁。同書は、日本近代思想大系二三『風俗 性』(一九九〇年、岩波書店)に収録。なお、本富は政教社の「同志」たちとも関係の深い東京英語学校の教師も務めたことがある。その前後の事情については、熊倉功夫「解説(二)」、前掲『風俗 性』五〇〇頁以下参照。
- (4) 惣郷正明・飛田良文『明治のことば辞典』(一九八六年、東京堂出版)の「書生」の項目を見渡したとき、確かにこのような傾向が指摘できよう(同書二六〇～二六一頁)。
- (5) 「中学校教則大綱」(明治十四年七月二十九日文部省達第二八号)第一条。
- (6) 明治二十年『東京府統計書』(一八八八年、東京府)等から推計。
- (7) 政教社の場合、設立の「同志」が島地を除いて洋行の経験を有しないことは、「国粹主義」の思想内容を評価していく際に注目すべきことからである。すなわち、彼らの受容した西洋文明は講義、書物を通して得られた学術なのであって、洋行による直接の衝撃を受けていないだけあって、比較的容易にそれらを相対化し、「国粹 Nationality」の発見へ向かうことができたのではないかと考えられる。
- (8) 唐沢富太郎『学生の歴史』(一九五五年、創文社)二二頁。
- (9) 小谷保太郎『三幅対』(一九〇三年、吉川弘文館)によれば、貢進生時代の杉浦

は「慷慨家」「近世史好」「無産」「不潔家」「漢学家」「短気」「交際好」、宮崎は「無産」「気長」「外から見て分らぬ漢書類」「好人物」とされ、「無産」を除けば共通点はないが、この二人が貢進生どうしの交際を「重もに斡旋した方」(同書八頁)であったという。

(10) 若槻礼次郎『古風庵回顧録』(一九五〇年、読売新聞社)九頁。

(11) (12) 橋南漁郎『大学学生溯源』(一九一〇年、日報社)二八頁。同書は、前掲(註9)『三幅対』とともに、貢進生の実態を最もよく伝えてくれる。

(13) 添田知道『演歌の明治大正史』(一九八二年、刀水書房)一四頁。

(14) 上山満之進監修『都筑馨六伝』(一九二六年、馨光会)四八〜四九頁。

(15) (16) 同右五七頁。

(17) 徳富猪一郎『蘇峰自伝』(一九三五年、中央公論社)一三一〜一三二頁。

(18) 徳富『我が交遊録』(一九三八年、中央公論社)九頁。

(19) 前掲(註3)本富『地方生指針』三七頁。

(20) この点では、「帝国大学令」(明治十九年三月一日勅令第三号)以下の諸学校令、「文官試験試補及見習規則」(明治二十年七月二十三日勅令三七号)、「学位令」(明治二十年五月二十日勅令第一三三三号)などが注目される。

試験については、天野郁夫『試験の社会史』(一九八三年、東京大学出版会)及び竹内洋『立志・苦学・出世』(一九九一年、講談社現代新書)を参照。

(21) 故阪谷子爵記念事業会編刊『阪谷芳郎伝』(一九五一年)参照。

(22) 利谷信義「日本資本主義と法学エリート」、『思想』第四九六号(一九六五年)

一〇九頁。

(23) この史料は、群馬工業高等専門学校名誉教授長谷川博氏の御教示による。

(24) 磯田光一「遊民」的知識人の水脈、「文学」第五四卷第八号（一九八六年）五頁。

(25) 伊藤整『日本文壇史』二（一九五四年、講談社）参照。

(26) 末兼八百吉（宮崎湖処子）「壮士、青年、少年（其一）」、『少年園』第一二号（一八八九年）五頁。

(27) 同右（其二）、同右第一四号八頁。

(28) 同右（其三）、同右第一五号八頁。

(29) 宮崎道正「日本書生の前途」、「日本人」第四号（一八八八年五月十八日）八頁。

(30) 「『文創刊の辞』」、「文」第一号（一八八八年）一頁。

(31) 「学徒状態の変遷」、「亜細亜」第一六号（一八九一年十月十二日）三頁。

(32) 「現代の少壮年、遷移機」、第二次『日本人』第五号（一八九三年十二月十八日）八頁。

(33) 大田才次郎「今日の書生（続）」、『風俗画報』第一三〇号（一八九六年）一頁。

(34) 徳富「社会の勢力としての書生」、「国民之友」第一八六号（一八九六年）二頁。

(35) 花笠庵翠葉「書生の門附」、「風俗画報」第一六六号（一八九八年）四頁。

- (36) Michel Foucault, *Surveiller et Punir*, 1975. 田村淑訳『監獄の誕生』(一九七七年、新潮社)一四七頁。
- (37) 田山花袋『東京の三十年』(一九八一年、岩波文庫版)七頁。
- (38) 同右一三頁。
- (39) 谷本芳郎「神田学生街の発生と変遷について」、『法政』第十卷第四号(一九八三)参照。
- (40) 市島謙吉『回顧録』(一九四一年、中央公論社)一八八頁以下。
- (41) 菅復三編『東京名所指南』(一九九〇年、泛舟楼)九九頁。
- (42) (43) 千代田区役所編刊『千代田区史』中巻(一九六〇年)二八四〜二八五頁。
- (44) モデル問題については、岩波文庫版『当世書生氣質』(一九三七年)巻頭の柳田泉による「解題」に具体的な名前が出ているもの(同書一二〜一三頁)、ここでは大村弘毅の「特定のモデルがあつたわけではないが、逍遙およびその周辺の幾人かのモンタージュ写真のようなものであつたと見てよい」という見解にしたがつておきたい(人物叢書『坪内逍遙』(一九八七年新装版、吉川弘文館)五五頁)。
- (45) 加賀国は、後年三宅によって「蓋し前田氏の治や、大を忌む所の幕府を恐れ、強に抗する所の宗徒を恐れ、民衆を管着して敢て或は各自の特長を發揮するを得ざらしめぬ」(「加州の人」、第三次『日本人』第三七号(一九九七年二月二十日)五八頁)と分析されたように、一般に人物の少ない地といわれる。
- (46) 三宅の家系等については、稲垣伸太郎『雪嶺三宅先生の家系誕生地及び小伝』(一九三六年、私家版)参照。

(47) 三宅は『偽悪醜日本人』（一八九一年、政教社）の序一頁及び『小泡十種』（一九〇六年、丙午出版社）の七七頁で、河波の次のような発言を引用している。

夫物自無用而觀之、則天下無一不無用者、自其有用而觀之、則無一不有用者、今夫穢汚之物、人之所憎也。然田圃非待此物、無遂繁殖矣金玉之珍、人之所愛也。然古今不藉此以招患害鮮矣。是可以知夫有用無用之不在物而在人也。

(48) 三宅が学んだのは、明治六年（一八七三）二月に兼六園内に開設された県立の英仏学校であつたと思われる。同校は、致遠館以来の加賀藩洋学の流れをくむ学校で、七年五月には仏学専攻者の減少により英学校と改称、九年二月には他校と合併して啓明学校となっている。以上については、金沢市役所編『金沢市史』学事編第二（一九七三年、名著出版）四三二頁以下、石川県教育史編さん委員会編『石川県教育史』第一巻（一九七四年、石川県教育委員会）一六〇～一六一頁、今井一良「加賀における英学・フランス学の展開」増補改訂（『稿本加賀洋学資料』一九八六年、日本英学史学会北陸支部）等参照。

三宅は当時の様子を次のように回顧している（「細井君を念ふ」、『少年園』第一四六号（一八九四年）一四頁）。

回顧すれば二十年前、加州金沢広坂の上に、巽の学校とやいひけん、東校とやいひけん、州内唯一の英学校ありしが、一百に余る寄宿生、日に蟹行紙上語牙牙を畢る、則ち後門より兼六園にぬけ出で、危石竦峙する所、緑草延縁する所、走りヤイに、石ホーリに、ヒトヒトに、オニカイホーに、各々遊を放にするを常とせり。

(49) 『(愛知県英語学校一覽)』全(出版事情不明)によれば、同校では四学年を通して全教科目の実に九〇パーセントが英語による授業で、ウイルソンの読本やパーレーの万国史などが使われた。愛知県英語学校については、他に愛知県教育委員会編刊『愛知県教育史』第三卷(一九七三年)四二二頁以下、鯉光百年史編集委員会編『鯉光百年史』(一九七七年、愛知一中(旭丘高校)創立百年祭実行委員会)一頁以下等参照。

(50) 三宅『自分を語る』(一九五〇年、朝日新聞社)二二頁。

(51) 前掲(註49)『(愛知県英語学校)』二九頁。

(52) 中山茂『帝国大学の誕生』(一九七八年、中公新書)二九頁。

(53) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』通史一(一九八四年、東京大学)四三〇頁。同書は、明治十年代の法・文両学部の学科構成の変化を、「前者においてはドイツ法学の導入、後者においては、そのことと関連しつつも、大学の中における哲学的思弁への警戒が、それぞれの学科改編の背景となっていたように思われる」と分析している(四五八〜四五九頁)。

(54) 『学芸志林』第一一巻(一八八二年)四一二頁。

(55) 同右五〇四〜五二三頁。有賀長雄訳。このときの演説については、明治十五年十月三十一日付の『東京日日新聞』が、雑報記事「フェノロサ氏の祝辞」でいち早く取り上げ、大意を訳出している。

(56) 小中村清矩「古典講習科開業演説案」、同右三〇六〜七頁。

(57) 前掲(註53)『東京大学百年史』四六六頁。古典講習科に関しては、他に斯文会

編刊『斯文六十年史』(一九二九年)二三二―二四七頁参照。

(58) 「九鬼文部少輔ノ演説ヲ読ム」、明示十五年十月六、七日付『東京日日新聞』。

(59) 多田好問編『岩倉公実記』下巻(一九〇六年、皇后宮職蔵版)七一九頁。もちろんこれが井上毅の起草になることはいうまでもない。

(60) 前掲(註53)『東京大学百年史』四七五頁の第一図「法・理・文学部卒業生の進路」参照。

(61) せつれい(三宅)「面棚偶語(四)」、第三次『日本人』第八号(一八九五年十月二十日)五五頁。

ここでいわれている「文学の混沌時代」を示すために、「日記」全期間から棚橋の読んだ書物をすべて書き出したのが別掲「読書記録」である。これによると、棚橋の読書傾向は、大学のテキスト中心で、カント、ヘーゲル、H・スペンサー、J・S・ミルなども含まれているが、継続的に読んでいるのは和漢の古典、四書五経や古事記、万葉集などであるといえる。

棚橋の「日記」は、郁文館学園の八十年史編纂の際に「発見」されたもので、第一号から第九号まで全部で八冊残っており、第八号が欠けている。全篇漢文で丁寧に墨書されている。

(62) A "Heathen Convert" (Kanzo Uchimura), How I Become a Christian, 1895. 鈴木俊郎訳『余は如何にして基督教徒となりし乎』(一九五八年改版、岩波文庫版)六四頁。

(63) 志賀「在札幌農学校第二学期中日記」(北海道大学附属図書館北方資料室所蔵)

- 1 詩文（斯文）一斑、2 源氏（田舎源氏）、3 仏国史（仏史）、4 大清文典、5 格物探源、6 竹山国字牘、7 生物学、8 近世偉人伝、9 文学雑誌、10 学芸新報、11 咸唐題庫、12 学芸雑誌、13 虎列羅予防訓、14 天一坊実記、15 信夫草（忍草）、16 景清一代記、17 佐倉宗吾一代記（宗吾一代記）、18 斯文会講義筆記、19 花月新誌、20 自由之理、21 宗教三論、22 文明史（英国文明史＝英人伯克爾）、23 萱野草、24 写本詩鈔、25 古事記、26 韓非子、27 解詁全書、28 新策（＝山陽先生書）、29 修身書編纂規則、30 經濟論（＝弥兒氏、小幡氏訳）、31 析玄（＝淡窓先生所著）、32 六論衍義大意、33 草紙？、34 自新録、35 再新録、36 正統英雄百人一首、37 近思録、38 熱海唱和、39 太閤記（真書太閤記）、40 大学、41 詩經、42 宗元通鑑（通鑑）、43 論理書（＝平牙兒氏）、44 哲理書（＝官途氏）、45 頼豪阿闍梨恠鼠伝、46 栄華物語、47 大鏡、48 古語拾遺、49 莊子、50 稗史？、51 中庸、52 大倭文般、53 荀子、54 劇戲種本？、55 古今集、56 遠鏡、57 呈木戸公神道碑、58 同窓集、59 小金井小二郎伝、60 慶応水滸伝、61 人權新説、62 源語（源語聴）、63 四教儀（天台四教儀）、64 万葉集、65 夢想兵衛胡蝶物語、66 星巖録、67 玉池吟社詩集、68 歌文新誌、69 黄石公素書、70 古文学史、71 論語（論語註疏）、72 心性実験録、73 日本文範、74 時得抄、75 心理学、76 道德進化論、77 老子、78 八犬伝、79 康熙字典序並凡例、80 鈴木孟陽遺集、81 芦屋道満劇場種本？、82 傍觀記事、83 生物原理（＝斯遍世留氏）、84 維摩經、85 東洋哲学史、86 左氏（左伝）、87 一塵新誌、88 經濟書貧民救恤法、89 唐書、90 日本紀、91 三国志、92 続日本紀、93 弓張月、94 儀式論、95 明儒学案抄録、96 修身実験録、97 政体学（政体之組織＝宇留清氏）、98 旭荘先生三洲氏摩齊氏及大人壯年之文章、99 心意学、100 周礼、101 周礼註疏（参考書）、102 秋月序文、103 名家史論、104 遊戯会規則、105 文章規範、106 輔教編、107 詞八衢、108 有栖川二品親王欧米巡航日記、109 道義学、110 徒然草、111 本朝文範、112 三体詩、113 歴朝詔詞解、114 蜀魂雲井一声（色？）、115 墨子、116 心種？、117 三宅雄次郎子寄高僧諸師書、118 教学論集、119 致知啓蒙（啓蒙）、120 八宗綱要、121 関尹子？、122 演義日本外史、123 金瓶梅、124 実々事談、125 哲学史（＝須宇恵具羅留、迷辺留宇恵具）、126 道義心理？、127 敷島文庫？、128 大功記及近江源氏等義太夫本、129 明道教会規約並其解説、130 哲学原理、131 芳譚雑誌、132 中山大納言使関東始末書、133 一谷嫩軍記、134 兵六物語、135 列子、136 延喜式、137 祝詞

四頁。この日記は志賀富士男編『志賀重昂全集』第七、八巻（一九二八、九年、志賀重昂全集刊行会）にも収録されているが、「全く杜撰な翻刻」（亀井秀雄「小さな大学の大きなドキュメント」、『文学』第五五巻第五号（一九八七年）一四頁）という指摘もあり、以下においても念のため原本を用いることとする。

- (64) 矧川生（志賀）「十年前録（二）」（『亜細亜』第二巻第一号（一九九三年二月一日）所収）に、「札幌同窓の卒業生亦た吉凶慶弔君（宮崎道正・引用者）を仰ぎて中心と為す」（同誌四七頁）とあり、札幌農学校の卒業生たちの中心に宮崎がいたことが窺える。

- (65) E.S.Morse, Japan Day by Day, 1917. 石川欣一訳『日本その日その日』2（一九七〇年、平凡社）一五七頁。

- (66) 明治十六年九月二十九日付「石狩国郡区画更正の義に付伺」、札幌市教育委員会編『新札幌市史』第七巻史料編二（一九八六年、札幌市）二三七頁。

- (67) 明治九年（一八七六）八月三十日制定「札幌農学校校規」第一章第一節、北海道大学編『北大百年史』札幌農学校史料（一）（一九八二年、ぎょうせい）二二〇頁。なお、明治期札幌農学校の自画像という意味で、札幌農学校学芸会編『札幌農学校』（一八九八年、裳華房、一九七五年、北海道大学図書刊行会復刻）は参考になる。

- (68) 『北大百年史』通説（一九八二年）四七頁。

- (69) 同右二九頁。

- (70) 前掲（註63）亀井「小さな大学の大きなドキュメント」、一二頁。

(71) 札幌農学校入学以前の志賀の経歴は、前掲(序章註^ハ(4))『政教社文学集』所載の「年譜」のほか、中村和之雄「志賀重昂先生と其家系」(『風景』第十卷第六号「一九四三年」所収)が最も委細を尽くしている。この中村という人物は、当時岡崎市立図書館長で、生家が志賀本家の隣りであったという。

(72) 松沢弘陽「政教社と札幌農学校」、『日本近代史における札幌農学校の研究』(一九八〇年、昭和五十四年度科学研究費研究成果報告書)五二―五三頁。松沢はこの中で、「札幌農学校における「理学」や「英学」なくして、志賀や今や菊地の『日本』『亜細亜』における言論がありえなかったことは明らかであろう」(同書五五頁)ともいつている。

(73) 開拓使の廃止にともない、明治十五年三月八日、札幌農学校は農商務省の所管に移った。同年十月二十八日付「卒業生の誓約書解約の旨報告」(前掲(註⁶⁷)『北大百年史』)には、「旧開拓使トノ条約ヲ解キ各自ノ自由ニ任カスルニ決シ(中略)入校誓約書ヲ下渡シ解約之義相違候」(六三二頁)とある。それ以後の卒業生は北海道内に就職する者が減り、志賀、菊地と同期の第四期生で二名、今と同期の第五期生で三名にすぎなかった。第一―五期の全卒業生七十名のその後の進路が多様化していったことについては、天野郁夫『近代日本高等教育研究』(一九八九年、玉川大学出版部)八二頁において指摘されている。

(74) 板垣退助監修『自由党史』中(一九五八年、岩波文庫版)によれば、本多新は自由党の結成式に列席している(同書八三頁)。

(75) 前掲(註⁶³)「日記」一一六頁、明治十五年五月十七日の条。

- (76) 同右一一七頁、五月二十日の条。
- (77) 志賀「初対面録」(第三次『日本人』第六号(一八九五年九月二十日)所収)では、「予の札幌を去り東京に到るや、即ち民間の政党に入りて以て運動せんことを想う。而して当時最も自由党に入らんことを想ふ」(同誌四六頁)と回想されている。
- (78) 田中彰「札幌農学校と米欧文化」(前掲、『北大百年史』通説所収)参照。
- (79) 前掲、『北大百年史』通説五一―五二頁。
- (80) 志賀『世界山水図説』、『志賀重昂全集』第三卷(一九二七年)二九二頁。
- (81) 佐藤のノート類は、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。内田のノート類は、北海道開拓記念館所蔵。
- (82) Inazo Nitobe, *The Agricultural College of Sapporo, 1893*. 佐藤全弘・和泉庫四郎訳「札幌農学校」、新渡戸稻造全集編集委員会編『新渡戸稻造全集』第二二卷(一九八六年、教文館)三六七頁。
- (83) 同右三九二頁。
- (84) 大島正健『クラーク先生とその弟子たち』(一九七三年、国書刊行会)一八五頁。
- (85) 佐伯有清「札幌農学校と英学」(前掲、『北大百年史』通説所収)参照。
- (86) 「札幌農学校本科成績表」(北海道大学附属図書館北方資料室所蔵)による。
- (87) 前掲(註61)棚橋「日記」第一号、三二―三三頁裏。
- (88) 三宅「内藤湖南君のこと」、『書芸』第四卷第九号(一九三四年)二二頁。

(89) 同校については、秋田県師範学校編刊『創立六十年』（一九三三年）、秋田大学

教育学部創立百周年記念会編刊『創立百年史』（一九七三年）及び明治三十六年『

秋田県師範学校一覽』（一九〇四年、秋田県師範学校）第一章「沿革」等を参照。

(90) 内藤自身が少年時代を回想したものとして、「名士の少年時代」（『報知新聞秋

田版』一九二九年、十回連載）、「我が少年時代の回顧」（『内藤湖南全集』第二

巻（一九七一年、筑摩書房）所収、初出は『学海』第一巻第一、二号、一九四四年）がある。

(91) 田中正造「田中正造昔話」、田中正造全集編纂会編『田中正造全集』第一巻（一

九七七年、岩波書店）六〇頁。この中には、「寸陰館学派の友人内藤某」（同書六三頁）、「陸中国江刺県鹿角郡にては最初寸陰館に入館し、内藤魯一（調一）等を師と仰ぎて勤務の外に研究する所あり」（同書二八二頁、「回想断片」一五）という回想がある。また、同全集第九巻所収の「日記」の中にも各所に内藤調一の名が見える。

(92) 鹿角学については、高橋克三『近世鹿角学統考』（一九七五年、私家版）参照。

(93) 明治十二年『秋田県治一覽概表』（一八八〇年、秋田県蔵版）。

(94) 前掲（註89）『創立百年史』七一頁。

(95) 同右六九頁。

(96) 尾形作吉「回顧五十余年の五もく寸史」、前掲（註89）『創立六十年』付録一六一頁。

(97) 三田村泰助『内藤湖南』（一九七二年、中公新書）七五頁。

(98) 明治十八年一月二十七日付父調一宛内藤書簡、『内藤湖南全集』第一四卷(一九七六年)三六七〜三六八頁。この「哲学」についてJ・A・フォーゲルは、「当時湖南は、かれが新たに知った西欧哲学や進化論と、儒教や仏教との相違(つまり、西欧の唯物論と東洋の観念論)は、弁証法的に統一できると考えていた」(Joshua A. Fogel, *Politics and Sinology*, 1984. 井上裕正訳『内藤湖南』(一九八九年、平凡社)五〇頁)と捉えている。

(99) 同右全集三六五頁。

(100) 明治十六年四月二日付父調一宛内藤書簡、同右三四三頁。

(101) 明治十七年四月十日付父調一宛内藤書簡、同右三六〇頁。文中の「森」は、森可次と思われる。森に英語を習っていたことは、前掲(註90)の回想の中でも森と三宅が東京大学時代に友人であったと記されている。また、棚橋「日記」第六号の明治十六年十一月十二、三日の条に森の名が見え、彼らの間に交際があったことが知られる。

(102) 千葉三郎『内藤湖南とその時代』(一九八六年、国書刊行会)九一頁。

(103) 綴子時代の内藤については、秩父威仙「湖南先生の綴子時代」(『湖南』第二号、一九八二年所収)及び前掲(註90)の回想を参照。綴子には、内藤在職時代に一時綴子小学校が置かれていたという綴子神社の社務所が、現在でもほぼそのままのかたちで残っている。

(104) 井上『仏教活論序論』(一九八七年、哲学書院)一八〜一九頁。

なお、内藤と『仏教活論序論』については、朝日新聞社史編集室編『上野理一伝

『（一九五九年、朝日新聞社）四四〇頁の伝えるところである。

(105) 青江舜二郎『竜の星座』（一九八〇年、中公文庫版）六〇頁。

(106) 内藤は、上京直後の明治二十年九月に認めた「綴子良友諸君ニ留別ス」（綴子神社内館文庫所蔵）の中で、「快樂ノ郷」綴子を離れ「未知新見ノ地」東京に赴かざるを得ない「錯雑」した胸中を吐露している（『内藤湖南全集』第六卷（一九七二年）一六四〜一六五頁）。

第二章 「国粹主義」の思想形成

——三宅雄二郎に即して——

第一節 東京大学と進化論

ここで再び、東京は神田錦町の東京大学へ戻ってみよう。

前章で明らかにしたように、東京と札幌と秋田では明治十五年頃から徐々に政教社のへ組織的の原核となる人脈関係が形成されつつあった。それは従来の政教社研究の始点をかなり遡ったことになる。また、それぞれの書生社会が、明治十年代を画する二つの思想的課題、すなわち進化論の受容と自由民権運動への対応という課題に、ある程度共通に直面していたということは、政教社の「国粹主義」を検討していく上で重要な意味をもっている。当時一般に、この二つの課題を素通りして思想形成を果たすことは考えられない。蘇峰が後年「日本青年の脳中には進化論の外何物もなかりし時代ありき」(ノ)といい、「當時土佐は民権自由論の発祥地にして、苟くも天下の改革に志ある者は、孰れも土佐を中心とせぬ者はなかつた」(コ)というように、それらは一種の流行思想であった。書生時代にこれら二つの思想的課題と取り組むことは、とりもなおさず明治二十年代に政教社が直面することになる文明論と政治論に関する時代的要請への対応を準備するものであった。前章で述べたように札幌の志賀と秋田の内藤には何らかのかたちでそれを認めることができた。そこで、東京大学へと立ち還って、三宅の場合に即して右の二つの思想的課題への対応を基底的な思考方法の次元で捉えることが本章の狙いである。

まず、東京大学における進化論 (evolution theory) の受容について、蘇峰の民友社から育った山路愛山の記憶に聴いてみよう。

斯の如く東京大学はモールスに依つて人祖論を唱へ加藤弘之に依つて天賦人權説を

排したると共に外山正一の徒に依つてスペンサーの哲学を唱導し、人間の知り得べきものは現象のみ、人間は直ちに宇宙の本体に面対すること能はず、万物其れ自身は不可知的なり、万物の本源も亦不可知的なりと主張したり。東京大学が此の如き活動を始めたるは仏国派の権利論、英国派の功利論が稍人心に飽きられんとする時に乗じたるものなるを以て頗る世上に新鮮なる感覚を与へたりき。

余は當時を回想して大学の此活動が日本の思想界に与へたる影響の甚だ大なりしものありしことを想像せざるを得ず。何となれば此の如き思想の波動は当時静岡に住したる余が小さき友人の一群にも及び青年会の討論会に於てすら時として不可思議論の起りたることあるを記憶すればなり。(5)

モールスすなわち E・S・モース (Morse) の生物進化論と加藤、外山の社会進化論は、当時の「日本の思想界」に大きな影響を与え、その衝撃が地方の青年たち(地方生Ⅱ地方の書生社会)にまで及んでいた。そして、この進化論の震源地こそほかならぬ東京大学であつたという回想である。ところが、後年の回想とはいえ、愛山はもう一人の重要な人物を忘れてゐる。E・F・フェノロサ (Fenolosa) である。三宅自身、「明治思想」を総括する小文の中で、モースとフェノロサの来日に触発されて「進化の語は翼を生じて飛び、新知識に心懸ある者は頻に進化を口にし、進化とさへ云へば問題は解決せらるるかに考へた」(6)と書いてゐる。この四人のうち、本節と次節ではモースを除いた三人を、日本における社会進化論あるいは社会ダーウィニズム (Social Darwinism) の紹介者として順に取り上げ、三宅の思想形成過程を理解する前提としたい。そこでまず、加藤から取り上げてみよう。

加藤弘之にとつても明治十五年は大きな転機となつた年である。彼はこのとき東京大学総理、東京学士会院会長でさらに明治天皇の侍講をも務め、官学の泰斗としてすでにほぼ衆目の宥す存在であつた。その加藤が、前年の十一月から十二月にかけて、以前刊行した自著のうち『真政大意』（一八七〇年）、『立憲政体略』（一八七〇年）、『国体新論』（一八七五年）を相次いで絶版にし、天賦人權論からの「転向」を果たしたことは、すでに諸書において論じ尽くされている。それから約一年を経た明治十五年十月に出版された『人權新説』は社会進化論に依拠するものであつた。この間の事情は何よりも彼自身の自伝によつて窺い知ることができる。

それから維新の少しく後に「真政大意」「立憲政体略」又明治六、七年頃に「国体新論」と題する書を著述したが、是等は本来吾吾人間に天賦人權なるものが具つて居るといふ主義を確信してそれを土台として論じたもので、其後余の主義が變じて天賦人權なるものの存在を否認することとなつたから此三書は後に絶版した。

又余が侍読の職を辱くして居る頃に独乙国のブルンチリーといふ有名なる国法学者の国法論の大意を進講するのために其書を翻訳した。併し全部落成迄には至らなんだが其書は文部省が出版した。而して其書名は「国法汎論」といふのである。其他独乙のビーデルマンの立憲政体史を訳して、それを「西洋各国立憲起立史」と題して出版した。

次に余の四十七歳の時即ち明治十五年に人權新説なる小冊子を著述出版した。是れは余の主義が一変してから初めての著述である。余の主義の一変したといふのは抑如何なる訳である乎といふに、余は英国の開化史の大家バックルの著書を読んで所謂形而

上学なるものの殆ど荒唐無稽なることを始めて知り、専ら自然科学に依拠せざれば何事をも論究する能はざることを感じて、それからダーキンの進化論やスペンサーやヘッケル其他の進化哲学の類を読むこととなつて余の宇宙觀人生觀が全く変化したためである。(5)

加藤の「日記」によれば右の事情はより詳細に判明してくる。彼の「転向」が明治十四年の政変と歩調を合わせたものだという指摘はすでにあつたが、高橋真司によれば『真政大意』等の絶版に際して時の文部卿福岡孝弟が深く介在しているという(6)。『人権新説』の出版に先立つても、「日記」明治十五年八月十七日の条に「人権新説先ツ着来ニ付近日出版之心得ナレドモ一応文部卿へ見せ置タ」(7)とあり、あらかじめ福岡文部卿に内覽を得ておくという周到な準備をしている。同書が書肆の店頭に現れたのが十月二十一日、いち早く好意的な書評を載せたのは帝政党・福地桜痴の『東京日日新聞』であつた。二十七日付同紙は「今日我が政治社会に立つ所の急進者流頂門の一大針にして、時弊を矯るに足るの語なり。有益とは此らの書を謂ふべき」と書いている。しかし、加藤自身の日記に逐一記されているように、主に民権派の戦列からは厳しい批判の矢が向けられた。十一月二十日には静養のため熱海に発つた彼の元へも駁論が次々に届けられる。

とまれ『人権新説』における加藤弘之の主張を簡単にまとめておくならば——「物理」に関する学問に較べ「心理」に関する学問は従来「妄想主義」に陥っていた。ところが、ダーウィンの進化主義(エボリューション・セオリー)以来、「心理」に関する学問にも「実理ノ研究」の氣運が生じてきたのは喜ぶべきことである。天賦人権主義はこの妄想主義の一つで「実理ノ発見ヲ妨碍シ随テ社会ノ進歩ヲ遮防スル」ものである。古今東西の史

実に照らして天賦人權主義が実在したことはなく、グロチウス派の自然法思想に由来するこの主義の「古来未曾有ノ妄想論者」はルソーといえよう。進化主義（実理）をもって天賦人權主義（妄想）を「一撃ノ下ニ粉碎」することができる。進化主義によれば「宇宙」（＝競争の修羅場）で生存を保つていくには優勝劣敗の自然淘汰の定規が認められる。

一方、天賦人權主義の教える「自由自治平等均一」の原理は古今の社会に見いだせない。人類世界は野蛮から開化へ進むにしたがつて「良正ノ優勝劣敗」が現れ、競争も生存から権力をめぐるものにならわっていく。天賦人權主義は「蜃気楼」のようなもので、進化主義という「利刃」をもって粉碎できる。権利というものは「専制的治者＝最大優者」の保護によつて国家（「邦国」）の成立とともに生じたもので、国家を離れてはありえず、それによつて社会、個人の安全が守られている。したがつて、権利の拡張は国家の開化の度合いに応じて適切に行われるべきで、民権者流のいうところは「理論社会」にすぎない——とならう。

要するに、『人権新説』において加藤の説く結論は、生物進化とのアナロジーに基づく次のような社会進化論によつて、「吾邦ノ過激民権者流須ク猛省スベシ」（と）というもので、それは我が国における社会進化論の最も典型的な定着例を示していたのである。

今日社会活動ノ両主義タル保守ト漸進トハ即遺伝ト変化トニ異ナラズシテ、此両主義ノ相須テ社会ヲシテ能ク活動セシムルハ、其理宛カモ動植物ノ遺伝ト変化ト相須テ動植物ヲシテ能ク長育進化セシムルト一般ナリ。若シ其一全捷ヲ獲レバ遂ニ変ジテ或ハ急進トナリ或ハ守旧トナルニ至ル。保守ト漸進トハ社会邦国ヲ興スノ道ナリ。急進ト守旧トハ社会邦国ヲ倒スノ術ナリ。豈謹マザル可ケンヤ。（と）

以上のような加藤弘之の所説に我が国における社会進化論の最も典型的な定着例をみる
ことができよう。小牧治は「国家の近代化と哲学」という視角から、「東京大学総理加藤
弘之の進化論的『人権新説』」は、自由民権運動を抑圧し、天皇制的権力体制を確立しよう
とする明治政府にとって、なによりの理論的武器となったのである。かれは、イギリスの
進化主義を受容した。しかしそれは、日本と同じく後進近代化の道をたどり、「上からの
近代化」をはかるドイツもしくはプロイセンにおける進化主義を通しての受容であった。
いかえるならば、ドイツ化された進化主義を受容した」(10)と位置づけている。引用の
前半部はともかく、後半部でいうように社会進化論を主としてブルンチュリブルンチュリの国家有機体
説と接続して受容したというところに加藤の『人権新説』の特色がある。

「日記」によると棚橋一郎は、この『人権新説』を刊行後約一カ月の十一月十日、大学
の図書館で閲覧している(11)。おそらく三宅や井上なども同じ頃に同書を手にしたことだ
であろう。三宅がはるか後年、『同時代史』の中で「加藤は学術の研究に忠実なると共に、
政府に奉仕するに忠実にして、時として矛盾するを免れず」(12)と評して、「学術」の社
会的機能について批判的に言及しているのは、彼自身が思想と権力と時代状況との関係に
対処する場合の基本姿勢、すなわち時代状況によっては思想は権力と相容れない場合もあ
るということを、このとき以来直感的に意識しつづけていたことの証左といえるかもしれ
ない。

ところで、加藤の『人権新説』に寄せられた駁論も一応整理しておきたいのであるが、
馬場辰猪など民権派からの反論は諸先学によって比較的多く取り上げられてきたところで
もあり(13)、むしろここでは内部批判者ともいう立場の外山正一による駁論に耳を傾け

てみたい。外山はこのとき文学部教授、その彼が翌明治十六年一月発行の『東洋学芸雑誌』第十六号に「人權新説ノ著者二質シ併セテ新聞記者ノ無学ヲ賀ス」なる一文を寄せた。

外山の論調は、加藤の所説がかならずしも「新説」には値しない陳腐なものだという指摘をするのみで、何ら問題の核心を衝いたものではなかつた。彼の場合、自分の担当する心理学、英語等の講義でスペンサーの著作を使用しており、この時点で両者が依拠する価値判断の思想的根拠は進化論の間に大きな差異は認められない。実はこの二人が東京大学における（それはとりもなおさず我が国における）進化論受容の雰囲気を作り上げる最大の“功労者”だつたことは疑いないだろう。後年外山は帝国大学文科大学の社会学科を主宰して「スペンサーの番人」と呼ばれる役割を果たすことになる。

その雰囲気は、外山がスペンサーの社会学書の訳本に寄せた次のような新体詩風の序文によつて知ることができる。

（前略）

羊に近き猿はまだ

愚かなことよ万物の

霊とも云へる人とても

今の身体も能力も

本を質だせば一様に

一代増しに少しづつ

積み重さなれる結果ぞと

古今無曾有の活眼で

見究はめたるは是ぞこれ

アリストートル、ニユートンに

優すも劣らぬ脳力の

ダルウイン氏の発明ぞ

之に劣らぬスペンセル

同じ道理を拡張し

化醇の法で進むのは

面あたり見る草木や

動物のみにあらずして 凡そありとしある者は
活物死物それのみか 有形無形其れぞれの
区別も更に無かりしを 真理究はめしその知識
感ずるも尚ほ余りあり されば心の働きも
思想知識の発達も 言語宗旨の改良も
社会の事も皆都て 同じ理合のものなれば

(中略)

上手とこそは云ふべけれ 政府の舵を取る者や
輿論を誘ふ人達は 社会学をば勉強し
能く慎みて軽率に 働かぬ様願はしや(化)

進化論におけるスペンサーの役割を高く評価し、その原理を社会全般にまで及ぼしていく論理がよく判る内容である。中略をはさんでそのような社会学の「勉強」を社会の指導者に勧めている。結末の部分も引いたのは、蛇足にはちがいないが、加藤を中心として社会進化論が強者の論理として定着していく端緒を示しているように思われたからである。

その意味で、進化論の内包する適者生存、人種淘汰に関する『東洋学芸雑誌』上における論争は、それが三宅と井上円了を巻き込んでいるだけに興味深い。論争はまず加藤がヘッケルの「造化史」(『自然創造史』F. H. Haeckel, *Natürliche Schöpfungsgeschichte*, 1880)から、古代スパルタと北米インディアンの人為淘汰の是非、医学進歩による延命の社会に及ぼす影響、という二つの疑問を呈したことで始まった(1)。これに対して三宅は、「今日ノ世界」は「兵力」のみを尊ぶのではなく、「文化」をも尊ぶものである事を

強調している(16)。このような社会観が、スペンサーの『社会学原理』から学んだもので、徳富蘇峰の『将来之日本』とも共通するものであったことはいうまでもない。以上から導かれるのは、三宅の思想世界が、社会進化論全盛の東京大学という知的環境の中で形成されたという見通しである。しかしそれだけでなく、三宅の進化論理解はフェノロサの影響をも受けて独特の「哲学」を生み出していったと思われる。そこで次節では、フェノロサの哲学史講義の内容を取り上げてみたい。

第二節 フェノロサの哲学史講義

独特の社会進化論の紹介という点では、三人目のフェノロサこそ多くの学生に直截な影響を残したように思われる。前後八年間に及ぶ東京大学在任中、早い時期の指導学生であった井上哲次郎は「当時氏は年少気鋭であったから、余程学生には強い刺激を与へた。氏は進化論者であったが、普通の進化論者の如くただ進化論を講ずるのみでなく、独逸の哲学をも併せて講じた」(17)と回顧している。

そもそも「お雇い外国人」としてフェノロサが来日したのは明治十一年のことであった。その前年来日して東京大学で教鞭を執っていたモースの紹介といわれる。現在ではむしろ「日本近代美術の恩人」として知られるフェノロサについて、ここでは社会進化論の紹介者という視点から、三つの断面を拾い上げておきたい(18)。それは第一に、彼が故国アメリカのハーヴァード大学で学んでいた頃、スペンサーの思想に惹かれ「ハーヴァード・スペンサー・クラブ」の設立に奔走したが(19)、大学院に進んだ頃からしだいにヘーゲルに関心を移したこと、第二に、彼の東京大学での講義に列したのは合計で百十数名にものぼり、その中には三宅をはじめ中原、棚橋、杉江、井上など政教社に集う学生たちが皆含まれていたこと、第三に、その講義内容は、J・S・ミル、スペンサー、ヘーゲルの対比を得意としたこと、である。

フェノロサの場合、加えるにキリスト教への反発ということが挙げられるかもしれない(20)。来日直後の明治十一年、江木学校で行なった演説では、とくにキリスト教の靈魂不滅説に対して、それが「野蛮」「半開」の段階にある宗教でも見られるものであると

し、「耶蘇教ト雖ドモ其神ノ思想ハ全ク死者ノ魂魄ヲ信ズルヨリ変遷進化シテ成レル者タルコト明ナリ」(一七)と結論づけている。その論拠としてスペンサーの学説はすでに挙げられていた。信仰に関わる問題なので軽々に判断することはできないけれども、これに前章で触れた「学生の政治活動を戒める演説」を加味して判断すれば、フェノロサの社会進化論が我が国で受容されたとき、それは結果的に当時の政府及びその政策を擁護する役割を担わされたということもできよう。

それはともかく、本章では受容した側とりわけ三宅とその周囲へと焦点を絞っていかなくてはならない。フェノロサについて三宅は、「新たに米国よりフェネロサが来り、予科で経済学を受持ち、本科で独逸哲学を紹介した。シユウエグラの哲学史、ボーウエンの近世哲学の外に出なくても、頗る弁舌に長じ、人を説得する所があつた」(一八)という印象を抱いたらしい。その講ずるところの「哲学」の内容と影響については、「哲学もデカルトからヘーゲルまでの変遷を陳べる所、頗る鮮かであつた。カントは本国で英訳を読んで、ヘーゲルは英訳も読まず、日本へ来て之を読み、シヨペンハウエルは未だ読まず、自らはれから独逸語を学んで此等の書を研究しようと言つた。然し日本で哲学と言へば、ベーンの心理学、スペンサーの第一原理といふ位に心得て居る時、豎板に水の勢でデカルトから弁じ立てる所、人の注意を喚起せずには置かない。実力は別とし、影響は確かに著るしかった」(一九)と顧みている。

要するに、フェノロサの哲学講義はかなり危なっかしいものだったが、それでも当時としては若い学生たちを魅了したようだ。当時の履修科目では、「西洋哲学」の二年次に「西洋哲学史」が開講されていた。その目的は左のように報告されている。

欧州古今ノ哲学史ノ概略ヲ講ジ、デカルト氏ヨリヘーゲル氏スベンサー氏ニ至ル近世哲学ノ考究ニ最モ多ク力ヲ尽サシムルモノトス。而シテ哲学論中百家其說ヲ同帰スル所ノ二理ヲ発見セシメ、以テ徒ラニ孤行ノ学派ニ偏傾スルノ弊ナカラシムルヲ目的トス。蓋シ斯ノ如ク教導スルトキハ、現時ニ行ハルル哲学專攻ニ善良ナル階梯ヲナスベキヲ以テナリ。参考書ハ、シウエグレル氏著哲学史、ボーウエン氏著近世哲学史ヲ用ヒ、專ラ講義ヲ以テ授ルモノトス。(24)

そこで氣になるのは、「哲学專攻ニ善良ナル階梯」を据える目的で講じられた講義内容である。三宅に関しては残念ながら自筆のノート類は遺っていない。しかし、すでに一部では知られているように、市島謙吉(明治十五年中退)、金井延(同年卒業)、坪内雄蔵(三宅と同期の明治十六年卒)、阪谷芳郎(棚橋と同期の明治十七年卒)、井上円了(明治十八年卒)の五人の英語による速記ノートが現存している。それぞれの詳細は註に譲るとして(25)、坪内のものは分量的にこの際問題にならず、井上円了のものはほとんどが彼自身の読書ノートとなつていたので、さしあたり阪谷の書き残したノートがフェノロサの口吻を一番よく伝えてくれるものといえよう。全部で五冊残つている阪谷のノートについては、杉原四郎が簡略ではあるが的確な紹介をしている(26)。しかし、杉原の主たる関心が理財学(経済学)の受容過程にあるため、うち二冊の哲学史の部分はなお充分に検討を要するまま残されているのである。

表紙に「哲学2 憲法史」(27)とあるノートは、冒頭の六十一頁分がフェノロサ哲学史講義の筆記になつている。劈頭「カント(承前)」と書かれていたので、元来これ以前の部分もあつたはずである。あるいは古代ギリシア以来カントに至る西洋哲学史が通観され

ていたのかもしれない。表紙に「政治学 哲学1 理財学雑誌」⁽²⁸⁾と記されたもう一冊は、冒頭七頁目までが哲学史の筆記で、劈頭「ヘーゲル(承前)」とあるのをみると前のノートとの続きとも考えられる。ちょうど運よく近世哲学の部分が残されているので、次にフェノロサの語ったところを若干詳しく辿ってみたい。

フェノロサはまず、カントによる経験的認識とア・プリオリ(先験的)な認識、総合的判断と分析的判断の区別から説き起し、ア・プリオリな総合的判断を哲学上の偉大な発見とする。これは『純粹理性批判』の緒言に当る部分で、とくにヒュームの経験論、懷疑論を意識している。ついで、先験的感性論から順にほぼ同書の構成に沿って簡単な説明とフェノロサ自身の意見を加えていく。ここでは随所にスペンサーへの言及がみられる。たとえば、カントのいわゆる万有は「物自体(Ding an sich)」としてではなく現象として考察されるという命題に比較するに、スペンサー哲学大系にある不可知論を持ち出したりしている。総じてフェノロサはカントの哲学を高く評価しているのであって、それはシュヴェーグラーが「カントは、先行者たちの一面的な哲学的努力を一つの結び目のように統一と総体とへ総括した、哲学の偉大な革新者である」⁽²⁹⁾と語っているのと一致する。また、神の存在の証明に関しては、ダーウインの進化論によっても神学的な影響力がなお存することを挿話的に紹介したりしている。このようにみえてくると、フェノロサの講じた哲学史は、シュヴェーグラーの『西洋哲学史』に依拠しているようでもあり、しかし当然スペンサーやダーウインの挿入は彼の独創に違いなく、何よりも論旨に飛躍や省略が多くて如何ともいいがたいところがある。実際、カントの三批判のうち残る『実践理性批判』『判断力批判』の二著については、ごく簡単な説明で済ませてしまっている。阪谷の筆記が

不十分だったことは考慮に入れなければならないが、これで受講生たちがカントの哲学体系を厳密に理解できたか否かについては一抹の危惧を覚える。

カントの次には、かなりの時間を割いてフィヒテを取り上げる。フィヒテに関しては、自我 (Ego) と非我 (non - Ego) の関係でカントに新しい要素を加えた功績を中心に説明が続ぎ、最後には「ヨーロッパの孔子」と位置づける。ここでは、フィヒテの思想に進化的な一面を認め、スペンサー以前のドイツ哲学の中に進化論の萌芽を見いだしていることが注目される。さらにこの次にシェリングが取り上げられ、自我と自然 (Nature) の関係から有機体 (Organization) に関する原理の発見を彼の功績とする。シェリングには「ドイツのスペンサー」という位置づけが与えられる。

こうしていよいよ最後にヘーゲルが登場する。もうすでに明らかのように、カント、フィヒテ、シェリングと辿ってきたフェノロサの講義は、ドイツ観念論の流れの中で進化論の痕跡をつなぎ合わせることに主眼が置かれていたようだ。それがヘーゲルでどのように結末づけられたのだろうか。

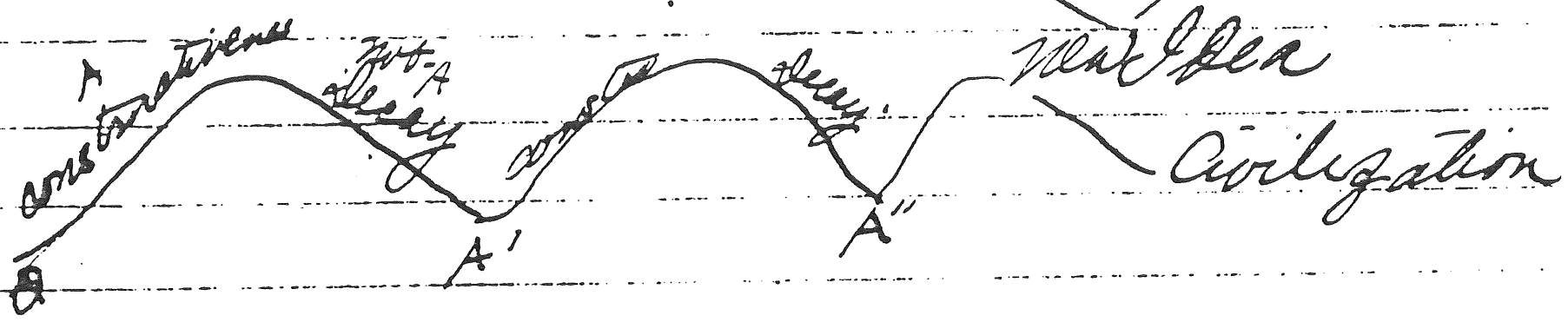
ヘーゲルの哲学を説明する冒頭、フェノロサはそれが「非常に難しいものなので、徐々に導きたい」⁽²⁰⁾と述べる。ついで、基本的な概念を祖述する中では、当然に弁証法的方法が取り上げられ、かなりユニークな例話をしたようだ。例えば、行為 (action) と反発 (reaction) の対立から進歩 (progress) が止揚され、また、自由党 (liberal party) と保守 (党 conservative) の対立から (政治の) 最高点 (chief point) が止揚されるといった具合である。さらに、文明の進歩を建設 (construction) と衰退 (decay) の対立が交互に継起する波線形として描いてみせた (写真2参照)。これらは、ヘーゲルの弁

Action - reaction

写真 2

Morality - Religion - Skepticism
No morality

Progress



Force - Timiney (Education of children)

Crato of Education (always taking care to direct the development of children)

Things is ^{not} what is but what becomes

証法的方法の説明としては深い理解に基づいているとはいえず、むしろ余りに俗化しすぎているものだが、保守(党)の存在理由や文明進歩の法則ということで例示された内容は極めて興味深いもので、フェノロサの思想的基盤を構成する重要な要素として記憶に止めておきたい。

この説明のあと、フェノロサはヘーゲルの体系を論理学、自然哲学、精神哲学の三部門に分け、論理学から解説を始める。しかし、この解説は全く不十分なもので、自然哲学、精神哲学には触れず、すぐにロツテエを介在させてヘーゲルの「限界」を指摘する。「限界」の根拠はヘーゲルの哲学が十九世紀における科学の発展を前提としていないということで、科学の発展によつて機械論的方法(mechanical way)が導入されたとする。この機械論的方法こそ、スペンサーの哲学体系の立脚点であり、ダーウィンによる生物進化論の確立を促した思考方法にほかならない。ただし、スペンサーの体系も曖昧かつ多義的で、とくにその思弁的な側面は不十分なものにすぎず、進化論を確立したことが功績とされる。そこで最終的には、「もし、スペンサーの進化論とヘーゲル哲学の統一ができたなら、私たちは完璧な哲学を獲得することができる。それは今後三、四十年の間に成し遂げられるだろう」(51)という彼の構想が示される。このような構想がフェノロサ個人に関心にとどまらず、教場において学生たちと共有されたものであったということは、明治十三年度の文学部第一科(哲学、政治及び理財学)二年生の「哲学史」の試験問題に「理論上ヨリ云ハバスペンセル派ノ哲学ハヘーゲル派ヲ補欠スル為ニ必ず無カルベカラザル者ナリトスルノ理由如何」(52)という出題をしていることから窺える。十三年度の第一科二年生といえ、三宅、中原らがこの試験を受けたことになる。

フェノロサによる哲学史講義は、シユヴエーグラーやボーエンの哲学史概説を基本に据え、それに主としてスペンサーに関する自己の見識を加えた独特の社会進化論の樹立を指向するものであった。筆記ノートの残っている阪谷と同学年だった棚橋はもちろん、その前後の学年にいた三宅や井上などのちに政教社に結集する「同志」たちは、書生時代にこれとほぼ同じ内容の講義を聴いていたことになる。ここでは彼らがフェノロサという分光器（プリズム）を通してスペンサーの社会進化論を受容したということが重要である。それがどのような形で受容されたのかということ、次に三宅の場合に即して考えておきたい。

第三節 「進歩」と「漸進主義」の思想

さて次に、社会進化論全盛の東京大学にあつて、独特な「哲学」を構想するフェノロサの影響をも受けながら専攻分野を決めつつあつた三宅雄二郎の内面世界へと考察を進めていこう。

三宅は自伝によると、余り教場には出ず図書館で読書をして過ごすことが多かったといふ⁽²⁾。もしその通りならば、そもそも前引のようにフェノロサの講義内容に不満をもつていた彼のこともあり、余り影響を受けなかつたのではないかと考えることもできる。

ところが、現在残っている「東京大学法理文学部生生徒勤惰表」⁽³⁾によると、当時の学年暦で明治十五年度中（明治十五年九月～十六年八月）、三宅は一日の「欠課」もなかつた。教場に出なかつたというのは、むしろフェノロサの欠講が多かつたからといえそうである。事実、明治十五年度中の「日記」が完全に残っている棚橋の記したところを集計すると、この一年間の論理学、哲学史の欠講は十日以上となる。すると、例えば「三宅雄二郎において、フェノロサ批判は頂点に達する」⁽⁴⁾といっているのは後年の回想等に基づくもので、仮に「批判」を抱いたとしてもそれによつて影響を受けなかつたことにはならない。私のみるところ、むしろ三宅はフェノロサの講じた哲学史から多くの影響を蒙っている。それは我が国における進化論受容の一つの型を示しているともいえるであろう。

ではそれが具体的にどのようなものであつたかといえば、まず何よりも、フェノロサによつて初めて西洋起源の学問に刮目させられ、愛知英語学校以来のあの「語学Ⅱ学問」という状態から脱却できたということではないか。自伝の中で「カーライルとスペンサーが

印象に残っている」(26)と書いているからスペンサーの影響が後々まで意識されていたことは確かとして、当時の文学部の教授陣と各担当科目は「外山正一、フェノロサが西洋哲学を、島田重礼、中村正直が支那哲学を、原坦山、吉谷覚寿が印度哲学を受持った」(27)とあるように、支那哲学と印度哲学は老大家をそのまま教授に迎えているのに対して、西洋哲学には「新帰朝者」の外山と「お雇い外国人」のフェノロサを配しており、三宅たちの関心が多く西洋哲学に向いたであろうことが予測される。

三宅のフェノロサを通したスペンサーの影響は、前引の山下が明らかにした有賀長雄のように直截なものではなく(28)、いわば地中に雨水がしみ込むように緩慢な、しかし確実に思想の岩盤に突き当たるような性質のものではなかったか。それらが具体的なかたちをもって現れるのは後章で扱う時期のことで、直接的には第一に、東京専門学校で論理学を哲学館で西洋哲学史を講じたこと、その成果が第二に、『哲学涓滴』(一八八九年、文海堂)『論理学』(一八八九年、哲学館講義録、一八九〇年、文学社)等の講義録、概説書となつて結実したことにより明らかである。このうち、西洋哲学史については次章で、『哲学涓滴』については第四章で若干詳細に取り上げたい。

間接的には、三宅の生涯六十年にわたる思想活動の基底に社会進化論的発想を据えたことが重要である。彼の代表的著作とされる『真善美日本人』(一八九一年、政教社)の中で明快に示されている国家有機体説、『宇宙』(一九〇九年、政教社)によつて完成されたといわれる絶対無限なる一大有機体Ⅱ「宇宙」を前提とした総合哲学体系、『同時代史』全六卷(一九四九〜五四年、岩波書店)の記述を貫く「勢」の歴史観などに、私たちは社会進化論の独自の展開をみることができるといえる。本節で扱っている書生時代に書き残したも

のが少ないので断定は差し控えなければならないが、三宅の場合、元来が没価値的な「進化」の概念を「文明」の発展段階論を介在させて予定調和的な「進歩」の概念へと転回させることで基底的思想の一面が形成されていったのではないか、という仮説を立てることが許されるであろう。「文明」の発展段階論とは、野蠻↓半開↓開化という段階的な発展によつて文明が実現されるという思考方法といえる。我が国にこのような思考方法を導入するのに与つて力があつたのは、いうまでもなく福沢諭吉の『文明論之概略』（一八七五年）であり、明治初年代のいわゆる文明開化期には、このような思考方法が開化本などによつて流布して底辺民衆にまで通有化されていた。三宅も『明治思想小史』で「欧米の思想で影響の最も広きに及んだのは未開、半開、開化と云ふ類のことである。（中略）苟くも洋書を繙いた者の頭脳をば、直接若くは間接に支配したのは文明史であつたと云うて宜い」²⁹といつてゐる。

その具体例として、明治十九年に上梓した『日本仏教史』を挙げることができる。同書の中で三宅は、「抑モ宗教ノ思想ハ如何ニシテ發生シ、如何ニシテ進化スルカ」という疑問に対し、それには「一定ノ理法」があると考える。ここで「一定ノ理法」とされているのが右に述べた「進歩」の思想と符合するであろう。すなわち、宗教の「理想ノ進歩」とは、第一に「蛮民」、第二に「半開ノ民」それぞれの発展段階を経て、第三の「文化ノ民」に至つて次のような意識に達することだといふ。

宇宙ノ存スルハ、宇宙ノ存スルヲ顕ハスノ意識ニ依リ、意識ノ存スルハ、意識ノ存スルヲ顕ハスノ宇宙ニ依ル。宇宙ハ意識ニ対シテ存シ、意識ハ宇宙ニ対シテ存ス。其相對スル所以ノ理、即チ原理ヲ知ルニ至ルハ、意識究竟ノ發達ニシテ、而モ宇宙ヲ純全

ニ形成スルヲ得ルコトナリト。(45)

宇宙との合一を説く後年の思想の端緒がすでに垣間見られるようでもある。このような宗教観がフェノロサのそのの影響を受けていたことは疑いないし、ここで加藤弘之が進化論の優勝劣敗を考えながら日本開化史を構想していたこと(46)、フェノロサがスペンサーの社会進化論とヘーゲルの哲学の融合を企図して、文明の発展を波状的な進歩と捉えていたことを思い出したい(前節参照)。実はスペンサー自身も、社会の進歩を有機体の構造変化において同質から異質への転化とみなしているのである(47)。右にみたような「進歩」の思想を基底的な思考方法とすることは、三宅の思想活動を動態的で多様性を許容する持続性の高いものとした一方で、判断の基準を常に絶対的見地に委ねる曖昧なものとしたという見通しを得ることができる。ここに今日まで総合的な評価を難しくしている淵源が潜んでいるともいえよう。

以上がいわば大学の教場における進化論の受容による内面世界の成長だったとすれば、次に彼の属する書生社会を包んだ社会情勢の中で三宅がどのような立場を選んだのかという点に考察を移そう。まず注目されるのは、左のような回想である。

その中に戦乱が治まり、国会期成同盟会が起り、自由党が運動し、改進黨が組織され、世間が騒がしい。文学部の政治経済科なる高田、天野、山田、法学部の山田、岡山、砂川等の諸氏が大隈側に加はつたのに対し、別に運動が始まった。文部省の九鬼少輔が糸を引いたのであろうか、法学部の三崎、関、斯波、伊藤、西尾、江木、奥田、文学部の穂積、中原、平沼等の諸氏が会合した。帝政黨の組織があり、福地の「

東京日々」に渡辺、穂積等が関係し、丸山の「明治日報」に三崎、江木、奥田等が関係し、水野の「東洋新報」に伊藤、平沼等が関係し、自分は明治日報組に属した。當時三崎が一切の牛耳を執っていた。(42)

渡辺安積と『東京日日新聞』の関係などは次節とも関連する内容であるが、何よりも三宅自身が「明治日報組」に属したことを明言している点で注目される。この時点で「明治日報組」に属したこともつ意味を考え、それが彼の思想形成過程の中でいかなる位置づけを与えられるべきであるのかを明確にしておかなければならない。

ところで、右の引用文中「丸山」とは、丸山作楽(一八四〇〜九九九)のことにほかならない。丸山は肥前大村藩の出身で、平田篤胤没後の門人として国事に奔走し、維新後は外務大丞に任ぜられて樺太談判に臨んだ。明治五年、征韓論に関する嫌疑で入獄、在牢十年近きに及んだ同十三年、特典をもって放免されたのである。出獄後約一年、『明治日報』創刊の経緯は、「明治十四年四月、父は石井瀧治(南橋)、吉岡徳明、大関克氏等と竹川町花月楼に会し、新聞発刊を議す。太田実、関謙之の二氏また計画する所あり。議同じきを以て合同し、遂に忠愛社を設置し、明治日報を発刊し、忠愛の精神を喚起し、漸進主義を唱道せり」(44)というものであったようだ。こうして、同年七月一日に創刊号を出したのが、日刊新聞『明治日報』である。

同紙創刊号所載の「開業祝詞」の中で丸山は、「天地神明ニ誓ヒテ忠勇義烈ノ志氣ヲ發揮シ、共和同治ノ影響ヲ視聴ノ外ニ排撃」すると宣言している。当時「共和同治」の意味するものが、このあと全国的政党組織として自由党と立憲改進黨に結集する民権派の二潮流の主張だったということを考慮すれば、丸山・『明治日報』の立場が当初から反民権派

に与するものであったことは明白である。このような立場は、いわゆる明治十四年の政変の直後に書かれた「明治日報第百号」と題する社説でより鮮明に打ち出される。

余輩ハ真ニ我国家ヲ愛スルモノナリ。亦真ニ皇室ノ為メニ忠セント欲スルモノナリ。

故ニ余輩ノ目的ハ忠愛アリテ又其他アルヲ知ラザルナリ。而シテ漸進主義ハ余輩ガ忠愛ノ目的ニ於テ闕ク可ラザルノ主段ナリ。(45)

ここにいう「漸進主義」こそ三宅の属した『明治日報』の標榜するところであった。明治十五年三月十八日には、丸山の忠愛社・『明治日報』、水野寅次郎の東洋新報社・『東洋新報』、前節で取り上げた福地源一郎の日報社・『東京日日新聞』の三社・三紙が協同して公同会を結成し、一の政社として立憲帝政党を組織した。翌日の『明治日報』は社説の中で「儼然タル漸進保守主義ノ立憲帝政党」(46)と自己規定している。この時期の新聞については、「各党誕生とともに名実ともに機関紙主流時代が到来した」(47)といわれ、右の三紙のうちの『東洋新報』が示した各党(主義)と機関紙の系列関係はその模様を伝えている(48)。

前章(註49)で触れたように、明治十四年の政変に先立って書かれた右大臣岩倉具視の政権構想「大綱領」の中には、「漸進の主義」という一節が明記されていた。これが太政官大書記官井上毅の草案に基づくもので、参議伊藤博文を加えた「トリオ」によってその後の国家構想が主導されたことも先行研究において論じられている(50)。すでに明らかのように、『明治日報』の「漸進主義」は政治的漸進主義一般ではなく、明治十五年当時の我が国においては政府の路線を支持し、民権派に対抗する一つのイデオロギーだったのである。

ところが、当の井上毅は『明治日報』創刊直後からその論説の質に不満を抱いていたらしい。七月十二日には伊藤博文にあてて、「明治日報ノ発出ハ人々其政府ノ新聞ナル事ヲ知ラザルモノナシ。然ルニ其社説ノ膚浅ナルコト学校生徒ノ笑ヲ博スルニ足ル、政府ハ如此小技倆ヲ以テ世ノ風潮ニ抵抗シ、変局ヲ牽制セントスルハ真ニ兎戯ニ類ストイフベシ」(50)という懸念を書き送っている。「漸進主義」には当初から理論家の必要が感じられていた。東京大学の学生への着目の背景には、このような事情が潜んでいたとも考えられる。

「漸進主義」の理論化を進めたのは東京大学法学部生の渡辺安積であった。彼は大学卒業後、『東京日日新聞』の日報社に入り論説を担当していた。同紙明治十五年十月二十日から六回にわたって連載された「漸進主義ヲ執ル所以ヲ述ブ」は、「極端自由主義」への憂慮に基づいて書かれたもので、「漸進主義」の論理構造が最も明確に示されている。それは、「社会進歩ノ発達」には「自然ノ順序」があり、その順序は「世界万邦其揆一」すなわち単系的な社会進歩を想定し、「社会文明ノ度」に応じて「政治思想ノ深淺厚薄」もあるのだから、例えば我が国と欧米諸国の差を二百年とみるような論理構造である。ここでは自然の順序は飛び超すことはないという進化論の原則(51)が前提とされ、その結果かなり悲観的な見通しとなっている。

三宅と『明治日報』の関係は、渡辺と『東京日日新聞』のように直截なものではなく、『明治日報』の全号を見渡しても署名論説などを探しだすことはできない(52)。しかし、彼の内面世界の成長を画する上で、「進歩」の思想の形成とともに「漸進主義」の陣営に身を置いたことの意味は大きいと思われる。渡辺の場合にみるように「漸進主義」の思想

もまた社会進化論の受容によって得られたものであった。そして、三宅における「進歩」と「漸進主義」の思想は、「国粹主義」の主張のもつ文明論と政治論の二つの側面へと、内在的に連関していく思考方法の根幹を形成していたと考えることが可能である。そのよ
うな連関の様子は第四章で明らかにしたい。その前に、三宅や他の「同志」たちが、これ
ら書生社会の内外で獲得した“成果”をもって政教社を設立するに至る前提として、当時
の言論のあり方について触れておかなくてはならない。

第四節 政談と学術

書生社会の日常を追って棚橋一郎の「日記」を読み進めていくと奇異に感じることがある。それは、現存する明治十五年七月から十七年十月までの約五七〇日分の記述の中で、政治情勢に関することといたらずかに二箇所しか見当たらないということである。そのうちの一つは、十五年七月八月のいわゆる壬午事変に関する一連の経緯で、棚橋は連日『時事新報』を閲読して情報を収集し、めずらしく「驚憤」（七月三十一日）「雀躍」（八月一日）という感想まで書き付けている。よく知られているように、福沢諭吉によって創刊された『時事新報』は、この時点ではなお限定的な対朝鮮強硬論を展開していた。もう一つは、翌十六年七月二十日の右大臣岩倉具視の死と五日後の国葬についてである。「日記」によれば、棚橋は葬列の“見物”に出かけている。

私が奇異に感じるのは、戦後歴史学の成果としてこの間が自由民権運動の諸激化事件の時期に該当するとされるのに、棚橋の「日記」からはそういった時代を共有した臨場感が全く認められないということに起因している。年表から拾っただけでも、福島事件（十五年十二月一日）、高田事件（十六年三月二十日）、群馬事件（十七年五月十三日）などがこの間に起きているのに、それらに関連することすら一切記されていない。この原因を考えたとき、「日記」が身辺雑記的な備忘録にすぎず、また通信網の不備や新聞紙条例による統制など情報伝達の限界を差し引いても、棚橋の非政治的書生とでもいうべき個人的資質と彼の属した書生社会の閉鎖性あるいは無菌培養的性格は際立って目立ってくる。

しかし、同じく東京大学で学んでいた高田早苗や天野為之らが小野梓を通じて立憲改進

党の旗揚げに馳せ参じたこと、それに対してフェノロサが卒業式の祝辞で異例の「学生の政治活動を戒める演説」を試みたことは、第一章第一節で述べたように明治十五年の「政治の季節」を象徴するできごとであつた。その高田は回想の中で、まさに当時の東京大学とへ政治への関係について次のように顧みている。

私共が大学を卒業した頃は、世上は政論沸騰の時代であつたから、我々と時代の近い大学卒業生は、何れも多少に拘らず政治に関係したものである。私は大学へ入ると間もなくどういふわけであつたか、同学生の関直彦君と殊に親厚な交際をした。(中略)

関君は元来パンの為に日々新聞に入つたのであつたが、いつかそこに自然の關係が生じて帝政党に参加せざるを得ぬ事となり、後には福地氏の後を承けて日々新聞の社長になつたのである。又私が岡山、山田、市島などの諸君を勧誘して大隈派に馳せ参じたと同じ様に、関君も同時代の学友の誰れ彼れを勧誘して帝政党に直接間接荷担せしめた。其中に渡辺安積といふ人があつた。是は私の共立学校時代からの親友の一人で、英語学校でも同級であり、共に予備門から大学に進んだ人である。此人は文章も中々上手で、学問も出来、其頃主権論といふ問題で政府派と在野派間の大議論が起つた時、渡辺君は学生でありながら主権論を草して、日々新聞に掲げて大喝采を博した事がある。(54)

法学部や文学部の政治学及び理財学科において欧米の最新学説を学んだ学生たちは、こうして否応なく現実の政治運動へ引きずり込まれていった。彼らは民権派、反民権派を問わず陣營の理論面を担うこととなり、ここに書生社会一般の政治志向のいわば頂点部分を

形成する東京大学学生をめぐる「政談と学術」という問題の発生と、それが一気に顕在化してくる過程をみることができるのである。三宅の場合も、『明治日報』組に属するといふことで、いやおうなくこの問題の渦中に巻き込まれていたのである。そこで、この「政談と学術」について、右の引用にも登場する渡辺安積を中心に主権論争⁽⁵⁴⁾を取り上げ、その顛末を追う中で政教社の設立を促した言論社会をめぐる環境について考えてみたい。

渡辺は、安政五年（一八五八）周防国岩国に生れた。高田の回想にあるように、東京英語学校、東京大学法学部に学び明治十五年七月に卒業している。主権論争の時期にはまだ在学中であった。彼が山口県とはいってもマージナルな地域の出身であったことは比較的重要かと思われる。周知のように明治十四年の政変で確定した薩長藩閥路線の中核は長州閥であり、なかでも伊藤博文はやがて成立する「天皇制国家」において「最大の近代国家^{エタデー}主義者」^{スト}といわれる役割を果たす。渡辺は長州閥の末端としてその「天皇制国家」の創出作業に法理論を奉仕させたといえるのである。ではいったいどのような主権論を展開したのだろうか。

主権論争の主舞台は、主権は天皇にありと主張する『東京日日新聞』と、主権を法律制定権とした場合それは国会にありと主張する『東京横浜毎日新聞』の両紙であった。このうち『東京日日新聞』は、社説で「我国ノ主権ハ帝室ノ有サセ給フ所ナリトハ既ニ神ノ代ニ確定セルコトヲ熟知セザル可カラズ」といい、結局それを「我神洲ノ国体」に帰してしまっている⁽⁵⁷⁾。一方、『東京横浜毎日新聞』の国会主権説はもっぱらイギリスの場合を念頭において論じられている⁽⁵⁸⁾。もちろん両紙とも、明治二十三年の国会開設という現実の政治日程に即してその意とするところは国家論の構築にあるのだが、なかなか本質的

次元まで掘り下げて論争するところまでは至らない。

確かにいまひとつ齟齬した感が否めない中央紙の主権論争の中にあつて、『東京日日新聞』の各欄に連載された渡辺安積の論調は『東京横浜毎日新聞』に対する明快な駁論となつてゐる。渡辺の「主権論」が巖山の号、戊寅社の肩書きで初めて「寄書」欄に載つたのは二月八、九両日であつた。このときは、わざわざ「説ノ可否信偽ハ吾曹（日報社・引用者）之レヲ保証セズ」という但書きがついてゐる。書生の寄書ということの内容までは責任を持たないというわけであろう。ここでは『東京横浜毎日新聞』の「關邪論」に反駁して主権の「義解」すなわち定義を三点から論じてゐる。学説の根拠として名前の挙がつてゐるのは、二人の十九世紀イギリスの法学者、J・オースティンとH・J・S・メインである。ところが、次に「主権考」と題していよいよ本格的に主権論争への参画を試みたとき、『東京日日新聞』はこれを同紙の社説「東京日日新聞」欄に掲載した。「主権考」は二月十七日から二十三日まで六回にわたつて連載された。論拠として引用されているのはさらに、J・R・グリーン、J・F・ステイーヴン、H・ハラム、W・ブラックストン、J・ロックらである。本論も毎日記者への反論の形になつていて、イギリスにおける主権の所在を右の諸学者の説から適宜引用して論証することに終始し、決して直接には我が国の天皇主権のことまでは触れてゐない。全編の結論は、渡辺自身による要約によれば次のようであつた。

本論ハ第一ニ皇権ノ性質ヲ解キ、皇権ハ皇帝ノ政治上ノ資格ト其権力トヲ含蓄シ、主権ハ皇帝政治上ノ資格ニ附属スル著明ナル原素タルコトヲ示シタリ。次ニ英国ノ主権ハ皇帝ニ在ルノ証左ヲ挙ゲタリ。次ニ皇帝ノ権ハ不羈独立ナリト雖モ、實際ニ於テハ

主権ノ意ヲ害セズシテ皇帝ノ専制ヲ防グベキ周密ノ方法アルコトヲ示シ、萬一害ヲ蒙ルコトアルトキハ之レガ救正ヲ求ムルノ道アルコトヲ示シタリ。次ニ英皇ハ概ネ行政ノ権ヲ宰相ニ委任スルト雖モ英皇ノ主権ハ毫モ其為ニ傷ケラルル所ナキヲ示シタリ。而シテ第二段ニ移リ、皇帝ノ行政権ノ性質ヲ解キ以テ毎日記者ノ蒙ヲ啓キタリ。而シテ生硬な書生論かもしれないが、論旨は明快である。渡辺はこのあとさらに「続主権考」を四月五日から十三日にかけて八回連載する。執筆の背景と実際は、学部は違つたけれども一年後輩だつた三宅によつて、「伊藤は参事院議長として憲法の確立を以て任じ、福地が其の代弁者たらんとし、井上毅等が論旨を授けたるが、議論の細密に入るや、福地も、岡本も、興味なく、理解なく、東京大学法学部生渡辺安積に委ね、渡辺が大学図書館を探り、博引旁証、当るを幸に駁撃し、他は漸く議論に倦む」(60)と回想されている。「大学図書館を探り」というあたり、おそらく実際に目撃したのだろう。それはともかく、三宅の見立てによれば、渡辺の主権論は福地源一郎を通して井上毅から伊藤博文にまで繋がつていたという点が重要である。この連携を証する史料には乏しいが、まさに主権論争の最中の三月十八日、福地を中心に政府の国家構想路線をバック・アップする目的で立憲帝政党が結成されたこと、その二日前の十六日に明治十四年の政変で下野した大隈重信を総理に戴く立憲改進黨が結党式を挙げたこと、そして『東京横浜毎日新聞』『郵便報知新聞』など国会主権説を採る新聞は大隈・改進黨支持の立場を明確にしていたことなどを考え合わせれば、国政レベルにおける政党の対抗関係の中で渡辺安積の主権論が担つた役割が浮かび上がってくるだろう。

新聞を舞台とした主権論争の直後、渡辺は演説によつて現実の政治運動へとさらに足を

一步踏みだした。升味準之輔が指摘しているように(6)、自由民権運動は新聞や演説が効果をもちうるような「言論社会」を前提に展開したのだが、反民権派の場合もその前提は当然同じくしている。民権派に較べ、この点で反民権派のスター不在は否めない。そのことは『東京日日新聞』の福地も気づいていた。この年の二月六日、つまり渡辺の「主権論」を載せる二日前の「言論」と題する社説では、「政府ノ目的方向」を示すために集会条例で禁止されている官吏の演説を解禁したらどうかと提案している。官吏が無理ならば、官吏の予備軍と目される書生ではどうか。

こうして準備されたのが、渡辺を中心とする東京大学学生による学術演説会である。同紙四月二十六日の雑報欄には次のような記事が載った。

○学術演説　来る二十九日(土曜日)午後一時より柳橋萬八樓に於て東京大学法学部文学部の学生達が学術演説を催さるるよし。尤も傍聴は無料とのこと。其演説者の姓名と論題は左の如し。穂積八束(論題未定)、片山清太郎(権利ノ義解)、関直彦(英国人命律ヲ説キ併セテ相原某ガ刑ノ適用ヲ論ズ)、渡辺安積(憲法ヲ論ジ併セテ報知記者主権論ノ蒙ヲ啓ク)、客員三崎亀之助(駁彌兒氏自由論)

のちに東京帝国大学法科大学教授として天皇主権説の主唱者となる穂積八束が加わっていることから想像がつくように、このグループは政府支持、反民権派の演説結社だった。渡辺が「主権論」で用いた肩書き「戊寅社」こそこのグループの名称であったろう(62)。棚橋の「日記」には、成器社、相愛社、三共社、十三社などといった演説又は討論結社の名称が頻出する。この前後の時期は一般に、自由民権運動に共鳴して東京大学内でも演説が盛んだったといわれる(63)。それらのうちでも政談結社としては、この戊寅社な

どは旗色を鮮明にした先鋭的な団体だったといえよう。ところが、『東京日日新聞』に掲載された右のような演説会の広告記事に関連して、当日のうちに文部省から大学あてに次のような通牒が発せられたのは、いったいどのようなことと考えたらよいのだろうか。

本日東京日々新聞公告欄内ニ有之貴学学生學術演説之義ハ、論題中政談ニ紛ハシキ儀
モ相見候条、至急總理ニ於テ取調、御差止可相成、且官公私立学校生徒タル者公衆ニ
対シ演説ノ儀ニ関シ即今詮議中ニテ、追テ可被相達候義有之候へ共、先ヅ總理ニ於テ
御取締可相成、此段文部卿之命ニ依リ及御通牒候也。

明治十五年四月二十六日

専門学務局長

文部大書記官濱尾新

東京大学総理加藤弘之殿 *ok*

要するにこれは、二十九日の演説会の「差止」「取締」を促す依命通牒なのである。しかし、大学が実際にどのような措置を講じたかは判らない。演説会は予定通り実施され、それも五月一日付『東京日日新聞』雑報欄の伝えるところによれば、開場一時間を過ぎた頃には満員の聴衆だったという。渡辺の演説は三たび同紙の社説欄に連載される *つ*。書生の學術演説会が満員になる、もちろんこれは「言論社会」の出現を前提として、それが文部省が懸念したように政談演説会であったからにほかならない。実はこの当時、全国的に書生の政談演説が非常に盛んとなり、「政談と學術」という問題が顕在化しつつあったのである。その事例は各新聞の雑報欄を読んでみれば枚挙にいとまがないほどである。そして、學術演説会または親睦会と称する限り従来の集会条例では処罰できないとしたら、

その改正が急がれるのは当然といえよう(66)。

萬八樓における渡辺の演説草稿の連載が終わった三日後の五月十九日、参事院は集会条例改正案(甲号)を太政官の閣議に上申する(67)。翌二十日に再上申された乙号が閣議決定され、三十日に天皇の裁可を得、元老院の議定を経て六月三日に修正裁可、太政官布告第二十七号として公布されたのである。その第十六、七条は左のように定めている。

第十六条 学術会其他何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ハラズ多衆集会スル者、警察官ニ於テ治安ヲ保持スルニ必要ナリト認ムルトキハ之ニ監臨スルコトヲ得。若シ其監臨ヲ肯ゼザルトキハ第十二条ニ依リ処分ス。

学術会ニシテ政治ニ関スル事項ヲ講談論議スルコトアルトキハ、第十条ニ依リ処分ス。

第十七条 前条ノ場合ニ於テ治安ヲ妨害スト認ムルトキハ第六条ニ依テ処分ス。

この規定によつて以後政談と学術は法令上峻別されることとなつた。このことは、渡辺たちの演説会のようにたとえ政府の憲法構想を擁護し民権派に対抗する論調のものだとしても、政府は書生には一切の政談を認めない方針に転じたことを示しているといえよう。

六月二十一、二十二日の『東京日日新聞』は、「政談ト学術ノ區別」と題する社説で「学術ハ是非当否ヲ判定スルニ止リ、他ノ一方ナル政談ハ冀望ノ思想言辞ニ露ハル」という區別を立て、変わり身の早いところをみせた。字義通りに解すれば学術の脱「思想」化である。高田や渡辺が卒業したのはこの直後の七月、コレヲ猖獗のため延期された学位授与式でフェノロサの例の演説が行われたのは十月であるから、この明治十五年の東京大学は、

〈政治〉に振り回され、総合的にいえば政府の進路に急ぎ追隨する姿勢を採りつつあつ

た。三宅をはじめ政教社に結集する「同志」たちの多くが翌十六年以降の卒業生であった。この意味を考えると、政教社の言論は政論でもなく学術でもない、いわばその両者の狭間において準備されていたといえよう。

(ノ) 「哲学流行の兆」、『国民之友』第二二五号(一八九四年)九頁。榎林滉二「H・スペンサー哲学受容の様相」(『文学』第五三卷第一号(一九八五年)所収)参照。ただし榎林が、「国粹の側から『日本人』、『亜細亜』を、仏教の側から『反省会 雑誌』を眺めたのであるが、これらにおけるスペンサー言及は数例にとどまり、その有意性も乏しい」(同誌一六一頁)と述べているのは、おそらく論説の表題だけから判断した結果かと思われ、政教社に関していえばそのようなスペンサーの影響は各論説の随所において認められる(第四章以下参照)。

なお、H・スペンサーの理論を中心とする我が国の社会進化論受容については、山下重一『スペンサーと近代日本』(一九八三年、御茶の水書房)がよくまとまっている。ここでは、山下がいうように、我が国でスペンサーが受容される場合、全く相反するさまざまな受容のしかたがあったという点だけを確認しておきたい。また、進化論の歴史におけるスペンサーの影響は、八杉龍一によれば「分野により場合によりダーウインをしのぐくらい大きかった」(『進化論の歴史』(一九六九年、岩波新書)一六〇頁)とされている。考えてみれば、スペンサー(Herbert Spencer 1820-1903)は明治日本とは同時代の人物であり、主著 A System of Synthetic Philosophy, 1862-96. 『総合哲学体系』の一部は、当時まだ書き続けられていたのであった。

(ニ) 前掲(第一章註ノ)徳富『蘇峰自伝』一八四頁。

- (3) 山路愛山「現代日本教会史論」、『基督教評論・日本人民史』(一九六六年、岩波文庫版)七五頁。初出は一九〇五年。
- (4) 三宅『明治思想小史』(一九一三年、丙午出版社)一一〇頁。
- (5) 加藤弘之『弘之自伝』(一九一三年、私家版)五六〜五七頁。
- (6) 高橋真司「加藤弘之日記を読む」、『私学研修』第一一三号(一九八九年)参照。
- (7) 加藤「(日記)」明治十五年七月二十三日ヨリ十六年(東京大学百年史資料室保管、I・一二)五丁裏。
- (8) 加藤『人権新説』(一八八二年、谷山楼藏版)一〇五頁。
- (9) 同右一〇二頁。
- (10) 小牧治『国家の近代化と哲学』(一九七八年、御茶の水書房)三〇〇〜三〇二頁。
- 前掲書(註1)の中で山下は、加藤のスペンサー理解が「誤読」に基づくものであったと述べているが(同書一六〇頁)、ここではむしろ、加藤がスペンサーを「自分につごうよく」(八杉龍一『ダーウインを読む』(一九八九年、岩波書店)一五二頁)受容した側面が窺えよう。その上で、『人権新説』における加藤は、J・K・ブルンチュリ「政治的立場を借りて」、「急進主義的な日本の民権論を批判・排撃せんとした」(安世舟「明治初期におけるドイツ国家思想の受容に関する一考察」、『日本における西欧政治思想』(一九七六年、岩波書店)一五四頁)とみることができよう。

- (11) 棚橋「日記」第二号九丁裏に「図書閲覧室に至り、人権新説を読む（原漢文）」とある。
- (12) 前掲（第一章註1）三宅『同時代史』第二卷一七一頁。
- (13) 馬場の批判は、明治十五年十一月十七日から十二月三日まで、『朝野新聞』の論説欄に「読加藤弘之君人権新説」の題で十一回連載され、翌年一月『天賦人権論』と題して出版された。
- (14) 乗竹幸太郎訳『社会学之原理』（一八八五年、東京経済学講習会）所収。なお、東京大学における社会学の受容については、下出民義編刊『下出隼吉遺稿』（一九三二年）収録の諸論考が参考となる。
- (15) 加藤「社会二起レル人為淘汰ノ一大疑問」（『東洋学芸雑誌』第二九号（一八八四年）所収）。
- (16) 三宅「加藤弘之先生二質ス」（同右三〇号所収）。
- ところで、この論争には「在札幌 一寒生」と名乗る者も加わった。これは札幌農学校生徒と考えてよからう。その場合、東京と札幌の書生社会には、進化論という思想的課題をめぐって『東洋学芸雑誌』というへ媒体へを通じた交流があったことになり、これは両者が共通の知的環境にあったという点で重要である。
- (17) 井上哲次郎「明治哲学界の回顧」、岩波講座『哲学』第一〇卷（一九三二年、岩波書店）七〇頁。
- (18) 山口静一『フェノロサ』上下（一九八二年、三省堂）参照。
- (19) アメリカにおけるスペンサー思想の受容と影響については、『社会進化論』（一

九七五年、研究社アメリカ古典文庫一八）参照。

(20) 前掲(註18)山口『フェノロサ』上九七頁。

(21) 「フェエ子ロサ先生宗教論」、『芸術叢誌』第四〇号(一八七九年)五頁。

(22) 前掲(第一章註50)三宅『自分を語る』二三〜二四頁。

(23) 同右九三頁。

(24) 『東京大学法理文三学部一覽』一(出版事情不明)一一五頁。

(25) これらのうち、市島、阪谷のノートは、すでに山下「フェノロサの東京大学教授時代」(『国学院法学』第一二巻第四号(一九七五年)所収)で検討を加えられている。それによれば、市島のノートはのちに清書されたものだという。金井のノートは、イエール大学バイネツキ図書館で保存され、秋山ひさ編『フェノロサの社会学講義』(一九八二年、神戸女学院大学研究所)として公刊されている。

坪内のノート(早稲田大学演劇博物館所蔵、ZB一・四四)及び井上のノート(東洋大学図書館井上円了文庫所蔵、αI・一・一・三、六)も閲覧する機会を得たが、いずれも断片的なもので内容の検討は難しいように見うけた。

(26) 杉原四郎「フェノロサの東京大学講義」、『季刊社会思想』第二巻第四号(一九七二年)所収。

(27) 国立国会図書館憲政資料室所蔵「阪谷芳郎文書」八五六。

(28) 同右八五五。

(29) Albert Schweigler, Geschichte der Philosophie im Umriss, 1847, 谷川徹三・

松村一人訳『西洋哲学史』下巻(一九五八年改版、岩波文庫)一〇二頁。

(30) 前掲(註27) 阪谷「哲学2 憲法史」五五頁。

(31) 前掲(註28) 阪谷「政治学 哲学1 理財学雑誌」六頁。原文は、If we can unite the doctrines of Spencer's Evolution & Hegel's Philosophy, we will have a complete philosophy, & we believe this will be done within next thirty or forty years. となっている。

(32) 前掲(註24) 『東京大学法理文三学部一覽』一、三二六頁。

(33) 前掲(註25) 三宅『自分を語る』一三、二四頁など。

(34) 国立国会図書館憲政資料室所蔵「阪谷芳郎文書」九一八。

(35) 前掲(註26) 山口『フェノロサ』上、九一頁。

(36) 前掲、三宅『自分を語る』二三頁。

三宅がカーライルの『英雄及び英雄崇拜』T. Carlyle, Heroes and hero-worship, 1841. 等から影響を受けて人物論を多く発表するのは、明治末年から大正年間のことである。

(37) 三宅『大学今昔譚』(一九四六年、我觀社)一二九頁。このうち、中村敬宇の「支那哲学」の講義について、三宅は「其当時学生として出席して居るのは私一人、先生と向ひ合せであつて普通の課業よりは他の談話に亘つたことが多く、それとなく先生の事を承知したことがあるのであります」(「故文学博士中村正直君に就て」、全国教育者大集会編『帝国六大教育家』(一九〇七年、博文館)四八頁)と回想している。

(38) 前掲(註1) 山下『スペンサーと近代日本』一七一頁。

(39) 前掲(註4)三宅『明治思想小史』一〇八頁。

(40) 三宅『日本仏教史』(一八八六年、集成社)一四頁。同書は、兵庫県竜野市善竜寺所蔵のものを拝見した。

同じような宇宙観の端緒は、孔子、老子の学問を「志向」と「知識」から論じた「論孔老二氏之学」(『学芸志林』第一五卷(一八八四年)所収)の中で、「宇宙普遍ノ大勢力常ニ無量ニ変更転化シ、茲ニ動アレバ茲ニ反動アリ、時ニ進化ヲ受クルヲ得バ、時ニ溶化ニ従ハザルヲ得ズ」(五八頁)といっているところにも見いだすことができる。

(41) 前掲(註7)加藤「(日記)」明治十六年一月二十四日の条で、次のような構想が示されている(五二丁裏〜五三丁表)。

○日本開化史ヲ著スノ志四、五年前ニ立テ近々着手セントシタレドモ、先ヅ開化論ヲ初ニ著述セント考ヲ變ジタリシニ、頃日人権新説ヲ著シタルニ付テハ、漸ク之ヲ改訂スルノ業モ決シテ容易ノコトニアラズ、且ツ必要ノコトト考フレバ、寧口終永ノ業ヲ人権ノ研究ニ尽スヲ是トシ、其心得ニテ勉力スルコトトナスニ決セリ。而テ漸ニ右改訂ヲナス上ハ、遂ニ人権進化史トナサント欲スルナリ。

(42) スペンサー自身、「正しい意味での社会的進歩とは、社会という有機体の構造上の変化」(Herbert Spencer, Progress; its Law and Cause, 1857. 清水礼子訳『進歩について』、世界の名著三六清水幾太郎編『コント スペンサー』(一九七〇年、中央公論社)三九九頁)であり、「進歩の本質は、同質が異質に変わって行く

ことにある」(同書四二〇頁)といっており、これは『第一原理』のテーマの一つになっている。

S・ポラードによれば、「スペンサーは、宇宙が社会法則をふくむ諸法則に従属すると信じ、民族社会では一連の文化的段階を通過することが、人類の運命であると感じている」(Sidney Pollard, *The Idea of Progress*, 1968. 舟橋喜恵訳『進歩の思想』(一九七一年、紀伊国屋書店)一六二頁)とされる。

(44) 前掲(註1)三宅『自分を語る』二九頁。同様の回想はすでに第三次『日本人』第五号(一八九五年九月二十日)所収の「面棚偶語(二)」に出ている。しかし、このときはまだ三宅自身の所属関係については語られていない(同誌三四頁)。

(44) 丸山正彦編刊『丸山作楽伝』(一八九九年)一九三頁。丸山については他に、大川茂雄・南茂樹編『国学者伝記集成』第二巻(一九三九年、国本出版社)の中に、同じ丸山正彦による伝記が収められている。

(45) 「明治日報第百号」、明治十四年十月三十日付『明治日報』。

(46) 「党勢一斑」、明治十五年九月十九日付『東京日日新聞』。

(47) 山本武利『新聞と民衆』(一九七八年、紀伊国屋書店)二二頁。

(48) 明治十五年九月十九日付『東洋新報』。

東京日日新聞 京浜毎日新聞 自由新聞

明治日報 郵便報知新聞 絵入自由新聞

東洋新報 大坂新報 東北自由新聞

大東日報 神戸新報 福島自由新聞

信濃毎日新聞	西海日報	東海暁鐘新報
西海新聞	新潟新聞	北陸日報
静岡新聞	茨城日々新聞	山陰新聞
山梨日日新聞	伊勢新聞	岡山毎日新聞
高陽新報	岐中新報	土陽新聞
弥生新聞	岐阜日日新聞	総房共立新聞
秋田日々新聞	秋田日報	立憲政党新聞
福島新聞	陸羽日々新聞	新潟日々新聞
岡山新報	福井新聞	淡路新聞
紫溟新報	鹿児島新聞	普通新聞
不知火新聞	熊本新聞	石川新聞
越中新誌	愛知新聞	
南海日報	福岡日々新聞	
山陰新報	栃木新聞	
芸備日報		
紫溟雜誌		
京都滋賀新報		

(49)

大久保利謙「明治十四年の政変」、大久保利謙歴史著作集2『明治国家の形成』
 〔一九八六年、吉川弘文館〕三〇二頁。同論文の初出は一九五二年。

(50)

明治十四年七月十二日付伊藤博文宛井上毅書簡、伊藤博文関係文書研究会編『伊

藤博文関係文書』一（一九七三年、塙書房）三二二頁。

(57) 「自然は飛躍しない」(Natura non facit saltum)は、ダーウィンの愛好句であつたといひ、研究史上ダーウィンにおける「変化が連続的、漸進的(gradual)である」といふ観念」に意義を認める評価があるといふ(前掲(註10)八杉『ダーウィンを読む』一一四―一一五頁)。

(52) 自伝では加藤『人権新説』の書評をしたと述べられているが、少なくとも署名記事を寄せた形跡は見られない。明治十五年十一月十二日付『明治日報』無署名社説「人権新説ノ著者及ビ報知新聞毎日新聞ノ両記者ニ望ム所アリ」がそれかとも思われる。

(53) この点では、志賀の札幌農学校在学中の「日記」の方が政治的な関心を多く記している。しかしその場合でも、何分当時の札幌は情報の到達が遅い上に量も少ないために、例えば、いわゆる国会開設の詔が発せられた五日後に「又聞ク処ニ因レバ国会ハ来ル二十三年ヲ以テ設立セラルル由」(前掲(第一章註63)志賀「札幌農学校第二学期中日記」四二頁、明治十四年十月十七日の条)と書き付ける程度であつた。

(54) 高田早苗述、薄田定敬編『半峰昔ばなし』(一九二七年、早稲田大学出版部)七九―八〇頁。

(55) 主権論争は「民権期の思想闘争を典型的に示す」(江村栄一「自由民権運動とその思想」、岩波講座『日本歴史』一五近代二(一九七六年、岩波書店)三六頁)題材として取り上げられてきた。家永三郎は中央紙に現れた論説よりも、むしろ高知

の『土陽新聞』に掲載された植木枝盛の「国家主権論」を、「この論争の中でもっとも民主主義的な主権論」（『植木枝盛研究』（一九六〇年、岩波書店）二七八頁）として評価している。

(56) 藤田省三『第二版 天皇制国家の支配原理』（一九七八年、未来社）一一頁。

(57) 「主権弁妄」、『東京日日新聞』明治十五年一月二十四〜二十八日まで五回連載。このとき同紙の記者であつた関直彦の『七十七年の回顧』（一九三二年、三省堂）によれば、「其議論の火元は実は拙者」すなわち関であり、「或る日の事、余は大学の教科書の一なるオースチン氏の法理論を携へて出社し、閲読し居たりし時、桜先生之を見られて（中略）其れより桜痴先生は紙上の社説に主権論を起稿し其翌日より堂々数日に亘りて東京日日新聞の社説欄に掲載し、一時天下の耳目を聳動したり」（同書一〇七頁）という社説が、この「主権弁妄」であろう。

(58) 「主権弁妄」は、明治十五年一月十八〜二十四日に六回連載された『東京横浜毎日新聞』社説「読日報記者主権論」を直接の対象としていられると思われ。さらに遡れば一月十四日付『東京日日新聞』社説「主権論」が火つけ役だつたと思われる。

(59) 渡辺安積「主権考」第六、明治十五年二月二十三日付『東京日日新聞』。

(60) 前掲（第一章註1）三宅『同時代史』第二卷一六九〜一七〇頁。

(61) 升味準之輔『日本政党史論』第一卷（一九六五年、東京大学出版会）三二七〜三三二頁。

(62) 戊寅社が東京大学内の学生結社であることは確かだが、その性格等についてはよく判らない。前掲（註54）『半峰昔ばなし』によると、戊寅社の「重なる」は山田

喜之助、砂川雄峻、有賀長雄、三崎亀之助などであり、「演説の稽古を第一目的とする」ものであったという（同書四三頁）。

(63) 大日方純夫「立憲改進黨における鷗渡会の活動」、『早稲田大学史記要』第一五卷（一九八二年）参照。

(64) 「学生学術演説ノ件」、『文部省往復』明治十五年丙号（東京大学百年史資料室保管、A四五）一二八丁表。なお、この件は国立公文書館所蔵の「公文録」中には見当たらないので、文部省内決裁であったと考えられる。

ついで文部省は、学生、生徒の学術演説を禁止する旨を直轄学校へ六月十日付内達、七月三日には同趣旨を府県へも内達している（『文部省第十年報』明治十五年（国立公文書館所蔵、記・一四）二八～二九頁）。

(65) 渡辺「主権ヲ論ジ併セテ憲法ニ及ブ」、明治十五年五月十一日付『東京日日新聞』から十六日まで四回連載。引続き同紙上には片山、穂積らの演説も連載される。

(66) 例えば静岡県では、七月十八日付達号外「学校生徒学術演説ニ関スル件」（静岡県学務課編『学務諸達類纂』（一八八五年）所収）を發し、学術演説会に際してもその都度演題を添えた開催伺いを出すことを命じている。

(67) 「集会条令改正追加ノ件」、明治十五年『公文録』太政官六月全（国立公文書館所蔵、公・三二一三）所収。

第三章

政教社の設立

東京、札幌そして秋田の書生社会に政教社の〈組織〉的原核が形成されつつあった明治十五年は、思えば多端な一年であった。年の瀬も迫った十二月十九日、新潟県高田町（現上越市）の旅館で佐田介石（一八一八〜八三年）が没した。「ランブ亡国論」で知られるこの奇怪な「国粹主義」者の死は、書生社会内部における新しい「国粹主義」思想主体の成長と対比したとき、その新旧交替を象徴するようなできごとだったといえよう。

佐田に関しては、基本史料が不足している上に、管見の及ぶ限り研究業績の蓄積も甚だ不十分である。河合栄治郎が、主として経済論の側面に焦点を当てながら、政教社から前田正名までを包摂する「一連の国家主義思想の原初形態」⁽¹⁾と位置づけたのを出発点としても、その後、佐田の須弥山説を中心とする仏教思想の基底的構造と、舶来品排斥運動や代用品発明との内的関連についての追求は十分になされていない。佐田が全国各地で行った説教演説の様相を伝える記事は諸新聞の雑報欄に頻出する⁽²⁾。それらによると、一種のパフォーマンスといえる彼の方法は、聴衆の大きな支持を受けていた。「国粹主義」の思想性ということを考えるとき、存外この点は無視できないように思われる。佐田の思想と行動の中には、「国粹主義」の旧態として葬り去ることのできない何かがあったといえよう。私のみるところ、佐田の「国粹主義」には新旧二つの側面がある。明治七年九月提出の「建白」の冒頭で、「欽而案ずるに、文明開化と申事、西洋に限れる事に非ず。西洋には西洋に固有する処の文明開化あり、日本には日本に固有する処の文明開化あり」⁽³⁾といひ、日本固有の文明開化を主張している点は、同時期の開化物などにはない斬新

な着眼である。だが結局、文明開化を即物的な次元でしか把握できない点では、それらと同様の地点に立っていたといわざるをえないだろう。要するに、西洋の脅威に対する民衆の原初的な排外感情を慰謝する一定の役割を果たすものであった。

このような佐田介石の死に象徴される「国粹主義」の主役の交替は、翌十六年になるといよいよ促進されてくる。三宅をはじめ「同志」たちのほとんどが、この年から十八年にかけて東京大学と札幌農学校を続々卒業して「学士」となったのである。

我が国で初めて学士号が授与されたのは明治十二年のことで、このときは前々年の十年に理学部を卒業していた宮崎道正ら三人に遡って出されたのであった（写真3（左）参照）。学位の授与は、すでに学制（五年）、文部省職掌章程（八年）の中で定められてはいたが、実際に授与されることはなかった。それを十一年十一月十八日になって、文部卿から太政大臣宛に「目今東京大学ノ教育稍其歩ヲ進ムルニ際シ、高等ノ学科ヲ卒リ候俊秀ノ士逐次輩出シ、随テ学位ノ授与ヲ要スベキ時機ニ臨ミ候ニ付テハ、適當ノ方法ヲ創設シ考試ヲ行ヒ登第ノ後ハ直ニ大学ニ於テ学位授与致シ度、此旨相伺候也」という伺い（閣議請議）が出され、十二月二日決定、裁可を得る（5）。これはつまり、東京大学の教育制度が漸く整ってきたのに伴い、学位の授与が必要になってきたことを示している。そして、この学士号を取得できる二つの階梯が東京大学（司法省法学校、工部大学校、駒場農学校を併合）と札幌農学校だったのである。学位令（二十年）公布までは我が国唯一最高の学位だったので、学士はいわば書生社会の頂点に位置を占めるものといえよう。

したがって、前述の明治十五年東京大学学位授与式において、文部卿福岡孝弟が祝辞の中で、「今や諸子亦其業ヲ卒リ此ニ学位ノ榮ヲ受ク、美ナリト謂フベシ。嗚呼諸子ノ美ハ

東京大学
 理学部
 文三
 同法
 理学部
 総理

明治三十年七月十日

加藤 弘之



John W. Johnson

エドマント・ナウマン

J. W. Wheeler

ローテエル・ガッ、ウキナル

Robert W. Allison

ロバート・ウキリアム、アトキンソン

東京大学理学部教授

化学科卒業候事



宮崎道正

国家ノ美ナリ。諸子ノ栄ハ国家ノ栄ナリ」(6)と述べているように、当局者の側では学士と国家は直結したものと認識されていた。一方、十八年の学位授与式で政教社「同志」のひとり井上円了が新学士総代として謝辞を述べた中で、卒業後は朝野いずれにあるを問わず学士として国家と進退を伴にする覚悟を次のようにいう。

此位ノ苟モ生等ニ属スル以上ハ、飽マデ実効ヲ立テ自ラ尽サザルベカラズ。国家開明ノ曉ニハ学海ノ楫ヲ執テ前路ヲ啓キ、天下多事ノ夕ニハ嶮ヲ履ミ艱ニ当テ辞セズ。(中略)朝ニアルモ能ク其力ヲ竭シ、野ニアルモ能ク其身ヲ致シ、進退顯晦一ニ唯世道文運ヲ興起シテ大ニ国家ニ為ス所アランコトヲ務ムルノミ。此ノ如クニシテ生等始メテ学士ノ栄位ニ対スルノ義務ヲ全ウシ、併セテ今日ノ盛意ニ報ズベシト信ズ。(7)

政教社の中軸をなす「同志」たちは、概して右のような期待を背負い、またそれにふさわしい自意識を有した者たちであったと考えなければならない。学士であることの“価値”は、第一章の各所で述べたように様々な面に及んでいた。具体的には、初任給の格差(第一章第四節参照)などに歴然と現れたけれども、私たちにとつてより重要なのは、彼らが国家に対して抱いていた連帯意識、政策科学としての文学、農学を組織的に学んで政治エリートとなる予備訓練を充分に受けていたことであつた。しかし、彼らの専攻分野は法学、政治学、財政学など統治に直結する学問でなかつたこともあり、当時の書生社会の思想的基盤ともいふべき社会進化論と自由民権運動の洗礼を受けていたにもかかわらず、彼らは政府の陣営にも自由民権運動の陣営にも明確に参加することはなかつた。「同志」たちの最大公約数的な共通性は、序章で掲げた表1にみるように学校教員として教育界に進むことで、同時代に対する態度を保留したままで言論といういわば“第三の道”を選びつ

つあったところに見いだせよう。それゆえに彼らは、書生社会のあの濃密な人間関係と共通の思想的基盤をかなりの程度維持したまま、「同志」としてやがて邂逅することになるのではないか。その過程を三宅の場合に即して少し辿ってみたい。

三宅は、大学卒業にあたり指導教授の一人外山正一の斡旋で准助教授（准判任御用掛）となつて、学内の編纂所に奉職した。このポストは「学生的官吏」^{（2）}というものであつたらしい。ここで彼は、先輩の井上哲二郎や有賀長雄らと机を並べて日本仏教史の研究をすることになった。三宅にとつて最初の著書、『日本仏教史』（第二章第三節参照）と『基督教小史』（一八八六年、集成社）は、このときの成果とみてよからう。

では、「学生的官吏」の実態はどのようなものだったのだろうか。それを如実に物語ってくれるのが、明治十七年早々の哲学会結成をめぐる動向であると思われる。哲学会は「学会」としては我が国で最も早く設立されたものの一つで、現在でも活動を続けている^{（3）}。その発足にあたっては、「同志」のうち三宅をはじめ井上、棚橋、辰巳、島地が加わり、その他彼らの周囲にいた多くの学士、学生たちが関わっていた。棚橋の「日記」第七号には次のようにある。

(1) 一月十八日の条―「三宅雄二郎氏来室。雑談」（五丁表）

(2) 一月十九日の条―「偶ま三宅雄二郎氏来室。雑談（中略）二時半、遂に諸氏とともに出でて福田亭に会し、哲学会規則を儀定す」（同表裏）

(3) 一月二十六日の条―「三宅雄二郎氏来訪、則ち雑談。子及び井上子とともに出

で、一時過華族学校曰く学習院（割書）における哲学会に趣く。諸老諸氏を待ちて雑談。三時過に至りて集合、則ち規則

等を議し、五時半に及びて散会す」(八丁表)

(4) 二月十一日の条―「十一時半、出でて哲学会に赴き、島地黙雷、井上哲次郎氏の

演説を聴く」(十五丁表)

卒業後も大学に残った三宅は、後輩の棚橋らの入居する寄宿舎を気軽に訪ね、そのよう
な中から井上と三人が中心となって哲学会が結成された模様である。同会の特色は、単に
西洋哲学を紹介するのではなくて、「西洋の哲学を比較参照」(19)して我が国独自の哲学
を創造することを目指していた。『哲学雑誌』の創刊号で、井上円了は「哲学」を「原理
ヲ究明スル学」とし「学問世界ノ中央政府ハ即チ哲学ナリ」(20)と定義したが、三宅は同
じように「原理ヲ考究スル学」と定義した上で、「概スレバ東洋哲学ノ感情ヲ交ヘテ曖昧
滑凝ニ陥ルハ、西洋哲学ノ知識ヲ主トシテ明晰精緻ニ弁ズルニ劣ル畜ニ数等(中略)故ニ
哲学ヲ両洋ニ別ツモ、西洋哲学ハ一体ノ哲学ヲ形成シテ、宇内真正ノ学問ナリト認定セラ
ルル様ニ為リタルナリ」(21)と述べ、この時点では西洋哲学を主とする立場を明確にして
いる。

また、「同志」の中で一人だけ異色の島地黙雷の政教社参加について、従来は雑誌『日
本人』創刊に際して新聞紙条例に基づく保証金の支払いの援助を受けるため参加したとい
われていたけれども、単にそれだけではなくこの哲学会の結成を通して書生社会と接触を
もったことが判るのである(22)。これで、初期の「同志」十一名はすべて、何らかの繋が
りで政教社の〈組織〉的原核の相関図に入ったことになる。

〈組織〉形成の面で着々と結びつきを深めていった「同志」たちは、同時に思想伝達の
〈媒体〉形成の面でも注目すべき試みを行っている。ここでいう〈媒体〉としては、新聞

と雑誌が挙げられるが、序章で述べたように、ちょうどこの頃に我が国の近代的なコミュニケーション市場が形成されたことを前提に、新聞と雑誌の急速な普及現象がみられる。

「同志」たちと新聞の関係としては、第二章で取り上げた三宅と『明治日報』が典型例といえよう。つまり、既存の新聞に社説、論説を執筆するかたちである。当時一般に、発行部数が多く速報性が求められる新聞は、資金や設備などの面で雑誌に較べて発刊にともなう困難が大きかった。後述する徳富蘇峰の場合のように、まず雑誌『国民之友』で成功を収めて、しかるのちに『国民新聞』を創刊するという順序が必要であったろう。

「同志」たちと雑誌の関係としては、すでに何度か引用している『学芸志林』『東洋学芸雑誌』への執筆が注目されよう。前者は「東京大学法理文三学部編纂」と銘打って明治十年八月に創刊され、「緒言」には「学問ノ方一ニシテ足ラス。大要力ヲ専修ノ門ニ用フベシト雖モ、抑亦別ニ自ラ其見聞ヲ弘ムルノ具無カル可カラズ」(14)、つまり学問普及のためのコミュニケーション手段たらんという「本意」が記されている。一方後者は、「同志」たちに近い杉浦重剛を中心として十四年十月に創刊されたもので、同じく「緒言」と題された発行趣意文の中で、「我邦人ノ理学ノ思想ニ乏シキハ識者ノ常ニ憂フルトコロナリ。故ニ之ヲ救ハンガ為ニ此雑誌ニ理学ニ関係アル文章ヲ掲載シテ、其性質及ビ功用ヲ世ニ明ニセンコトヲ力メタリ」と述べ、「理学ノ思想」を提供するという目的が明確にされている。両者は発行の趣旨と総合的な学術雑誌であることにおいて重複していただけでなく、三宅、井上、松下などの「同志」たち、杉浦重剛、宮崎道正などの社友たち、そしてもちろん加藤弘之、外山正一、矢田部良吉などの大学教授たちが寄稿者として名前を列ねている点でも共通していた(15)。本稿の冒頭で紹介した「政教社の祝宴」に招待された者

たちの一半は、すでにここで集団的特徴をもって現れているといえよう。

この集団は、まだ漠然としたものだが、書生社会のもっていた人的関係と知的環境を明治二十年代に架橋する、より選別された知識人集団としての学士社会の形成を予測させるものである。学士の誕生は、したがって、政教社の設立にも直結する画期に違いないが、その前にもう一つ、自由民権運動によつて開眼させられた書生社会のへ政治へ志向の行方について触れておかなくてはならない。

第二節 設立の時期と背景

大学卒業後「学生的官吏」となった三宅は、「日本思想史では広きに過ぎ、宗教史では神道を含んで面倒になり、日本仏教史とすべしとて」⁽¹⁶⁾、ひとまず専攻を日本仏教史と定めたのであったが、その実「自分の仕事」を求めて様々な可能性を探し続けていた。自伝での述懐によると、「自分は政治に興味があつても、政治家になれるとは思はず、又ならうと思はぬ。既に官吏を断念しては、政治上の成功に関する興味の薄らぐを免れぬ」⁽¹⁷⁾とあり、政治に対する「趣味」と同時にある種の距離感を示している。しかし、この抑制の利いた筆致は時間の然らしめたところであつて、その点では徳富蘇峰の自伝の方が正直かもしれない。蘇峰は明治二十年頃の自分について、「予は自から政治家たるを好まなかつたが、併し政治そのものは頗る好物であつて、須臾も政治を離れる事が出来ず、その為には漸次に実際の運動にも主役ではなかつたが、加役として多少の努力をした」⁽¹⁸⁾と回想している。後年我が国の言論界で“雪嶺・蘇峰”と並び称された二人が、ともに文筆活動の出発点であつた当時を振り返つたとき、政治を「趣味」あるいは「好物」と呼んでいるのは興味深い一致といえよう。

すでに述べたように、“参議熱”に象徴される明治十年代書生社会の政治志向は、非常に強烈なものであつた。三宅をはじめ「同志」たちは、自由民権運動に触発されながらも民権、反民権のいずれの側からも距離を措く対応をとつたのに対し、徳富の場合は郷里熊本の本民権派、相愛社に接近し、自らは「民権私塾」大江義塾を主宰していた。同塾は「生徒ノ自治」を重視する「同志的結合の“社中”としての性格をつよくもつ」⁽¹⁹⁾もので、

教科目では政治、経済、歴史を重視し、その外に演説会や討論会を行ったという。しかし、「たえず中央に向けられていた」彼の「眼」は、自由民権運動の退潮をみたとき、別な方向へと注がれていった。明治十八年、『第十九世紀日本ノ青年及其教育』を著し、大江義塾を閉鎖する。その頃徳富は、塾生の一人でのちに民友社の社員ともなる人見一太郎に向かつて、「予等は長く田舎に老ゆべき者ではない。中原に出て角逐すべき時期は、正に到来せんとしつつある」(一)と語ったという。自ら「旗挙げ」という中原||中央志向の具体的な中身は、「胸中の秘策」たる雑誌・新聞刊行計画の準備であつた。

予は何事をなすべき歟。予は熊本を去る頃から既に一個の計画を抱いてゐた。そは自ら雑誌を刊行する事である。予は初から新聞に心があつた。されど多少とも新聞に経験ある予は、容易に手を出すべきものでない事を知つていた。(一)

こうして創刊されたのが、雑誌『国民之友』であることはよく知られている。一方、「自分の仕事」を探しあぐねていた三宅も、「時事の是非得失が気に掛り、何とか評論したくなり、学校に居る頃から新聞雑誌に発表した。一は嗜好よりし、一は職分と心得、時事の評論に従事するものの、自分の仕事が其れだけと思へず、出来ても出来なくても、更に多く年月を要する者が無くてならぬとした」(一)と回顧するように、とりあえず新聞、雑誌における「時事の評論」に従事することとなつた。「更に多く年月を要する者」、それが「宇宙」の解明を目指す「哲学」であつたことは、自伝を語つたときの三宅自身も現在の私たちも知つてゐる。さしあつては、政治を「趣味」「好物」とした二人の活躍舞台が新聞、雑誌となつたという、これまた興味深い一致を確認できればよい。この「更に多くの年月を要する者」へのこだわりが、後年とくに日清戦後社会に際会したとき、三宅と

徳富の思想的対応の差異をもたらす導火線になっていると思われるが、それはまた第六章で述べよう。

ここでは、政教社と民友社という明治二十年代の新しい思想主体の形成過程に当って、両者の共通点と相違点を整理しておくべきであろう。それは前述の『第十九世紀日本ノ青年及其教育』における主張から考えることができる。同書の中で徳富は、「明治ノ青年」が「天保ノ老人」を導いて「平民社会」に進まなければならないとする有名なテーゼを提示する。ここでいう「明治ノ青年」は、彼が当初あらゆる立論で立脚点（担い手・基盤）とした「田舎紳士」の予備軍とでもいうべき、地方の青年層すなわち「田舎書生」のことであろう。つまり、本稿の分析視角とした「書生社会」の構成員という点では、政教社と民友社は共通の基盤に立っていた。まして徳富は、一時東京英語学校（のちの東京大学予備門）に在籍したことがあり、またよく知られているように同志社で新島襄にも学んでいる。岡和田忠常が主に徳富と志賀を取り上げながら、「青年論」と「世代論」を連結した彼ら新世代の自己主張が、時代批判を含みつつ政治評論へと向かったといっているのは⁽³⁾、この点に関しては有効な指摘であろう。

しかし、東京の書生社会は出身地の地域性を否定したところに成り立っていたともいえる。したがって、徳富のいう「田舎書生」には、東京の「学士」たちは含まれないであろう。前節で述べたように、彼ら学士たちは書生社会から出てその特質を引き継ぎながら、国家との不可分の結びつきを意識する極少数の政治エリートであることを自他ともに許し合った存在だったのである。明治二十年、政教社に結集する「同志」たちは様々な理由により東京に集結してきていた。彼らが学士社会とでもいうべき結合を始めたことを重視

すれば、ここに政教社と民友社の相違点が存するという予測を立てることができ。

政教社「同志」の中でも、札幌農学校で学んでいた当時の志賀には、政治への刮目を契機とした中央志向の傾向が生まれてはじめてた。同校卒業後の彼の場合、明治十七年の長野県中学校赴任(24)と翌年の辞職——県令木梨精一郎との間に酒席で諍いがあつたといわれる(25)——さらに十九年の南洋航海の経験(26)が視野の拡大にとって大きな意味があるろう。長野勤務当時、札幌時代の恩師の一人加藤重任が「事業難成志易遷。莫貪微俸過青年。矧川好句今猶記。咲指大洋万里天」という詩を唐紙全幅に書いて、一年遅れで長野県中学校上田支校に赴任する今外三郎に託して志賀に送つたという(27)。これを見た志賀は「慚愧措く能はず」、辞職の一因ともなつたごとくである。彼にも強烈な中原志向が感じられるわけだが、さらに志賀の場合、文字どおり「大洋万里天」を指し、海軍練習艦筑波に乗って南洋航海をするという、当時としては希有な体験へ向かつた。志賀は後年回想して、「長野県中学校教師を免ぜらるるや否や、ダーウィン著の『博物学家世界巡航記』を丸善書店にて求め、之れを携へて意気揚々と遠洋航行の軍艦に便乗せんとした。(中略)ダーウィンを私淑せし当時の生意気書生たる予は、各方面の人士を訪ひ、ダーウィンが軍艦に便乗せし英国の実例を引き、日本にて軍艦便乗を許可せぬは不条理なりと説き廻り、遂に軍艦筑波に便乗を許可せられた」(28)と語っている。その成果『南洋時事』については後述するとして、彼の巡航の目的には「学術上」の「観察稽查」(29)という側面が意識されていたということだけを、ここでは確認しておきたい。『日本人』創刊の辞にある「学術ノ用」と結びつく「学士」としての本分の領域が、ここに現れている。

一方三宅も、二十年、文部本省に移管されていた編輯局を辞職する。辞職の理由は自伝

では明言されていないけれども、ちょうど同じ頃同じ編輯局を辞職した山県悌三郎はその原因を次のように書いている。

是れより先、編輯局内部の組織改造せられて、専ら力を教科書の編纂に集注せらるるや、伊沢局長鋭意自ら率先して監修の任に膺り、功程を急ぎて局員を鞭撻せらるるので、仕事の繁劇なること、毫も普通事務員の執務状態に異なる所なきに至つた。是れ固より当然の事であつて、身官吏たる以上は、一意専心上官の命に従うて職務に服するの他は無い。然れど初め余の西村前局長の招きに応じて本省に入りたるは、唯官吏として俸給生活に甘んずるが為めではなかつた。主たる目的は、当時学者の淵叢たる編輯局に入り、公務の旁ら自己の志す所に精進して、他日の大成を期するに在つた。(20)

制度化に対する抵抗とも読めるが、三宅が辞職を決めるまでの思考経路も、おそらくは右のような順を踏んでいたと考えられる。彼の場合もこの辞職によつて、前述したような「自分の仕事」あるいは「更に多くの年月を要する者」と直面することになったといえよう。実は、以上に瞥見した志賀や三宅だけでなく、ほどなく「同志」として政教社に結集する学士たちは、さまざまな理由から公職を離れ東京に集まつてきていたのである。

世代的には共通の「明治ノ青年」たちが、新聞、雑誌に彼らの活躍舞台を定めたとき、我が国では初めて内閣制度が導入され、「天保ノ老人」たち、伊藤博文が内閣総理大臣、井上馨が外務大臣に就任して「欧化主義」の政治指導を主導する。彼らの指導理念は「欧州的帝国」(21)の実現ということにあつた。いわゆる鹿鳴館時代の現出である。田山花袋が、「十四年頃の東京と十九年の東京ではかなりに夥しい変遷を少年の私の眼に映じさせ

た」(22)と回想しているように、首都東京は可視的な速度で変貌していた。それは単に少年の観察ではなくて、実は十九年に内閣に設置された臨時建築局(総裁井上馨、副総裁三島通庸)による、首都改造計画として政策的に推進されていたのである(23)。この計画は井上が責任者となつてのことからも判るように、当時秘密裏に進められていた諸外国との不平等条約改正交渉を側面援護すめために「開化日本」を演出する工作であつた。要するに「欧化主義」は、一面で条約改正と密接に関わつていたのである。

明治二十年は大夜会で始まつたといつても過言ではない。一月十四日井上外相主催、十五日伊藤首相主催、二十七日大山陸相主催・・・と続く。そして、四月二十日の有名な首相官邸における大仮装舞踏会、二十六日の井上外相邸への明治天皇行幸が、伊藤と井上にとつても、彼らが主導した「欧化主義」にとつても絶頂期だつたのではなからうか(24)。

民友社から『国民之友』が創刊されたのは、ちょうどこの頃であつた(25)。

夜会と同時に進行していた条約改正会議の内容が外部に漏れたのは、それから間もなくのことである。欧米歴訪から帰国した谷干城が、条約改正反対の意見書を提出して農商務大臣を辞任したのは七月二十六日で、この直後から各地の「有志」が上京して元老院への建白運動を繰り返す。この新しい運動のスローガンは、「租税徴収の軽減」「言論集会の自由」「外交失策の挽回」の「三大事件建白」ということに集約される。彼ら「有志」あるいは「壮士」たちを糾合していくのは、十月三日に丁亥俱樂部を設立した後藤象二郎であつた。

右のような運動の盛り上がりを、自由民権運動の再燃とみるか、国会開設を意識した政党再編運動とみるかは議論のあるところとして、いずれにせよこのとき「欧化主義」の政

治指導は一転して藩閥政府の性格を露わにする。十二月二十五日、日曜日にもかかわらず突如公布された保安条例は、第四条で「皇居又ハ行在所ヲ距ル三里以内ノ地ニ住居又ハ寄宿スル者ニシテ、内乱ヲ陰謀シ又ハ教唆シ又ハ治安ヲ妨害スルノ虞アリト認ムルトキハ、警視總監又ハ地方長官ハ、内務大臣ノ認可ヲ經、期日又ハ時間ヲ限り退去ヲ命ジ、三年以内同一ノ距離内ニ出入寄宿又ハ住居ヲ禁ズルコトヲ得」と定めていた。このとき右の条文を適用して実際に退去を命じられた者は五七〇名に達し、そのうちの一人だった尾崎行雄が「保安条例を読むも、唯だ之を適用すべき国敵の所在に惑ひたり。何ぞ己れの此の法網中に入ることを夢想せんや」(26)という驚きから、学堂という雅号を愕堂と改めたというのは有名な話である。その他の退去者は、中江兆民、片岡健吉、林包明など土佐出身の旧自由党系の人々が中心の人選になっている。ともかく、血氣盛んな五七〇名もの「有志」「壮士」が、歳末のわずか数日のうちに東京から消えたのであるから、明くる明治二十一年の正月は「一般に聊か氣拔けの状態にして、某々が何処に退去せるやが談話の主題となる」(27)ありさまであった。

かくて、自由民権運動を担った人たちはいつたん舞台から退き、新しい主役の登場を待つことになる。「同志」たちが『日本人』を創刊し、星ヶ岡の茶寮で「政教社の祝宴」が催されるのは、それからわずか三か月後のことであった。

ところで、素朴な疑問であるが、政教社はいつ設立されたのであろうか。勝本清一郎ほか編『近代日本総合年表』(一九六八年、一九九一年第三版、岩波書店)、日本近現代史辞典編集委員会編『日本近現代史辞典』(一九七八年、東洋経済新報社)はいずれも、明

治二十一年四月三日すなわち『日本人』第一号の刊行日をもつて政教社の「設立」として
いる。しかし考えてみるならば、雑誌の創刊とその母体となる発行所の設立が同日だとい
うのはいささか奇妙なことであり、法令上からいっても、当時新聞と定期刊行の非学術雜
誌が規制を受けていた新聞紙条例第一条は、「新聞紙ヲ發行セントスル者ハ、發行ノ日ヨ
リ二週間以前ニ、発行地ノ管轄庁東京府ハ警視庁（割書）ヲ經由シテ内務省ニ届出ベシ」
と定めていて、政教社の場合も少なくとも四月三日の二週間前、つまり三月二十日以前に
設立の届出を済ませていたことになる。実際『官報』に掲載されたのは三月二十一日で、
その記述によれば十三日に届出を済ませていたことになっている²⁹⁾。したがって、法令
上の政教社の設立日は、この二十一日をとるべきであろう。そこで次に、設立までの経過
を辿りながら、時期の確定と「同志」結集の目的を探っておきたい。

三宅と志賀についてはすでに述べたけれども、他の「同志」たちが東京に集まってくる
までの動静については意外と不明な点が多い。当時一般に学士は希少価値であったから、
彼らが口を糊する途は容易に得られたと考えられる。さしあたり、私立学校を設立してそ
の教師になるのが捷徑であったようだ。そのような学校としては、東京英語学校（現在の
日本学園高等学校）と哲学館（東洋大学）が挙げられる。

東京英語学校は、第一高等中学校（のちの第一高等学校）などの官立上級諸学校に進学
するための一種の予備校として、十八年七月、杉浦重剛、増島六一郎、千頭清臣、松下丈
吉、宮崎道正、谷田部梅吉らによって設立された³⁰⁾。彼らは、明治書生の第一世代とで
もいべきあの「三幅対」時代の大学貢進生出身者で、後述する乾坤社同盟の連判署名者
でもあった。二十年になるとこの学校へは、宮崎の札幌農学校教授時代の生徒であった志

賀、菊池、今が、また、杉浦の東京大学予備門長時代の同僚であった辰巳、生徒であった杉江、棚橋らが教師として加わってくる。

一方哲学館は、二十年九月、井上円了によつて「哲学諸科ヲ教授シ専ラ促成ヲ旨トス」⁽⁴⁰⁾る目的で設立された。開校に協力し教鞭を執つたのは、辰巳、三宅、棚橋、加賀、島地らであつた。九月十六日の仮開館式では、棚橋、辰巳に続いて外山正一、加藤弘之が祝辞を述べたというから、これは東京大学文学部の人脈、とりわけ哲学会結成のときのメンバーがそのまま流れ込んでいるといえよう。

すでに明らかのように、右の二校の開校を媒介として政教社は設立されたのである。この間の事情を三宅は次のように整理している。

明治二十一年、旧哲学館の井上、辰巳、棚橋、加藤、島地、旧東京英語学校の杉浦、宮崎、志賀、菊池、今、杉江諸氏と相談し、一雑誌を発刊するに決定し、紀元節に出さうとして準備が整はず、神武天皇祭に「日本人」第一号を出だした。(中略)「日本人」の名は自分が択び、発行所「政教社」の名は井上円了氏が択んだ。⁽⁴¹⁾

人脈関係など、きわめて正確な記憶といわねばならない。ところで、これを素直に読めば、雑誌発行の計画が持ち上がったのは二十一年の二月十一日以前ということになり、従来四月三日説よりも遡つて考えなければならぬことになる。三宅の伝記を書いた柳田泉は、「先生及びその同志が政教社の結成を宣言したのは、明治二十一年二月、政教社の名は同志宮崎道正の発案に出た(中略)日本人の名は先生の発案したところである」⁽⁴²⁾と述べて、いわば政教社二月設立説を打ち出している。

また、『日本人』の名称は三宅の発案だつたとしても⁽⁴³⁾、政教社の方は井上とも宮崎

ともいわれ判然とはしない。発案者の特定はともかくとしても、従来から、政教社の名称の由来が政治十宗教なのか、あるいは政治十教育なのかということに関して決定的な証言は得られていない。これは単なる名称の問題ではなく、政教社の基本的性格に関わる問題ともいえるので、等閑に付すことはできない。「政教」といった場合、その当ても現在も一般には政治と宗教のことであるということが出来る。しかし、政教社についてもそうだとはい切ることはできず、そもそも当時「教」の意味するところは広く、政治舞台における国民教化とも関連するので、ここでは「教化」を考えておきたい（第四章註²参照）。

さて、設立時期の確定に戻ると、諸説の中で最も早いのが明治二十年五月設立説であるが、その後井上円了の伝記や東洋大学の各年史がこれを採用するところとなって現在に至っている。他に確証がないのでこのまま取り上げることができないが、二十年五月頃から井上を中心とした哲学館設立グループの中で雑誌発行の計画が話し合われていた、と読み取っておくことは許されよう。実はその哲学館の設立に先立つ二十年一月、井上円了は哲学書院という出版社を起していた。これは、前節で述べた哲学学会の機関誌発行を引き受け、また井上自身の『仏教活論』なども刊行する出版、売捌元であった。この哲学書院の二階で『日本人』創刊の計画が練られたようだ。井上を回想する座談会の席で棚橋が語っていることを聴いてみよう。

あれは哲学書院が出来て居つて、哲学書院の二階へ吾々が寄つた事がある。確か辰巳君に三宅君に私に加賀秀一君、これだけ寄つて「どうも斯う外国かぶれが盛んになつて来ちや仕様がないが、何とかこいつを叩直さなくちやどうもならぬぢやないか」と云ふことを、確か僕が言ひ出したと思つて居ります。さうすると「ウムそれは全くさ

うだ」(中略)又丁度吾々の手で雑誌「日本人」をやるあの前あたりは、議論を見て
も何を見ても、相当ひどい外国かぶれであつた。それで偶然(ひよいと)そんな話が
出たんです。出ると皆無論賛成だ。誰だつたか雑誌でも一つ出さうぢやないかといふ
話。それはよからう。皆賛成。それから僕が「御互ひ世間で名前の知れない者だけが
そんな事をやつた所が、世間に読んで呉れる奴はない。どうしても杉浦さんを一つ担
がなければ駄目だ。先輩でもあり、あれだけの立派な意見を持つて居る人であるし、
兎も角杉浦さんを中心に引張り込まなければ物にならないよ」といふと「それはさ
うだ。君一番心易いやうだから杉浦さんの所へ君が使に行け」といふ訳だ。それで私
が使に行つて杉浦さんに「斯う斯うですが、一つ御賛成下さる訳に行きませんか」と
いふと「これは不思議な事があるものだね。四五日前に僕の方でも友人の宮崎道正、
志賀重昂、菊池熊太郎、今外三郎、この四人が僕の家へ寄つて来て、その席上で丁度
同じ事を目論んで、何とかやらなければならぬ、雑誌でも出したら宜からう、それに
は一つ君なんぞに参加して貰はうと、こつちから実は使でもやらうかと云つて居る所
だつた。」「さうですか、それは好都合の所へ伺つた。その編輯は、私共の方は四人
これこれです。皆寄つて一団になつてやつたらどんなものですか」「それは結構だ」
と云ふやうな事であればその十人が最初の発起人、さうして名称はといふので十人が
寄つた時に誌名に対して色々な名前を持出した人があつたやうですが、結局三宅君が
「何だ、妙なことを云ふより日本人とやつてしまつたら一番早い」といふ。「それは
妙案だ、それでは『日本人』といふ雑誌の名前にしようぢやないか」杉浦さん初め皆
これに賛成した。だから『日本人』といふ名称は三宅君が命けた名称です。さうして

誰が一番筆が立つ、文章を書くのが早いかといふた所が、衆評志賀重昂君だな。「志賀君、君、主筆をやれ」と云ふやうなことで、志賀君が主筆を押し付けられてしまった。それぢや引受けようといふので志賀君が主筆、さて経営の方は僕と今君とがやった。(44)

長文の引用になってしまった。我田引水のところもあり、島地、杉江、松下の名前が抜けているなど不正確なところもあるが、「同志」結集の雰囲気をよく伝えてくれている。では結局、二つのグループの雑誌発行計画が合体して政教社が設立されたのは、いつのことだったのだろうか。その時期をより限定することができる史料は、合体を仲立ちした杉浦の「備忘録」である。この原本は、称好塾・日本学園資料室に保存されていて、神宮司庁発行の略本曆に黒と朱の墨で書き付けたもので、その二十一年一月三十日の条を見ると「政教雑誌会」と書き込んである。さらに、二月二十八日のところに「新誌会」、三月十日に「政教社会」とあり、政教社は四月三日の『日本人』創刊に向けて月一回のペースで会合を重ねていたことになる。三大事件建白運動の盛り上がりに対して政府が保安条例で応じていた頃、そのいずれからも距離を措いて、政教社は東京の学士社会の中に生れたのであった。

第三節 「同志」と政教社

本節と次節では、「同志」を軸とする政教社の〈組織〉と思想伝達〈媒体〉としての雑誌『日本人』を実態的に究明することによって、「国粹主義」思想の存在形態に外形的な輪郭を与えることを目的とする。つまり、「同志」たちの結集原理と『日本人』の発行状況から、政教社の実像を明らかにしたいのである。序章でも述べたように、組織と媒体はその場合の分析概念となろう。時期的には、「初期政教社」の第Ⅰ期とした明治二十一年から二十四年までを通観し、必要に応じて第Ⅱ期以降にまで及ぶ。「国粹主義」の内容分析に先立ってまずこの基礎的作業を重視するのは他でもない。序章で述べたように、先行研究の成果が「健康なナシヨナリズム」とその「限界」という思想像の提示を繰り返す地点に止まっているのは、主として三宅と志賀の代表的著作ばかりを取り上げてきた方法論上の限界に基づいていると思われるからである。

まず本節では、分析概念として位置づけた〈組織〉の分析を通して、「同志」的結合の実態を明らかにすることから始めてみたい。

政教社設立の「同志」は、これまでに述べてきたように、東京と札幌の書生社会の人脈と知的環境を引き継ぎながら、「創刊の辞」とでもいうべき一文によれば「日本人」ノ隆替ト進退去就ヲ俱ニシ云々」と「誓約」することで結ばれていた。しかしながら、本節で扱う時期をあらかじめ見通したとき、各「同志」の参加の態度、帰属意識の度合いはまちまちで、人によってはむしろ他の分野での活躍が目立ったようにさえみえる。このことは、民友社が蘇峰と号するようになった徳富猪一郎を中心に「かなりの思想的統一性をも

っていた」(45)とみなされるのに対し、政教社がいわば「星雲状」の「組織」を特徴としていたということを予測させるだろう(46)。政教社の内部資料が伝わらない現状では、この予測を裏付けるためには、「同志」たちの政教社外における諸活動をできるかぎり丹念に追いかけて、そこから逆に政教社への参加の態度、帰属意識の度合いなどを推し量つていく方法を採らなければならない。そのような社外での活動としては、主として三つの分野が考えられる。第一に教育関係、第二に新聞雑誌関係、第三に政治関係である。このうち第三の政治関係については次章の第三、四節で取り上げるとして、本節では前二者を順に明らかにしていきたい。

第一に、「同志」たちの教育関係の活動は、政教社設立の動きじたいが東京英語学校と哲学館での教職を足場に築かれていったことから判るように、設立後の「組織」のあり方に掣肘を加えないでは措かなかつたと思われる。そもそも政教社の「教」は教育の「教」だという説のあることもすでに紹介した。そこで、比較的史料の残っている東京英語学校と政教社の関係からみていくことにしよう。

東京英語学校は、本章第二節で述べたような経緯で開校され、当初増島六一郎が中心となつて経営に當つていたようだが、明治二十三年七月一日からは名実ともに杉浦の主宰に移つた。この間に政教社の設立があるわけで、両者の密接な関係について、同校出身の長谷川如是閑は入学当時の様子を次のように回想している。

東京英語学校は、右の「日本」および「日本人」一派の盟主の一人だつた杉浦重剛が校長で、教師のうちには、志賀、松下、今の諸氏等、少年の私の、名だけに親しみをもつていた人人が顔を揃えているので、そこに入つていくのを私は自分の親類のい

る国に行くような気がしたのだった。

英語学校のおも立った先生たちは、たいてい専属だったが、皆同志というので待遇もよかつたらしく、そのころの中学の先生たちの見すばらしい貧書生然たるのとは違つて、いずれも風采や身装から堂々としていて、抱え車で通つたもので、志賀重昂先生のごときは、一時乗馬で通つていた。⁽⁴⁷⁾

教師のうちでもとくに志賀重昂は、『南洋時事』によつてつとに文名高く、また『日本人』の主筆と目されていたので、「校中における最大の人望家」であり、「教場における先生の風格は、先ず生徒を酔はしむるものがあつた」⁽⁴⁸⁾という、やはり同校初期の在学生小村俊三郎の回想がある。小村は続けて、「『日本人』の発行によつて、先生を始め諸同人、それは即ち主として英語学校の先生達であつた人々の名声が、江湖に響くやうになり、同時に学校の盛運も、その絶頂に達した」⁽⁴⁹⁾といっている。要するに、政教社の設立、『日本人』の創刊は、同時に東京英語学校の興廢とも大きな関係を有していたのである。

「同志」たちと東京英語学校（二十五年以降、日本中学校）の関係は、現在知りうる限りの一週間担当授業時間数と月俸を一覧できるようにした表5によつてさらに明確となる。この表によると、明治二十二年、三年頃は「同志」の半数を超える六人、すなわち松下、志賀、菊池、杉江、今、棚橋が同校の教壇に立ち、月俸から推測すると一週間担当授業数もかなり多かつたようであるが、二十五年になると松下、菊池、志賀の三人だけとなり、さらに二十六年六月には政教社と日本中学校との関係は事実上終息することが判る。このことは、第五章で述べるつもりの政教社の変貌と符合するであろう。また、志賀の場

表 5 政教社「同志」の東京英語学校における月俸及び授業時間数

	明治22年		23年		25年							26年							
	11月	12月	1月	2月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	11月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	
杉浦 重剛 (校長)	70	70	70	70	20	20	20			20	20								
松下 丈吉	50	50	50	50	50	50	50	15	12	12	12	9	19	19	19	22	12	25	25
菊池熊太郎	25	25	25	25	20	20	20	14	8	10	20/14	6	8	8	8	13	42	6	3
志賀 重昂	40	40	40	40	5	5	5	4	2	3	3	3							
今 外三郎	20	20	20	20															
棚橋 一郎	13	13	13	13															
杉江 輔人	5	5	5	5															

補注) 日本学園資料室所蔵の「職員担当時間数調」「収支決算」より作成。各人の数字は、上段が俸給額を、下段が担当時間数を示す。

合についていえば、二十二、三年頃はやはり月俸から推測するとほぼ毎日出講していたのに対し、日本中学校と改称した二十五年の後半になるともはやそれはみられない。

この東京英語学校の他に政教社の「同志」たちが深く関わった学校としては、哲学館、郁文館、東京文学院、成立学舎、高等普通学校、同人社などがある。哲学館は、すでに述べたように政教社の設立母体の一翼を担うもので、明治二十二、三年頃は井上、三宅、棚橋、辰巳、島地が教鞭を執り、二十一年には加賀の名前も見える。先の東京英語学校と合わせると、実に政教社「同志」の全員が両校いずれかの教師を経験していたことになる。

さらに、二十二年十一月開校された郁文館でも、校長棚橋の他、三宅、井上、志賀、杉江が講師を務めたことは確かである(50)。以上から、「初期政教社」の、それも第I期についていえば、彼ら「同志」たちはいくつもの学校に掛け持ちで出講し、それら幾重にも重なった教育実践の人脈と表裏の関係として政教社への参加ということもあつたのである。さて、第二の新聞雑誌関係の活動に目を転じてみよう。

一般に月刊あるいは隔週刊の雑誌に較べて、日刊新聞の情報伝達へ媒体としての影響力はそれだけ大きいといえる。したがって、自由民権運動以来政府も政党も新聞に注目し、世論操作や政治運動でそれを利用するとともに、その取締りに努めてきたのである。ただし、新聞への関与は時間的にも金銭的にも大きな負担を強いることとなる。すでに述べたように蘇峰が『国民之友』の成功を前提に『国民新聞』の創刊に踏み切つたのも、この点と関連している。いま政教社を基点に考えたとき、「同志」の新聞との関係はへ組織のあり方にも当然影響を与えたと思われる。

そのような意味で、従来からしばしば言及されるのは、陸羯南の新聞『日本』との関係

である。政教社の設立に遅れること約一年という明治二十二年二月十一日に、『日本』は新聞『東京電報』を改題して日本新聞社から創刊された。当初、杉浦が編集、宮崎と今が会計に関わっていた事実があり⁽⁵¹⁾、その年に表面化した大隈条約改正案に対する反対運動でも『日本人』と『日本』は「一派」⁽⁵²⁾とみなされることが多かった。それゆえ、「この両者はふかい友誼によって結ばれ、ほとんど一心同体の観があつた」⁽⁵³⁾、あるいは「両紙誌は人的な面でも思想的な面でもかなり密接な関係をもっていた」⁽⁵⁴⁾という見方が、深く疑われることなく今なお広く受け入れられている。両者を合わせた「政教社グループ」の思想性を一括するのは例の「健康なナシヨナリズム」という評価である。さらに、後年になると政教社と日本新聞社は一つの建物の中に同居することになったので、「一心同体」「密接な関係」というイメージはますます強くなる。

しかし、すでに明らかにしたように政教社の〈組織〉は決して「一枚岩」といえるものではなく、仮に『日本』との関係があつたとしても、それは一部「同志」の個別的な参加であつたと限定しておいた方がよいのではないだろうか。創刊に関わつた杉浦、宮崎、今の三人も二十三年四月には退社したらしい⁽⁵⁵⁾。また、三宅が同紙に記事を書くようになったのは、早くても二十五年以降と考えるのが妥当なのではないか。それも社員としてではなくて、あくまでも「客分」⁽⁵⁶⁾であつたという。

周知のように、『日本人』と『日本』は明治四十年一月からは合併して『日本及日本人』となる。したがって、この間徐々に両者が親密になっていったことは確かであろう。その過程について見通しを示しておけば、日清戦争をはさんだ対外硬運動と進歩党結成を経ることで、両者は接近していくのではないだろうか。いずれにせよ、これは第五、六章に

において順に取り扱うこととし、ここでは、設立初期の段階から両者の関係を強調することにより、政教社独自の思想的展開という側面が捨象されてしまうのではないかという危惧を提示しておきたい⁽⁵⁾。私としてはそのような立場を採らず、「同志」たちと他の新聞雑誌との関係にも目を向けていきたいのである。

そこで注目されるのは、三宅と『江湖新聞』、志賀と新聞『国会』の関係である。

『江湖新聞』は、明治二十三年二月一日に初号（創刊準備号）を出したあと、十一日から本格的に発行された日刊新聞で、資金は大内青巒が調達したといわれる。はじめ、三宅が主筆を務め⁽⁶⁾、のちに内藤虎次郎が一時これを代行したことがあったらしいが、彼らは遅くとも六月には同紙から撤退し、十月十七日の第一二三号からは立憲自由党の有志機関紙となった。したがって、三宅を中心にして政教社の「同志」たちと関係があつたのは、実質四か月あまりということになる。

わずか四か月とはいえ初めて一新聞を主宰したということ、このとき、三宅の新聞観というか、新聞に対する取り組み方の原型もほぼ固まったように思われる。彼はその後、主として『日本』『朝日新聞』『帝都日日新聞』に関わり、生涯にわたって新聞を思想表出の場としつづけたのである。三宅の新聞に対する“想い”は、自宅に『東京日日新聞』の創刊号を額に入れて掲げていたという横瀬夜雨の伝聞⁽⁷⁾から想像できるだろう。それは、自伝の中では次のように整理されている。

自分の新聞に興味あるのは、第一に早く事実を知り、第二に評論を加へて、人に知らすにあつて、評論も雑報の初号文字に圧倒せられぬ間の事、雑報の片隅に押付けられては、新聞は読むべき者で、書くべき者でないと思ふ。雑報も肝要であり、実に最

も肝要であつても、それは自分の手出しすべき部分でない。リーダーがリーダーらしい頃、それに興味を覚えたが、評論と経営と両立するに難く、評論で正々堂々と打出し、経営で之を取消さねばならぬなど、使ひ分けに骨折れるのみならず、人格を念として為し得べきでない。福地氏は既に彼の如く、福沢氏さへ面白からぬ事あつては、評論と経営とを兼ねべきでない⁽⁶⁰⁾と考へずに居れぬ。然し新聞に興味あるので、友人が全部又は一部を担任する場合、之に関係し、時間の許す限りの事をした。

これには言い訳や美化も含まれているだろうが、要するに新聞への尽きせぬ「興味」と「評論」を重視するが経営からは身を引く姿勢というのは、三十歳にして初めて主筆を務めた『江湖新聞』の経験によつて得られたものであつたらうと想像することができる。それを一言で表現したのが、同紙欄外に毎号刷り出された「言行は撃実を要す」⁽⁶¹⁾という信条であつた。

三宅が大なる抱負をもつて『江湖新聞』の初号を世に送つたとき、政教社の他の「同志」たちはこぞつて祝辞を寄せた。初号とその付録には、杉浦、志賀、杉江、菊地、辰巳、今、中原らの署名文、郁文館（棚橋）の広告が載り、第一号には哲学書院（井上）の広告が出ているので、同紙の創刊は「同志」たちの支持と協力を得てなされたことが判る。三宅を助ける編輯部員には内藤と長沢がいた。全く同じ時期に徳富蘇峰が『国民新聞』を創刊していることを考慮に入れれば、さらに一步踏み込んで、雑誌における政教社『日本人』と民友社『国民之友』の対抗関係が新聞にまで持ち込まれたとみなすことも可能である。『江湖新聞』と『国民新聞』の比較としては、「先づ其体裁を瞥見すれば、一は文彩的にして一は質朴的なり。一は濃厚的にして一は淡泊的なり。一は絢爛たる牡丹の如く、

一は横斜たる梅の如し。但し花の濃なるものは媚ぶるに似て（中略）花の淡なるものは背くに似て云々」（62）というのが、対比的な比喻を用いておもしろい。『江湖新聞』は「質朴的」「淡泊的」で「横斜なる梅」に喩えられている。

一方の『国会』は、明治二十三年十一月二十五日、帝国議会召集の日を期して創刊された日刊紙で、以前からあつた『大同新聞』と『東京公論』を廃刊にしてそれらの代替紙という性格をもつ「政治新聞」（63）であつた。資金は大阪・東京『朝日新聞』で成功した村山龍平が拠出し、主筆は鉄腸・末広重恭が務めた。十二月七日付第七号の社告を見ると、「今回志賀重昂氏を本紙特別客員に請嘱し、日々編輯に従事せらるる事となりたり」とあるので、創刊直後から志賀は同紙に深く関与していたことが窺える。三宅も「特別社友の名義をもつて毎日出社執筆」（64）したという。翌二十四年三月五日付の同紙第八三号所載「国会新聞拡張広告」によると、「記者」として志賀の名が、「社友」として井上、棚橋、松下、今、島地、杉浦ら政教社「同志」のほか、加藤弘之、千頭清臣、大内青巒、柴四郎ら「同志」周辺の人たちの名が挙げられている。

こうして、政教社と新聞『国会』の間には志賀の入社を機に広範な関係が生じることとなった。へ組織／＼面での密接な関係は、両者の主張にも反映していたといえよう。創刊号に末広を書いた社説中にある政党に対する「局外中立」の宣言は、次章第四節で述べるように議会開設を前に政教社の到達した政治的立場であつたともいえよう。

では、三宅と『江湖新聞』、志賀と『国会』のような関わり方を私たちはどう考えたらよいのだろうか。この時期における「同志」たちの新聞雑誌関係は、何もこの二人に限られるわけではなく、他にもたとえば、菊池と雑誌『文』、杉江と『学』などの関係を挙げ

ることができる。このうち、三宅米吉によって二十一年七月に創刊された『文』は、二十三年になると政教社「同志」の一人菊地熊太郎を発行兼編集人として改刊されたのであるが、それを評した『日本人』の記事には「文は体裁を変じたり。純粹なる政治雑誌となしたり。(中略)而して本社菊池熊太郎氏其主筆の任に当れり。余輩は我が同主義の別働機関に運転するを喜ぶものなり」(65)とあり、ここでは明快に政教社の「別働機関」といつている。

それら「別働機関」は、教育及び新聞雜誌関係の活動に関していえば、政教社の設立当初から多数存在したと考えられる。「同志」たちが政教社とそれら「別働機関」で行なつた諸活動に費やしたであろう時間の配分は、偶然知ることのできる二十五年初め頃の志賀の週間予定によつてある程度推測することができる。

広 告

小生へ御用談有之候御方は、可成左記の日割及び時間中に相願度、然らざれば時々出頭致さざる事有之候に付、此段念の為御断り申上置候。

政教社へは 火曜日 午前十時頃より

木曜日 同十二時頃迄

東京英語学 火曜日 正午頃より午後

校へは 木曜日 一時頃迄

国会新聞社 毎日 午後三時頃より

へは 五時迄頃(66)

これによると、志賀の場合、政教社に本社するのは週にわずか二日、二時間ずつにすぎ

ず、前述した東京英語学校での講義と新聞『国会』の編集に残りの多くの時間を割いていたことが判る。他の「同志」たちの活動もおそらくこのような具合に行われていたと判断して差支えなからう（表6参照）⁶⁷。

以上の例から考えると、政教社の〈組織〉の特質は次のように描けるだろう。つまり、政教社というのは、「同志」たちの諸活動の結接点とでもいうべきもので、さまざまな学校における教育実践と『日本人』以外の新聞雑誌における論述という方法による思想伝達活動の総意を、ゆるやかに包摂する精神的紐帯として機能することをその〈組織〉構造の特質としていた。このような〈組織〉の特質は、政教社の思想といった場合の「国粹主義」の存在形態の一面をなし、その思想内容をも規定するものとして作用したと思われる。

表 6 『人事興信録』にみえる政教社「同志」

	明治22年6月	25年1月	29年11月	30年12月	33年7月
加賀 秀一	政教社員	学習院教授	学習院教授	(30年4月頃非職帰郷)	
今 外三郎	政教社員	— (25年3月死去、以下—は職業欄が空欄の場合を示す)			
島地 黙雷	政教社員	僧侶	僧侶	僧侶	僧侶
松下 丈吉	政教社員	— (26年7月久留米明善中学校長)			
辰巳小次郎	政教社員	政教社員	哲学館講師	哲学館講師、 学校教員	京華学校 教員
三宅雄二郎	政教社員	国会新聞 社員	哲学館講師		
菊池熊太郎	政教社員	—	—	著述業	護国生命保険 株式会社支配人 会社員
杉江 輔人	政教社員	政教社員			
井上 円了	政教社員	政教社員	哲学館主、 同講師	哲学館主	—
棚橋 一郎	政教社員	東京商業 学校講師	哲学館講師	哲学館講師	著述業
志賀 重昂	政教社員	国会新聞 社員	新聞記者	—	—
宮崎 道正	政教社員	—	—	著述業	
杉浦 重剛	文部省専門 学務局次長	—	私立日本 中学校長	私立日本 中学校長	文部省高等教育 会議副議長
中原 貞七	成立学舎長	(26年5月山形県尋常中学校長)			

第四節 雑誌『日本人』とその後継誌

内務省の調査によれば、明治二十一年中に全国で発行されていた新聞雑誌は八〇〇種にも及び、この年に創刊されたものだけでも一八六種あったという⁶⁸。四月三日に第一号を世に送った政教社の『日本人』もそのうちのひとつということになる。この当時はちょうど、我が国にも全国的なコミュニケーション市場が形成され、日清戦争をさらなる契機として、新聞雑誌がマス・メディア化の過程を辿り始めた時期に当たっている。もともと、八〇〇種の中には、いわゆる「三号雑誌」で終わったものも多かったと思われる。それらのうちにあつて、政教社から発行された『日本人』と前年から民友社によって刊行されていた『国民之友』は、本格的な総合雑誌の嚆矢であるとともにその模範的なスタイルを示した代表誌といえよう。

そこで本節では、思想伝達の〈媒体〉という視点から『日本人』の実像——書誌的事項、発行状況と執筆者、読者層——を説明することに努めたい。〈媒体〉の性格は〈組織〉同様「国粹主義」の存在形態を規定する大きな要因であり、さらにはその思想内容にまで影響を与えないでは措かなかつたと仮定できる。ところが従来、このような視点からする研究は乏しく、わずかに前引の松本三之介と有山輝雄（序章註⁶⁹）が全体的な見通しを示しているにすぎない。

まず、書誌的事項であるが、判型から見ると『日本人』とその後継誌はめまぐるしく変更されている。すなわち、はじめ菊判であつたものが、『亜細亜』ではA3判からA5判へ変更され、第二次『日本人』でA5判、第三次『日本人』がB5判と変わっている。一冊

あたりの頁数と値段は、創刊号が三〇頁で六銭五厘、最小がA3判のときの『亜細亜』で一二頁、四銭、最大が『亜細亜』第三巻第一号で一三〇頁、一二銭である。発行所と印刷所は一貫して政教社と熊田活版所となっていた。編輯人等については後段の中で適宜触れたい。なお、駿々堂支店から合本『日本人』というのも出されていた。

次に発行状況であるが、本稿が考察範囲としている期間中、雑誌『日本人』は序章表2に見るような年別発行号数を推移した。発行状況のバラつきは、隔週刊か週間かという発行頻度の変更によるほか、発行停止処分による場合が多い。二十四、五年における発行号数の増加は、『日本人』の身代わり誌『亜細亜』が週間だったことにより、また二十七、八年の日清戦争期に年間発行号数が減少しているのは、度重なる発行停止処分もあって政教社の経営が行き詰まっていたことによるらしい。当時の窮状は、例えば左のような書簡から窺える。

謹啓。昨日御面会可致心得之処、竟に其意を得ず候。実は恩田氏義、各所より嫌疑あるに付ては、是非辞退し度し之由し、而して宮崎氏も同様二候二付、小生も可然とは置き候処、昨日、本日共に約束手形の支払日にて、右延期之為利子十五円を払はざるべからず。又公債証書の利子（郷里へ昨日送付すべき分）は、一昨日小生自分のものを25丈け送付し（是れも大に信用を失ひたれども）置きたるが、他に広告料、熊田活版所へ支払の残額も今日中に幾許かは払はざるべからず。又畑山氏以下の俸酬も目前に差迫り居り候処、小生は自分の負債にて今月は困難を累ね、唯ロツタリーの百円丈けを以て恩田氏の方へ差引きに致候へ共、今日の所にて他に方策も無之候二付、来月一カ月は雑誌を休艱にかるは如何に有之候哉。右御相談申上候。勿々拝具。


〔明治二十七年〕一月二十五日

志賀生

三宅大兄侍史 

これは文字通り窮状といってよいと思うのだが、政教社の台所はまさに火の車、借金（の利子）も、他紙誌への広告料も、雑誌の印刷費も、社員に対する給与もいずれも満足に支払えない状況に立ち至っていた。三宅と志賀が金策の相談をしていたわけで、政教社という〈組織〉、『日本人』という〈媒体〉を維持するのは容易ではなかったのである。

また、政治雑誌の発行に際しては新聞紙条例によって「保証金」の納付が課せられていたが、政教社が『日本人』の発行を続けるためには、この五〇〇〇円の捻出にも非常な苦勞をしている。はるか後年になって、やはり志賀の伝えるところによれば、「保証金」の出処には次のような変遷があったという。

政教社発行「日本及日本人」保証金五百円は最初発行の際社員島地黙雷氏公債にて立替、其後島地氏より返還すべしとのことなりしを以て社員志賀重昂は故佐々木高美氏（故佐々木侯爵嫡嗣）より公債を借用して島地氏の分と入換したり、然るに「第二十六世紀」事件の際故佐々木氏より返還すべしとのことなりしを以て志賀は故平岡浩太郎氏より現金借用して故佐々木氏の分と入換したり、現時の「日本及日本人」の保証金にして当時の儘となり居るならば故平岡氏の厚意より出でたるものなり。 

右は志賀が政教社から離れる明治三十二、三年頃までの変遷で、文中にある“二十六世紀事件”が起きたのは二十九年のことであった。

この間、『日本人』の発行部数はどのように推移したのだろうか。ところが、残念なが

らそれを明示した史料はきわめて乏しい。唯一確実な数字を教えてくれるのは、二十二年二月十四日付の『官報』第一六八五号の彙報欄にある「新聞紙雑誌配布高」という一覽表である（表7）。この表では政教社の「同志」たちが関わった新聞雑誌を中心に挙げてみたのだが、このうち『日本人』は第一七、八号の発行部数の合計ということになり、一号当たりに換算すれば約六千部である。『国民之友』に較べればおよそ半分というところか。しかし、最大の『やまと新聞』でも一号当たりにすれば二万部を超える程度の時代であるから、雑誌にして約六千部というのは決して少ないとはいえない。このあと『日本人』の発行部数がどのように推移するのかは、『警視庁統計書』から作成した表8によって明らかだろう。

では、当初約六千部、のちに落ち込んで千五百部台の発行を続けた『日本人』が、読者の手に届くまでの流通経路はどのようなものだったのだろうか。この場合、当時の商慣習の一種として、一般的な書籍流通の仕組みが考慮されるべきである。現在では通例となっている雑誌の返品制が導入されたのは、日露戦後に創刊された『実業之日本』からとも『婦人世界』からともいわれ、さしあたり本書が考察対象としている時期には、売捌所を通す方法と、通送による直接購読という方法があったと考えられる。しかし、その実態はいまひとつ判然としない。大多数の読者は、前者すなわち売捌所を通して『日本人』を入手していたと思われるのだが、そうだとするならば、売捌所の分布（という偶然の、しかも外的な要因）が思想伝達へ媒体への死命を征するほどの大きな意味をもっていたということになるろう。

図5は、二十三年一月三日発行の『日本人』第三八号巻末に列挙されている「日本人雑

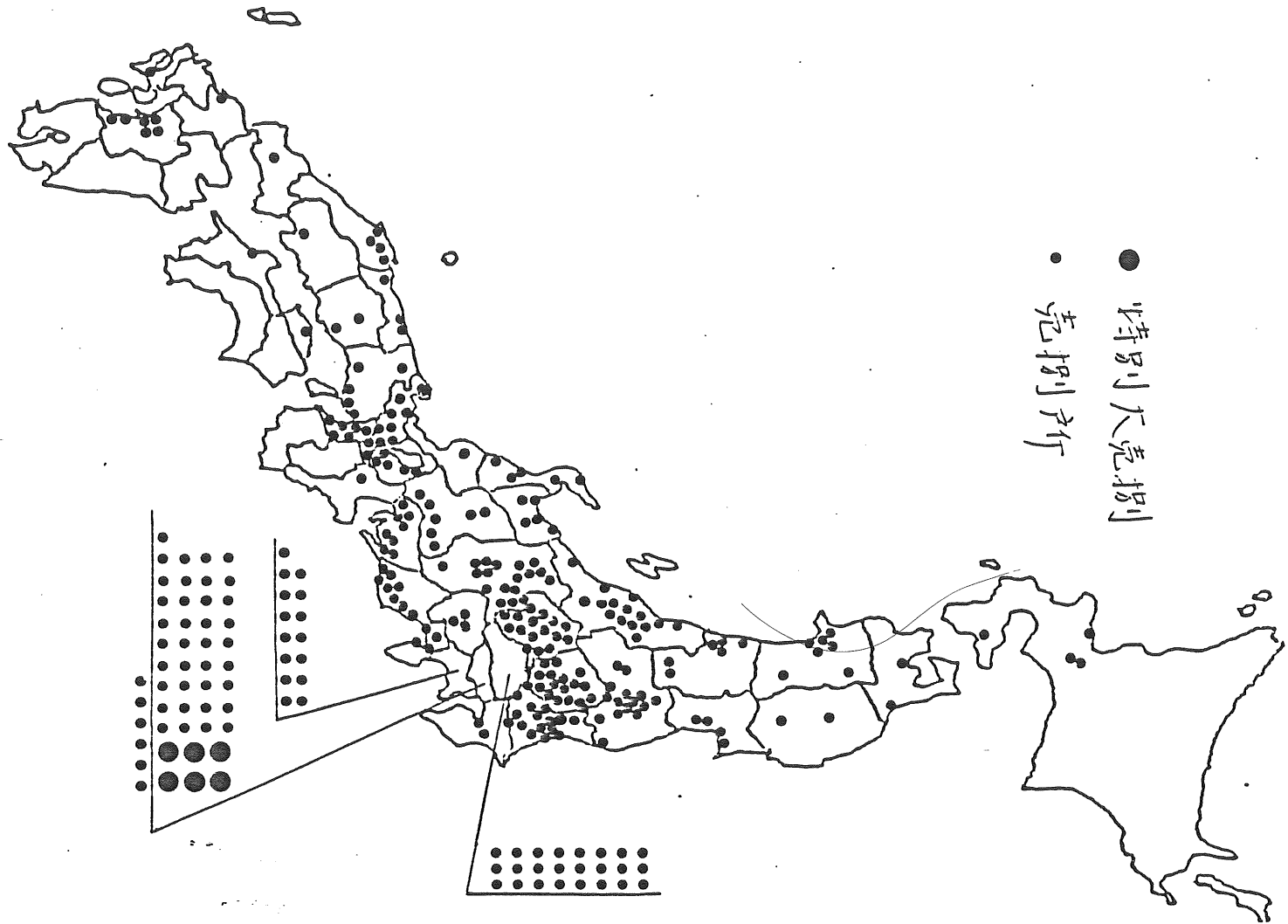
表 7 明治21年12月中新聞紙雑誌類発行部数

題号	発行度数	東京府下配布	各府県配布	その他	合計
(保証金を要するもの)					
東京日々新聞	26日	149,287	152,506	2,542	304,334
やまと新聞	25	469,863	89,992	130	559,985
東京電報	26	45,305	61,685	862	107,852
団々珍聞	4	6,943	6,306	15	13,264
日本人	2	11,118	1,074	20	12,212
文	5	1,663	2,848	50	4,561
日本経済雑誌	5	3,520	4,958	65	8,543
国民之友	2	15,671	10,256	30	25,957
(保証金を要しないもの)					
いらつめ	1	1,025	274		1,299
少年子	1	447	305	1	753
日本大家論集	1	6,172	2,735		8,907

表 8 『日本人』及びその後継誌並びに『国民之友』の発行部数

	明治21年	23年	26年	27年	28年	29年	30年	31年	32年
日本人〈年間発行号数〉	18号	27号	17号	14号	12号	21号	24号	24号	24号
総数	120,123	220,935	116,088	151,252	25,233	42,050	36,386	40,165	43,292
東京府下配布数	112,192	175,183	43,578	58,506	22,309	36,113	32,278	33,612	36,470
他府県配布数	7,862	45,305	72,318	92,483	2,832	5,763	4,003	6,402	6,754
外国配布数	69	447	192	262	92	174	105	151	68
1号当たり配布数	6,674	8,183	6,829	10,804	2,103	2,002	1,516	1,674	1,804
東京府下配布率	93.4%	79.3%	37.5%	38.7%	88.4%	85.9%	88.7%	83.7%	84.2%
国民之友〈年間発行号数〉	23号	36号	36号	30号	34号	52号	36号	8号	
総数	275,753	421,044	494,400	406,756	446,254	794,268	560,758	118,778	
東京府下配布数	159,093	299,365	362,784	279,506	149,097	255,826	185,459	45,482	
他府県配布数	116,259	120,350	129,576	125,192	290,449	525,552	364,943	70,439	
外国配布数	404	1,329	2,040	2,058	6,708	12,890	10,356	2,857	
1号当たり配布数	11,989	11,696	13,733	13,559	13,125	15,274	15,577	14,847	
東京府下配布率	57.7%	71.1%	73.4%	68.3%	33.4%	32.2%	33.1%	38.3%	

補注) 国立公文書館及び国立国会図書館所蔵の『警視庁統計書』から作成。1号当たり配布数では少数点以下を、東京府下配布数では少数点2桁以下をそれぞれ四捨五入してある。



誌売捌所」から作成した売捌所の府県別分布図である。東京の特別大売捌は、東海堂、良明堂、巖々堂、吉岡書籍店、敬業社、哲学書院の六店である。この図からみると、『日本人』の読者は東京を中心に関東とその周辺諸県に集中していたといえ、それに対して西日本では少なかったようだ。とくに東京府下の配布数が多かったということは、有山輝雄がすでに指摘しているが⁽⁵⁾、前引の警視庁調べ「新聞紙雑誌配布高」によれば、それは明治二十一年、三年と二十八年以降のことになる。

さらに、流通の末端ともいえる各売捌所における販売の実態へと関心が向かうわけだが、もはやこれは偶然知り得る範囲から推測してみるしかない。一例として、北海道函館の愛新軒を挙げておこう。同店は図5の中にも見える。二十一年四月十日付『函館新聞』の公告欄には、愛新軒の「新着広告」が載っていて、『日本人』第一号も「沢山着荷」とある。創刊一週間後に函館まで達しているのにまず驚くけれども、四月十七日付同紙には「日本人 第一号再着」とあって、その売れ行きにも驚かされる。これら見えない読者のリアクションの速さに、『日本人』が広範な支持を得たことの証左と、明治二十年代における全国的なコミュニケーション市場形成の現場をみる思いがする。そして実際、函館の読者からは次のような書簡が寄せられていた。

拝啓 未だ拝眉ノ栄ヲ得ズト雖ドモ夙ニ足下ノ高名ヲ聞キ友愛ニ耐ヘズ、又曩ニ日本人ノ發兌アリタルヲ以テ其第一号ヨリ之ヲ閲読シ足下ノ卓説高論ヲ見、其主義ノ存スル所劣生ガ平素ニ懷抱セルモノト相暗号シ欣喜措ク能ハズ、大ニ我が党ノ社会ニ存スルアルヲ悦ブ。(中略)今足下保持スル所ノ国粹保存旨義ハ乃チ我が邦家ノ元氣トシテ応サニ拡張スベキノ一大要義ナレバ、広ク之レヲ全国ノ志人ニ質シテ其同志者ヲ

得、旨義ニ茲ニ相一致シ、事業ニ茲ニ相團結シ、大ニ全国ノ元氣ヲ養生スルノ実効ヲ
催カシテハ如何可有之乎。然レドモ其同志ノ一致ト云ヒ團結ト云フモ、彼ノ政党其物
ノ如キヲ歌ヒズ、彼ノ交詢社其組織ノ如キモノ即チ可ナラン乎。(後略)

明治二十一年五月十二日

北海道函館会所二十番地 北海義塾事務所

山口県士族 磯村良廉拝具(印)

遠人 高橋勝太郎代書ス

日本人編輯 志賀重昂君

足下(2)

北海義塾は、明治十九年五月に設立され、英語・数学を教える中等レベルの諸学校で、
磯村はその設立者と考えられる(2)。右の書簡では、「国粹主義」の運動形態として交詢
社のようなものを例示している点が興味深い。このような「国粹主義」に共感する地域の
団体は多数存在したと考えられ、その個別的な実態解明は今後の課題といえよう。

以上が『日本人』の書誌的事項と発行状況——思想伝達の“器”という側面——だとす
れば、次に執筆者と読者の誌面への参加——思想交歓の“場”という側面——の態様へと
考察の対象を移していきたい。

『日本人』の執筆者はもちろん政教社の「同志」たちということになるが、総合雑誌の
性格を備えていたので、場合によっては社外に執筆者を求めることもあった。そのような
要素も加味して、本稿の時期区分に即して執筆者を特徴化すると、およそ次のようになら
う。

第Ⅰ期（二十一～二十五年）―第一次『日本人』発行。完全な同人制。「同志」以外の執筆者は、加藤弘之、柴四郎（東海散士）、陸羯南など周辺の者に限られる。

第Ⅱ期（二十五～二十八年）―『亜細亜』第一、二、三巻、第二次『日本人』発行。同人制。ただし「同志」じたいが変貌、三宅と志賀中心に移行。その他の執筆者は、森本駿（『国会』記者）、福泉雅一（日本中学校講師）、斎藤祥三郎（同上・農学士）など周辺に加わった者たち。

第Ⅲ期（二十八～三十三年）―第三次『日本人』発行。無署名論説は三宅と志賀中心の二頭制。署名論説は島田三郎等立憲改進黨（進歩党）系の政治家が執筆。しだいに三宅の個人雑誌的な色彩が強くなる。

このような『日本人』執筆者の変遷からみると、政教社は確実に変貌していたということが出来る。〈媒体〉と〈組織〉は密接に結びついていたのである。本稿は以下において、右の第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ期に第四、五、六章を各々対応させるといふ構成になっているので、執筆者の詳細な分析は各章に譲ろう。

難しいのは、毎号数千人はいた読者の特定である。この点で参考になる先行研究は、山本武利が明治三十年代の新聞『日本』の読者層を分析した論文くらいであろう（注）。山本は同紙の投書欄に注目して、そこから「伝統型知識人読者層」を析出してくる。三十年代といえど政教社と日本新聞社は〈組織〉の面で接近してくるので、『日本人』の読者層も

それと重なる面がある。よく引かれる長谷川如是閑の回想によると、少年時代の彼は『日本人』や『日本』を「『論語』の素読でもするような気持ちで、解らぬなりに読んだ」(25)という。『日本人』掲載の文章は、巻頭の社説、論説から雑報に到るまですべてルビなしの文語体が主流で、とくに三宅の書く論説などは漢文くずし調のスタイルをとっていた(26)。

しかし、あまりこの「伝統型知識人読者層」を強調するのも控えるべきであろう。そもそも当時の我が国で、読者それも「小説稗史」の類ではなく政治評論を主とする総合雑誌の言説を理解できる読者は、漢文の素養のある層に限られる。その頃第一高等中学校の生徒だった堺利彦は次のように書いている。

『国民之友』は新思想の雑誌として学生必読であった。徳富蘇峰および民友社一派に対する我々の崇敬と敬慕はほとんど絶対であった。(中略)しかし『日本人』が『国民之友』と対立の形を以て出現した時、我々はまた三宅雪嶺を尊崇した。文学において、紅葉の艶麗でも、露伴の豪宕でも、一緒くたに貪り読んだと同じく、政治社会評論において、平民主義の蘇峰でも、国粹主義の雪嶺でも、みな同じく丸呑みにしたわけであった。(27)

要するに、『日本人』と『国民之友』両方の読者となっていた層、前引の『国民之友及日本人』を著した愛郷学人・末兼八百吉こと宮崎湖処子のような読者層を想定することができる。上京熱に促されて遊学中の書生たちの存在を考慮に入れないと、両誌の成功は説明しにくい。とくに『日本人』の場合、府下配布率が高かったというのは、そのことの傍証となろう。また、年を追ってしだいに発行数が減り、府下配布率も低下したのは、第一

章第一節で概観したような書生社会の変質と軌を一にするといえ、さらに日清戦後には発行部数そのものが決定的に減少するというのも、書生の趨勢と対応している。わずかに、三の例から判断を下すのは無謀にすぎるかもしれないが、一つの仮説としてはあながち牽強附会とはいえないだろう。

では一方、執筆者である「同志」たちの側では、『日本人』の読者をどのように想定していたのだろうか。すでに引いた新聞を語る文章の中で、三宅は「リーダーがリーダーらしい頃、それに興味を覚えた」⁽²⁸⁾と述べていたけれども、いわば執筆者が読者を選ぶという一見不遜な非商業的態度が同誌の特徴とさえなっていた。同じく彼の執筆と推定できる『日本人』第六五号の社説「新年に際し日本人の地位を論ず」では、「何を以て満天下の志士に告ぐべき」⁽²⁹⁾と自問しているように、何らかの指向性をもった有志者こそ読者として要求されていたのである。

読者の反応を知るには、やはり投書欄の分析しか方法がないのだろう。『日本人』は当初「寄書」欄に投書を書せていたが、第一五号の社告によると「本誌発刊以来、我社執所の国粹主義を賛成し、大方より寄送を辱ふする投書、日に堆を成す」⁽³⁰⁾という状態だったらしい。しかし、実際に採用されている投書は少ないし、同一人のものが複数回掲載されている例もごく稀なので、一定の水準に達した良質の投稿はあまりなかったのかもしれない。

その中であって、明治二十二年から三年にかけて数編の投書を採用されているのが秋山銀二郎である。この秋山がいかなる人物であったのかは、残念ながらよく判らない⁽³¹⁾。彼は自ら「草莽の一書生」と称し、政教社の「国粹主義」への「敬愛思慕」の念を表明し

ている。「我日本は文明の新造国なり」という秋山は、「国粹主義」を次のように理解していた。

抑も吾人が常に大声倡道する所の国粹旨義は、決して妄想的の反影にあらず。而して其当さに本領とする所は、一に夫の妄進的の弊を矯正し、以て我邦従来固有する所の粹美を保存せんと欲するに在り。(中略)是故に吾人が取る所の国粹旨義なる者は、所謂真正進歩的の旨義、真正改良的の旨義なり。(2)

この秋山のように、政教社の「国粹主義」を「同志」たちの意図どおりに理解した読者は確実に存在したのである。彼は、多いときには一万を数えた見えない読者層の堆積から、たまたま露頭に現れたサンプルといえるかもしれない。このような読者層を前提にして政教社の言論活動は展開したのである(2)。いよいよ次章からは、その「国粹主義」の具体像をさまざまな側面から明らかにしていくことにしよう。

第三章 註

- (1) 本庄栄治郎「解題篇」、佐田介石『社会経済論』(一九四一年、日本評論社)八七頁。
- (2) もとより伝聞に基づく雑報記事ではあるが、大阪における「輸入品防遏説」の聴衆は何と七万人に達したというし(明治十五年一月十三日付『東京日日新聞』)、東京神田での説教では「涙をこぼして難有がる」者がいたという(三月二十九日付同紙)。前掲(序章註16)大濱『明治キリスト教会史の研究』八六―八七頁参照。
- (3) 佐田介石「建白(二十三題之議)」、『建白書』明治七年甲戌自九月至十月五(国立公文書館所蔵、建・五一)所収。
- (4) 「(宮崎道正卒業証書)」(宮崎家所蔵)。
- (5) 「学位授与伺」、明治十一年自九月至十二月『公文録』文部省之部全(国立公文書館所蔵、公・二三四二)所収。
- (6) 『学芸志林』第一一巻(一八八二年)四一一頁。
- (7) 同右第一七巻(一八八五年)五〇八頁。
- (8) 前掲(第二章註37)三宅『大学今昔譚』一三一―一三七頁。
- (9) 桂寿一「「哲学会」と「哲学雑誌」」(『日本学士院紀要』第四〇巻第三号(一九八五年)所収)参照。
- (10) 『東洋学芸雑誌』第二八号(一八八四年)は、発足に至る経緯を次のように伝えている(同誌二六八頁)。

此頃本邦にて哲学の振はざるを慨し、外山正一、井上哲二郎の両君を始とし、井上円了、三宅雄二郎、千頭徳馬、棚橋一郎、有賀長雄、寺田福寿、千賀鶴太郎、辰巳小二郎、長沢市藏、日高真実、二見康時、坂倉銀之介、加納治五郎、浜野定四郎、戸田恒太郎、福富孝季、松本源太郎の諸君相集り、加藤弘之、西周、中村正直、島地黙雷、原坦山等の諸先生をも招引して哲学会を興さんと企てられ、其目的とする所は専ら哲学に関する演説、討議、質疑、解答を為し、著書、新聞、雑誌上に見る所にして苟も哲学に関係する者ある時は互に之を報道し、且つ其得失、是非等をも論じ、西洋の哲学を比較参照するにある由にて、来る二十六日錦町学習院内にて発会を開かると云ふ。

(11) 井上円了「哲学ノ必要ヲ論ジテ本会ノ沿革ニ及ブ」、『哲学雑誌』第一号(一八八七年)七頁。

(12) 三宅「哲学ノ範圍ヲ論ズ」、同右一一―一二頁。

(13) 島地の政教社参加の弁は次のようなものである(島地「日本人の解剖」、『日本人』第三号(一八八八年五月三日)一二頁)。

余や霜顔雪髪、殆んど老朽衰残に向んとするの驚駭を以て、青龍白兔、將さに渡江陞甌せんとするの、神駿と並び馳せて、閃電逐星、社会の耳目を驚醒せんとすること、頗る狂耄の所為に似たりと雖も、亦已むべからざるの境遇に感ずることあればなり。

(14) しかし、それが単に専門學術誌とだけ見られていたのではないことは、例えば明治十五年三月三十一日付『朝野新聞』が、「東洋学芸雑誌は有名なる諸学士の論説

を集めし者なれば、高尚確實にして後進を啓発すること少なからず」と評している
ことから判る。

(15)

「同志」たちの両誌への寄稿は次のようになっていた(既出のものを含む)。

●三宅雄二郎(三宅ゆう、三宅雄次郎)

- ・「寄高僧諸師書」、『雑誌』第二六号(一八八三年十一月)
- ・「加藤弘之先生ニ質ス」、『雑誌』第三〇号(一八八四年三月)
- ・「仮將軍の猛將をして一驚を喫せしむ」、『雑誌』第三一号(一八八四年四月)

●井上円了

- ・「論孔老二氏之学」、『志林』第一五卷(一八八四年七月)
- ・「男女出生ノ比率」、『志林』第一六卷(一八八五年五月)
- ・「堯舜ハ孔教ノ偶像ナル所以ヲ論ズ」、『雑誌』第九号(一八八二年六月)
- ・「牧都宇氏ニ答フ」、『雑誌』第一三号(一八八二年十月)
- ・「易ヲ論ズ」、『志林』第一七卷(一八八三年二、三月)
- ・「黄石公ハ鬼物ニアラズ又隠君子ニアラザルヲ論ズ」、『雑誌』第二〇号(一八八三年五月)
- ・「読日本外史」、『雑誌』第二五号(一八八三年十月)
- ・「排孟論」、『雑誌』第二八、二九号(一八八四年一、二月)
- ・「加藤先生ノ一大疑問ニ答ヘントス」、『雑誌』第三三号(一八八四年六月)
- ・「読句子」、『志林』第一五卷(一八八四年八月)

・「孟子論法ヲ知ラズ」、『雜誌』第三八、三九、四三号（一八八四年十一月、十二月、一八八五年四月）

・「学位授与式謝辞」、『志林』第一七卷（一八八五年十一月）

・「相撲玄談」、『雜誌』第六二号（一八八六年十一月）

・「囲碁玄論」、『雜誌』第六三号（一八八六年十二月）

●松下文吉

・「未開ノ遺俗果テ何レノ所ニ滞在スルヤ」、『雜誌』第五号（一八八二年二月）

・「人類ノ紀元」、『雜誌』第八、九号（一八八二年五月、六月）

・「古代ノ事物ノ容易ニ消滅セザル所以ヲ論ズ」、『雜誌』第一三号（一八八二年十月）

●棚橋一郎

・「野蛮人種ノ消滅」、『雜誌』第二〇号（一八八三年五月）

・「墨子ヲ讀ム」、『志林』第一四卷（一八八四年三月）

●加賀秀一

・「世界各人種の弓箭放射法」、『雜誌』第六九号（一八八七年六月）

(16) (17) 前掲（第一章註50）三宅『自分を語る』一三頁。三宅はいう、「自分の仕事は自ら意識した通りと言ふことが出来ぬ」（同書一七頁）と。

(18) 前掲（第一章註17）徳富『蘇峰自伝』二四一頁。

(19) 鹿野政直「一民権私塾の軌跡」、『思想』第五三六号（一九六九年）六三頁。

(20) 前掲、徳富『蘇峰自伝』二一七頁。

(21) 同右二二一―二二二頁。

(22) 前掲、三宅『自分を語る』一四頁。

(23) 岡和田忠常「青年論と世代論」(『思想』第五一四号(一九六七年)所収) 参照。

(24) 当時の長野県中学校長野本校については、長野県教育史刊行会編刊『長野県教育史』第一卷(一九七八年)六六九頁以下及び長野高校八十年史刊行会編『長野高校八十年史』(一九八〇年、長野高校同窓会)等参照。

(25) 志賀の辞職は九月二十二日付辞表提出を受けての論旨免職というかたちになっているが、『公文編冊』明治十八年自一月至六月、県立学校職員進退索引(長野県総務部広報文書課所蔵、県立長野図書館保管、F七)によれば、それに先立つ十九日、兼任していた巡査訓練所英語学教授を「不都合之所為有之教授不適任」という理由で解職されており、尋常の免職ではなかったことが窺えよう。

(26) この練習航海の報告は明治十九年『海軍省第十二年報』(国立公文書館所蔵、記一四六二)に載っている。しかし、この公式記録にはもちろん、外務省外交史料館及び防衛研究所所蔵の文書にも志賀が乗船していたという記録がない。

(27) 矧川生(志賀)「十年前録(一)」、『亜細亜』第六六号(一八九二年十一月二十一日)六頁。

(28) 志賀「ダーウィン、ゴーゴリ誕生一百年記念」、『志賀重昂全集』第二卷(一九二八年)八七頁。初出は、明治四十二年十一月二十三日付『大阪毎日新聞』。

(9) (志賀) 「南洋巡航日記」、明治十九年五月二十五日付『時事新報』。同紙への寄稿については、「明治十九年」六月二十五日付志賀宛左近与之助書簡(志賀家所蔵)にある。この寄稿の件は重昂令孫戸田博子氏から御教示を得た。

(30) 山県悌三郎『児孫の為に余の生涯を語る』(一九八七頁、弘隆社)一〇九頁。

(31) 井上馨「条約改正締結理由書」、井上馨侯伝記編纂会編刊『世外井上公伝』第三卷(一九三三年、内外書籍)九一九頁。

(32) 前掲(第一章註3) 田山『東京の三十年』二二頁。

(33) 藤森照信『明治の東京計画』(一九八二年、岩波書店)、御厨貴『首都計画の政治』(一九八四年、山川出版社)参照。

(34) 仮装舞踏会及び井上邸行幸の模様は、四月二十二、三日付及び四月二十八日付『東京日日新聞』に詳しい。ところが、この間の四月二十三日付同紙に「ノルマントン号一件義援金処分第一回報告」が載り、七、八一八円五九銭四厘が集まったと記されていることにも注目したい。欧化と排外意識は背中合わせだったのである。

(35) 『国民之友』第一号(一八八七年二月十五日)の創刊の辞「国民之友」では、「蓋シ維新改革二十余年ノ歲月ハ、我ガ明治ノ社会ヲ駆リテ方サニ一步ヲ転ゼシメントス。旧日本ノ老人漸ク去リテ新日本ノ少年将ニ来リ、東洋的ノ現象漸ク去リテ泰西的ノ現象将ニ来リ、破壊的ノ時代漸ク去リテ建設的ノ時代将ニ来ラントス」とあり、蘇峰は当時を回顧して「予の最も恐るるところは、欧化主義者よりも、その反対に立つ反動者であつた」(徳富『蘇峰自伝』二八二頁)といっている。

(36) 尾崎行雄「退去日録」、尾崎号堂全集編纂委員会編『尾崎号堂全集』第三卷(一

九五五年、公論社」三〇五頁。

(37) 前掲(第一章註1)三宅『同時代史』第二卷三二九頁。

(38) 明治二十一年三月三月二十一日付『官報』の教育欄によると、『日本人』は三月十三日に「京橋区宗十郎町十一番地 政教社」の名で内務省へ届出を済ませている。したがって、少なくともその時点で「政教社」は設立されていたことになる。また、この住所は書肆敬業社の住所と同じである。

(39) 『各種学校書類』(東京都公文書館所蔵、六一五・A四・六(3))所収。その後の経過は、『日本中学校五十年史』(一九三七年、日本中学校)参照。

(40) 『願伺届録』学務課(東京都公文書館所蔵、六一六・C八・二)所収。東洋大学創立一〇〇年史編纂委員会編『東洋大学百年史』資料編I・上(一九八八年、東洋大学)八四頁。

(41) 前掲、三宅『自分を語る』四〇五頁。

(42) 柳田泉『哲人三宅雪嶺先生』(一九五六年、実業之世界社)三三〇三四頁。

(43) ところが、暁烏敏・西村見暁編『清澤満之全集』第一巻(一九五三年、法蔵館)五九一頁所収の西村の回想には、『日本人』の命名は加賀秀一だとある。

(44) 「井上円了博士を語る」、『思想と文学』第二卷第三冊(一九三六年)八五〇八七頁。この座談会は昭和十一年(一九三六)十月十九日に行なわれた。

(45) 前掲(序章註2)植手「『国民之友』・『日本人』」、一一二頁。

(46) 同時代人にもそのように見えていたことは、末兼八百吉(宮崎湖処子)『国民之友及日本人』(一八八八年、集成社)に「日本人は国民之友の如く、其社説を一人

にて書かず、所謂経済上の分業に基き、各個に受持の人ありて、志賀重昂氏之が総裁として、大眼目の文章を第一類に掲げ出せるが如し」（同書五三頁）とあることから判る。

(47) 長谷川如是閑『ある心の自叙伝』（一九五〇年、朝日新聞社）一七〇頁。

(48) 小村俊三郎「志賀矧川先生を憶ふ」、第二次『日本及日本人』第一二五号（一九二七年六月一日）九九頁。

(49) 同右一〇〇頁。

(50) 明治二十二年十月「郁文館規則」（郁文館学園百年史編纂委員会編『郁文館学園百年史』（一九八九年、郁文館学園）一九〇二四頁所収）及び『日本人』掲載の広告等による。

(51) 三宅談「『日本人』と『日本新聞』」、岡吉寿編刊『宮崎道正伝』（一九三二年）一八三頁。あるいは三宅『自分を語る』四五頁。

(52) 例えば、「大同団結大会の結果を窺て其の将来を推測す」（『国民之友』第五一号（一八八九年五月二十二日）一四頁）など。政教社の側でも、『日本』の発刊に際して「主義の兄弟」「同主義の親友」（『日本人』第二二号（一八八九年二月十八日）二一頁）と把握していたのは事実である。

(53) 鹿野政直「明治時代の思想」、前掲（序章註₂₉）『思想史』Ⅱ二八三頁。

(54) 「解説」、西田長寿・植手通有編『陸羯南全集』第一卷（一九六八年、みすず書房）七〇〇頁。

(55) 『日本人』第四五号（一九〇九年四月十八日）二七頁。

(56) 古島一雄『一老政治家の回想』(一九七五年、中公文庫版)三四頁。

(57) このような観点で、逆に「政論記者」陸の誕生の意味を考えた論考に松田宏一郎「政論記者」陸羯南の成立」(東京都立大学『法学会雑誌』第二八巻第一号(一九八七年)所収)がある。

(58) 『日本人』第四〇号(一九九〇年二月三日)巻末広告一頁では「三宅雄二郎主筆」と明示してある。

(59) 横瀬夜雨『太政官時代』(一九二九年、梓書房)はじめに一頁。

(60) 前掲、三宅『自分を語る』四三〜四四頁。

(61) 明治二十三年四月三日付『江湖新聞』には次のようにある。

●江湖新聞の社説 看官 ヲイ今日は社説がないがどうしたんだ。社の小僧一体三宅先生は「撃実」の看板を始終左右に置かなくつては筆が取れない性分だ。看官 フム、ナル。小僧 所が其看板が尾参地方遊歴中野砲の響きに胆を潰して逃げてしまった。それで先生は半分書きかけた社説が書けなくなつて、今血眼になつて其行方をさがしてゐるさうだ。見つかり次第社説は電報でよこすと言つてきた。それでけふは社説がないのさ。

文中「尾参地方云々」とは、陸海軍大演習参観のため三宅が愛知県方面に出向いていることを指している。もとよりユーモア記事ながら、『江湖新聞』の社説は三宅が担当し余人には任せなかつたこと、納得のいかない原稿は記事にしなかつたことなどが窺える。

(62) 「国民新聞と江湖新聞」、『日本人』第四〇号(一九九〇年二月三日)二九頁。

(63) 前掲(第二章註⁶³)山本『新聞と民衆』一一九頁。

(64) 朝日新聞大阪本社社史編修室編『村山龍平伝』(一九五三年、朝日新聞社)二五二頁。

(65) 「文」、『日本人』第四〇号二九頁。

(66) 『亜細亜』第三三号(一九九二年二月八日)二二頁。

(67) 交詢社版『日本紳士録』から抜き出した政教社メンバーの職業区分は表6のように変遷している。自己申告ではないと考えられるが、志賀と三宅が早い時期から「国会新聞社員」となっていることには注目せざるを得ない。前掲(第一章註⁶⁴)『上野理一伝』によれば、『国会』の「社説は矧川志賀重昂が中心となつて論調をまとめ、坂崎紫瀾、森本駿、村松柳江らがこれに参加した。しばらく経ってから雪嶺三宅雄二郎が特別社友という名称で入社し、ほとんど毎日社説欄に筆をとるようになった」(同書三六五頁)という。

ところで、『国会』は政府から資金を得ていたらしく、当時から「御用新聞」視されていた。西田長寿はその根拠を「蛇の道はへび」といつて明示しないが(『明治時代の新聞と雑誌』(一九六六年、至文堂)一七五頁)、佐々木隆によれば同紙は内務省と「特殊な関係」にあったことが明らかにされている(「第一次松方内閣期の新聞操縦問題」、『東京大学新聞研究所紀要』第三一号(一九八三年)三〇頁)。(ただしその場合、志賀や三宅がそのような事実を知っていて、なおかつ同紙に執筆していたのかということが気になる。しかしここでは、大橋素六郎という記者が書いた論説が政府と気脈を通じていたという理由で、二十六年六月に彼らが『国会

』を退社したという事情などから判断すると（前掲、『村山龍平伝』二六〇頁）、新聞操縦費の件は承知していなかったのではないかと思われる。

(68) 内務省『明治二十一年功程報告』（国立公文書館所蔵、記・九七六）五〇頁。このうちとくに、時事論説が前年よりも増加した理由として、同報告は「国会開設ノ期モ既ニ近ツキタルト市町村制度ノ発布アリシヲ以テ、従前沈静ノ姿ナリシ各地ノ政党モ自然活発ノ傾向ヲ呈シ、続々新聞紙、雑誌ヲ発行シ之ガ機関ト為シ、時事論説ノ如キハ頓ニ四十八種ノ増加ヲ見ルニ至レリ」（同書五〇〜五一頁）と分析している。

(69) 「明治二十七年」一月二十五日付三宅宛志賀書簡（三宅家所蔵）。文中、「恩田」は恩田熊寿郎、「畑山」は畑山芳蔵であろう。「宮崎」は宮崎道正か。実はこのとき、政教社と恩田の間に金銭をめぐるトラブルがあつたらしい。

(70) 大正十二年十二月九日付志賀重昂書簡、第二次『日本及日本人』第三九号（一九二四年一月一日）一九六頁。その後の経緯は次のようであつたという。

明治三十九年、旧「日本新聞」が、伊藤欽亮氏の経営に移りし際、「日本人」の保証金も亦同氏の手に移転せり。「日本及日本人」と改題後屢々伊藤氏より三宅氏に返還を請求し来るも応ぜず。両三年間其儘となりゐたるが、其後新聞紙法改正せられ、保証金増額の必要生じたるを機会に、井上に於て壹千円の公債を買入れ保証金の入換を為すと同時に、伊藤氏へは前保証金を返済したり。三宅氏等は、今尚ほ此の保証金を保有して、「日本及日本人」の発行権を主張しつつあるものなり。（同誌同頁）

なお右の文章の筆者は、文中にも名前の出ている井上亀六かと思われる。

- (71) 前掲(序章註¹⁰)、有山「雑誌「日本人」・「日本及日本人」の変遷」一三頁。
ただし有山はのちに、「言論の商業化」(『コミュニケーション紀要』第四輯(一九八六年)二二―二三頁)において、そのような前言を撤回している。

- (72) 明治二十一年五月十二日付志賀重昂宛磯村良廉書簡(志賀家所蔵)。

- (73) 明治二十年『函館区役所統計概表』(一八八八年、函館区役所)二四頁。

- (74) 山本武利「明治三十年代前半の新聞『日本』の読者層」(『近代日本の新聞読者層』(一九八一年、法政大学出版会)所収)参照。

- (75) 前掲(註⁴⁷)長谷川『ある心の自叙伝』一七〇頁。

- (76) 『日本人』の文体について宮崎湖処子は、「日本人は幾分か漢文直訳の風を存せり、国民之友が「国民之友生れたり」と云へる処に、日本人は「日本人将に出んとす矣」と曰へり」(前掲(註⁴⁶)『国民之友及日本人』七五頁)と述べている。

- (77) 堺利彦『堺利彦自伝』(一九七八年、中公文庫版)一一一頁。

- (78) 前掲、三宅『自分を語る』四四頁。

- (79) 「新年に際し日本人の地位を論ず」、『日本人』第六五号(一九九一年一月六日)一頁。

- (80) 「社告」、『日本人』第一五号(一八八八年十一月三日)三五頁。

- (81) 秋山銀二郎には『安楽之郷国』(一八八九年、有隣堂)という五二頁の著書がある。同書の奥付によると、秋山は千葉県士族で住所は横浜区石川仲町一丁目二十三番地寄留となっている。秋山はこのほか『文』にも寄稿している。

(82) 秋山「誰れか国粹保存を以て今日に必要ならずと謂ふか」、『日本人』第四七号

(一八九〇年五月十八日)二七頁。

(83) 彼ら“見えない読者”が噴出するのは、皮肉にも三宅退社後の第二次『日本及日本人』の誌上であつた。「既知未知の人々より」という投書欄に寄せられた読者の自己表現を借りれば、彼らは「愛読者」「一会社員」「未知未見の野人」「地方在住の者」「名もない田舎の小学校の三等校長」「貧老書生」であり、中には「明治二十一年よりの愛読者」という者もいた(同誌第三九号一七三―一九六頁)。

第四章 「国粹主義」の理論と実践

第一節 志賀重昂における「日本の開化」

一般に「国粹主義」と把握されることの多い政教社の思想は、序章第二節において先行研究の整理を試みた際にも述べたように、政治、宗教、教育等といったさまざまな現実に向かつて発言しながら、それらとの関わりの中で形成され展開するとともに、かつ現実の变革をも目指すという実践的な性格の思想であったと考えられる。その中心的な舞台が雑誌『日本人』における言論活動であったことはいうまでもない。したがってそれは、書齋の中で構築された精緻な理論体系というよりも、むしろ実社会の中で鍛えられた行動の指針といべきもので、政教社の統一見解とでもいうような「国粹主義」論が書かれることもなかった。「同志」の一人菊池熊太郎は、「国粹主義は我社の持論なりと雖ども、未だ社説として論究したることなし。是れ一は重要の問題にして軽々に議了し能はざる」と、一は社員中各自それぞれに懐抱する所の特見ありて、未だ相集りて之を一定する好機を得ざりしに原因するものなり」と述べている。民友社の「平民主義」が徳富蘇峰に代表されるのと較べても、政教社そのものが「星雲状」の「組織」であったため、「同志」たちは得意とする各分野で発言し、ときには運動にも跳び込んでいたので、特定の一人の著作を分析するような方法では、「国粹主義」の思想構造を的確に把握することはできない。おそらくこれらのことが、先行研究の積み重ねにもかかわらず、いまなお総合的な政教社の思想像を共有できない所以であろう。それでも私たちは、本稿が考察範囲としている「初期政教社」の全期間を通して、志賀重昂と三宅雄二郎がそれぞれの視点から「国粹主義」の理論化を進めようとしたことを知っている。そこで、以下順に二人の思

想的努力を辿ることによつて、政教社の言論活動の出発点を確認することから始めてみよう。

ところが、『日本人』を通観したとき、ともかくも「国粹主義」の理論化を意識しているのは「初期政教社」の第Ⅰ期（序章表2参照）に限定され、それも徐々に曖昧になつていくようにみえるのはなぜであろうか。このことは、「国粹主義」のゆくえを占うとともにその思想像を把握するについて重要なことだと思われるのだが、第Ⅰ期は「国粹主義」のプレゼンテーションの仕方に応じて、さらに次の三期に分けることができる⁽³⁾。

「国粹保存」―第一号（明治二十一年四月三日）―第二三号（二十二年三月三日）

「国粹顕彰」―第二四号（二十二年五月七日）―第五八号（二十三年十一月三日）

「依然として国粹顕彰」・週刊化―第五九号（二十三年十一月二十五日）―第七三号（二十四年六月二日）

私が通読したところ、「国粹主義」が社説その他で正面から取り上げられているのは、「国粹保存」を提唱した時期に集中し、「国粹顕彰」と改めて以降は漸次その数を減らししている。したがつてまず、創刊後約一年間の誌面分析から、いわば政教社の初心といえる「国粹主義」の原形を探り出す必要があるう。

『日本人』誌上で「国粹主義」の理論化に努めたのは、志賀重昂と菊池熊太郎である。とりわけ志賀は、第一号から第九号まで編輯人で事実上の主筆であり、「政教社の代表」⁽⁴⁾ともいえる立場にあつた。創刊号から第八号までの巻頭に連続して署名入りの論説（社説）を寄せているのも彼である。それらのうちでは、第二号所収の「日本人」が懐抱する処の旨義を告白す」と第三号所収の「日本前途の国是は「国粹保存旨義」に選定せざ

るべからず」の二論説が、「国粹主義」の理論化を正面から進めようとしたという点で重要であろう。

ここで、本稿の冒頭で取り上げた政教社の祝宴を思い出してみたい。あのととき主催者たる政教社を代表してあいさつを述べたのは志賀であったが、その演説を「敷衍した」のが第二号の「日本人」欄に掲げられた論説「「日本人」が懐抱する処の旨義を告白す」である。この中で彼は、大和民族には「一種特殊なる国粹(Nationality)」が発達していて、それを「大和民族が現在未来の間に進化改良するの標準となし基本となすは、正しく是れ生物学の大原則に順適するものなり」という。したがって、「予輩が懐抱する処の大旨義は実に日本の国粹を精神となしこれを骨髓となし、而して後能く機に臨みて進退去就するにあり」と結論づける。日本人のナシヨナリティを「進退去就の標準」とすること、すなわち「国粹主義」を『日本人』の精神に据えたのである。また、その根拠にされたのがほかならぬ進化論的な思考方法で、志賀によれば「日本の開化」は数字で表わせば1234の段階、一方「西洋の開化」は12345678910に達し、そのような日本にいきなり「西洋の開化」10を輸入しても空隙を生じるだけで、「寧ろ1234を漸次に増進し来り、5678910となすの安全鞏固なるに若かざるなり」という考え方が示される。こうして、彼が「塗抹旨義」という表面的な欧化主義は排され、『日本人』の言論活動の目的は次のようにまとめられる。

(前略)日本の宗教、徳教、教育、美術、政治、生産の制度を選択せんにも、亦「国粹保存」の大義を以て之を演繹せんとするものなり。然れども予輩は徹頭徹尾日本固有の旧分子を保存し旧原素を維持せんと欲する者に非ず。只泰西の開化を輸入し来る

も、日本国粹なる胃官を以て之を咀嚼し之を消化し、日本なる身体に同化せしめんとする者也。(5)

ここで志賀は、「泰西の開化」を直輸入するのではなく、従来の「日本の開化」の延長上に「日本国粹」に基準を置いた独自の文明化の途を探ろうとしている。つづいて、同誌第三号所載の論説「日本前途の国是は「国粹保存旨義」に選定せざるべからず」の中で、「予輩が居常大声疾呼して「国粹保存」の大旨義を奨説主張する所因のものは、豈に夫れ単に彼の踏舞、仮装舞踏会を情視したるより由来したるものならんや」と述べているから、彼らの主張する「国粹主義」が単に鹿鳴館の舞踏会に象徴される「欧化主義」の風潮に対する表面的な批判に留まらないことは、当初から自覚的に意識されていたのである。その上で、当時の時代思潮を五つに分類して、その中に自らの「国粹主義」を次のように位置づけた。

- (1) 塗抹旨義
- (2) 日本分子打破旨義
- (3) 折衷比較旨義
- (4) 国粹保存旨義
- (5) 日本旧分子維持旨義(6)

この配列を見る限り、志賀の「国粹主義」は、(1)や(2)の「欧化主義」とも、また(5)のような当時「保守主義」と呼ばれた潮流とも違い、さらに(3)のような一種の機会主義とも異なる、独自の立場を築こうとしていたようだ。しかし、一般に(5)の「日本旧分子維持旨義」と混同して「保守主義」のレッテルを貼ろうとする批判が多かったようで、『日本人』

誌上においてそれらに対する防戦を試みたりしている。さらに翌明治二十二年夏になると、「同志」の多くが大隈条約改正反対運動の一角に参画することによつて、政教社は「新保守党」とみなされたようで、それに対して『日本人』第二八号誌上に菊池熊太郎は「新保守党なる名称は鬚斗付きの儘返却すべし」なる論説を掲げたこともあつた（第四節参照）。志賀も「国粹保存旨義」は保守党の言にあらず。否一步を進みたる改革家の言なり。彼の仏教徒、神官、漢学者、天保の老人等は国粹保存旨義の朋友にあらず」と述べていた。「国粹保存」から「国粹顕彰」へのスローガンの改変にはこのような事情も働いていたのである。

さて、右の(1)～(5)のような時代感覚をもつて自らの「国粹主義」を位置づけようとした志賀は、続いてそれを具体的な運動指針へと一歩進める努力を始めた。『日本人』創刊約一年後のことである。彼は「日本の将来を如何にすべきや」「日本前途の国是は何の旨義に選定すべきや」そして「如何にして日本国旗の榮譽命脈を当代の優勝劣敗場裡に保維すべきや」という強烈な時務意識に基づいて、「日本民族独立の方針」を次の三箇条にまとめた。

- 無 日本民族の思想を独立せしむる事 (国粹旨義)
- 形 日本民族箇々の勢力を惣併する事 (大同団結)
- 有 日本民族箇々の実力を増殖する事 (殖産興業)

これが大同団結運動の一局面で予定されていた演説の草稿だということを差し引いても、志賀においては主として文明構想と関わる「国粹旨義」、政治構想と関わる「大同団

結」、実業構想と関わる「殖産興業」が同列に扱われていたことに留意すべきである。このうち「国粹」について次に考えてみることにし、残る「大同団結」については第三、四節で、また「殖産興業」に関しては第五章第二節で取り上げたい。

先に引いた「日本人」が懐抱する処の旨義を告白す」の中で、志賀が「国粹」に英語のままナシヨナリテイを対応させていたことに戻ってみたい。もちろん、これをもって政教社の思想をナシヨナリズムと短絡するのは差し控えなければならない。序章第二節で縷々述べたように、ナシヨナリズムには概念規定の曖昧さと時代状況に応じた意味の振幅がつきまとうし、陸羯南が「吾輩が斯に用ふる「国民主義」とは英語の所謂「ナシヨナリチー」を主張する思想を指す。従来「ナシヨナリチー」なる原語は国体、国情、国粹、国風等の国語に訳されたれども、此等の国語は従来固有の意義ありて、原語の意味を尽くす能はず」(10)と定義しているのを例外とすれば、明治二十年前後の段階ではナシヨナリズムという概念は思想界でも普及しておらず、政治言語としても一般的でないことによっても明らかである。「同志」の一人棚橋一郎の訳編した英和辞典によっても、Nationalityに「国粹」の訳語を対応させた例は見当らない(11)。中国や朝鮮の古典にも「国粹」の出典は見当らず、両国ではむしろ日本から影響を受けてこれ以降「国粹」なる概念が意識されはじめたようだ(12)。

では、志賀が「国粹」に託した原理的な意味は何だったのかというと、この時点では二つの側面が指摘できよう。まず一つは、前引の「日本前途の国是は「国粹保存旨義」に選定せざるべからず」における次のような一節から窺える。

独り「国粹保存」の大旨義は即ち西洋の開化を日本に輸入するも之をして大権を操ら

しめず、日本の開化を主とし西洋の開化を客と為す者にして、語を易へて謂へば西洋の開化を輸入するも之をして日本的に同化せしむるものなれば、這般が独り至理至義のみならず、亦至利益なるは予輩が曩に曉々叙述する処の如けんか。(13)

右の一節を要約すれば、「国粹」とは「日本の開化」を進めるときの価値基準であるという論理である。要するに「国粹」とは「西洋の開化」を日本に「輸入」する際の一種のフィルターであり、それを通過させることによつてはじめて「日本の開化」に「同化」という主張である。以上から志賀の「国粹」||「日本の開化」の価値基準という側面が確かに指摘できるであろう。

「日本の開化」すなわち「文明」化を模索する思想的営為は、ペリー艦隊に象徴される西洋文明諸国の外圧によつて「開国」を余儀なくされた我が国が、近代社会として発展していく過程を内面的に支える独自の文明論を構築する知的作業だったといえよう。松沢弘陽によれば、「日本における近代化——明治時代を通じてポピュラーなことばでは「文明」「開化」——の理論をうちたてることガリベラルな知識人の課題(傍点原著者)」(14)であつたとされる。幕末期にはじめて西洋文明と出会つた福沢諭吉は、「吾々洋学者流の目的は、唯西洋の事実を明にして日本国民の交通を促がし、一日も早く文明開化の門に入らしめんとするの一事のみ」(15)と回顧し、『文明論之概略』(一八七五年)で示された文明論の「始造」と「独立」の試みは、むしろ残された課題として次の世代に引き継がれた。志賀をはじめとする政教社の「同志」たちだけでなく、明治二十年代にそれぞれの立場から文明論の構築を模索した蘇峰たち民友社や内村鑑三たちクリスチャンに共通しているのは、このような思想的系譜に連なるということであろう(16)。

右に祖述したような「文明」観の多義的な展開を念頭に置いたパーस्पекティヴで、志賀の「国粹」⇨「日本の開化」の価値基準という論理構造を検討したとき、どのような思考方法がそれを準備したのか、ここでその特質と起源を析出してみる必要がある。志賀は「開国後の日本」と題する論説で、「社会の変遷」の法則を次のように述べている。

然らば日本社会前途の成行きは如何なるべきやと問ひたらんには、国民の思想、諸般の出来事、社交上の減少は疎より細となり、悠々より擾々となり、単純より複雑となり、磊落的より分析的となり、小説的より数理的となり、豪傑的より実業的となり、英雄拝崇的より自動的となり、模倣より国粹的となるは、物心あるものの皆知悉する処ならん。(17)

志賀は日本社会前途の見通しを「疎⇨細」「悠々⇨擾々」「単純⇨複雑」という方向の変化にみている。文明論のもつこのような論理構造の特質は、第二章第三節で三宅の場合に即して「国粹主義」の思想的基盤として措定した、「進歩」を「同質⇨異質」という変化の相において捉える社会進化論の思考方法と共通のものである。なお、「国粹主義」を「進歩⇨同質⇨異質」によって「日本の開化」を漸次進めるものとみる論理構造は、「初期政教社」の第Ⅰ期を通じて一貫した立脚点であったようだ。例えば、『日本人』の週刊化を告げる社説の中で、「国粹顕彰」が「世界の福祉」につながる「宇内の通義」だと述べたあと、「凡そ進歩は単純の幸福を変じて複雑の幸福為らしむるを称するに過ぎず」(18)とされているのである。

札幌農学校出身で農学士の志賀が、生物進化論の応用から「国粹主義」の理論化を図ったことは、すでに引いた「日本人」が懐抱する処の旨義を告白す」の中で明確に「国粹

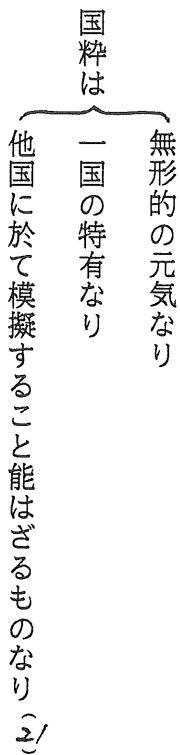
と生物学の大法を縁故する」と述べられているほか、『日本人』誌上のいくつかの論説に認められる。それは、「数学の大法」「重学の大理」であり、また「総併力 Resultant」「勢力保存旨義（エネルギー保存の法則）」であった。前述したように、志賀が「国粹」概念を何に依拠して主張したのかは結局のところ不明というしかないが、このうち「勢力保存旨義」がH・スペンサーの「力の持続性」に根拠をもつものであったことは確かである。志賀がこの時期までに、スペンサー、ダーウィン、カーライル、バツクルなどの著作に親しんでいたことは回想等から知ることができる。

さて、志賀が「国粹」に託したもう一つの意味は、「国粹」をもつて「美術的の觀念」¹⁹とする非論理的な論理である。この「美術的の觀念」は、右に述べた進化論的な発想からも影響を受けて、環境的又は歴史的に大和民族の間に形成された一種特別なものとされ、論理的な説明を排除する觀念という側面をもっている。しかし相対的に言えば、志賀にとつて「国粹主義」の理論化を構想する上で大きな意味を有するものではなく、むしろ今後の方向性として意識されはじめたものといえる。

以上の考察によつて、志賀が『日本人』創刊直後に政教社を代表する形で精力的に行つた「国粹主義」を理論化する思想的努力の結果は、およそ次のようにまとめられるであろう。「国粹 (Nationality)」とは、「日本の開化」の価値基準といふべき思想的根拠であり、政治的には大同団結、経済的には殖産興業によつて「日本の開化」すなわち「文明化を進める際に、思想的にそれらの中軸となるのが「国粹主義」にほかならず、これを追求することは我が国独自の文明論を構築する思想的営為であるということもできる。しかし、「国粹」の意味内容がそれ以上に豊富化、具体化される契機に乏しく、「美術的の

觀念」に置き換える余地を残すことによつて、文明論の中軸をなしながら一種の中空構造を示すことになる可能性もあながち否定できない。この時点で志賀の主張する「国粹主義」が、その中心部に潜む無内容性という陥穽を、例えば昭和前期に声高に唱えられる国粹主義のようにファナティックな精神主義で補う知的頹廢に墮していないとすれば、それは丸山真男のいう「日本近代ナシヨナリズムにとつて美しくも薄命な古典的均衡の時代」(26)になお踏み止まっていたとみなすことができるかもしれない。いずれにせよ、志賀にとつて「国粹主義」理論化の課題は、論理枠と方向性を示しただけでなお未解決のまま残されているのである。

志賀の課題を引き継ぐかたちで「国粹主義」の定義づけを進めたのは、札幌農学校で同期生だつた菊池熊太郎である。二人は「国粹」を Nationality の訳語とみなす点で共通していた。菊池は「国粹主義の本拠如何」と題する論説で、「国粹(ナシヨナリティー)なるものは一国特有、国民通有の氣風なり。無形の感情なり。思想なり。意思なり」と定義し、それを次のように分節化して把握しようとしている。



ついで、「何を以てか我が日本の国粹となす」と自問し、それに答えて「我が帝室に対する国民の感情即ち是のみ」(28)と断言する。志賀においては漠然と「美術的の觀念」とされ、まだ明快に規定することがためらわれていた「国粹」の内容(菊池のいう「大主眼

「()が、いとも簡単に「帝室保存」と置換されているかの印象を受ける。

菊池のこのような側面を「保守主義者が陥らざるをえない悲劇」(23)と論じる評価もあるが、私はむしろ政教社の「国粹主義」には「悲劇」と断ずるのをなお早計とするような思想の生産性——それ自体で自律的に形成、展開していく可能性——が保持されていたと考えておきたい。帝室とりわけ明治天皇個人に対する素朴な敬愛の念は、例えば「同志」の一人であった棚橋一郎が「我帝室は日本臣民の総本家なり」(24)と書いているように、当時としては一種の常套表現に伴って喚起される感情であつて、この場合も「国粹主義」の内容を排他的に占有してしまうような絶対的な価値として作用するものではない。むしろここでは、菊池が同じ論説の中で「我輩は君主専治の立憲政体に変ずるを喜ぶものなり」(25)と述べていることから判るように、来るべき憲法制定に大きな期待を寄せていた側面を重視したい。彼の説くところによると、「帝室をして直接に政治上の責を受けしめざることは、余輩国粹論者の切に希望する所」(26)であり、「国粹を保存し助長せんとするには、須らく憲法に依らざるべからざること明なり」(27)となる。

菊池に関していえば、彼が杉浦重剛とともに唱えていた理学宗と「国粹」との関係が気になるところである。理学宗についての説明は註に譲るしかないが(28)、理学すなわち自然科学のアナロジーとして「国粹主義」の理論化を進めていこうとした点で、志賀と菊池は共通の経路を辿っていたといえるのではないか。志賀は、前述のように「国粹と生物進化の大法と縁故する」という立場から「国粹主義」の理論化を図り独特の文明論の構築に向かったものの、結局「美術的の観念」であるとする曖昧な主張を繰り返したのに対し、菊池はそこに具体的な「帝室」をあてはめた。ともかくも、この菊池の論断は一般の理解

を早める効果があつたといえよう。『日本人』第三五号の「寄書」欄に載つた紀伊天籟生と名乗る人物の投書は、数年前は「欧化主義」だつたという彼（？）の内面の転成がよく判る一文である。それによると、彼は志賀が創刊直後の『日本人』誌上で展開した「国粹主義」にはじめ「憤激」を抱いたけれども、しだいに「稍国粹保存主義に左袒せんと欲するに至」つたという。

然れども、未だ国粹とは、如何なる者なるかを認知する能はず。従て其保存すべきは、如何なる者なるかを認知するを得ず。只美術と言ふが如きに聞へて、漠然として甚だ惑へり。然り而して、一たび菊池君の国粹保存主義の本拠を論破せらるるに迫んで、初て其国粹を認知するを得たり。其保存すべき者を悟了するを得たり。(29)

この投書家のような理解のしかたも確かに存在したのである。後年我が国で「国粹」という政治言語が辿る道を予言しているようにもみえる。しかし、私たちがここで検討している時期の「国粹主義」は、諸々の側面と可能性を含んだ総合的な思想としていまだ形成過程にあつたといふべきであろう。志賀や菊池とは別な観点から「国粹主義」の理論化を進めたのが、次に取り上げる三宅である。

第二節 三宅雄二郎の「哲学」と「日本人」

三宅雄二郎は、とくに雪嶺と号するようになった頃⁽³⁰⁾から、志賀重昂とともに政教社の中心人物と考えられている。三宅は、『日本人』が『日本及日本人』と改題した明治後期から大正期まで、論壇あるいは思想界にあつてよくその孤塁を守り、一定の評価と影響力を保つたことが知られているため、ともすれば私たちは彼が当初から政教社「国粹主義」の理論的支柱かとの先入観を抱いてしまう。ところが、前節で述べたように、設立直後の政教社が「国粹主義」を唱道したとき、その理論構築を目指したのは志賀とそれから菊池であった。それに対して三宅は、創刊以来の『日本人』誌上に、「薩長の前途を占ふ」(第二、三、五号)、「三千の奴隸を如何にすべきや」(第九号)、「森文部大臣に望む」(第一一号)、「官吏の辞職は身の為めなり国の為めなり」(第二〇号)、「大日本帝國憲法を評す」(第二二号)など、時事問題に関する論説を執筆していた。この当時の三宅の立論が、反藩閥政府の立場でなされ、弱者にも向けられた視点を持ち、目前に迫った立憲政治に期待するものであったことは、すでにいくつかの先行研究が説いているところなので再論しない⁽³¹⁾。

私がむしろ問題にしたいのは、三宅の立論を支えていた基底的な思考方法についてである。右の諸論説において彼は、「国粹主義」という表現を一度も用いておらず、したがってそれを正面から理論化しようという意図を認めることはできない。しかし、例えば『国民之友』と『日本人』の誌面比較を試みた宮崎湖処子は、「三宅氏の文を解せんには、氏と同程度の学識、若くは少くとも氏に近き学識あらざれば、其妙味を嚙む能はず」⁽³²⁾

と、三宅の「文章家」たるを認めたと、志賀に替わって彼こそ同誌の「主筆者」になつたと断じている。一見「国粹主義」の理論化とは関係ないような三宅の時事論説も、同時代の読者には「国粹主義」を標榜する雑誌『日本人』の主筆とみなされる性格を有していたのである。そこで、まず同誌所収の諸論説からみていこう。

前掲の時事論説の中では、「大日本帝国憲法を評す」に注目してみたい。この論説は、憲法発布直後の明治二十二年二月十八日号の『日本人』に掲げられたもので、その中で三宅は、「拝受すべし拝受すべし、双手を挙げて拝受すべし。特に左の箇条は臣民として喜ぶべきに非ずや」として、次の五か条を列挙している。

第三十七条 凡て法律は帝国議会の協賛を経るを要す

第四十一条 帝国議会は毎年之を召集す

第五十五条 國務各大臣は天皇を補弼し其責に任ず

第六十四条 国家の歳入歳入は毎年予算を以て帝国議会の協賛を経べし

第七十三条 将来此の憲法の条項を改正するの必要あるときは勅命を以て議案を帝国

議会の議に付すべし (33)

三宅が「人民」のために重視するのは、立法、予算、憲法改正等について議会の権限を規定する条文であつて、彼の立場が議會主義にあつたことは明白であろう。三宅によれば、「憲法を公平とするも法律の制定次第人物の適用次第にて如何様にも為すを得べし」(34)、すなわち憲法は運用次第だとされ、藩閥政權の退潮、政党内閣の出現は案外早く訪れるであろうから、それに応ずる人民の政治的自覚と責任が強く求められる。

左も有らば有れ。憲法は喜て拝受すべしは依て以て執權者を拘束する能はざるは人民

の罪なり。依りて以て国家の安寧を保つ能はざるも人民の罪なり。依りて以て帝国の
光榮を顕はす能はざるも人民の罪なり。彼の憲法あり、各自有為の氣象あらば、何の
日か圧屈せられん。若し尚ほ碌々として不法の処分を甘んぜば、天皇陛下の恩賜に
対して恐れあり。実に邦家の罪人なり。畏れて懼れざるべけんや。(35)

「人民の罪」が人民自身に対するものなのか、あるいは天皇に対するものなのか、これ
だけで判断を下すのはなお早計だと思われるが、三宅にとって、憲法を適正に運用し、議
会を通して人民が「各自有為の氣象」を發揮することこそ、「執権者を拘束」し「国家の
安寧を保つ」だけでなく、対外的には「帝国の光榮」を顕現する手立てと考えられていた
ようだ。このような基本的構造をもつ国家観は、三宅自身によって「君民共治」(36)と表
現されている。これが、彼がこの時期に発表した一連の時事論說の中で行った、最も立ち
入った主張である。

ところで、憲法が發布され、三宅が論說「大日本帝国憲法を評す」を書いた明治二十二
年二月を過ぎると、世情とりわけ政情は大同団結を軸に再び盛り上がって、にわかに活況
を呈してきた。翌年秋の議會開設を多分に意識したこの運動は複雑に展開し、三宅をはじ
め政教社の「同志」たちも各局面に関わることとなる。その関わり方は、これまで考えら
れてきたよりもはるかに大きな期待感に基づいた深いもので、彼らが運動の挫折から学ん
だものもそれに見合つて大きかったと想像できる。一連の過程は第三、四節で詳しく述べ
るとして、いまここでは三宅や前節で取り上げた志賀、菊池らによって行われた「国粹主
義」を理論化する試みが、彼らの大同団結運動への参入によって一時中断され、『日本人
』誌上からも姿を消してしまうことを確認しておきたい。

しかし三宅の場合、『日本人』とは別なところで彼なりに「国粹主義」の理論化を進めていたのではないかということは、大同団結運動が大隈外相の条約改正に対する反対運動として展開した政治的喧騒をよそに、西洋哲学史の執筆を急いでいたということに注目したときに、新たな課題として視野に入ってくるだろう。三宅はすでに『日本仏教史』『基督教小史』を上梓していたが、前に述べたようにそれらは東京大学編纂所、文部省編輯局勤務中のいわば業務著作物だったのに対し、彼にとって事実上の処女出版というる『哲学涓滴』は明治二十二年九月に脱稿され、十一月に文海堂から発行されたのである。同書の緒論第一章「進学解」は、『日本人』第二八号（七月三日）に掲載されているので、これはまさしく条約改正反対運動の高潮期に書かれたことになる。

『哲学涓滴』は、その凡例にある通り、次の二書に材料を取ったものである。第二章第二節で述べたように、このうち前者は東京大学におけるフェノロサの哲学史講義のテキストであった。

Albert Schweigler, *Geschichte der Philosophie im Umriss*, 1847.

Kuno Fischer, *Geschichte der neueren Philosophie*, 1852-77.

同書の構成は、「哲学の宏壮なる結構を考へんと欲せば、最近三百年有力の学士が苦心して作為せる意見弁論を察するを以て足れりとすべし」⁽²⁷⁾との西洋近代哲学史を重視する立場に基づいて、デカルトからヘーゲルまでの紹介に紙幅の多くを費やすものとなっている。この点でも、阪谷芳郎らのノートによって明らかにしたフェノロサの哲学史講義の構成と類似していたといえよう。要するに『哲学涓滴』は、三宅が東京大学でフェノロサから学んだ哲学史をかなり忠実に祖述した、いうなればその直訳書なのである。あるいは

また、こうもいえるかもしれない。大正元年（一九一二年）哲学会の席上、彼は「どうも今日哲学を哲学史と同様に視て、或哲学者の学説を攻究しなければならぬと云ふことになつて居て、いよいよ根本的の解釈と云ふ事がむづかしくなつて来て居る」³⁶と述べ、哲学史の弊害を指摘しているけれども、これは「雪嶺の画期的大著」とされる『宇宙』が刊行されたあとの発言であつて、学窓を巣立つて間もない三宅にとつて『哲学涓滴』は自己の「哲学」の出発点を探るための習作なのである。

さらに、この二十二年当時、三宅は井上円了の主宰する哲学館に出講して「近世哲学史」を講じていたことも考慮に入れる必要がある。このときの講義内容は、「哲学館講義録」³⁷として刊本の形で残っているものによるほか、第一期生として二十三年に同館を修業した金森從憲の筆記³⁸を借覧することによつて知ることができた。それらによると、三宅の哲学史講義は、デカルトに始まりヘーゲル、スペンサーに到る概説的なもので、彼の独創にかかる部分はむしろ少なく、したがつて『哲学涓滴』が執筆された経緯と云ふのは、やはりフェノロサの哲学史講義を忠実に辿るものだったといふべきだろう。

では、以上のような経緯で書かれた同書の特色は何かというと、一つには緒論で展開されている彼独自の「哲学」観と、もう一つとしてはドイツ観念論の説明に比較的大きく頁を割いている構成とに認められる。とくに緒論は、この時期の三宅の基底的な思考方法を探るための格好の材料といえ、彼の思想を画するいくつかの萌芽的な要素をそこに見いだすことができる。その一つは、「哲学」の愉快を述べた次のような一節だろう。

凡そ学術は人をして他の獲る能はざる愉快を獲せしむる者なるが、彼の哲学に至ては、行く所として愉快ならざる無く、止まる所として愉快ならざる無く、事変に遭遇

して愉快を享けざる無く、焦盡して愉快を受けざる無からしむるなり。(中略) 哲学の修業焉ぞ愉快ならざらんや。哲学を修業するとして、必しも一室に閉居するに及ばず。教育に従事するも可なり、殖産に奮励するも可なり、政事に奔馳するも可なり。專業の余暇に之を修業せば、幾くは一たび成功して意氣猛く、一たび躑躅して肝胆落つるの弊風を免れんか。実に哲学は所謂浩然の氣を養ふ者。之を練り之を磨かば、尋常の中に寓して天地の間に塞がり、卒然として之に遇へば、王公も其貴を失ひ、晋楚も其富を失ひ、良平も其智を失ひ、賁育も其勇を失ひ、儀秦も其弁を失ふならん。(41)

三宅の出発点とした「哲学」は、専門家以外のだれにでも「修業」できるもので、「專業の余暇に之を修業」すれば「浩然の氣」を養うことができるという、きわめて通俗的かつ機能主義的なものであった。それゆえにまた、術学的な用字・用語を避け、その面では一定の評価も得た。外山正一は「論理書や哲学書は成るだけ分り易く、成るだけ面白き文章を以て之を綴ること肝要なり(中略) 貴君の哲学書は文章面白くして読者をして倦むこと莫からしむる者なり」(42) という感想を三宅あてに書き送っている。哲学の啓蒙という意味で果たした役割を評価してもよからう。だが一方で、このことは彼の哲学上の業績がいわゆる講壇哲学の中で占める位置を低くする要因ともなっているのである。

『哲学涓滴』で私が注目したいのは、三宅にとつての「哲学」が以上述べたような単なる西洋哲学の祖述や啓蒙的性格に終始するものではなく、そこに彼が終生一貫して追求することとなる東西文明の融合を「哲学」の次元でなし遂げていこうとする契機が現れていることである。そのことに関しては、「我国仏教にて印度に超越し、儒教にて支那に対抗

すれば、若し欧州の哲学を考究し転じて修業の法則を完備するに於ては、哲学に関して世界の中心たるを得ん」(43)と断言する。仏教・儒教・西洋哲学をしかるべき「修業の法則」で兼習すれば、日本独自の「哲学」創造して世界に貢献できるといふわけである。鹿野政直はこの点をとらえて、「独自性の発揚をつうじての調和へという方向を、かれはめざしていた」(44)と解釈している。たしかに、『哲学涓滴』を書いた三宅の場合、一方では大同団結運動を睨みながら、自己の「哲学」の出発点を示すことで、彼なりの「国粹主義」の理論化を試みていたといえよう。

「哲学」に関するこのような思考方法は、より状況論的な「日本人」の立場を模索した『真善美日本人』『偽悪醜日本人』の二書において一層鮮明にされる。前者は明治二十四年三月に、後者は同年五月に、共に政教社から発行された。『真善美日本人』は三宅の数多い著書の中でも今日もつとよく読まれる一冊となっている。両書の関係について三宅自身は、「対照は予期する所に非ざりしが為め、全く関係を有せずと見做すも妨げなし」(45)と書いているが、やはりワンセットにして考えるのが順当であろう。「真に明治二十年代ナシヨナリズムの遺した古典といわるべき作品」(46)と評価されている両書は、当時の国際状況において日本人が何をなすべきかという課題を示そうとした警世の書である。したがって、ナシヨナリズム云々というよりも、まず政教社の「国粹主義」を「日本人」という立場から総括した作品と位置づけることが可能であろう。

『真善美日本人』と『偽悪醜日本人』の内容分析に入る前に、一つだけはつきりさせておくべきことがある。それは、両書がともに『日本人』の発行停止中に政教社の新入社員だった湖南・内藤虎次郎と別天・長沢説に「口授」又は「演述」して完成したものだとい

うことである。そのため、例えば桑原武夫などは内藤について書いた文章の中で、「彼は三宅雪嶺のために、その傑作とされる『真善美日本人』『我観小景』などを代作している」⁽⁴⁷⁾と述べて、いわば「代作」説を打ち出している。しかし、「口授」「演述」は口述筆記のこととすれば「代作」とは随分ニュアンスが違うのであって、私は伝記作者柳田泉がいうように⁽⁴⁸⁾、内容はもちろん、文体も三宅独特の世界が伝わっていると思う。

さてその上で、両書執筆のモチーフは何かといえば、『真善美日本人』の序にあるように、第一議会議閉会後の「士民多く鬱鬱として楽むこと莫し、吁嗟邦家の事豈に此に止らんや」⁽⁴⁹⁾という状況を打破しようということにあり、そのために彼が設定したテーマは――すでに先行研究の多くが指摘しているように――「真・善・美、偽・悪・醜」という六つの視点から「世界人類」の「円満幸福」に資するため「日本人」が果たすべき「任務」を説くことにある。「真偽」「善悪」「美醜」という視点は、後年の大著『宇宙』ではそれぞれ人類の意識の諸面をなす「知能」「意能」「感能」と置き換えられて、絶大なる宇宙と「渾一観」――無限の連続（関係）において統一的に把握しようとする三宅独自の思想体系として結実する。ここで取り上げている二書では、その端緒が社会有機体説として説かれているといえよう。

三宅は、『真善美日本人』において、まず「日本人」とは何かを問う。それに答えて、次のような社会有機体説の思考方法を示す。

彼れ其の集るや必ず一体の国家を形くる。其の啓発するや、微なる種子の茁として芽を生じ、单子葉を開き、双子葉を開き、莖を長じ、幹を長じ枝を岐し、葉を茂らし、而して花さき、而して実るが如く、純然たる有機体を為して発達す。艸の如く木の如

く、知覚なきの有機体にあらずして、総体に通じて意識を具有し、動物よりも、人類よりも莊嚴高大なる優等の有機体を形くり、通商、工業、宗教、学芸、皆之が一官能とし、一機関として発達し、而して所謂之を統括すといふ所の政府其物も、亦之が一官能、一機関として、かの統括せらるると認むべき者と、同じく共に発達するなり。斯の如き有機体、徒然として集り、偶爾にして群する者の故さらに望で輒ち建設し得べき者にあらず。⁽⁵⁰⁾

これによると、国家を生物とのアナロジーにおいて有機体とみる国家有機体説の立場と、またその有機体は偶然に群集した者によってことさら「建設」されるようなものではないとみる非契約説の立場が明確にされている。さらに右の引用に続く部分で、「乃ち日本の国家あるが若き、亦豈に徒然として集り、偶爾として群するの能く成す所ならんや」⁽⁵¹⁾といい、「斯の如き国家、輒ち望て輒ち造り、日を期し挙手投足して弁ずること主意書を広布して会社を組織するが如く然るにあらざるなり。斯の如き歴史ある日本の国家に分子たるの人、斯に之を名けて日本人といふ也」⁽⁵²⁾と結ぶ。すなわち、三宅の社会有機体説は、「日本人の本質」を論ずる限りにおいて、契約説に替えるに歴史主義的な性格を帯びるに到る。右のようにまとめられる三宅の社会有機体説に基づいた国家観は、前述した「大日本帝国憲法を論ず」で示されていた議會主義を基調にする「君民共治」の国家観と較べたとき、抽象的にはなっているけれどもそれが第二章第三節で明らかにした社会進化論に規定された思考方法を踏襲していることを明確に示している。国家も政府も有機体の一機関にすぎないというこのような国家観が、反藩閥という批判の論拠になって、同時期の三宅の政治姿勢を規定していたことは疑いない。

しかしながら、『真善美日本人』と『偽悪醜日本人』に現れている三宅の国家観は、一見矛盾するいい方だが、国家そのものを究極の目的とはしていなかったように思われる。むしろ三宅は、そのような国家観によつて新たに意味づけられた「日本の国家」と「日本人」が、世界の「円満幸福」に貢献するための関係のあり方の追求にこそ、彼の思想的課題の重心を移していったのではないだろうか。「国家を成す者多し。彼れ皆各々其特能を尽して其の特色を秀絶せしむるの任務を負て而して立てり」(53)というように、明治二十四年の日本にも世界に貢献できる「特能」「特色」があるはずで、それを両書の本論部分では「真・善・美、偽・悪・醜」の各視点から現実的な諸問題に応じた貢献の仕方を論じているのである。そのような関係のあり方、貢献の仕方に関する三宅の結論は、『偽悪醜日本人』末尾の一節で次のようにまとめられている。

われや国を開て欧米と交通せしより僅に三十年、所謂世界文明後進の国土なれば、所謂先進文明の国たる欧米の新事物を容るるに急なるは勿論なりと雖も、而も静かに二千年来の發達を稽查するに、風俗習慣、礼文芸術、他人と交際するに於て敢て甚だしく恥るにも及ばざるなり。大凡社会の事物たる、他を模倣せんよりは、自家固有の特質を發達せしむるの優たることあり。蓋し我国固有の風俗たる奚ぞ悉く抹殺すべきものならんや。(54)

開国以来三十年、日本は「文明後進の国土」とはいいなから、欧米「先進文明」の模倣よりは「自家固有の特質」を伸張させていこうという決意の表明である。これが「国粹主義」の理論化において三宅の提示したこの時点における回答といえよう。時事論説と同時に独自の「哲学」によつて東西文化の融合を目指した三宅は、国家間のレベルでは社会進

化論の思考方法に基づく国家有機体説を契機として、「人類（個人）」と「国家」と「世界人類」を統一的な関係性において把握する思想を構築しつつあったといえよう。

第三節 「国粹主義」と「大同団結」

政教社の「同志」たちが「国粹主義」を掲げて雑誌『日本人』を創刊したとき、彼らが最初に直面した現実的課題は、大同団結運動にどのように対応するかということであった。大同団結運動は、一般に明治十九年十月二十四日に旧自由黨員らによって開催された全国有志懇親会の席上における星亨の演説、「小異を捨て、大同を旨とすべし。懇親既に成らば団結は自然に生ぜん。諸君幸に此意を諒せよ」⁽⁵⁵⁾から始まるとされている。これを機に政党活動は「霜枯れ時」を終えて「復興時代」に入り⁽⁵⁶⁾、翌二十年になると三大事件建白運動へと展開していった。第三章で推測したように、同年末の政府による保安条例の公布・施行によって生じた首都東京の政治的空白こそ、そもそも政教社の設立を促す要因ではなかったか。ここまではいわば大同団結運動の第一段階といえよう。

本章で検討を加えたいのは、続く第二段階とでもいうべき運動の展開と設立直後の政教社との関わり方についてである。この段階で運動の牛耳を執ったのは、周知のように後藤象二郎であった。彼こそは「明治政府、即ち薩長政府に対する攻撃の総同盟運動は、後藤伯に依つて出で来つた」⁽⁵⁷⁾とみなされる立場を運動の過程で獲得し、二十一年七月八月の信越・東北地方遊説において「伯の過ぐる所、靡然として無心の草木も大同団結の前に伏するの觀があつた」⁽⁵⁸⁾というような位置を確かにした。彼が各地で行つた演説は、我が国の「危急存亡」の現状を救済するのに「大同団結」の必要を説くにすぎないが、八月二十二日の帰京までにはその精力的な遊説によって大きな支持を得るに至っていた。このような現象は、升味準之輔がいうように、「一八九〇年の水門に向かつて次第に水位が高

くなつていく《中央志向型》な国会ラツシユを考えないでは、大同団結運動が中央・地方の政治家の関心をよんでたちまち流行と化した理由がわからない」⁽⁵⁹⁾ものである⁽⁶⁰⁾。

考えてみれば、政治を「趣味」あるいは「好物」とする「明治ノ青年」たちが、眼前の大同団結運動を等閑に付しておくわけがなかった。三宅が後年、「世間にてダイドウと発音するも、後藤自らタイトウと発音せり」⁽⁶¹⁾と回想していることなどは、彼と運動との間の「距離」が近かつたことを証する一例にすぎない。また、もはや政教社が運動から遠ざかってしまった明治二十三年春、「同志」の一人だった今外三郎は両者の関係を次のように総括している。

後藤伯が会て健気にも大同団結の議を主唱し、広く天下の志士と相結ばんとするに當てや、一時全国を挙げて之れに風靡せんとするの勢ありき。当時我輩等も亦大に之れに賛成を表したり。蓋し我輩等は大同団結なるものは、一朝事の起るに際し、国家維持上に最も必要なるものと信じたればなり。啻に當時のみならず、今日に於ても大同団結を以て一国の他国に対する一種の力と信じ、益々主唱して止まざるなり。⁽⁶²⁾

政教社の運動への深い関与が推測されるわけだが、この間の大同団結運動は、目前に迫つた国会開設を睨んだ選挙運動の側面と、大隈外相による条約改正交渉への反対運動という側面とが複雑に絡み合っているため、その全貌が捉えにくくなっている。もとより本稿は運動そのものの経過を明らかにすることが目的ではないので、以下本節と次節では、大同団結運動が胚胎した政治思想の側面のうち政教社に関連すること的を絞って、最初に「国粹主義」と「大同団結」を結合せしめた論理を探り、次に運動への実際の関わり方の性格を特徴づけ、最後に彼ら「同志」たちが理論と実践の乖離から得た教訓について、順

に説明していきたい。

まず最初に、政教社が設立当初から主唱していた「国粹主義」と、大同団結運動の唯一ともいえるスローガン「大同団結」を架橋するために、「同志」たちの側で準備し、採用した論理はどのようなものだったのだろうか、という点から考えてみたい。いま、分析の起点はあくまで政教社の「国粹主義」にあるにしても、この場合「大同団結」の側にも両者を接近させる論理が準備されていたとみるべきであろう。

先述したように、「大同団結」は後藤の演説などをみる限り、要は「危急存亡」に連帯して当る在野の政友を団結させようという内容いたつて空疎なものであった。しかし、少なくとも次の二つの点で「国粹主義」と接近しうる論理を包摂していた。一つは、後藤の主張する「大同団結」が政府主導の「欧化主義」に対する批判を含んでいたという、次の陸羯南による状況認識の中から窺い知ることができる論理である。

彼れ（大同論派・引用者）又た痛く政府の欧化主義に対して反対し、泰西模擬の弊は一国の滅亡に係ると迄に攻撃したり。此の点に於ては新論派たる国民論派と頗る相ひ合し、大同論派の代表者たる後藤伯が当時即ち一九年二十年の交に於て国民論派の代表とも云ふべき谷子と俱に偶然にも条約問題に反対せしは著しき事実なりとす。⁶³

陸は自らいう「国民論派」の一翼として政教社と共に運動に加わった経験で発言している。大同団結運動は三大事件建白の一つとして、「欧化主義」「泰西模擬」に象徴される井上外相の条約改正交渉に反対することを出発点としており、その意味で政教社設立の契機と同根だったといえよう。

もう一つは、「大同団結」がそもそも運動の論理として、旧自由党、改進黨から所謂保

守派まで、在野の勢力を広く糾合する必要があつたため、厳密な政治思想の体系というふうなものではなく、むしろ何でも包摂できるような非論理性を当初より胚胎せざるをえなかつたということである。したがってここでは、在野性（＝反薩長藩閥）という運動における立場が、論理に先立つて重視されることになるだろう。

一方、政教社の「同志」たちも大同団結運動に素早く反応している。『日本人』の論調でそれをみれば、第六号（明治二十一年六月十八日）で後藤たちの機関誌として創刊された『政論』を好意的に紹介したあと、第八号（七月十八日）の雑報「後藤伯の巡遊」では、「伯が所謂旨義とは如何。曰く公道を踏み正路を歩み、以て日本帝国の独立を永遠に保維するにありと。果して然らば予輩も亦伯が旨義に同感を表明する」（64）旨を宣し、後藤の説く「大同団結」に「同感」の意を示した。さらに、第一一号（九月三日）の社説は「乞ふ明治の志士よ、真に憂国の精神あらば小異を捨て、大同を取り、強大なる政党を構成せんことを努めよ」（65）と主張し、その一ヵ月後の同誌に投じた論説で菊池は、「克く大団結の大業をなさんとするの勇氣あり、又成し得るの望みあるものは今日後藤伯を措て亦何くにかある」（66）と述べ、後藤のリーダー・シップに大きな期待を寄せている。また杉江は、後藤と自由民権運動との関係に触れて次のように書いている。

仮令伯は自由民権を主張せらるるの人にもせよ、彼自由党の如き其目的の忠正誠実なるにも係はらず、其黨員に当代の名望家多きにも係らず、其党勢の末路を問へば或は一種言ふべからざるの汚風に感染したるもの決して無とはすべからざれば、後藤伯の今回樹立せんと欲する処の政党は斯る旧自由党の再興に非るは論を俟たず。（中略）

余輩は伯に就て聊か冀望する処ならんとす。他に非ず、主として外交殖産の事を誘導

し、自由民権の言は勉めて之を口外せられざらんことは是れなり。 67

このような対応をみせた政教社が、その主張する「国粹主義」と運動のスローガン「大同団結」を結合させるために準備したのは、どのような論理だったのだろうか。それは、すでに志賀と三宅の場合に即して明らかにしたような、政教社「国粹主義」の基底的思想がもつ思考方法の中に潜んでいたであろう。

志賀の場合についていえば、表面的には簡単な論理操作を要するだけである。本章第一節ですでに取り上げた論説「日本民族独立の方針」によると、「日本民族箇々の勢力を惣併する事」すなわち「大同団結」が要請され、続いて「大同団結」こそが「国粹主義」と密接に関連しながら「日本の国基を鞏固ならしむる最大手段」だという見解が示される。

日本民族の精神を独立ならしめんとせば、実に国粹旨義に囚らざるべからず。然り而して之れと共に亦日本民族箇々の勢力を惣併せざるべからず。日本民族箇々の勢力惣併とは即ち所謂大同団結なり。(中略)苟くも日本民族にして当世に雄飛し他民族と相拮衡せんしせば、須らく国民合一の大同団結に是れ囚らざるべからず。(中略)実に大同団結は真理なり、至義なり、日本の国基を鞏固ならしむる最大手段なり。 68

したがって、志賀にとつての「大同団結」は「国粹主義」と同様あらゆる価値判断の前提となる原則であるが、二つの——実は「殖産興業」も含めた三つの——原則を同時に主張しうる論理操作を保障していたのは、「勢力を惣併せざるべからず」という意識、第一節で明らかにした「勢力保存旨義」であった。志賀の自問自答によれば、「「日本旨義」(「国粹主義」のこと・引用者)とは何ぞや、「勢力保存旨義」是なり。勢力保存とは何ぞや、自己が特有の勢力を歩々着々發揮進暢して、其基礎を鞏固にし、其重心線を垂直な

らしめ、漸次の間に大勢力と化成するものを云ふ」⁶⁹のである。このような思考方法が進化論に起源するものであることはすでに述べた。しかし、「国粹主義」を「日本の開化」のための価値基準を選定する思想として構想していた志賀なのに、そのような文明思想の側面と現実の政治運動のスローガン「大同団結」のもつ政治思想の側面との内在的連関は、右に述べた以上には必ずしも十分に追求されることがなかったのではないかと思われる。それゆえ逆に、彼は運動の第一線に立つことに思想的な違和感を感じることは少なく、ここに、大同団結運動に深く関わり、その後の政治的経歴をみても対外硬運動、進歩党・憲政党・政友会の結成など、民党合同の運動にはことごとく参加する政治姿勢が準備されていたといえる。

一方、時事論説によつて社会的発言を開始した三宅の場合は、当然のことながら大同団結運動とも交差する論点についての考察を進めた。前節で明らかにしたように、立憲主義、議会重視の姿勢を打ち出したほかに、「薩長の前途を占ふ」と題した論説では、反薩長の立場から藩閥の一代限りでの衰退と、併せて政党政治到来の必然性を予測していた。三宅の筆を藉りるとすべてが彼独特の表現に変じてはいるが、これらの論点は皆自由民権運動が提示してきた政治像にほかならない。したがって、三宅に関していえば、政教社の「国粹主義」はたしかに自由民権運動の政治思想のうちの基本的な部分を継承していて、その点によつてやはり自由民権運動を継承していた「大同団結」と結合する論理を共有しえたといえよう。無署名ながら三宅の執筆かとも推測される『日本人』第一九号の社説「明治二十二年の新航路」は、次のように述べている。

抑も吾人が家を棄て身を忘れ、国を憂へ世を思ふ所以のものは、唯だ一国の独立不羈

と、人民の自主自由とを得るに在るのみ、左るからに、明治の初年より今月今日に至るまで、天下志士の運動は、一に此の両目的を達するの爲めならざるなし、(中略)然るに一昨年条約改正談判中止以来、社会に稍々生氣を生じて、政治上の運動を試むるの状ありと雖ども、余輩の眼を以てする時は、其の挙動は尚ほ甚だ遲鈍にして、如何にも国会開設前の邦国とも思はれざるなり。(20)

「政海」の「新航路」を「独立」と「自由」を主眼とする思想運動の延長線上に定めようというのだから、自由民権運動の政治思想を継承する一面をもっていたといつても差し支えないと思う。

ただし三宅は、実際の運動が胚胎する論理に対しては早くから懐疑的であつたようにみえる。維新以来在野の政治家に乏しいことを嘆じた文章の中で、「後藤伯一身にて益々運動するは、伯の胆略才量を表すに足れど、惜いかな多少の瑕瑾あり」(21)と評し、その「瑕瑾」すなわち欠点に対して「補助を求めずして済むべきや、今一回猛省して計画する所ありては如何があるべきや」(22)と警告を發している。彼がその後、後藤の入閣問題などを経ることはいよいよ運動の表面からは遠ざかり、志賀の場合とは対照的に対外硬運動、進歩党・憲政会、政友会の結成に際しても常に一定の距離を措いたことの淵源は、このあたりに潜んでいたといえよう。

志賀と三宅が大同団結運動を支持し参画するために準備した論理は、二人の「国粹主義」の理論化の方法が違つたことに対応して、相異なる方向に向かつて歩み始めていたといえるかもしれない。しかし、なおこの時点では、余り先回りせず、二人を含めた政教社「同志」たちの共通点を強調することの方が適当であろう。それは、彼らの結集を促す基

底的思考であつた政治的漸進主義と、「大同団結」が矛盾しないものであつたということである。志賀は『日本人』創刊号に寄せた論説で、同誌が「保守主義」も「過激極端の主義」も採らず、要するに「革命者に非ずして、改革者たらざる可からず。転覆者に非ずして修繕者たらざる可からず」(73)と述べている。他方、政教社の社友格だつた国友重章が、『日本人』第三号所載の論説で、「昨年条約改正事件の紛議起るや、国民的の漸進主義は朝野を合して一団結となり、大に勢力を顕はしたるより、従来一種の情実の為に朝野を画したる経界線は、一変して主義の経界線將に生ぜんとするの趨勢となれり」(74)といつてゐるように、「国粹主義」を標榜する思想集団であつた政教社が運動に参加するのには、「国民的の漸進主義」という「主義」に関する共感の意識が必要であつたと思われる。次節では、政教社が運動に参加していく場合の実態をみておきたい。

第四節 条約改正反対運動の一翼

ここで節を改めて、前節のはじめに設定した第二の課題、すなわち政教社が大同団結運動へ参加する場合の運動形態の性格を特徴づけることに努めてみたい。その際、明治二十二年(二十三年)にかけて、大同団結運動そのものがひとたび分裂の様相を呈しながら、大隈外相を中心に進められた不平等条約改正交渉に対する反対運動の中で団結を維持し、合従連衡の駆け引きの末、議会開設直前の土壇場で自由党が再興されるという過程において、政教社がそれら一連の政界再編成の動きとどのように関わっていたのかということに注目したいと思う。

後藤象二郎をリーダーに据えてはじめられた大同団結運動は、二十一年夏以降、地方遊説によって急速に支持者を拡大していったが、これに同道したのは後藤側近と目される大石正巳、菅了法などであつて、政教社の「同志」たちが運動に直接関与した形跡は認められない。むしろ独自の運動を展開しつつあつたのではないかということは、後藤の遊説開始にやや先立つ六月十七日に、辰巳、三宅、棚橋、島地の四人が、麻布の高等普通学校において「日本主義」の演説会を開催していることから推測できる²⁵。ところが、史料的な制約もあつて、その後約半年以上の間、政教社と大同団結運動との実際の関わりについてはいまひとつ判然としない。この間にも『日本人』誌上で後藤の運動への支持を繰り返していたことは先述した。また、運動そのものも、十二月七日から翌二十二年一月二十五日まで越年で強行された後藤の東海・北陸遊説によつて、ますます熱を帯びていた。この時点でほぼ東日本を席卷したかたちである。二十一年十月十四日には栗原亮一らによつて

大阪で大同団結有志懇親会が開かれ、同二十八日に熊本で開催された旧九州改進黨大会も大同団結派の集会であったので、大同団結はこのときすでに全国的な運動になっていたのである。

一方、二十年夏に下野した谷干城を中心とする政治勢力結集の動きも、二十一年の後半期になると活発化してきた。この運動を担ったのは杉浦たち乾坤社(26)の面々である。杉浦の「備忘録」によると、同年中乾坤社はほぼ月一回のペースで会合を重ねていた。同社の一員だった福富孝季がドイツ留学から帰国したのがその年の六月十六日で、これ以降、谷と同郷の土佐出身であった福富の仲介によつて、乾坤社は谷と接近する。とりわけ同年末になると、陸の新聞『東京電報』を改刊する計画を打ち合わせるために、両者の会合頻度は増してくる(27)。この計画は、翌二十二年二月二十一日の新聞『日本』創刊として実現された。この時点になると、志賀が谷の面識をえていたのは確かなようである(28)、既述のように政教社では『日本』の出現を「主義の兄弟」「同主義の親友」として歓迎する。

このほか、二十一年十一月には、谷とともに“不平將軍”といわれた鳥尾小弥太を中心として、保守党中正派が旗揚げした。鳥尾の抱く仏教主義の色彩をも帯びたこの派の運動は、その後かならずしも順調に伸展したわけではなかったけれども、二十三年七月の第一回総選挙まで存続して独自の位置を占めた。これが我が国で「保守」の名を冠した政党では最初ではないかと思われるが、第一節で述べたように政教社がこれと混同されて「保守党」扱いされることもあった。仏教系の政治運動としてはこのほかに、大内青巒が中心となり政教社から辰巳が参加した尊皇奉仏大同団があつて、以上の諸派とほぼ同時期の二十年一月から活動を開始している。

こうして、二十二年二月十一日、大日本帝国憲法が發布されたとき、在野の政治運動は後藤の大同団結を主流に、乾坤社・『日本』グループ、政教社・『日本人』グループ、保守党中正派のほか各地で発生した地域的な結合をも加え、複雑な潮流を示しはじめていた。さらにこのとき、複雑さの度合いを増す要因となったのは、憲法發布に伴う大赦で、河野広中、大井憲太郎、星亨等かつて自由民権運動に関する種々の「事件」で収監されたり、東京を逐われていた旧自由党の主要メンバーが、再び上京してきたことである。それはとりもなおさず、旧自由党という共通項をもちながらも複雑な派閥的關係を有する彼らが、続々大同団結運動に参入してくることなので、事態は一層錯綜してきた。一つだけ明らかなのは、後藤の側近グループや政教社の「同志」たちが運動の中で占める地位は相対的に低下していったということである。したがって、井上角五郎、綾井武夫、志賀重昂、三宅雄二郎の四人が、三月に福島県須賀川町で開催された河野広中出獄慰問招待会まで出かけて行ってその上京を促した²⁹というのは、彼らにとっては皮肉な結末を招来するものであった。

この直後に、大同団結運動をめぐる事態を徹底的な混迷に導いたのは、三月二十二日に後藤本人が黒田内閣の逋信大臣として入閣してしまったことである。谷干城の「日記」をみると、その十日前の十四日の条に「後藤氏出仕の事に決意の由」³⁰とあり、翌日には、高橋、福富、千頭ら乾坤社・『日本』グループの面々が谷を訪れて、後藤入閣に不満の意を確認しあっている。このとき、後藤の後事を託す人物として周囲から期待されたのは、ほかならぬ谷本人であつたらしい。「日記」十八日の条に「浅野氏を辞し三浦氏に行く。三浦氏も亦余が宅を訪ひしより只今歸りたる所なり。話亦後藤氏の事に及ぶ。且後藤

氏の集めたる大同団の事に及び、余に其の後を治するの可なるを言ふ」(81)とある。松下の記すところによると、同じ日杉浦は「当時民間の有志四分五裂、帰する所を知らず。是れ事の挙らざる原因なり。今日の急、宜しく此の弊を除去して皆一に歸し、戮力同心事に従はざるべからず。先づ第一着に谷將軍と後藤伯とを和合するを良しとす」(82)と語ったという。翌十九日になると、朝から井田讓が谷を訪ねて出馬を乞うが結局谷は立たず、同夜大同団結派は火曜会という倶楽部を江東中村樓に発足させ、その席で後藤入閣の賛否を問うたところ、二対三十で反対者が多数を占めた。ついで後藤自身の弁解演説を求めたあと、三宅が立って入閣反対の演説を行った(83)。谷もあえて火中の栗を拾うことはせず、結局大同団結派はリーダーを失ったのである。このときの三宅の演説内容は正確には伝わらないけれども、生来の訥弁ゆえ演説を苦手とした彼が即座に立って反対意見を表明したということは、後藤に対して抱いていた期待の大きさと、同時にまた失望の深さを暗示してはいないだろうか。三宅の伝記はこの点に関して、「明治二十一年から二年にかけて、後藤象二郎の大同団結の運動には殊に乗気になったが、やがて後藤の表裏ある言動に憤って、自分からその運動を離れるとともに実際の政治運動には二度とタッチせず、与かるところは、すべて思想関係だけとした」(84)と述べている。このとき三宅が感じたであろう憤りは、生涯を貫く政治姿勢を規制する端緒の一つになったと思われる。

周囲の反対を押し切る形で入閣した後藤ではあったが、大同団結派は各地の同志を説得するために「弁解委員」を派遣して、事態の混迷を收拾することに努めた。政教社からも松下文吉が近畿地方派遣の委員となって出発した(85)。しかし、約一か月後の四月三十日に開催された同派の主義綱領起草委員会で、河野広中らの政社派と大井憲太郎らの非政社

派が顕在化し、五月十日にはついに各々大同倶楽部と大同協和会を結成し運動を分裂させてしまふ。

実はこの間、『日本人』は第二十三号（明治二十一年三月三日）の記事によつて発行停止の処分を受けていたので、政教社は運動の言論面を担う主要なへ媒体を失つていたことになる。同誌は、主義綱領起草委員会が決裂した四月三十日に、事態を見透かされたように解停となるが、政教社にとつてこの約二か月は重大な意味をもつていたと思われる。大同団結派分裂直前に、「国粹顕彰」を掲げて改刊された『日本人』は、運動の主流となつた旧自由党グループに対して次のような「忠告」を与えている。

旧自由党員の挙動は、政府の大に忌憚する処なり。随て社会の人心も之を憚り、忌避するの情況なしとせず。旧自由党の事業ハ已に失敗せり。旧自由党の本城は已に滅亡せり。河野、大井等の諸氏は謂はば敗軍の将なり。敗軍の將にして、更に率先して、事を天下に挙げんとするは、人心の向ふ処る或は薄弱なるなからんや。余輩は大同団結の命運のために、失敗諸氏の当分遠慮して台頭的の運動を慎まれんことを忠告するものなり。 (86)

要するに、政教社は、大同団結運動が旧自由党グループによつて専断され、その派閥抗争に転化することを批判しているわけだが、それを未然に防ぐことができなかったこと、すなわち運動内部で敗退を余儀なくされたことを間接的に認めているのである。とまれ分裂は現実のものとなり、「国粹主義」の運動形態として政教社が「大同団結」に託した期待はこの時点で一頓挫した格好となる。

ところが、問題は思わぬ方向から生じてきた。黒田内閣では、伊藤内閣から引き続いて

大隈重信が外務大臣を務めていたが、各国別談判方式によって進められていた条約改正交渉の内容が四月十九日付の London Times に掲載され、それを五月三十一日から六月二日にかけて『日本』が転載したことから、反対運動がしだいに盛り上がってきたのである。

このとき、分裂した大同倶楽部と大同協和会が協同して反対運動を起した理由は、大隈外相の条約改正案が内地雑居と外国人判事の採用を前提にしたものであったことに対して、そもそも彼ら大同団結派結集の原点でもあった二年前の井上外相による条約改正案に反対する運動の記憶が甦ったことにある。だがこの場合はさらに、旧自由党にとつての宿敵立憲改進黨が大隈案に賛成する立場にあつたため、党派的な対抗意識がむき出しにされた側面も大きい。そのような中で政教社は、志賀が日刊『政論』の第一号に寄書して「想うに日本国裡の在来なる政党派の会衆にして、意匠の最も年少単白、而して未だ琢磨せず、甚だ精錬せざるもの即ち今後愈々發達、愈々進暢するの余裕あり、容量あるものは、独り大同団結派あるのみ」⁽⁸⁷⁾ といひ、松下が日記に大隈条約改正交渉に対して「余は何処までも不賛成の一人」⁽⁸⁸⁾ と書き付けたように、大同団結の立場から条約改正に反対するといふものであつた。

当時、大隈案を支持したグループは、今外三郎によれば次の三つに分類される。

第一 大隈伯崇拜者

第二 改進黨員

第三 淺薄学者⁽⁸⁹⁾

一方の反対派は、運動が最盛期を迎えた八月の段階で、「大同倶楽部・大同協和会・保守党中正派・政教社（および新聞『日本』社友）・九州団体連合（熊本紫溟会・福岡玄洋

社など)の「五団体連合」(20)であった。八月十九日、江東中村楼で開催された五団体の各府県有志親睦会に、政教社からは松下、辰巳、杉江、今、菊池が参加し、乾坤社からも杉浦、国友、千頭、国府寺らが出席した(21)。このうち、九州団体連合所属の熊本紫溟会を代表して反対運動に加わっていた佐々友房は、当時の政界・言論界を条約改正問題に対する立場によって分類した興味深い表を残している(22)。表中の反対論者・在野党のところ「東京学士社会」とあるのが、政教社・『日本人』グループ、乾坤社・『日本』グループを指していることは疑いない。第三章で述べたように、政教社の「組織」は「学士社会」の特質を直接引き継ぐかたちで形成されたものと考えられるが、この反対運動はその「学士社会」がそのまま一つの政治勢力として機能した一例といえよう。またその際、表中からも窺えるように、賛成、反対の両派はそれぞれの新聞雑誌をもっていて、政治運動の局面において言論機関の果たす役割が大きくなってきていたことをも暗示している。

政教社の「同志」たちが拠った日本倶楽部は、八月十五日に乾坤社・『日本』グループが中心となって、谷の外に三浦梧楼、浅野長勲などを巻き込んで結成された反対運動の拠点で、福岡玄洋社の頭山満や石川盈進社の遠藤秀景らも出入りし、当時日本新聞社員だった古島一雄の回想によれば「宛然たる梁山泊」(23)というものであったらしい。ただし、政教社がこの運動に参加する場合の基本姿勢は、菊池による次の発言にも明らかかなように、あくまでも「同志」個人としての参加であった。

我「日本人」社中は「日本人」社中として、即ち「日本人」社中の一団結を以て、或る一種の政党に加盟すること能はざるものなることを弁じ、(中略)由し「日本人」社中の一人在、何何党に加盟し居るにもせよ、そは一己人としての事にして、政教社

況景ノ野朝ルス関ニ正改約条

糊模味暖	派正改	対反局部部	者論対反	主 義 類
後藤 通信 大臣 (投機師天氣次第) 井上 農商務 大臣 土方 宮内 大臣 山本 文部 大臣 陸軍 大臣	黒田 総理 大臣 元老 院 議員 多数	伊藤 枢密 院 議長 山田 司法 大臣 松方 大藏 大臣 西井 法制 局長 郷 海軍 大臣	寺島 枢密 院 顧問 官 尾島 枢密 院 顧問 官 元副 島 枢密 院 顧問 官 海田 枢密 院 顧問 官 品川 元老 院 議員 官 前田 宮中 顧問 官 三浦 宮中 顧問 官 浅野 無任 所 公使 川高 等 師範 学校 長 (少将)	政府 部 内
	立憲 改進黨 並 二 附 屬 ス ル 九 州 派 部 ノ 改進黨 及 ビ 關 東 ノ 改進黨		谷 板 垣 伯 軍 大 九 州 独 立 論 者 保 守 党 俱 楽 部 派 高 知 俱 楽 部 派 關 西 独 立 党 志 奥 羽 七 州 有 志 東 北 十 五 州 有 志 東 京 学 士 社 会 党 土 佐 旧 自 由 党	在 野 党
国民之友	報 知 新 聞 朝 野 新 聞 日 新 新 聞 改 進 新 聞 読 売 新 聞 興 論 新 誌 經 済 新 誌	時 事 新 聞 東 京 日 々 新 聞 中 外 電 報 新 聞	日 本 公 論 東 京 新 報 保 守 新 論 東 京 自 由 新 報 繪 入 自 由 新 聞 關 西 日 報 東 日 新 聞 雲 日 新 聞	新 聞 雜 誌 三 府 二 限 儿 日 本 人 經 世 評 論 大 同 新 報

の全体は、少しも之に関係する筈なし。 94

したがって、運動が最高潮に達した八月二十六、八日の千歳座における反対派の三日連続全国連合大演説会で、辰巳が「日本帝国は独立国なり」、杉江が「終に吾が国を如何せん」（演説不許可）という演説を試みたというのも、少なくとも政教社・『日本人』グループにとっては「己人」（個人）としての参加と意識されていたはずである。他方、谷の「日記」をみると、杉浦、高橋、千頭、福富、陸などの乾坤社・『日本』グループは連日のように会合を重ねて集団で行動しており、両者の運動形態はずいぶん異なっているように感じられる。この点からも、従来二つのグループをもって「ほとんど一心同体」とされてきたのは、再検討されなければならない。陸は、前述のように自身の『日本』と政教社の『日本人』の論張を「国民論派」と名づけ、同一の思想傾向とみなしているが、両者が実際に接近していったのはむしろこの反対運動を通してのことだったと考えた方が事実合致している。杉浦が名実ともに政教社の「同志」となるのもこれ以降のことである（序章表3参照）。

ところで、反対運動そのものは、先の大演説会で最高潮に達したといえるが、例えば谷は「日記」の八月二十三日の条に「大隈氏もすでに屈伏せるよし」⁹⁵と記し、早くも終息の兆候をみせていた。もしそうならば、高潮した反対運動の波をいかに組織化するかということが次の課題とされて然るべきだが、政教社も含めた日本倶楽部のグループにはその明確なビジョンはなかったようだ。結局、十月十八日、玄洋社員来島恒喜の投じた爆裂弾によって大隈が負傷し、条約改正交渉が事実上延期になったのをみると、反対運動は目標を失って一気に終息へ向う。同月中に五団体連合は解散し、また日本倶楽部も六九五円

一 一錢五厘の運動費を残して十一月三日に解散の祝宴を神田開化楼に開く。同倶楽部の解散は、政教社にとって現実の政治活動の足場を喪失したことを意味するものであった。松下は日記に、「終に条約改正中止の問題に志を得て、再び旧巢の教育界に復期す」⁹⁶と記している。これに対して、同じ十一月の十一日に、大井憲太郎が土佐に板垣退助を訪ねて自由党再興を促したのは、対照的でさえある。三宅の『同時代史』はいう、「後藤の入閣と共に混乱せし大同団結は条約改正中止に一致し、条約改正の否決と共に、再び分裂するの余儀なきに及び、即ち政社派なる大同倶楽部と非政社派なる大同協和会と、相ひ軋輾して已まず」⁹⁷。以後の大同団結運動は、議會開設という具体的な目標を軸に展開し、とくに第一回総選挙（二十三年七月一日〜三日）後は、旧自由党三派（大同倶楽部、自由党、愛国公党）、九州連合同志会、改進黨のいわゆる進歩派合同問題として取り上げられる。ここには、前年の五団体連合のうちの日本倶楽部も保守党中正派も九州団体連合も出てこない。

政教社は、その二十三年春、一連の運動の失敗を正式に宣言する。

大隈伯の遭難あり、条約賛成の党派暗夜に灯を失へるに似たり。嗟吁機に乗ずる此時にあり。業を励むも此時にあり。而て余輩之を知らざりしなり。諸君之を知りしや、否や。（中略）大隈伯の遭難あるや、余輩惟へらく、事茲に成る、続けて運動せば治安を妨害するに及ばん。強て匪勉するも別段に得る所なからんと。焉ぞ知らん銳意熱心に奔馳すべきは、真に此に在りしことを。想へば思へば悔恨に堪へざるなり。⁹⁸

では、以上のような大同団結運動の政治過程に直面する中で、政教社の「同志」たちは言論と政治の関係について何を経験化していくことができたのだろうか。最後にこの問題

を三つの点から考えてみたい。

第一に、政教社は当初、大同団結派内においてすでに主流を占めるようになった旧自由党、とくに河野グループとの協同を模索し、のちに離反していったことである。政教社は、旧自由党の派閥的な運動原理といわゆる壮士風の運動形態とに、本質的になじめなかつたと考えられる。三宅の時事論説などをみると、原理的なレベルで自由民権運動の成果を継承する側面を有するものの、二十一年初頭の政治的空白期に新しい主体として「学士社会」の特質を保持しながら登場した政教社は、大同団結運動に参入しつつも運動が分裂した時点で旧自由党に対する批判的な立場を鮮明にする。前節でも検討したように政教社には必ずしも明確な運動論があつたわけではなく、「同志」たちが基底的な思想として共有していた政治的漸進主義が、元来自由党への違和感に由来していたことを想起すべきだろう。

第二に、実際の政治運動に対するときのスタンスとして、政教社ではあくまでも「己人」としての参加に限定しようとする努力をしたことである。この場合、志賀と三宅は対照的な方向を選びつつあつたように思われる。志賀は、大隈の遭難によって運動が目標を見失つてしまったあと、明治二十三年の正月を郷里の土佐で迎えるため帰省する谷に同行したことからも窺えるように⁹⁹、運動に一步ふみ込んでいく姿勢を示している。一方、三宅は、後藤入閣の時点から大同団結派とは徐々に距離を置くようになったようだ。この間、条約改正反対運動が最高潮に達しようとしていた二十二年八月はじめに発行された『日本人』誌上に、杉江と連名で「小生儀為海水浴旅行致候」¹⁰⁰という広告を載せていることにも注目したい。運動の最盛期に呑気に海水浴に出かけるといふのは何とも腑に落ちない気がす

るが、彼が当時『哲学涓滴』の執筆を進めていたことを考え合わせると、実際の政治運動に没入しないという生涯を貫く原則的な姿勢は、この頃から意識化されはじめていたといえよう。

第三に、条約改正問題における「対外硬」の姿勢を確認したことである。三宅は、大隈の遭難の直後に「余輩の伯を見る、改進黨員を見るに異なり。伯は剛毅なり、大胆なり、愛国心に富めり」(10)と述べている。爆裂弾で隻脚を失った大隈への同情もあるが、条約改正の態度がかつての井上外相の「欧化主義」とは違って、「強硬外交」(対外硬)を基調としていたことへの一定の評価に基づいている。この「対外硬」の立場が、のちに日清戦争前後における、対外硬運動から進歩党結成へという政治過程に政教社が再び関わっていく論理を準備している。

第四章 註

- (1) 菊池熊太郎「国粹主義の本拠如何」、『日本人』第一九号(一八八九年一月三日)七頁。
- (2) 民友社の〈組織〉の特質について、和田守は「蘇峰の思想的影響力と組織的統率力のもとで比較的まとまった思想・言論集団を形成した」(『近代日本と徳富蘇峰』(一九九〇年、御茶の水書房)一三九頁)と捉えている。
- (3) 「日本人」の革新」(『日本人』第五九号(一八九〇年十一月二十五日)所収)で試みられている政教社自身による時期区分を参考にした。
- (4) 前掲(第三章註²³)岡和田「青年論と世代論」、四四頁。たしかに、設立当初の政教社の住所「東京府神田区小川町二十五番地」は志賀の住所でもあった。
- (5) 志賀「日本人」が懐抱する処の旨義を告白す」、『日本人』第二号(一八八八年四月十八日)四〜五頁。
- (6) 志賀「日本前途の国是は「国粹保存旨義」に選定せざるべからず」、『日本人』第三号(一八八八年五月三日)所収。
- (7) 志賀は「日本人」の上途を餞す」において、「保守主義を懐抱する者に非ず」「過激極端の主義を蘊蓄する者に非ず」と述べている(『日本人』第一号(一八八八年四月三日)三〜四頁)。
- (8) 志賀「日本少年の為すべき事業(続き)」、『少年園』第一卷第八号(一八八九年)五頁。

(9) 志賀「日本民族独立の方針」、『日本人』第二三号(一八八九年三月三日)一四頁。

(10) 陸羯南「日本文明進歩の岐路」(一)、明治二十一年六月九日付『東京電報』。

(11) 『英和双解字典』(一八八五年、丸善商社)及び『英和字海』(一八八七年、文学社、鈴木重陽と共訳)参照。Nationality, national characterの訳語として、前者では民情、民性、国、国体、国風が、後者では民性、民情、民生が挙げられている。東京大学三学部印行『哲学字彙』(一八八一年)でも民情、国体が当てはめられている。

(12) 中国の「国粹」については、前掲(序章註²⁵)山室「国民国家・日本の発現」のどくに一〇五頁、朝鮮でのそれについては趙景達「朝鮮近代のナショナリズムと文明」(『思想』第八〇八号(一九九一年)所収)をそれぞれ参照のこと。

(13) 前掲(註6)志賀「日本前途の国是は「国粹保存旨義」に選定せざるべからず」、四頁。

(14) 松沢弘陽「西欧の文明論と日本の文明論」、徳永恂編『社会思想史』(一九八〇年、弘文堂)一八〇頁。他に同氏による「文明論における「始造」と「独立」」(一)(『北大法学論集』第三一卷第三、四号Ⅱ(一九八一年)所収)、同(二)(同第三三卷第三号(一九八二年)所収)参照。

(15) 福沢諭吉「福沢全集緒言」、慶応義塾編『福沢諭吉全集』第一巻(一九六九年、岩波書店)二三頁。

(16) 西洋文明とほとんど同義であった「文明」がその後の我が国で辿った道筋は、日

清戦後における陸羯南の発言の中に、「欧州列国の此の東亜に於れる近状を以てせば、彼れ列国は殆ど文明国にあらずして野蛮国なり。野蛮国に向ひて反抗を企つる者は、是れ真正の文明家にあらずや」(「真正の文明国」、明治三十一年四月二十四日付『日本』掲載)とあるように、もはや「野蛮」に象徴される「負」のイメージに転化しており、さらに第一次世界大戦中の大正期になると、細井和喜蔵が「彼女は近代文明が建設した工場で、最新科学の粹をあつめた機械を取扱っているのであるが、妙に文明の利器を怯じ恐れる性質をもつ。そうして物事をなすに当たるとかく億劫で決断力がない。また常に怛鬱がちで明るい快活な処がないのである」(『女工哀史』(一九五四年、岩波文庫版)三三六頁)と観たように、「文明」そのものが人間を疎外する「悪」の連想で語られることもあった。また、そのような経路とは別に、明治四十一年(一九〇八)に大隈重信の主唱によって設立された大日本文明協会による一連の文化事業の例を挙げることができる(佐藤能丸「大日本文明協会試論」、『早稲田大学史記要』第二一卷(一九八九年)参照)。これらさまざまな「文明」の展開相を念頭に置きながら、志賀の思惟方法を位置づけていく必要があろう。

(17) 志賀「開国後の日本」、『日本人』第一一号(一八八八年九月三日)一二頁。

(18) 前掲(註3)「日本人」の革新」、二頁。

(19) 志賀「日本国裡の理想的事大党」、『日本人』第五号(一八八八年六月三日)五頁及び「大和民族の潜在力」、『日本人』第七号(一八八八年七月三日)二頁。

(20) 丸山真男「解題」、福沢諭吉著作編纂会編『福沢諭吉選集』第四卷(一九五二

年、岩波書店」四一五頁。

- (2) 菊池「国粹主義の本拠如何」、『日本人』第一六号（一八八八年十一月十八日）二頁。

- (22) 同右四頁。

- (23) 前掲（序章註²）植手「『国民之友』・『日本人』」、一二二頁。

- (24) 棚橋一郎「帝室と人民」、『日本人』第一八号（一八八八年十二月十八日）一八頁。

- (25) 前掲（註²）菊池「国粹主義の本拠如何」、五頁。

- (26) 菊池「日本国粹を保存し助長せんとすれば責任宰相の制を設けざるべからず」、前掲註（24）『日本人』第一八号八頁。

- (27) 同右一〇頁。

- (28) 理学宗について菊池は、「社会一般の現象は悉く社会勢力の発作に係り、社会勢力の発作は亦重学の原則に由るものなることを確信するより、其の原則に順従せざれば正当なる行為の根拠を得べき者に非らざることを主唱して、政治、経済、道德の三途より人類の大目的を致了するの方便を指示せんとする者なり」（「ドクトル、ヘーリング氏に答ふ」、『日本人』第八号（一八八八年七月十八日）七頁）と説明し、また簡潔に「理学の諸原則に基く修身の系統なり」（同八頁）ともいつている。同じように杉浦は、「我々は理学上の法則を基礎とし、善因善果の理を推して、身を修め事を処し、世に立たうとするのだ」（猪狩史山「杉浦先生周囲の人々」、回想杉浦重剛編集委員会編『回想杉浦重剛』（一九八四年、杉浦重剛先生顕彰

会〕(二一頁)と語り、さらに後年になると「エネルギー保存の原理」(猪狩史山・中野刀水『杉浦重剛座談録』(一九四一年、岩波文庫版)一七〇頁)と述べているのである。

ところで、右引用文中菊池のいう「人類の大目的」とは、別の論説では「進化説」を根拠として「無限ノ星霜ヲ経過スルニ至ラバ終ニ完全無欠ノ人類ヲ造成スルト」(「行為ノ標準」、『文』第一巻第四号(一八八八年)四二頁)とされていることにも注目したい。

(39) 紀伊天籟生「国粹保存主義の気焰」、『日本人』第三五号(一八八九年十一月十八日)三四頁。

(40) 『日本人』第六二号(一八九〇年十二月十六日)所載の「伊藤春畝を送る」の署名に「雪嶺翁」を用いているのが最も早い例と思われる。

(41) 一例として佐藤能丸「高島炭坑問題と国粹主義」(『史観』第九二冊(一九七五年)所収)を挙げておく。

(42) 前掲(第三章註46)末兼『国民之友及日本人』八四頁。

(43) 三宅「大日本帝国憲法を評す」、『日本人』第二二号(一八八九年二月十八日)五頁。

(44) 同右六頁。

(45) 同右七、八頁。

(46) 同右八頁。

(47) 三宅『哲学涓滴』(一八八九年、文海堂)四七頁。

- (38) 森田義郎編『壇上より国民へ』(一九一五年、金尾文淵堂)一九六頁。
- (39) 三宅講義、田中泰麿筆記『近世哲学』及び井上円了・三宅講述『哲学史講義』(東洋大学図書館所蔵)。前者は近世哲学のうちデカルトのみを取り上げたもの。後者は、緒論を井上が、古代哲学史、近世哲学史を三宅が担当したものを合冊している。三宅の近世哲学史講義をみると、「スペンサルの特別の功といふは、他人より進化の理法を広く応用したるにあり」(同書三六七頁)とされ、第一原理、生物学原理、心理学原理、社会学原理のすべてに言及している。
- (40) 兵庫県竜野市善竜寺所蔵。「哲学史 文学士三宅雄次郎述」とあり、内容は右の『近世哲学』と重なっている。
- (41) 前掲、三宅『哲学涓滴』九〜一六頁。
- (42) 明治二十二年十月二十五日付三宅宛外山正一書簡、『日本人』第三三号(一八八九年十月二十七日)三五〜三六頁。
- (43) 前掲、三宅『哲学涓滴』三六〜三七頁。
- (44) 前掲(序章註38)鹿野「ナシヨナリストたちの肖像」、四六頁。
- (45) 三宅『偽悪醜日本人』(一八九一年、政教社)序。
- (46) 前掲、鹿野「ナシヨナリストたちの肖像」、四九頁。
- (47) 桑原武夫「解説」、内藤湖南『日本文化史研究』(下)(一九七六年、講談社学術文庫版)一七二頁。
- (48) 前掲(第三章註42)柳田『哲人三宅雪嶺先生』五一頁。
- (49) 三宅『真善美日本人』(一八九一年、政教社)序一〜二頁。

- (50) 同右四～五頁。
- (51) (52) 同右六頁。
- (53) 同右一〇頁。
- (54) 三宅『偽悪醜日本人』六二頁。
- (55) 有泉貞夫『星亨』(一九八三年、朝日新聞社)一〇九～一一〇頁。
- (56) 林田亀太郎『日本政党史』上巻(一九二七年、大日本雄弁会講談社)二四一頁。
- (57) 前掲(第一章註17)徳富『蘇峰自伝』二三八頁。
- (58) 明治功臣録刊行会編輯局編『明治功臣録』地の巻(一九一八年、明治功臣録刊行会)九一一頁。
- (59) 升味準之輔『日本政党史論』第二巻(一九六六年、東京大学出版会)一〇三頁。
- (60) そのような動向を扱った研究としては、渡辺隆喜「大同団結運動と地方政情」(『駿台史学』第五〇号(一九八〇年)所収)、佐野一夫「静岡県下における国会開設前夜の政治活動素描」(『静岡県近代史研究』第一〇号(一九八四年)所収)、M・W・ステイール「議会政治の誕生」(坂野潤治・宮地正人編『日本近代史における転換期の研究』(一九八五年、山川出版社)所収)、安在邦夫「一八八七年における国民的要求の位相」(『歴史評論』第四五二号(一九八七年)所収)などが挙げられよう。
- (61) 前掲(第一章註1)三宅『同時代史』第二巻三四六頁。
- (62) 今外三郎「全国民に一言す」、『日本人』第四二号(一九九〇年三月三日)四頁。

(63) 陸羯南『近時政論考』(一八九一年、日本新聞社)、西田長寿・植手通有編『陸羯南全集』第一卷(一九六八年、みすず書房)六一頁。

(64) 「後藤伯の巡遊」、『日本人』第八号(一八八八年六月十八日)二二頁。

(65) 「余輩同志は何如なる主義を執りてか運動すべき」、『日本人』第一号(一八八八年九月三日)四頁。

(66) 菊池「古今英雄を崇拜するの別」、『日本人』第一三号(一八八八年十月三日)六〜七頁。

(67) 杉江輔人「後藤伯東北漫遊に就き冀望する処あり」(志賀家所蔵)。この原稿は『日本人』のために寄稿され、朱筆による修正や読点が施されているので掲載予定であったのに、何らかの理由で実際には活字にはならなかったものと思われる。

(68) 前掲(註9)志賀「日本民族独立の方針」、一五〜一六頁。

(69) 志賀「日本前途の二大党派」、『日本人』第六号(一八八八年六月十八日)五頁。

(70) 「明治二十二年の新航路」、『日本人』第一九号(一八八九年一月三日)一頁。

(71) (72) 三宅「維新後政府外の政治家」、『日本人』第八号(一八八八年七月十八日)一一頁。

(73) 志賀「『日本人』の上途を餞す」、『日本人』第一号(一八八八年四月三日)四頁。

(74) 国友重章「日本政治社会の一新現象」、『日本人』第三号(一八八八年五月三日)八頁。

(25)

「政教社員運動」、『日本人』第七号（一八八八年七月三日）二八頁。このときの島地演説は、筆記によると「日本人の父母」と題するもので、文明と政教の關係が次のように説かれている（二葉憲香・福嶋寛隆編『島地黙雷全集』第一卷（一八九七三年、本願寺出版協会）所収）。

我曹三千八百万人ノ精神形体上ニ發現セル有形無形ノ文明ニ於ケルモ、之ヲ生育セシ所ノ父母ナキヲ得ズ。即チ我曹一国民ノ精神トシテ、海外諸国ニ対向シ、或ハ恥ズ或ハ誇リ、或ハ恐レ或ハ競ヒ、一体同胞ノ感情ヲ懷抱スル此一大生物ノ日本人ヲ、今日此形体精神ニマデ生育シタルノ父母ハ何者ゾ、豈遠ク之ヲ他ニ求メンヤ。近ク我曹同志ガ日本人ト題名セシ雜誌発行ノ社名ニ付シタル政教ノ二字即チ是レナリ。（同書四七六〜四七七頁）

このあとの部分で島地の主眼は、教化、教法の手段として仏教を据えることに置かれてゐる。政教社の思想運動が政治運動だけに限定されるものでなかつたことを示す一例といえよう。

(26)

乾坤社とは、明治十九年九月か十月の頃、次に掲げる十八名が共同出資して新聞発行のために印刷所を経営することになつた同盟の名称である。その印刷所が政教社の印刷も担当した熊田活版所であり、同盟の発起人は杉浦重剛と小村寿太郎であつたという（大町芳衛・猪狩又蔵編『杉浦重剛先生』（一九二四年、政教社））。

杉浦重剛、巖谷立太郎、平賀義美、宮崎道正、谷田部梅吉、長谷川芳之助、小村寿太郎、高橋健三、谷口直貞、中村弥六、河上謹一、伊藤新太郎、西村貞、千頭清臣、福富孝季、国府寺新作、手島精一、高橋茂（同書二三一〜二三二頁）

)。

(77) 日本史籍協会編『谷干城遺稿』二(一九七六年覆刻、東京大学出版会)所収の日

記参照。

(78) 谷の日記明治二十二年一月五日の条に志賀の名前が見える(同右六七六頁)。

(79) 河野磐州伝編纂会編『河野磐州伝』下巻(一九二三年、河野磐州伝刊行会)一二

一三頁。

(80) 前掲(註77)『谷干城遺稿』七二〇頁。

(81) 同右七二四頁。

(82) 松下丈吉「秋の千草」明治二十二年三月二十八日の条、本莊季彦編『松下雲処遺稿』(一九三二年、松下元発行)五七九頁。

(83) 同右七二六頁。伊藤痴遊によればこのときの演説は、「三宅の如きは、直ちに立つて、例の咄弁ながら、奇警の語を連発して、『後藤伯の言ふが如くんば、今後大命の下つた場合には、如何なる事にも意見を言わぬ、といふ事になるが、それは御覚悟の上でござるか』といふような皮肉を言うて、詰責的に肉薄する」(伊藤痴遊全集第一五卷『国会開設政党秘話』(一九三〇年、平凡社)五六九頁)というものであった。

三宅は自分の演説について、「子はなぜに演説するや、とは余に対する適切の詰問なり。言語の渋滞余に及ぶもの無く、態度の醜陋余に及ぶもの無し。而して余や往々広堂に出でて演説を試む。(中略)余は演説の依頼を受けて固辞せざる莫き

も、懇請の甚しき、情に於て避くる能はざる時は、則ち出席するなり」(「余の演

説」、『日本人』第五〇号（一八九〇年七月三日）三二頁）といっている。

(84) 前掲、柳田『哲人三宅雪嶺先生』二二頁。

(85) 明治二十二年三月二十六日付『郵便報知新聞』。

(86) 「大同団結の成行」、『日本人』第二四号（一八八九年五月七日）二二頁。

(87) 志賀「『政論』の日刊に就き一言す」、明治二十二年七月十日付『政論』付録。

(88) 松下「おにむろの日記」明治二十二年七月二十七日の条、前掲（註82）『松下雲処遺稿』五八〇頁。

(89) 今「条約改正に関し世の士族に計る」、『日本人』第三一号（一八八九年八月十八日）九頁。

(90) 前掲（註59）升味『日本政党史論』第二卷一一五頁。

(91) 大同俱樂部「大同倶楽部・大同協和会・保守中正派・日本社友・九州関西西部其他各府県有志親睦会出席者名簿」、国立国会図書館憲政資料室所蔵「河野広中文書」二六二。

(92) 「条約改正ニ関スル朝野ノ景況」、国立国会図書館憲政資料室所蔵「佐々友房文書」八五・一九。

(93) 前掲（第三章註56）古島『一老政治家の回想』二三頁。

(94) 菊池「新保守党なる名称は熨斗付きの儘返却すべし」。『日本人』第二八号（一八八九年七月三日）九〜一〇頁。

(95) 前掲、『谷干城遺稿』七八八頁。

(96) 松下「おにむろの日記」明治二十二年十一月十一日の条、前掲『松下雲処遺稿』

五八三頁。

政教社の「同志」たちが運動の継続を狙った行動として、新聞同盟計画や好同会結成が挙げられるが、いずれも十分な成果を得られなかった模様である。

(97) 前掲、三宅『同時代史』第二卷三八七頁。

(98) 「失錯を悔ひて同志の士に告ぐ」、『日本人』第三六号（一八八九年十二月三日）一～二頁。

(99) 前掲、『谷干城遺稿』八四二頁。

(100) 『日本人』第三〇号（一八八九年八月三日）広告一頁。

(101) 三宅「大隈伯の遭難を傷み改進黨員の挙動を憾む」、『日本人』第三三三号（一八八九年十月二十七日）二頁。

第五章
政教社の変貌

第一節 「罔面窩同人」制への移行

「日本人」は已を得ざる運命に遭際す。(中略)十余旬の間、実に三たび発行を停止され、一たび刑せらる。嗚呼「日本人」なる名称、夫れ大鬼小鬼の忌む処となるか。遂に断然廃刊するの已むなきに決す。(〃)

明治二十四年(一八九一)春、『日本人』は長期にわたる発行停止処分を受け、右にいう「已を得ざる運命」を受入れ、ついに従来のかたちで発行を続けることを断念した。政教社——念のためにいえば、発行所名は変わらなかった——の「同志」たちは、同年六月二十九日、新たに『亜細亜』と題する雑誌を創刊し、『日本人』の身代わりとしたのである。本章では、このときから『亜細亜』第一(三巻)と第二次『日本人』を刊行した二十七、八年(一八九四、五)の日清戦争期までを「初期政教社」の第Ⅱ期と位置づけ、その変貌過程を引き続き文明観と政治姿勢に関わる思想的課題への対応を中心に、「国粹主義」の展開相という把握方法によつて明らかにしていきたい。

変貌の過程はいかなる断面に露呈しているだろうか。『日本人』の廃刊と『亜細亜』の創刊という事実は、政教社の変貌を内外に印象づける画期となったに違いない。そのうえ、これ以降の政教社は、雑誌の発行が極めて不安定な時期に入る(序章表2参照)。私たちはまず、〈媒体〉の目まぐるしい変化から政教社変貌の様子を窺い知ることができるのである。しかしこの場合、〈媒体〉に現われた異変はむしろ変貌の表層とみるべきであつて、〈組織〉の変質と言論内容の推移こそ、その本質とはいえないだろうか。〈組織〉の変質は政教社の思想活動に転換を求めずにはいなかったろうし、言論内容の推移は政教

社の結集原理に改変をもちたらずには措かなかつたと思われる。この両者が相まってへ媒体の変化を促したと考えられ、政教社の変貌はそれら三つの側面が交錯する位相において把握されるべきだろう。

政教社にとって、『日本人』の廃刊は「大鬼小鬼」たる政府（内務省・警視庁）の発行停止処分といういわば外的な要因によるものであったが、結集原理の改変と思想活動の転換はそれ以前から内的に進行していて、すでにその端緒は大同団結運動からの後退をうけて明治二十三年になると徐々に現れはじめていたといわなければならない。この年、朝野の関心は第一回総選挙と第一議会に集中していたといえる。しかし、第一議会の争点であった「民力休養」に関する論説は『日本人』誌上に一本もないのである。「同志」たちについていえば、志賀は新聞『国会』に、三宅は『江湖新聞』にそれぞれ力を尽くし、井上と棚橋は学校（哲学館と郁文館）経営に専念しはじめ、また辰巳は政界進出へと転身を図るなど、独自の活躍が目立ってくる。こうなると逆に、政教社のへ組織へは弛緩を余儀なくされ、言論内容も拡散の傾向を辿らざるをえなかつたといえよう。弛緩や拡散の具象は以下で順に追跡するとして、『亜細亜』はどのような情況の内向を前提にして創刊されたと思われるのである。

創刊号の社説欄「日本刀」には次のような基本方針が示されている。

今日観察の急務は、亜細亜の果して勢力あると否とにあらざるなり。果して勢力あるか、之に対して如何に自ら譲るべき。將た如何に之と結で為す所あるべき。果して勢力なきか、之を助けて他に当らんか。將た其の弊に乗じて自ら為す所あるか。今日の講究すべきは実に此の問題なり。(6)

これによると、雑誌『亜細亜』の課題は、まさにその「亜細亜」においていま起こりつつある諸問題を「観察」「講究」するに際して、「勢力」の分析ではなく、「勢力」の無に依じて行動（「為す所」）を選択することだという。大同団結運動へのさまざまなかたちでの関わりとは別の意味で、これもやはり極めて実践的な課題意識だといわなければならない。誌名の変更をもって「国粹」から「亜細亜」へ政教社の思想が変質したと短絡することはできないけれども、彼らが思想活動の舞台を国内問題から国際問題へと意識的に転換させたのではないかという予測を立てることは許されるであろう。政教社の言論内容に関するこのような予測は、転換の軸をどこに設定できるのかということと合わせて、第二、三節で実業構想と対外認識に即して考えてみたい。

一方、政教社の〈組織〉についていえば、『亜細亜』が創刊された明治二十四年春頃は最も充実した社員を擁していたと思われる。創刊号の奥付によると、編輯人志賀重昂、発行人今外三郎、印刷人三宅雄二郎と、中心メンバーが文字通り先頭に立って発行に当たっている。したがって、〈組織〉の面で政教社に断絶は認められず、何よりも発行所「政教社」の名称を継承していることが如実に物語っているように連続性を有していたのである。彼ら設立の「同志」たちに加えて、杉浦、宮崎、中原の三人を含めたいわば〈第一世代〉と、前年からこの年にかけて入社した長沢、内藤、畑山、浅水らの〈第二世代〉とでも呼ぶべき若干若手の社員が、当時の政教社を構成していた。〈第一世代〉の「同志」的結合は、『亜細亜』への執筆回数が減ったことなどから判断すれば、すでに弛緩していたといわざるをえないが、創刊後まもない同誌へは全員が満遍なく寄稿しているので、なお緩やかな結束が維持されていたとみるべきだろう。〈第二世代〉は、政教社内部での立場が〈

第一世代の「同志」たちとは別で、当初は編集実務の担当者だったと考えられ、結集の理由も内藤と畑山を中心に秋田出身という地域性に基づくものであった⁽⁵⁾。

ところが、このような政教社の構成メンバーに関する充実期は、長くは続かなかった。終焉の契機は、二十四年九月二十日、三宅が海軍練習艦比叡に乗船して南洋航海に出発したことに見いだせそうである。そのような意味で、彼が出航する二日前、神田の開化楼で行われた送別会の出席者は、設立以来の政教社を支持してきた社会的基盤の実態を余すところなく示している。

関藤成緒 辰巳小次郎 今外三郎 井上蘇吉 田村秀雄 熊田宣遜 矢田部良吉
辻新次 谷田部梅吉 高橋健三 中村忠雄 寺田福寿 長谷川泰 畑山芳三
長沢説 内藤虎二郎 明渡知瑜太郎 国府寺新作 松岡好一 安井萬吉 鈴木巻太郎
清野勉 上田毅門 井上円了 斉藤祥三郎 有森真吉 菊池熊太郎 加賀秀一
沢柳政太郎 志賀重昂 坂谷芳郎 下山寛一郎 内田周平 松本愛重 井上哲次郎
岡本監輔 安村喜当 杉江輔人 北村三郎 鈴木義応 合川正道 平田讓衛 金井延
杉浦重剛 藤沢利喜太郎 鳩山和夫 坪内雄蔵 田原栄 桑原啓一 依岡省三
山田喜之助 三崎亀之助 穂積八束 稻垣満二郎 松下文吉 外山正一 福本誠
鈴木満次郎 大井憲太郎 山田猪太郎⁽⁶⁾

一見して三宅の交友範囲が知れる参加者である。すなわち、政教社のへ第一世代へとへ第二世代への大半、高橋や国府寺など乾坤社グループ、井上哲次郎、阪谷、坪内ら東京大学文学部の先輩、後輩、辻や外山等文部省、大学関係者をはじめ、斉藤、内田のような東京英語学校、哲学館の教員仲間もいる。これを総じて、政教社設立の母体となったあの学

士社会とその周辺と断じて差し支えなからう。なお、政党関係では三崎や大井など自由党系が出席している。

出席者を伝える「三宅氏の送別会」という雑報記事の中でもう一つ注目したいのは、送別の辞を述べた政教社の代表（氏名不詳）が自らを「岡両窩同人」^{（7）}と呼でいることである。「岡両」は魑魅魍魎、いわば同人を異形の怪物に擬して、政教社をその巢窟と位置づける。ここで、むしろ矜誇の念をもって「岡両窩同人」と自称しているようにみえるのは、将来を嘱望される学士であつたへ第一世代へが『日本人』での三年間によつて不平家の臭味を帯び、また閉塞された向学心を打開するために上京したもののそれを満足させられないでいるへ第二世代へを糾合することで誕生した、新しい政教社のへ組織へを最も端的に表現してはいないだろうか。署名論説の減少ということを見ても、『日本人』創刊に際して「平生懐抱スル処ノ精神ヲ姓名ト共ニ定時刊行雑誌上ニ告白センコトヲ誓約」した当初の「同志」たちとは、結集の意味あいまでもが違つてきているように思われる。いずれにしても、いましばらく三宅の南洋航海の日程に添つて政教社の動静を探っておきたいのである（8）。

九月に日本を發つた三宅は、翌二十五年のニュー・イヤーズ・デイを大英帝国領オーストラリアのシドニーで迎え、ついでメルボルンへ向つた。おそらくその地に滞在中の彼の手元に届いたと推測される志賀からの書簡が残っているので、それを次に紹介しよう。

（前略）「亜細亜」は相変ラズ、発刊如旧ノ候。部数は三千六、七百部之間を出入致シ居り候。此便と共に御送仕申上候間、御一覽ニ供シ候。国会新聞は近頃例之悪評を漸々ニ拭ひ去り候。部数は九千四、五百之間を出入致居り候。是れ亦九月二十日より

今日迄之分を御送付申上候。彼の十八新聞同盟は全く破れ、即今和議の申入最中二有之候。棚橋氏は依然。辰巳氏は東京市水道布設中止ニヤツキトナリテ到る処ニテ演説中にて、昨今は熱の沸騰点ニ達シ居リ。井上氏無異。陸氏如旧。宮崎氏亦然り。杉浦氏は教育之外は他に関せずと、世上之問題ニ一切無関係。今氏は十月中家父死去、爾後肺突にて時々吐血、数十日前より山龍堂病院ニ入院中。然かし毎日快方ニ趣ク。菊池氏不相変眼鏡を懸く。加賀氏は郷里の両従姉大地震にて圧死。可悼。杉江氏不相変郵船会社ニ赴ク。今日も面会せり。御出發後の異事、

世界未曾有

大地震

十月二十八日

(後略)

この書簡によつて、『亜細亜』や『国会』の發行部数が判明するだけでなく、同人たちの様子が窺える。それによれば、はるばる報告されているのは陸羯南を含めたへ第一世代の「同志」たちの近況ばかりで、へ第二世代の内藤たちには全く触れていない。ただしこの三週間あとに、やはりメルボルンで受け取ることになったであろう志賀の書簡の一節には、次のようにある。

(前略)辰巳氏は、去る二十五日夜衆議院解散之発令後、浅草区ニ於て又々選挙競争之準備中ニ候。長沢別天、北米ニ向ひて去り、過日郵船ニて安着セリ。「亜細亜」依然。早春は五十頁ノモノヲ発兌ノ準備整ひ候。内藤、畑山両氏依然。鈴木券太郎氏「亜細亜」より「亜細亜人」と題する冊子發行。早春第一の文字として政教社より發行。「国会」依然。今氏肺患依然、山龍堂病院ニ在り。加賀氏依然。(後略)

ところで、右の両書簡中にもあるように、政教社設立以来の「同志」であつた今外三郎は肺結核に罹つてしまい、大磯への転地療養の甲斐もなく病勢が進み、二十五年三月二十七日に他界してしまふ⁽¹⁾。また、⁽²⁾第二世代⁽³⁾に属する長沢は、二十四年十一月十日、スタンフォード大学留学のため、アメリカへ向けて旅立つていった。こうして三宅の不在中にも同人たちの異動が徐々に進んでくる。

七か月の航海を終えて三宅が日本に帰つてきたのは、今の死後二週間の四月十日であつた。このとき三宅は、東京湾に入った比叡艦上から東京に煙が濛々と上がるのを見たと思つているけれども⁽⁴⁾、これが政教社、熊田活版所、敬業社、東京英語学校などを焼き尽くした明治二十五年の神田大火である。猿楽町から出火し、折からの北西の風に煽られて延焼したこの火事は、区役所、警察署、勸工場のほか、新聞の伝えるところによると「書生の巢窟を一掃して尽くし」、「焼出されの書生諸君は、僅かに持出したる赤ケツトに科業の書物幾分をか包みて、巳がじし駿河台、麴町、仲猿楽町等へ避難せしにぞ」⁽⁵⁾といふ。まさしく政教社の設立基盤と支持基盤を二つながらに覆ってしまったのである。


この頃を境として、井上、杉江、菊池、島地、棚橋、加賀、中原らへ第一世代⁽⁶⁾の『亜細亜』への寄稿がなくなり、政教社の変貌は一層促進されたように思われる。二十五年十月十七日発行の同誌第六一号では、ついに『日本人』創刊号以来表紙のタイトル・バックに描かれていた蜻蛉（トンボ）の絵が消える。蜻蛉の古名「あきず」は秋津洲つまり日本に通じ、凶柄では複眼もつて日本と亜細亜を見下ろす蜻蛉は、「同志」たちの立場そのものを表していたと考えられるので、それが表紙から消えるということは政教社の結集原理そのものの変質を象徴していたといえるであろう。当時の⁽⁷⁾組織⁽⁸⁾を知るには、滞

米中の長沢の手になる「送竹川黙嘯子」という書簡体の一文が要を得ている。

(前略)内藤湖南と云ふ者あり。深沈にして、古典に通じ、時文を能くす。畑山閔越と云ふ者あり。放逸にして能く飲み、能く談じ、能く文を属す。二人共に誠意の人なり。正直太夫と云ふ者あり。批評的の炯眼細微を極め、兼て小説を書く、世人嘖々たり。三宅雪嶺と云ふ者あり。当代有数の哲学者にして、独り学問上の哲学者たるのみにあらず、坐作進退より言語衣服に至るまで悉く哲学的にして、其言は奇警、其思想は深遠、其文は疾風烈日の如し。杉浦天台道士と云ふ者あり。彼れ君子人、後進を養成するを以て自ら任じ、教へて倦まず、学て厭はず、近江聖人の遺風を帯ぶ。志賀矧川と云ふ者あり。志は豪蕩にして、文は雄魁なり。東西の詩趣を胸に蔵蓄し、巧みに英漢の詩を賦す。菊地熊太郎と云ふ者あり。温厚にして教育的学者なり。杉江雲外と云ふ者あり。胸中渋滞なく、能く人を容る、蓋し事務家なり。斎藤露骸と云ふ者あり。義気あり、能く人のために尽くす。鈴木醇庵と云ふ者あり。人類学に通じ、考証を能くし、且つ巧みに文を行る。文辞円熟なり。宮崎晴瀾と云ふ者あり。鬼語を以て詩を作る。読む者目を眩す。自恃庵主人と云ふ者あり。官に隠る。古策士の風あり、且つ能く人を知る。門下能士多し。鈴木十八公舎と云ふ者あり。和学に通じ、和歌、和文を巧みにす。横井時雄と云ふ者あり。端然たる好風丰、彼れ基督教徒中錚々の間へある者、其見解も亦た幾多パスター等の上に出づ、蓋し平四郎が遺鉢の幾分を伝ふる者。冀牧少年と云ふ者あり。真摯寡言にして文を能くす。亦た誠意の人也。鈴木天眼と言ふ者あり。精憫にして奇骨あり、奇文を作る。辰巳小次郎と言ふ者あり。政治学、和学、哲学に通じ、兼ねて神道、仏教等に精し。多能の士也。(後略) (4)

同人たちの風貌や得意分野をこれほど簡潔かつ的確に表した文章も少ない。しかし実は、これを草する一年前に長沢は日本を離れており、政教社が変貌しつつあったことが十分伝わっていないかもしれない。この時期の『亜細亜』を見ると、すでに〈第一世代〉のうちでは、三宅、志賀のほか辰巳、松下、杉浦、宮崎が原稿を寄せているだけで、誌面の中心は〈第二世代〉の内藤、畑山、鈴木醇庵らに移っていたことが判る。そしてまた、乾坤社、『日本』新聞との接近、混合が進むのもこれ以降であろう¹⁵。

〈組織〉面におけるこのような推移は、翌二十六年四月十五日発行の『亜細亜』第二巻第三号から、表紙に「三宅雪嶺執筆 志賀矧川執筆」と明記するようになって、広く読者にまで知れわたることになった。この年の五月に中原貞七が山形県尋常中学校長へ、また七月には設立時の「同志」の一人であった松下文吉が郷里久留米の明善中学校長に赴任して¹⁶、いよいよ新しい政教社への変貌は完結に向う。ちよつどこの頃の同人たちの雰囲気を伝えるのは、湘南への避暑旅行を叙した次のような記事である。

別天と呑龍はかねて遊泳の達人、得意の抜手とやらんを見せんとて、直様海に飛び入り、雪嶺、忘言、南八、吾も続て日暮の激潮に先後を争ひしが、肥大なる矧川の空しく月に吟じて詩情を洩すと、瘦弱なる湖南、木公の浅瀬にバチャバチャせるは俱に憐れむべかりき。此夜、湖南、木公は大内青巒を円覚寺に訪ひ来れるなれば迎、明日帰京に決し、一行は更に諸方に流浪することとせり。青衫飄々行く所は何処ぞ。 

三宅と志賀を「先輩」あるいは「先生」とすることで、一体感をもって結集した新しい同人制の政教社、すなわち「罔両窩同人」制の成立である。「一行は更に諸方に流浪することとせり。青衫飄々行く所は何処ぞ」——彼らによって展開された言論活動は何に向かっ

てなされたのか、それを解明するのが以下本章の課題である。

第二節 「帝国の拡大」と「亜細亜」

政教社の変貌は、まず同人たちの結集原理の改変すなわちへ組織への変質——「同志」から「岡両窩同人」へ——においてみることができるとは思われるが、それと表裏をなして彼らの思想活動も転換を余儀なくさせられたであろうことは容易に想像できる。転換の方向は、本章で考察範囲とした全期間の第二次『日本人』と『亜細亜』第一〜三巻をあらかじめ通覧したとき、前節の冒頭でも述べたように二つ考えられる。一つは、政教社が言論内容のウエイトを「政治」から「生産」へ移したのではないかということである。この背後には、たびたびいつているように大同団結運動における敗北の経験が潜んでいるであろう。もう一つは、思想活動の主要な媒体へといえる雑誌の名称を、主に外的な理由によるとはいえ『亜細亜』と改題したことが示しているように、考察の対象あるいは思考の枠組みを文字どおりアジアへと拡大したのではないかということである。そこで本節では、この二つの方向について順に取り上げ、変貌期の政教社が直面した問題状況とその解決のために彼らが準備した論理枠組みをみていきたい。

志賀重昂は、すでに「日本民族独立の方針」の中で「国粹主義」「大同団結」と並んで「殖産興業」を挙げていたが、三番目の「殖産興業」に関しては「日本生産略」を『日本人』誌上に四回にわたって連載していた。かつては志賀をもって「実学インテリゲンチヤ」の典型とみなす見解が示されたこともあるが、彼の「日本生産略」などをみる限り、具体的な実業イメージは提示されていない¹⁸⁾。むしろ、「殖産興業」の構想を実業論というかたちで北海道開拓と結びつけて論じていたのは、「同志」の一人今外三郎であったと

いふべきだろう。彼が描いた「殖産興業」のイメージは、政教社でも唯一「日本の開化」に具体像を与え、さらにいえば雑誌の読者層というかたちで現れる「国粹主義」の担い手・基盤を、どのような階層に想定できるかという問題にまで関わってくる。

今は『日本人』創刊号に「日本殖産策」を寄せて、その中で「会社の設立」つまり企業熱を前提に「政府の保護政策」を廃し、「今日余輩が当さに採るべきの方策は、務めて実業界腐敗の空気を排除し、漸次之を清浄にし、以て其基礎を固むるの一事あるのみ」(17)という。以後も彼は同誌の署名論説として数号おきに実業論を掲載し続け、「我輩は只我國をして純粹の商業国たらしめんと欲するものなり」(18)というような、商業に力点を置いた実業論を展開した。今の論説は、政治論においては「政治家 (Politicians) 」(19)「政治家 (Statesman) 」(20)を明瞭に区分して論じるほどに鋭いもので、実業論も「国家を経論するものは、一方に於ては、主権の寸毫も害せられざらんことを計り。一方に於ては、農、工、商のため十分の利便を与へ。之を保護し。之を盛ならしむるの道を究めざるべからず。我輩が動もすれば産業社会の為に利害を陳べんと試むる。豈に又他あらんや」(21)という具合に、国家経論において主権とともにもう一方の重要な位置を与えられていた。

では、今が早くから実業論に注目するようになったのは、いかなる理由によるのだろうか。それは、大同団結運動の総括を試みた一文を次のように結んでいることから推察できるであろう。

我輩は全国民に向て、一般に沈重の氣風を養成すべしと云へり。然れば、如何せば能く此の氣風を養成し得べきか。他なし、我輩は云はん、理学を研究すべしと。理学は

能く以上諸種の病患を除去するに大勢力を有するものなり。想像多感に和するに、沈着威重以てし、軽浮を変じて静肅となすものなり。理学其者を正道に用ゆれば、啻に無限の愉快を与ふるのみならず、国民を危胎に救ふの効あり。否国家をして常に安全の道に就かしむるを以て、決して危胎の位置に瀕せしめざるなり。蓋し人々其方針を定むる、最も安全の方向に在るを以てなり。嗚呼理学、理学は遂に能く日本社会内外に対するの方略にして固定ならしむるものなりと謂ふべし。窮めざるべけんや。憂ふる所あり。敢て全国民に一言す。(ふ)

これだけを読むと、あるいは「理学」のフェティシズムのような口吻を感じるかもしれないが、これが政教社の「政治」からの後退を認めた文章の結論だとすれば、「理学」による社会の沈静化の意味するものが、言論内容のウエイトを「生産」に移動させること、要するに「実業」の奨励であったと考えてよからう。彼のいう「理学」の実体はこれだけでは判然としないけれども、ここではさしあたり、「同志」の杉浦重剛と菊池熊太郎が主唱していた例の理学宗、すなわち物理学、化学、生物学等の原理を社会生活に応用していく処世方法と、志賀の「国粹主義」を準備した進化論的な思考方法に通じるものと仮定しておこう(第四章第一節参照)。

また、そのような今が、「殖産興業」の担い手としていかなる階層を想定していたかといえ、それは「農家、工人、商賈」からなる「実業家」(ふ)であった。ただし、彼のいうところの「実業家」は、自律的に成長することが期待されておらず、外国貿易や北海道開拓が従来満足な成果を挙げられないのは政策の不適當に原因するとされ、その解決策としても結局は政府からの資金援助に頼るという方法しか見いだせなかった。当初政府の保

護を排した彼が途中から援助に頼る論調に転じた背景には、彼自身のみた「産業社会の混乱」、実は我が国最初の経済恐慌が伏在していたというべきだろう。

その上で、今の実業論の展開をみていくと、彼はすでに大隈条約改正交渉に対する反対運動の最中に、条約改正と「産業社会の混乱」を関連させ、さらに「北海道の如き、未だ開拓せざる土地多き、天産の多きに乗じ、侵略主義を以て充滿せる露人の窺伺するあり。西伯利亚鉄道の竣工せんとするに於てをや」⁽²⁵⁾と述べて、ロシアの南進政策を意識しながら北海道の開拓へと進んでいく。今の眼が北海道に注がれるのは、弘前藩士であった彼の一家が早い時期の入殖者となって同地に渡り、彼自身北海道で成長して札幌農学校を卒業したという経歴によるところが大きいと思われる⁽²⁶⁾。札幌農学校では志賀や菊池よりも一年後輩であった彼は、「実に是れ北海道は帝国の金庫なりと謂ふも、敢て過言にあらざるなり」⁽²⁷⁾と云って、第二の故郷でもある同地に大きな期待をかけている。「北海道移住論」と題する論説では、冒頭まず次のようにいう。

我が愛読諸君は知らるるならん。我輩が彼の北海道に関し、鄙見の在る処を陳じたること、茲に一二回に止まらざるを。我輩は熱心に之を唱ふる者なり。北海道今日の有様は、我輩をして内地人の移住と内地人の資本を待つ者なりと信ぜしむればなり。然り而して内地人彼の地に移住するは移住者の幸福となるべく、其資本は又内地に在るよりも寧ろ多分の利益を生ずべきなり。世人は十津川移住民の惨状を聴き、北海道に對し異様の感情を惹起したるやも知るべからず。然れども我輩は十津川移住民の一度惨状に陥落するは既に之を知れり。蓋し其移住の季節太だ適当にあらざりしを以てな

り。⁽²⁸⁾

その「移住」と「資本」に関して具体的には、「華族社会」の出資や「地方有志家」の視察を促している。実際のところ、仙台伊達家の一族が家臣団ごと移住を凶つたのは有名なことだし、香川県では移民奨励会を創立し地方費の補助をもつて移住者を渡道させたりしている⁽²⁹⁾。当時、移住者数は年々増加してはいたが、明治十九年に始まった北海道庁の殖民地選定事業はようやく二十三年になって終了したところすぎず、さまざまな困難が継起したと思われる。翌二十四年に同庁が作成した『北海道移住問答』の中には、

問 北海道にさへ行けば仕事は沢山有るが如く云ひ触らすものあり。事実なりや。

答 北海道とて敢て天国にもあらざれば、赤手渡来して直に適當の仕事を得んとするは全く冒険の空想たるに過ぎず。斯る誘惑によりて移住せば、其困難如何許りなるを知るべからず。従来此悪手段に陥りたるもの少からず。後の移住民たるものに大に警戒すべき事なりとす。⁽³⁰⁾

という問答があり、移住者を待ち受けていた苦難が、厳しい自然環境だけではなかったことが窺える。

ここで今の「北海道移住論」にもどると、この論説に対して思わぬところから批判が寄せられていたことは注目に値しよう。それは北洋生と名乗る十津川移住者からの反論で、「其冒頭に於て吾十津川移住民を御引合ひに出されたる一事は至極迷惑に存ずるなり」といい、結論として「事実の真確を明示するは可なり。漫に一己の憶測を以て自家の断案を下すときは往々誤謬を生じ、終に世人をして妄想に陥らしめ、大に移住奨励の妨害となること不少。慎まざるべけんや」⁽³¹⁾というものである。今自身も認めているように、確かに先の論説「北海道移住論」のこの部分は伝聞に基づいた記事であった。それにしても、

「同志」たちの中では北海道の実状に最も詳しいと考えられる今でさえがこのありさまなのであるから、政教社の北海道移住論がその後十全な展開を示さなかつたとしてもやむをえないのかもしれない。志賀にいたつては、アイヌ人をもつてロシアのコサツク兵のような軍隊を創れという案を、『日本人』の論説で大真面目に取り上げているのである(2)。

北海道移住論も、その根拠となつていた実業論も、結局は政策的な補助に頼らざるをえなかつた点が論理的弱点となつていたように思われる。言論社会に身を置く彼らには、実業論を現実化していく基盤が乏しかつたのである。加えるに、政教社におけるこの分野の主要な論客であつた今外三郎の早世が、二十五年以降の『亜細亜』誌上から両論を退かせる決定的な要因になつていた。しかし、今の遺志を継ぐかのように、同誌には「拡大平哉」という欄が設けられ、主に北海道に関する参考資料、統計のほか道内各地の「通信者」から寄せられた報告文が掲載されることとなつた。この欄を新設するについての予告には左のようにある。

北海道拓地植民 に関する報導を登録するあらんとす。嗚呼斯の年年歳歳孳殖せる四十余万の生靈が留蕃場を發見し、第二の日本国を剝造せんとする、是れ余輩が生平刻意励行する処、而して之を封疆の内に需むる、唯夫れ北海道あるのみ。乃ち余輩が生平懐抱する処のものを断行する第一着手として、先づ北海道の拓地植民に関する報導を登録し、北海道の真相を普く八十四州の人士に警告し、漸く以て只管開墾移住の事を振作せんとす。而して函館、札幌の如き地方は固より、特に千島、北見遙遠の方土が状況を詳悉せん為め、国後、択捉、網走、根室、浜中、釧路、厚岸、幌泉、日高の各地に責任を負担せる通信者を依頼し、庶幾くは以て北海道開拓の引導者、「植民政

略」の先駆を以て任ぜんとす。(33)

これによれば、「北海道拓地植民」は政教社が「生平懷抱する処のもの」すなわち「国粹主義」の発現形態の一つであつて、そのための実際的な手段として情報の収集と報道を行つていこうというのである。情報を各地の「通信者」北海道開拓の「引導者」へ執筆者から送付してもらい、それを『亜細亜』の「拡大乎哉」欄へ媒体へ掲載して広くへ読者へに伝えようという企画は、雑誌ジャーナリズムが現実問題に関わつていく姿勢として、非常に積極的なかたちだといえよう。同欄は、『亜細亜』第一巻第十一号(明治二十四年九月七日)から同第七十七号(二十五年十二月二十六日)まで存続した。「拡大乎哉」欄の廃止が政教社の北海道に関する問題一般からの撤退とみられたらしいことは、「如何なる御都合にや、此頃は拡大乎哉の欄見受け候事殆んど之れなく、同時に北門の問題一も御掲載無之様に被有、折角の囑望水泡に帰し候をもやと、実は一方ならぬ憂鬱に打沈み居申候」(34)というような投書の文面によつても明らかである。

以上のように、今外三郎を主要な論客とする政教社の実業論は、この時期における「国粹主義」の第一の転換方向を示すものと位置づけられ、へ組織へ媒体へに変貌の兆しが見え始めた明治二十四、五年頃になると、北海道移住論へと展開していったのをみるこゝとができた。この過程に包含される問題群の中では、政教社として岡本監輔と彼の設立した千島義会の行動を支援していたことが注目される(35)。これ以降「東洋問題」「朝鮮半島問題」「南洋問題」などが喧しくなつてくると、北海道移住論の比重は相対的に低下してくるけれども、それが政教社の主張の中に一貫して存在していることは、例えば「殖民政略は我国の国是たるべきもの、断として行はざるべからず。然れども之れを行ふに当

ては、確乎として内に一定する所あらずんば、余輩は寧ろ北海道を開くの利に若かざるを思ふ」(36)という一節が、二十六年発行の『亜細亜』社説中にあることから明らかだろう。ただしこの時期になると、北海道移住論をその一部に含んだ「帝国の拡大」が政教社の視野に収められ、全体の文脈として日清戦争へと繋がっていく傾向が顕著となる。

そこで第二の転換方向、すなわち政教社がその〈組織〉や〈媒体〉の変化と同時に、思想活動の領域を国際問題へと移行させていったのではないかという点に移りたい。この移行過程を「国粹主義」の展開相として把握しようとする場合、その第一歩を示しているのは『亜細亜』第二号巻頭の無署名社説の次のような一節だろう。

然るに其国家社会が、先進国の文化に採ること漸く充足し、其の英華を含咀すること漸く洽きに及んでは、彼の少年が自家独創の見を以て自ら支配するが如く、奮然として斯に国民的精神を興発し、国粹特能を暢べて、碁布星纏せる列国諸民族に当り、軼して之に駕せんとするの大観念を生ず。国民進化の行路、当に爾らざるを得ざる也。故に吾が大和民族の特能国粹を啓発するに当て、先づ先進国の為に倣う者、是も亦進歩の一階級と謂ふを得べからざるにあらず。之を穉弱期の進歩として、浅薄なるとして許すべからざるにあらず。顧ふ四千万の大国民渠れ永へに穉弱ならんや。斯に進一步せる大進歩旨義あること、豈に信ず可らざらんや。(37)

ここには、「国家社会」の「進歩」のためには「国粹」の啓発が必要であるが、そのためにはまず「先進国」に学ぶことも必要であるという、従来の「国粹主義」の思想を総括するような基本的な考え方が要領よくまとめられている。さらにこの一節に続けて、「且

つ夫れ欧土白人が殖民政策なる者は、混々として昼夜を捨てず、漸々として東遷し、其の底止する所を知らず」というアジアをめぐる国際情勢が、「物理の法則」——ここでの意味はバランス・オブ・パワーに基づいているという危機意識を示したあとで、国内では「進歩党」「保守党」たるを問わず「東洋問題」「朝鮮半島問題」「南洋問題」にこそ意を用いるべきだと主張している。

かつて坂野潤治は、日本を一つの身体に喩えて、それが明治から大正期にかけてアジアへ向つて「肥大化」していく場合の「精神」を検討する試みを行っているが⁽³⁸⁾、いま、その視点を援用して日清戦争以前における政教社の対外論をあらかじめ概観するならば、それはあたかも人間が四肢を広げたときのように、日本を基点として四方に向かう四つの「論」が組み立てられていたといえるだろう。それは第一に、前述したような北海道移住論や千島義会の企てに代表される方向で、厳密に言えば国内問題であるけれども、いわば内国植民地を確実かつ有効に活用しようというものであつた。第二は、ハワイを中継地にした南北アメリカ大陸各地への移民論で、後述するように殖民協会会長の榎本武揚などが唱え、政教社では長沢説がこの主な論客である。第三は南進論で、台湾からフィリピン、南洋諸島からオーストラリアへと我が国の勢力を伸ばしていこうとするもので、論者としては志賀重昂の名がすぐに思い浮かぶ。そして最後に第四の方向というのは、朝鮮半島を通じて中国東北部(満州)へ向かうもので、当時は一般に北進論と呼ばれていた。第二、三、四は国際問題を対象としているので、当然ここでは対外認識の内質が問われることになる。

これら四つの対外論は、いずれも政教社の変貌を画する『亜細亜』の創刊号で表明され

た課題——「亜細亜」において「為す所」を選択すること——に直接応答するものであった。そこでも、対外論の成立条件を探りながら変貌期政教社の対外認識の特質を明らかにしていきたい。

対外論のうちで政教社においてまず取り上げられたのは、南進論と北海道移住論であった。そのうち北海道移住論に関しては、すでに今外三郎の実業構想と関連させて述べていたのでここでは触れないことにする。一方の南進論に先鞭をつけたのは、明治二十年に『南洋時事』を刊行した志賀であつたと思われる。同書は我が国の南進論の系譜の中でも早い例の一つに数えられる。その緒言において彼は、西洋列強の圧力と日本との関係につき次のような警告を発している。

輓近南洋ノ事務ハ日二月ニ警を告ゲ、益々多故ナラントス。而シテ其勢ヲ促スモノハ
独逸ナリ、仏蘭西ナリ、英吉利ナリ。我日本太平洋中ニ離群独居シテ陽ニ南洋ノ諸島
ヲ控ヘ、又近ク濠洲ニ面ス。苟ンゾ知ラン、南洋ノ鯨鱔ハ所在ヲ震盪シ、其余波ハ疾
ク馳セ来リテ富士山麓ニ憂摩センコトヲ。³⁹

志賀はさらに、「日本前途ノ大勢ニ注目スルモノ、豈ニ南洋ノ近時ヲ軽々看過ス可ケンヤ」と続けて、日本の将来像の中に「南洋」をはっきりと定置したのである。その後彼は、第一次『日本人』にいくつかの南進論を掲げ、その中で台湾に着目したりしている。この時点で志賀の南進論の性格を分析すれば、領土的野心を満たすための侵略というよりは、むしろ無人島に他国に先んじて国旗を立てるといふ類の、いふなれば多分にロマン的な臭いを感じさせるものであつた。政教社のメンバーのうち、杉浦重剛は一貫して南進論者だつたという指摘があるし⁴⁰、また、南洋航海から帰国したあとの三宅も、署名論説

等においてその成果を披瀝することはなかったが、南進論的な立場を採ったのではないかと予測できる材料がある。彼らの共通項は洋行又は南洋航海の経験があるということであった。

当時、彼らの周辺にあつて、南進論がもつ論理を明快に提示していたのは、福本日南（一八五七—一九二一年）⁽⁴¹⁾と菅沼貞風（一八六五—八九年）の二人だったと思われる。政教社を設立した「同志」たちと近い知的雰囲気の中で思想形成を果たしたと考えられる菅沼についていえば、彼は国際社会を「優勝劣敗、弱肉強食」の競争場とみなす社会進化的論的発想で把握していた。そのような競争に勝ち残っていくために当面なすべき方策、すなわち「近急の要務」とは、フィリピンを領有し中国、朝鮮は「保全」した上で、日本が「東洋の覇国」——これこそ菅沼のいう「新日本」——となることである⁽⁴²⁾。彼の場合領土的野心を隠さずに表出している。

ところが、その後南進論は政教社でも余り取り上げられなくなったようにみえる。それはなぜかといえば、ちようど『日本人』が廃刊に追い込まれ『亜細亜』と改題して発行されることになった明治二十四年春、「東方問題」がにわかにクローズ・アップされはじめ、ほぼ時を同じくして植民問題が移民論というかたちで持ち上がってきたからである。

「東方問題 (Yeastern Question)」⁽⁴³⁾は、アジア・太平洋地域に関する国際問題という意味で、元来西ヨーロッパに対する「東方」すなわちバルカン問題を指すが、このとき新たに認識されることになった日本周辺の国際情勢を読み解く枠組みの代名詞であった。それが包含する実質的内容というのは「朝鮮半島問題」と「満州問題」、したがって先の四つの対外論のうちでは北進論に該当する。この年に「東方問題」が論じられたのは

もちろん偶然ではない。一つは稻垣満次郎の『東方策』（一八九一年、哲学書院）が出版されて話題を集めたこと、もう一つは清国北洋艦隊が来航したこと、さらにはロシアのシベリア鉄道が着工されたことなどが原因になっていると思われる。『東方策』は、第一編で当時アジア・太平洋地域で発生していた国際問題を概観し、ついで第二編では十六世紀におけるヨーロッパの混乱にまで遡って、それが徐々に東漸しついに英露二国の対立に収斂されて「東方」に及んだことを述べ、最後の「結論草案」では日本が万国公法に基づいて対外方針を定め、「東洋の覇権」を獲得すべきだとする。志賀は第一編刊行直後に書評を寄せ、同書を「近世の大著述」(44)として高く評価している。また、シベリア鉄道に対しては、着工以前に発行された『日本人』の無署名社説の中で、「余輩は露国の東洋略略と云へば、一挙一動常に注目するを怠らざるものなり。彼の西比利亞鉄道布設の計画一条の如きは、大に余輩の心を刺激するものにして、其事の報を得る毎に、一喜一憂転た感慨に堪へざるものあり」(45)と述べて、全体としてはロシアに対する警戒感を表す内容になっている。このようなところに、来日中のロシア皇太子に対する刃傷事件(大津事件)が起きたのだから、そのとき朝野を挙げての恐怖心というものは並大抵ではなかったといわなければならない。従来も、例えば明治十八年に発生した巨文島事件のように、東アジアで発生した紛争の解決にイギリスやロシアの影が見え隠れすることはあった。しかし、「東方問題」の顕在化によって、日本周辺の情勢が朝鮮との二国間、あるいは清朝中国を入れた三国間の完結した問題では済まされることが明白になり、これ以降の対外論は世界的視野を具備していることが必須要件となったのである。ここに、「亜細亜」という枠組みへ転回する積極的理由が見いだせる。

以後、政教社同人たちの言論活動もこの点を衝いて展開することとなった。北進論とりわけ「朝鮮半島問題」に関する論説が目立つてくるのである。第一次『日本人』廃刊間際に掲げられた「朝鮮の存亡と日本」と題する社説はその好例であろう。

嗚呼朝鮮半島は、亜細亜のバルカン半島なり。今や東方問題は日に切迫し、而して朝鮮の存亡亦た日に切迫す。清之れを取らんか、英之れを取らんか、露之れを取らんか、抑も我れ之れを取らんか。嗚呼朝鮮の存亡は亜細亜の安危に関し、而して之れを得るものは覇となりて雄飛し、取らざるものは奴となりて雌伏せん。嗚呼朝鮮の半島豈に軽々の問題ならんや。(46)

この社説では朝鮮半島をめぐる当時の情勢がきわめて的確に分析されている。明治二十年は三宅の回想によれば、「韓国は最早一国の問題ならず(中略)正に東洋のバルカン半島なりとて、バルカンの話が下宿屋の二階にも聞ゆ」(47)というありさまであつて、「東方問題」は「朝鮮半島問題」と同義として定着したといえよう。したがつて、このとき北進論に与することとなつた政教社の対外認識の特質がいかなるものであつたかを探つておく必要がある。

それが明確に示されているのは、「亜細亜旨義とは何ぞ」というやはり無署名の社説だろう。そこではまず、「此の如き三千年の史蹟あり、斯に東洋の島帝国が其の国を為す所以の精神を洵し、形態を治す。此の精神形態や、正に以て森羅せる万邦の際に特立して、其の特長特美を彰はし、かの万邦の各々有する所と俱に円満完美なる全世界の大文明に資する所以の者とすれば、是を名づけて日本旨義といふ、豈謬れりとせんや」(48)と述べ、
「世界の大文明に資する」もの、つまり「日本旨義」を据える。だが続けて、「国よ

り大なる団体の旨義」として「欧羅巴旨義」「亜米利加旨義」「亜細亜旨義」の存在を指摘し、日本は「亜細亜の東海に位し、亜細亜諸国に先づて其の文物を完美す。是れ其の亜細亜諸国に於ける、自から先覚として後覚を開導するの任極めて重く、云々」⁽⁸⁹⁾ といひ、あくまでもアジアという立場に踏み留まつて「世界の大文明」に貢献すべきだとす。このようなアジア主義の立場は、当時一般に「東洋盟主論」⁽⁹⁰⁾ と呼ばれる立場に近いものだった。

変貌過程にあつた政教社が主として『亜細亜』誌上に掲げた対外論は、およそ以上のような論理構造を内包する「東洋盟主論」へと収斂され、「国粹主義」思想の展開相のうちでも最も注目すべき一面を構成していたと思われる。同時期にそれを運動の次元に還元しようとした一例が、次に紹介する同人の東邦協会への参加であつた。

東邦協会は、二十四年七月七日に設立された。それに先立つて発刊された『東邦協会報告』の記事によれば、同協会の設立趣旨の中には「此の時に当り、東洋の先進を以て自任する日本帝国は、近隣諸邦の近状を詳かにして実力を外部に張り、以て泰西諸邦と均衡を東洋に保つ計を講ぜざる可らず」⁽⁹¹⁾ という一節があり、「東洋盟主論」的な発想が示されているのを見ることが出来る。事業として計画されたのは、東南洋地域及び国際法等に関するさまざまな講究、それらの結果の報告、当該地域に関する資料の蒐集、探険員の派遣、学館の設立と人材の養成、講談会の開催、書籍館又は博物館の設置などであつた。発起人でもあり、当初運営の実務を担当したのは、小澤裕郎、福本誠（日南）、白井新太郎の三人で、設立時の役員には次の人々がすわつた。

副会頭 副島種臣 会計監督 渡辺国武

評議員 陸実 高橋健三 大井憲太郎 杉浦重剛 小山正武 志賀重昂

三宅雄二郎 杉江輔人 井上哲次郎 中橋徳五郎 星亨

幹事(編輯担任) 福本誠 (庶務担任) 白井新太郎 (会計担当) 小林定修 (52)

一見して判るように、日本新聞社(かつての乾坤社同盟)と政教社のメンバーが東邦協會の中心で、その中でもとりわけ日本新聞社の福本が中核であったことは、『東邦協會報告』の発行情報等から判明する(53)。ほぼ隔週の割合で開催されていた評議員会の出席状況をみると、政教社では杉江、三宅、志賀の順で同協会の活動に熱心だったのではないかと考えることができる。杉江は同『報告』第三に論説「布哇に於ける支那人問題」、第七に「海国史談」を載せているし、三宅は二十五年四月十五日の評議員会の席で南洋談を試みている。もっとも、二十四年十一月十五日の評議員会において、『東方策』の著者稲垣満次郎と海軍大佐の肩書をもつ肝付兼行の二人が評議員に加えられ、以後は稲垣が協会運営の中心に立つこととなったようだ。会員数は設立一年という二十五年六月三十日の段階で六七五人に達し、その範囲はイロハ順の「イ」ではじまる会員氏名の一部を挙げただけでも、板垣退助、伊東巳代治、犬養毅、池辺吉太郎(三山)、井上哲二郎、伊藤博文、稲田周之助、稲垣示、稲垣満次郎など、朝野、党派の区別を超えて各界を横断する幅を有していた(54)。

もう一方の殖民問題に対しても、政教社は設立当初から多大の関心を払ってきた。我が国で殖民の必要が説かれるとき決まって問題とされたのは、人口の増加と狭隘な国土との相克である。その論理は、「早晚殖民の策を行はざるべからざるに至らん。是れ狭隘なる国土に非常の速力を以て人口の増殖するあればなり」(55)というものであった。上述の北

海道移住論はこれに対する一つの回答にほかならないが、我が国の海外移民の嚆矢は、「明治元年及び二年にかけて、グアム島、布哇、カリフォルニアに渡航した二百余人の同胞がそれだ。我等の歴史はここから始まる」⁽⁵⁶⁾とされ、明治二十年代は一般に海外移民への関心がにわかにより高まりをみせた時期といえる。

このような気運を受けた運動の一例として、二十六年三月十一日に発会した殖民協会を挙げる事ができる。同協会は「殖民事業を奨励勧誘するを以て目的とす」⁽⁵⁷⁾るもので、「我国に於て移住殖民の業を急務とする所以」を数えて、第一に人口、第二に地形、第三に海権、第四に商権、第五に人心の五点から説明を加え、移住殖民の事業をもつて「日本の国是」とみなしている。会長は榎本武揚、副会長は前田正名で、評議員には次の三十名が選ばれた。

稲葉正繩	稲垣満次郎	井上角五郎	花房義質	林有造	星亨	奥三郎兵衛	
渡辺洪基	加藤平四郎	金子堅太郎	吉川泰次郎	吉村銀次郎	玉利喜造	立川雲平	
田口卯吉	津田静一	根本正	栗原亮一	福羽美静	古荘嘉門	肥塚龍	小村寿太郎
近衛篤磨	安藤太郎	佐々友房	三宅雄二郎	島田三郎	志賀重昂	柴四郎	
杉浦重剛							

さまざまな分野の人物を網羅している中で、この時期の政教社から三宅、志賀の二人が加わっていることは注目されよう（杉浦を入れれば三人になる）。とくに志賀は、設立委員七名のうちの一人として発会の準備に当り、のちには殖民講談会の席上「移住及探險の方針」と題する演説を行ったりしているから（明治二十八年一月二十日）、政教社ではこの面の立論をリードする立場にあったといつて差し支えあるまい。志賀の殖民論の内容を

考えようとするとき、このときの演説の趣旨を先取りしている次の二つの無署名社説——
いずれも殖民協会発足直後に書かれた——は注目されよう。その一つは「殖民探險の指南
針」で、その中では「其の日本国外に在りて、未だ版図の定まらざるあらば、一日も速か
に我より染指し、而して国家は着々と日本人を移住せしめ、茲に他日の計をなさざるべ
からず」(58)といい、もう一つは「世の所謂探險なる者」で、「邦人が今日に到たるまで
倣し来りし所謂「探險」と称するもの、西人の眼中より觀せば、真に兇戯に等しきのみ」
(59)とされていることで、論旨の共通点からみてこれらを志賀が書いたものと仮定するな
らば、彼が「殖民」にかけた期待は意外と単純で、かつ現状には不満を抱いていたと結論
できそうである。

政教社の殖民論のもつ特質が如実に顯れた一例として、ハワイ移住民参政権問題を取り
上げてみよう。そもそもハワイへの移民は上述のように明治年代の開始と同時に行われ、
「我が移民ノ一試験場ニシテ同地移住民ハ即其試験品ト仮定スルモ理ニ於テハ猶ホ可ナリ
」(60)といわれていた。とりわけ十八年以降は「官約移民」と呼ばれる制度が確立、二十
七年までの間に合計二十六回、二九、〇六九人がハワイに到着し、人口約十万の同国では
日本人が数の上で最大勢力となった。ところが、伝統的な王朝が続いていたハワイでは実
質的な権力はアメリカ人が握り、すでに一八八七年(明治二十年)の憲法改正でハワイ、
アメリカ、ヨーロッパ人のみ参政権を認め、東洋人なかならず日本人を露骨に排除する
姿勢を示していた。二十六年一月、親アメリカ勢力によるいわゆるハワイ革命が起こり、
リリオカラニ女王が退位して臨時政府が樹立されると、移民有志者たちは参政権回復運動
を開始した。我が国からは居留民保護の名目で軍艦金剛と浪速が急派され、アメリカと対

峙する格好となつたのである。

この段階でハワイに対する国内の関心が高まりをみせた。政教社の中でこの問題に向けて多くの発言をなしたのは、ちようどアメリカ留学から帰国したところの長沢説である。彼は渡米の船中ではやくも我が渡航者といえは「或は年老い、或は体弱く、或は風貌甚だ見苦るしく、或は片言半語も解すること能はざる者」⁽⁶¹⁾が多いことを嘆じ、またスタンフォード大学在学中カリフォルニアの地で清国民移住者排斥の実態を見るにつけ、植民問題に対して経験に基づいた一家言をもつに到つたものである。長沢はハワイ参政権問題を「日本人にして布哇の参政権を博取せば、人口上、冥々闇々裡に竟に新日本国たらんとす」⁽⁶²⁾と位置づけ、そのための方法は「即ち布哇今日の計をなす、他なし、蔽明剛直の士を択び、之れに大権を委して便宜事に従ふを許るし、而して之を護るに二三隻の軍艦を以てし、以て速かに布哇に向はしむるにあり」⁽⁶³⁾というもので、要するに砲艦外交の全面的な是認である。このとき海軍省官房主事にして「権兵衛大臣」の異名のあつた山本権兵衛が、「我が日本亦稍々英支と同患なきを保せず。故に英支の連合に加はつて露に当るか、將た露と共に英支に当るか、或は又独力を以て総て我に向ふ国に当るか、局外中立を守る乎。孰れにするも結局の処腕力に帰せざるを得ず。而して海軍の方針を立つべき所実に茲に在るなり」⁽⁶⁴⁾と語っているのと、先の長沢の結論は同じ地平に立つものといわなければならない。

殖民論が砲艦外交に代表される「力の福音」に傾斜したのをみると、「国粹主義」の展開相という視角から検討してきた変貌期政教社の対外論は、おぼろげながらその輪郭を現わし始めたといえよう。それはすでに明らかにしたところによると、東方問題を機に南

進論よりも北進論の有効性が確認され、北進の正当性を保証する論理の枠組みとして「東洋盟主論」を提示したとき、「国粹主義」は「亜細亜主義」へと転回を始め、さらに「力の福音」への帰依を示すことで、来るべき日清戦争にもそのまま対応することができるものとなりつつあった。こうして、「嗚呼日本国裡の日本人たる思想や、真個に狭矮細窄なる保守旨義なり。大世界上に於ける日本人たる思想や、好望有為なる進歩旨義なり」⁶⁵という積極的な姿勢が、対外論における基調として定着したのをみることが出来る。目前に迫っていた日清戦争を相対化し批判していく余地は残されているのか、政教社の言論は正念場に立たされていたといえよう。

ここでおお検討を要する課題が残されているとすれば、一つにはアジア諸民族に対する連帯の念、例えば中国や朝鮮の「国粹」（第四章註ノ参照）を認めた上でそれに同調する思考を内包していたのかということ、もう一つは西洋列強に対してもアジア諸国に対するのと同じ積極的な態度で臨めたのか、ということの二点であろう。このうちとくに後者に関しては、次節でいわゆる対外硬運動への取り組みについて考えてみたいと思うが、前者が投げ掛ける問題は、日清開戦直後に内藤が「日本の天職」を論じた中に示されている。

日本の天職は日本の天職なり。西洋の文明を介して、之を支那に伝へ、之を東洋に弘むるにあらざるなり。支那の旧物を保ちて、之を西洋に售るにあらざるなり。我が日本文明、日本の趣味、之を天下に風靡し、之を坤輿に光被するに在るなり。我れ東洋に国するを以て、東洋諸国、支那最大を為すを以て、之を為すこと必ず支那を主とせざるべからざる也。⁶⁶

内藤はすでに大阪に下っていたのであり、これも政教社という思想集団の外で発言されたものである。しかしこれは、日清戦争を文明と野蛮の対決とみるような、お仕着せな「東洋盟主論」に対する態度の留保と読め、何よりも「国粹主義」のもっていた西洋文明を相対化しながら「日本の文明」を創造しようという政教社の初心が継承されている。このような視点を貫徹させるならば、「国粹主義」の思想としての生産性はまだ維持されていたとみるべきだろう。

第三節 対外硬運動と政教社

明治二十二年の大隈条約改正反対運動のあと、議会開設を睨んだ民党合同の動きから完全に疎外されてしまった政教社の「同志」たちは、以後現実の政治運動に一定の距離を置くことになった。それは彼らにとって政治的な方面での蹉跌を意味していたともいえよう。ところがその後、政教社自体が変貌し、また政治的対立の主要な舞台となった初期議会の趨勢にも変化が兆してきたのである。そのとき再び政教社を現実政治に近づけることになったのが対外硬運動であったと思われる。

対外硬運動は、第五議會（明治二十六年十一月二十八日〜十二月三十日）に先立って、第二次伊藤内閣の条約改正交渉、対外政策を批判する立憲改進黨、国民協會、同盟俱樂部、政務調査会、同志俱樂部、東洋自由党が「硬六派」と呼ばれる院内団体を結成したころから明確に姿を現わしはじめ、翌二十七年になると「対外硬派」という名称が一般化し、ついには議會内外に及んだ広範な政治運動である。運動の全体像は酒田正敏によって手際よくまとめられているが、同氏は「日本グループ」と呼んだ政治集團のうち「『日本新聞グループ』に分析の重点を置いているので、私のみるところ政教社はその中で必ずしも適切な位置が与えられているわけではない。また、同氏の研究では「対外硬運動という枠組によって、ナシヨナリズムの議論をめぐって諸政治集團が対抗関係に立ち、相互に自己のナシヨナリズムの妥当性と正当性を主張する局面をも把握しつつ政治過程を分析検討しよう」⁶⁷という視点が示されているもの、まさにその諸政治集團の対抗関係の分析に終始し、ナシヨナリズムの思想的な検討はなお課題として残されたままになってい

るようにみえる。そこで本節では、第一に政教社が対外硬運動に参入していく場合の方法を事態の推移に即して明らかにしていくとともに、第二にアジアに向つては積極的に構想されていた政教社の対外論が、西洋列強を相手とした条約改正に対してはいかなる論理で対応しようとしたのかを解明したい。

「対外硬」のスローガンが政府に対抗する議会内外の諸勢力に共有されるまでには、少なくとも「非内地雑居」と「条約勵行」という二つの主張と運動を通過していた。このうち「非内地雑居」は、欧米諸国と対等条約を締結する場合でも外国人の日本国内での土地所有、自由営業等を時期尚早として拒否すべきだという主張で、「内地雑居尚早論」ともほとんど同義に用いられ、すでに井上、大隈両外相の条約改正交渉に対する反対運動の中で唱えられていた。この主張の論拠は、例えば井上哲次郎の『内地雑居論』によれば、「日本人は智識に於ても、金力に於ても、体格に於ても、其他百般の事に於ても、多くは西洋人に劣る事なれば、競争上常に敗を取るは、必然の勢」⁶⁹だというもので、「日本人は欧州人に対して尚ほ劣等の人種」⁶⁹にすぎないという認識に基づいている。この書が、帝国大学文科大學助教授の井上がドイツ滞在中に、たまたま同地を訪れた井上円了の勧めにしたがつて著されたものだとということを考慮すれば、「非内地雑居」を主張する知識人の間に実は拭いがたい「欧州人」に対する劣等感が存在したのを思い知ることができ。政教社が全体として「非内地雑居」の立場に与していたのは確かだが、『日本人』や『亜細亜』の社説、論説などをみるかぎりそれが明確に示されるようなことは少なかったように思われる。「国粹主義」を唱え、アジアに対しては積極的な対外論を形成しつつあった政教社にとって、人種的な劣等感に裏打ちされた「非内地雑居」のスローガンは彼ら

の立論の整合性を損ねる結果をもたらしかねないものであった。

その後、「非内地雑居」と同義の「内地雑居尚早論」は、第四、五議会開催期の政界再編成の過程において、専ら政党的離合集散を促す政治言語として機能させられ、「内地雑居尚早論は条約改正問題を政治争点に投入するための唯一の論理として、急速に注目をあびるにいたつたのである」(20)。この内地雑居問題を軸に政界の動向を整理するならば、かつて内地雑居を前提に条約改正を図つた大隈外相の股肱たる立憲改進黨と、松方内閣による選挙干渉の結果当選した議員を中心に結成されていた国民協会とが「対外硬」の下に結束しつゝあり、一方で自由党は藩閥政府の掲げる「積極主義」の方針に理解を示しはじめていたといえよう。したがつて、二十五年八月八日に第二次伊藤内閣が成立した頃には、政界再編成の構図は複雑な様相を呈していた。このとき「朝野人士意見の撞着」をみた政教社の立場というのは、政治に「主義」の復活を求めるものであった。

主義といふ辞、嘗て一たび流行せり。此時に当りて、苟くも吻を政治に容るる者、主義といふ辞を口にせざるなく、其の恒の言に曰く、主義を發表せよと。曰く彼は主義なし、道心に足らず。曰く彼と彼とは其の動作は云々なりと雖も、其の主義は則ち同じと。既にして實際問題に拠りて意見を定め、同異を決すといふこと大に行はれ、党派の去就の若き、皆實際問題を標準とせざるべからず。空理泛論を以て、予め鑄型を作るは不可なりとす。而して主義を道ふ者漸やく寥々たり。然れども主義の觀念、全く泯滅すべからざる者ありて、政党的離合、又自から此に由りて生ずるの傾向あり。而して此の觀念や、固より宜しく泯滅せしむべからざる者なり。(2)

しかし、政教社自身についていえば、少なくとも政治論に関するかぎり明確な「主義」

を提示していたとは思われない。「元勲内閣」と呼ばれた第二次伊藤内閣に対しては、それを「藩閥内閣」と規定して対決的な姿勢を鮮明にしていたが⁽²²⁾、このような立場は政教社設立直後から引き継いだもので、ここで再確認したものにすぎない。

同じ頃、のちに対外硬運動に結集する諸勢力を含む二つの団体が結成された。その一つは条約改正研究会で、二十五年四月二十三日に神田錦町の錦輝館で発会式を挙げた。発起人総代は星亨で、後日彼の他に評議員に推薦されたのは山田武甫、河野広中、鈴木昌司、島田三郎、高田早苗、尾崎行雄、鵜飼郁二郎、神鞭知常、坂本則美の十名、自由党多数派に立憲改進黨、さらには国権派をも含んだ構成になっている。同会の目的は「本会は現行条約を改正し完全なる条約の締結を希望する者にして其事項を研究す」⁽²³⁾とされたが、会員を一見して呉越同舟の感は否めず、研究事項も自然多岐に及ばざるを得なかつた。もう一つは内地雑居研究会で、同年六月十二日に柳橋亀清樓で第一回大会を開催した。この日、安部井磐根の指名によって同会の常務員となつたのは大井憲太郎、坂本則美、佐々友房の三人で、「規則」に掲げられた目的は「本会ハ内地雑居ノ利害及之ニ対スル準備ヲ講究スルヲ目的トス」⁽²⁴⁾とされたものの、出席者の賛同を得た「趣意書」によれば内地雑居を尙早とし従来の条約改正交渉を批判する立場が明確にされている。常務員や出席者の顔触れからみて、同会は自由党大井派（東洋自由党）と国民協会から成つていた。前者は第三議會（明治二十五年五月六日～六月十四日）を、後者は第四議會（二十五年十一月二十九日～二十六年二月二十八日）を意識した議員中心の運動と位置づけることができる。ここで一つ注目しておきたいのは、当然のことながら政教社からはずれの団体への参加もみられないということである。

二十五年夏当時、以上にみた政界再編成の動きはなお水面下で徐々に進行していたにすぎず、その年暮れからの第四議会では、なお「政費節減、民力休養」が民党のスローガンであった。この間に自由党は政府支持の立場に廻り、立憲改進黨と国民協会は「対外硬」でしだい接近することになる。三宅は民党分裂のこの現状を嘆いて、「自由党起こり、改進黨起こる。板垣伯、大隈伯、皆勉めて其の力を伸ぶるに汲々たり。而かも又皆一己の力を頼むで、敢て他と和親して其の力を大にすることを為さず。又力以て其の攻むる所の敵を碎折するに足らず。屹々として戦之れ務めて、一の成功を見ず」(25)と書かざるを得なかつた。

第二次伊藤内閣は、翌二十六年七月八日の閣議で条約改正方針を決定し、条約改正問題が十一月二十八日から始まつた第五議会最大の争点になつた。このとき政府反対派のスローガンになつたのが「条約励行」で、それを主張したのは先述の内地雜居講究会を改組した大日本協会(26)と、議院内における「硬六派」と呼ばれる政党連合であつた。

大日本協会は、十月一日に江東中村樓で発会式を挙げ、「趣意書」の一節で「吾人固より条約改正を切望す。領事裁判の制宜しく撤去すべし。海關税法及諸法制定の権宜しく回復すべし。而して内地雜居は我国情未だ之を許さざるなり」(27)と宣言している。これに対して政府系の『東京日日新聞』は、「国情の二字に拘牽し徒に雜居を尚早しと泛言するは、吾曹大日本協会の自ら外を尊び内を卑むの甚しきに驚かざるを得ず」(28)と批判している。具体的な戦術としては、政府、第五議会に向けて建白書、請願書の提出運動を展開するほか、各地での演説会を計画していた。組織の中心は政党では国民協会だが、発会式には政教社からも志賀と三宅が出席したようだ。これらの動きに対して政府は素早い対応

をみせた。すなわち、内務大臣によつて提出された「大日本協会及び国民協会ニ対スル処分ノ件」を十八日に閣議決定したのである⁽²⁹⁾。この中では、大日本協会が「実行的運動ニ着手シ」たからには「昔日ノ攘夷論者ニ異ラズシテ実ニ外交上国是ヲ誤ルノ危虞アリ」と断言している。

一方、議会内の硬六派は、第五議會開会後まず十二月八日に国民協会の佐々友房らが「外国条約取締法案」を提出し、その第一条では「外国人は、条約又は法令に於て特に認許したるものを除き、私権を享有せず」⁽³⁰⁾と定めていた。このような法案に対する政府側の認識というのは、内閣書記官長伊東巳代治が「国民協会提出之攘夷法律案」⁽³¹⁾と書いていることから察しがつく。伊東の操作する『東京日日新聞』は、十日の社説として「開国の皇謨国是を忘るる勿れ」⁽³²⁾を掲げていた。全面対決は避けられない。十三日、政府と自由党の提携を進める衆議院議長星亨が議會から除名され、ついで十九日に安部井磐根が提出した「現行条約勵行建議案」の説明演説が始まると、にわかに詔勅が発せられ十日間の停会が命じられたのである。解停後二十九日の衆議院は、開会劈頭に外務大臣の陸奥宗光が発言を求め、「維新以来国家ノ大計、国是ノ基礎トシテ採用サレタ所ノ開国主義ヲ以テ如何ニ国家ノ進歩ヲ促シ来ツタルカ、如何ニ国民ノ幸福ヲ増進シ来リタルカヲ陳述」⁽³³⁾して、その末尾で硬六派に対する次のような政府の決意を披露したあと、再び詔勅によつて解散を命じた。

茲ニ最後ニ本大臣ハ政府ヲ代表シテ言フ。到底彼ノ条約勵行若クハ其他之ニ附随スル所ノ起案ハ、維新以来ノ国是ニ反対シ、政府ハ此国是ヲ阻格スルモノニ対シテハ之レヲ排斥スルノ責任アルガ故ニ、苟モ斯ノ如キ議案ノ議場ニ提出セラルルニ當ツテハ、

之ヲ論駁スルコトニ於テ寸毫モ假借セヌノデアリマス。故ニ茲ニ政府ガ外交上ノ方針ヲ宣ベテ以テ諸君ノ反省ヲ求ムルノデアル。(84)

この政府の強行突破によつて対外硬運動は明確な目標と手段を獲得し、政教社もこれを契機に運動の戦列に加わることになったようにみえる。翌二十七年一月三日の『日本人

』は、巻頭社説で「政局紛糺極に達するを以て、「日本人」は暫く新春の佳象を云ふを措て、先づ指して由るべきの路を示さんことを本分なりと信ず」(85)という抱負を示し、具體的には「今の閣員及諸元老、党派の首領若くは重立ちたる者、海内の豪傑皆一堂に会して、和協合議邦家のために善後を策するは遂に為し能はざるの事なるか」(86)という施策を提示した。これに対して、翌四日付の新聞『日本』は冒頭の社説で、「多数の意見は是れ輿論なり。然らば対外硬派は今日に在て正しく輿論の代表者といふべし」といい、政府を「立憲政体の下に苛刑峻法を其人民に加へ、権利自由を国民に奪ふこと鬼の如く、而して独り外人に恩恵を沾るあらば、其の言稍々聴くに足るも誰か之を信ずる者あるべけんや」と批判した。この時期の対外硬論で注目されるのは、一月二十五日付けの同紙に掲載された雪嶺の論説「外尊内卑」だろう。この中で彼は、まず愛国心と独立心の必要を説き、「外尊内卑」について左のように述べる。

若し其の有志家にして外尊内卑の跡ありとせば、此者は必ず早晩政府に入りて上官の頭使を甘んじ、若くは議員の類と為りて吏化したると知るべし。真に不羈独立にして自由の民たるに背かざる者は、僅に翻訳本を読み、否らざれば僅に洋書をかぢり読みし、否らざれば洋書に通じ、外邦に留学せるも毎に敵愾の気性に富み、何がなして外人をへこまし呉れんと企図する者なり。外尊内卑の徒は唯だ装飾品を輸入するのみ

にして、精神は其の所謂東洋流なる強に屈して下を圧するの最も甚しき者なり。⁸⁷

引用文前半は、雪嶺自身の政治的スタンスを考え、さらに志賀重昂や徳富蘇峰がその後政府や議会に入っていくこととの対比をするについて、中ほどは「外人（欧米人）」に對して抱いていた對抗意識とその裏返しとしての劣等感を知るについて、後半は「国粹主義」思想の批判理論としての継承を確認するについて、いずれも大変興味深い論点が展開されている。したがってこれを雪嶺の知識人論として読めば、対外硬運動との関係において彼がそれに関与していく場合の原則的な立場を表明したものともしえる。

しかしこの段階で、政教社全体の論調は統一を欠き、混迷していたように思われる。それは、対外硬運動がこれまでは主に議会内の政争として推移し、彼らが院内に足場を持たなかったことにもよっている。そのため三月一日の第三回総選挙を前にして「前代議士を再選すべし」⁸⁸とはいうものの、支持政党についてはなお曖昧さを残していたようにみえる。選挙の結果は客観的にみて「数に於て軟派の勝利」⁸⁹であったが、「対外硬派は、なお一三〇名を擁し、無所属の動向によつては、政局は予断を許さなかつた」⁹⁰ともいえる。要するに、来るべき第六議会は流動的な要素が多分に存したのである。実はそれゆえに、対外硬派においては院外の運動が果たす役割が相対的に上昇し、一言論結社にすぎない政教社があの大同団結運動以来再び政治の表面に踊り出て、一定の影響力を及ぼすことになる。

政教社でこの運動の中心に立ったのは志賀重昂であった。当時彼の「私秘書」⁹¹の立場にあつた後藤狂夫は、志賀の政治歴を「先生が最も政治的に活躍せられたのは、明治二十六七年から三年の前後で、此時も僕は故香川魁庵と共に其配下に在つて万般の事務を処

理した。此時先生等の主張せられた所は、重に政府の軟弱に対する強硬対外政策であつた
「²²」と回想している。このとき志賀が中心となつて画策したのは全国同志新聞記者連合
(同盟新聞)と中央政社の結成である。

全国同志新聞記者連合は、三月二十七日、東京府下の記者が京橋区日吉町の共存同衆
に会して「全然意見投合」し、「第一二前議院ノ解散ヲ失当ト認メ、第二二条約ノ励行ヲ
促ガシ、第三二条約改正ノ急成ヲ期シ、第四二国民ノ對外自主的精神ヲ發揮シ、第五二此
ノ精神ニ一致スル責任内閣ノ成立ヲ希望ス」²³と云う五点の方針を確認したことに始ま
る。ただし、この日の会合の「探聞」を警視庁が各県知事あて「内報」したのを見ると
次のようにあるから、あるいは当初において志賀は受動的な位置にいたのかもしれない。
左記之通探聞候二付及内報候也。

明治廿七年三月廿八日 警視総監園田安賢

県知事殿

秘第二一八号

新聞記者同盟シテ政府ヲ攻撃セントス

国民新聞記者タル徳富猪一郎ハ、窃カ二大隈伯ノ内囑ヲ受ケ、第五議會解散ノ理由ナ
キヲ責メント、近頃日本新聞陸実ヲ説キ、之ニ同意シタル両名頻リニ奔走、開会前後
各新聞鋒ヲ連ネテ攻撃セント相談中ナリ。²⁴

「探聞」は概して穿つた見方を示すことが多いけれども、この場合警視庁では同盟新聞
の背後に当初から大隈の影をみていたことになる。ところで、やはり五月四日付の「内報
」の中には「新聞同盟者八目下志賀重昂ガ閑散ナルヲ以テ、之ヲ同盟新聞惣代トシテ六派

ノ交渉会ニ臨マシムルコトトシ云々」(95)とあり、これらによつて志賀がしだいに対外硬運動の中心に立たされていったのではないかと想像することができる。この間にあつては、四月二十二日に芝紅葉館にて開催された貴族院三曜会・懇話会、改進黨、国民協会、公同倶楽部、旧大日本協会、政務調査所、同盟新聞記者の八派連合懇親会が注目される(96)。同盟新聞は対外硬派の一角に位置を占めたのである。もちろん、志賀と三宅は「重なる来会者」(97)として出席している。この日の決議に基づいて、五月八日に江東中村樓で開かれた全国同志懇親会は、第六議会開会を一週間後に控えて、いふなれば対外硬派の決起集会であつた(98)。このとき「開会の趣旨」を述べたのは谷干城で、ついで「決議事項」を読み上げたのは「同盟新聞事務所書記」志賀重昂である。このあと木挽町万安に場所を変えて開かれた院外六派連合団体にも彼は出席している。

一方、同盟新聞も十三日に全国同志新聞記者大懇親会を同じ万安樓において開催した。『日本』によれば「雲来霞集絶ゆべくもあらず」(99)とされた参会者の顔触れは註に譲るしかない。政教社からは志賀のほか浅水又二郎、長沢説が出席し、三宅は『日本』からの参加となつている。また、すでに述べた同盟新聞結成の経緯からすれば当然のことながら、蘇峰はじめ国民新聞社・民友社の記者たち、島田三郎、高田早苗等立憲改進黨系の記者たちが一堂に会することになった。この懇親会で志賀が読み上げ、出席者の同意を得た「本会の主旨」は、次のようなものであつた。

全国同志七十六新聞雑誌記者、此に相会し其意志を発表す。

全国同志新聞雑誌記者は、自主的対外政略の主義を執り、責任内閣の完成を期す。

全国同志新聞雑誌記者は、前記の目的を達せん為めに、国民的同盟の結合協力を以て

必要と認む。全国同志新聞雑誌記者は、帝国議會をして第五議會解散の不当、条約履行、千島艦事件等に就きて、前記の目的を貫徹せん事を期す。

故に全国同志新聞雑誌記者は、前記の目的を貫徹せんが為め、解散せられたる議會及び議員に対しては確く同情を表し、且つ右代議士を再選せん事を期す。

故に全国同志新聞雑誌記者は、国民的聯盟の連合を鞏固にし、運動を円滑にし、以て前記の目的の必成を期す。(100)

「主旨」とはいえ決議文であるから、一見扇動的なのはやむをえない。この背景となっている基本姿勢を比較的冷静に分析しているのは、五月二日付け『日本』の社説「全国同志の真意」だろう。その冒頭、「此の同志会たる元と何の点に於て同志たるや。言ふまでもなく対外策に付ての同志たり。区々たる内政の点に於て現政府に反対するが如き党派の根性を有するにあらず。別言すれば政府に反対するの運動にはあらで、寧ろ外国に不満なるの運動なり」といい、「眼中唯だ外国あり」と政府の批判をかわしている。

第六議會二日目の五月十六日、伊藤首相は演説の中で「開国ノ主義」に則つて条約改正を完遂する覚悟と自信を述べ、対外硬派の主張は「対等ノ条約ヲ結バウト云フコトト非内地雑居ト云フコトハ両立ノ出来ルコトデハナイ」(101)として退けられたのである。同月三十一日の内閣弾劾上奏案可決に対して、六月二日、衆議院は再び解散を命じられることとなった。この直後、伊東内閣書記官長は伊藤首相に宛てて、同盟新聞は「治安を維持する為め解散する丈けの道理と価値有之候」(102)と書き送っている。政府中枢の認識を知る格好の例証であるが、警視庁は同盟新聞の解散を含めた処分案を同月二十四日内務大臣宛上申、その中では「之ヲ断裁スル必要」(103)を説いている。実際、七月二十日に志賀たちは

警視庁の召喚を受け、同盟新聞の解散を口達されたのである⁽¹⁰⁴⁾。

それに先立つ六月三十日、総選挙に向けた六派の中央選挙本部として中央政社が結成された。これはその名の通り政社組織とされ、七名の常議員には志賀のほか、尾崎行雄、佐々友房、工藤行幹、武内正志、大井憲太郎、綾井武夫が選ばれた。他の常議員は政党の幹部であり、地方遊説等で東京を離れることも多く、自然志賀が運営の中心に立ったようだ。さらに、定員一名の幹事(事務局長のようなものか)には政社の後藤祐助(忘言)が就任しているから⁽¹⁰⁵⁾、先の同盟新聞を含めて対外硬運動の中心機関と政社は一心同体というほかない。したがって、中央政社の綱領「自主的外交主義を執る」「責任内閣の完成を期す」は、当時の政教社の主張そのものであったといえる⁽¹⁰⁶⁾。

しかしこのとき、周知のように、朝鮮半島をめぐる日清両国の角逐はもはや縫合できない事態にまで到っていたのである。右の二つの綱領は、この角逐に対する主戦論の主張と矛盾するものではなく、むしろそれへと積極的に転嫁しうるものであった。政教社も「平和は一時の幻影のみ、日清の衝突は決して霧の如くに消滅すべきにあらず、日に日に冥々の裡に切迫し来るを知らずや」⁽¹⁰⁷⁾という主戦論を展開し、前節でみた「東洋盟主論」の立場にたつて開戦を支持する論陣を張った。この論調は、開戦後には「帝国の版図は東洋の平和を維持するに不足なり。東洋の平和を維持せんが為めに帝国の拡大を主張す。而して機は今日に在り」⁽¹⁰⁸⁾という領土拡大の欲求を露わにし、さらには「北京陥落の日は和議の日なり。和議の日は必ず遼東山東の両半島及台湾を割くべきを宣言す。之より多きを望まず、之より少きを許さず。而して多きは当局者の功に帰し、少きは当局者の責に帰す」⁽¹⁰⁹⁾という具合に、中国の分割を要求するまでにエスカレートしていく。これは、「こ

の開戦への国内世論の形成は、政府の主導による世論操縦によるものではなく、政府に批判的な在野勢力の広汎な拡がりをもせた主体的で積極的な言論活動によるものであった」(110)というような、複雑な役割を暗示している。

要するに、三宅が「韓国事件の如きは、陸奥に於て一の景物に過ぎず」(111)と回想しているように、八月一日の宣戦布告は国内のあらゆる争点を曖昧にし去ったのである。福沢諭吉は同日、渋沢栄一らと報国会を結成して戦争協力を打ち出し(112)、内村鑑三は同日、蘇峰に宛てて「陳ば兼て吾人の冀望せし日清開戦も愈々宣告に相成り、国家の爲め、人類の爲め大悦此事に御座候」(113)と書き送り、十一日には Justification for the Korean War を著わして義戦論を唱えた。蘇峰もこの年の暮れに『大日本膨張論』を上梓した。政界の対立も、例えば、立憲改進黨が党報第三一号で義戦論を、また第三二号で「吾党は暫く内閣の過失を咎めず」(114)という同党総会の「宣言」を紹介するなど、いわば政治的休戦の姿勢を公表する。義戦論と挙国一致のスローガンが一種のアノミー状態を呈して政界と言論界を席卷したとき、『亜細亜』誌上にはそれを諫め、争点を再確認しようとする論説もみられた(115)。だがむしろ、日本軍の予想を上回る快進撃で九月十六日には平壤が陥落してしまったあと、国内のあらゆる状況は内務大臣の井上馨が「海陸軍勝報続々到来候に付而は一般之人心並各政党等も趨勢に被為誘導決て政府え難問を不懸哉に被為察候」(116)と予測した通りの展開を示した。こうして凍結されたまま終戦を待つかたちとなった対外硬運動の課題が、三国干渉による遼東還付という新たな争点を加えて第二次伊藤内閣との間で再び火花を散らすありさまは、次章において明らかにしていきたい。

第四節 「我観」と「風景」の視線

以上において私は、およそ明治二十四年から二十七年にかけての時期を政教社の変貌期と位置づけ、さまざまな角度から検討を加えてきた。まず「組織」の変質と「媒体」の変化に着目したが、「岡両窩同人」制への移行と雑誌発行の困難化の過程は、設立当初の「同志」たちのほとんどを政教社から離反させることとなり、それは見方を変えれば「志賀・三宅二頭制」の成立を促していたともいえよう。ついで、その思想活動の転換を「国粹主義」の展開相として把握しようと努めたが、元来「国粹」概念の理論化を十分に成し遂げないうちに現実の政治運動に直面してしまった政教社においては、「生産」に関する議論が実業論として「帝国の拡大」方向へ向かったこともあり、この時期以降になると言論内容のうち「政治」の占める割合が相対的に大きくなってきたといえる。具体的には、国内政治論における反藩閥・民党合同を原則とする初心と、その後しだいに明確になっていく積極的な対外論とを、対外硬運動の中で連結させることができたのである。ところが、新たな問題状況というべきこの対外硬運動への対応において、政教社を代表する立場の二人が示した論理枠組と運動形態はしだいに差異の相貌を際立たせていったようにみえる。簡単にいえば、志賀は運動の中心に立つことで政界にさらに一步近づき、三宅は従来の姿勢を貫くことよって批判の自由を確保した。そのような分岐を促した原因は何だったのか、本節のねらいは、彼らの内面世界を探ることで変貌期政教社の思想活動を基底的なレベルで支えていた思考方法の特質を明らかにし、「国粹主義」のゆくえを追っていくことである。具体的には、志賀と三宅にとってこの時期の代表的著作といえる『日本風景論』

と『我観小景』を、書かれた順にしたがって取り上げてみたい。

三宅が『我観小景』を世に問うたのは明治二十五年秋であった。十月十三日に政教社から発行された同書は、全編一一九頁の小冊子で、口述筆記を担当したのは内藤と畑山の両名である⁽¹⁷⁾。ただし同書の緒言は彼が南洋航海に発つ以前の二十四年九月七日発行『日本人』第四六号に掲載されていた。以下の部分はその間の中断を経て、帰国後の翌二十五年八月二十九日発行の同誌第五四号から再開され、ついで一書にまとめられたのである。先行研究の多くは、この『我観小景』をもって三宅独自の哲学が初めて体系的に著わされたものとして重視している⁽¹⁸⁾。

同書の内容を祖述することは、先行研究もそれぞれ行っているところであるから、ここで繰り返すことはしない。むしろ、すでに前章で明らかにしておいたような『哲学涓滴』『真善美日本人』『偽悪醜日本人』で模索された三宅独自の「哲学」と「日本人」をめぐる思索が、『我観小景』ではどのように継承され、また政教社全体の言論内容、とくにその対外認識をいかに規制する役割を担ったかに焦点を絞って考えてみたい。

第一に、凡例及び序論では、まず「一家の見を哲学の上に立つ」（凡例六頁）という抱負を示したあと、「余は寧ろ解心の異類人と語るも、白頭生面の哲学者と談ずるを願わず」（同八頁）と述べて、『哲学涓滴』でも展開されていた独自の哲学観を確認する。続けて、哲学の定義の難しさをいい、それが「原理の学」だとする点では、明治二十年の『哲学雑誌』創刊号に掲載した「哲学ノ範圍ヲ論ズ」と同じ主張を繰り返していたが、『我観小景』においてはそれを一歩進めて、「更に哲学を以て諸科学全関の理論と為すあり。意心に近代科学の進度、竟に万象を包括して滲漏なき能はず。科学を統合するを以て、能事

畢れりとせば、亦た尠しく偏せるを見ざらんや」（本文六〇七頁）とし、「又更に此を以て完全に統合せる知識なりと為すあり。而も所謂完全に統合せる者、亦た尠々たる一夫、以て然りと為すに過ぎずして、其の果して統合の完全といふことを得るや否は、固より必ずべきに非ず」（同右）というように、諸学を統括する学としての哲学への志向は退き、不可知的な領域をそれとして是認する態度を示している。しかし、不可知的な領域を前提として諸学の統括を図るとするのは、H・スペンサーの『哲学原理』の構想をそのまま踏襲するものである。序論の最後のところでは、著述の目的に「請ふ今の時に当り、聊か我が知る所を述ぶ。可ならんか」（一二頁）と限定を加えているが、書名の「我観小景」がこの「聊か我が知る所を述ぶ」に由来することはいうまでもない。このような前提に基づいて展開される同書の本論部分に対する検討はあとに廻して、結論的に三宅がこの時点で考える「哲学」とは何かといえ、やや抽象的な言辞によつてではあるが、同書の最末尾で次のように定義されているのである。

適さに非常至靈の活気を暢発し、大生理を経営する。大動物の作用を見、而して日々
に其の靈活の動作と相接するとする所以を明瞭する。之を名けて哲学と謂ふ。哲学な
る者は、我の知る所を挙て、我と均しき生靈あるの体となし、以て其の知を統括して
遺すなからしむる所以。而して其の知の域を拡むる所、かの諸々学科の愈々発達する
や、哲学は則ち資て而して益々明かなり矣。（一一九頁）

第二に、より重要なことは、彼独自の哲学の考究法として書名の一部ともなっている「我観」の視線、すなわち知識究明の起点に「己れ」を据える方法論を措定したことであるまいか。この方法論は、デカルトの「我」とカントの「ア・プリアリ」な形式を否定的に紹

介したあとに、「夫れ知識の漸やく拡まるは、其の既に知る所より、以て其の未だ知らざる所に及ぼすなり。而して其の進むや、寧ろ類推の法に由らんか。(中略)類を以て推すや、先づ己れの最も明かに知る所を以て、其の未だ明かならざる所に及ぶ」(一七頁)という論理を辿つて得られたもので、「既に知る所」とされた「己れ」から、「蓋し智識の龐雜多方、殆んど統紀すべからざる、唯だ其の己れと最も直接せる者、乃ち最も明確に幾しとす」(二〇頁)として、「夢幻」と「身体」という二つの「己れと最も直接せる者」を抽出してくる。本論では、まずこの「夢幻」から「真」「善」「美」を、ついで「身体」から「心意」を有する「機関」としての「宇宙」を類推する。したがって、すでに『哲学涓滴』『真善美日本人』『偽悪醜日本人』で提示されていた雪嶺哲学の基本概念が、「夢幻」と「身体」を媒介項として改めて体系化されたということもできる。このような『我観小景』の構成には、シヨールペンハウエルとハルトマンの影響がみられるものの、「認識論的反省を欠く形而上学」にすぎないという指摘がある(29)。

同時代の評者たちも、「己れ」を起点とする同書の右のような考究法に対しては、例えば「其文章ノ絶奇ナルハ著者固有ノ才能ニシテ余ノ喋々ヲ要セザル所ナリ。其思慮ノ方法ハ詩歌的ニシテ科学的ニ非ズ。(中略)夢幻ト身体ヲ以テ我ニ最直接ナリトシタルハ抑モ何ノ主意ナルカ」(2)という批判を加えた。このような批判に対する反駁として書かれたのが「智識討究」(2)である。この中で雪嶺は、哲学者はすでに認知している智識に基づいて「事理を究察」するもので、その智識とは「何ぞや」「如何に」「何故に」という疑問を發するにおいて何が最も明白かといえばそれは「己れ」である、という。それにしても、雪嶺の数多くの著作を見通したとき、かくまで「己れ」にこだわった時期は他にはみ

られない。明治四十二年に刊行され「雪嶺の画期的大著」とされる『宇宙』においても、この「我観」の視線は直接的なかたちで継承されているとはいえないのである。ではないか。『我観小景』は雪嶺の哲学体系の中でどのような位置を与えられ、また変貌期政教社の言論活動との間にいかなる内的連関を有していたのか。

私はそれを次のように考えたい。同書によつて雪嶺の思想構造は、我を中心とし漸次周縁に向つて家族的、国家的、国際的という人類社会の各段階を経て宇宙に到達する同心円構造として完成する端緒を獲得したのではないか。すなわち、『我観小景』では「己れ」を起点とする「我観」の視線が遠心的に作用し、逆に後年の『宇宙』では「原生界」（宇宙）を起点とする「渾一の要求」が「副生界」（人類社会を含んだ地球上のすべての生物界）を経て「意識」（ある意味では「我」の継承ともいえる概念）へと求心的に作用しているのを見ることが出来る。この同心円構造は、彼の言論活動を生涯にわたつて規定する思考方法のダイナミズムを保証するものだった。このような思想構造を想定したとき、この時期の政教社が主張した積極的な対外論は、雪嶺にとつても「我観」の視線の延長上において国家的段階から国際的段階への遠心的な方向として容認できるものだったはずである。「国粹主義」における「国粹」もこの視線上に収められるものであった。しかしその場合でも、存在論的に規定された宇宙を起点とする求心的な方向が絶えず反復内省される契機が確保されているならば、国家的な要請に基づく積極的な対外論——例えば、日清開戦の前後に現われた「帝国の拡大」を当然とするような議論——に対しても、それを無限定に肯定することは周到に避けられたであろう。この結果、あらゆる価値判断に際して同時にそれを留保する要素を忍び込ませる彼一流の「するも可、せざるも可」という表現

手段が準備され⁽¹⁾、必然的に現実政治からはだいに距離を措く一因ともなったのである。

ところで、この時期の雪嶺はもう一冊の注目すべき著作を刊行している。明治二十六年十一月二十八日、やはり政教社から発行された『王陽明』がそれで、口述筆記に当たったのは、畑山、長沢、浅水といった⁽²⁾へ第二世代⁽³⁾の同人たちであった。全編一九四頁は「伝」「教学」「詞章」の三部から構成され、末尾には「王陽明の後に題す」という陸羯南の跋文が付されている。同書が書かれることになった動機はいまひとつ判然としないが、我が国近代における陽明学研究の嚆矢となった点は確かである。もつとも、これを王陽明の史伝あるいは陽明学の解説として読んだとき、山路愛山が書評の中で「氏は歴史上の陽明を善く書かざりしのみならず、哲学上の陽明を善く書かざりし」⁽⁴⁾といったように、必ずしも満足のいく内容をもつとはいえないかもしれない。しかし、私が本書の文脈で注目したいのは次の二点である。

一つは、『我観小景』で定位された「我観」の視線が、この『王陽明』では「陽明の学説の重なる一点は、予じめ先づ心を認了す。苟も一心にして正しければ、世間の事悉く之に拠て解釈せられざるなし。而して人皆良知を致すを得べくんば、寰宇の事業已に了せりと謂つべしと。陽明は実に良知を致すを以て躬の指導としたるなり」(七六頁)として「心」の問題に置き換えられ、引き続き問われていることである。したがって、両書はその執筆動機においても密接に関わっているといわなければならない。さらに『王陽明』では、柳田泉が「王陽明その人に雪嶺自身の理想の哲人を見、その哲学思想に雪嶺自身の哲学思想と深く共鳴するものを見出しているところがある」⁽⁵⁾と述べているように、雪嶺

の知識人として言論に対する姿勢が、王陽明に仮託されるかたちで極めて主体的な課題として意識されていたことが重要である。

己れの力微にして、而も自らは身を退て優遊して人情の澆漓を冷視することを得ず。天下の人心は自己の心なり。天下の悪習に沈淪するを見ては、之を座視するに忍びず、世人の疾痛に苦しむは、己れ其の痛みを感じるが如く、世人の饑餓に陥るは、己れ亦た饑餓に瀕するが如く、之を救済せざるは、自己の心に堪へざる所なり。(一〇七―一〇八頁)

もう一つは、この『王陽明』が、「餘姚(王陽明の生地・引用者)の学は独り斬然として支那哲学中に傑出するのみならず、畏らくは世界哲学中に在ても、尚ほ或は巍然として特色を現はし、燦然として異彩を放つあらん」(六七―六八頁)と高い評価を下すことで、すでに『哲学涓滴』において企図した東洋哲学と西洋哲学の融合を、東洋哲学の立場から実践する試みだったということである。このような立場は、かつて示した西洋哲学を主とする立場とは逆のものである(第三章註²参照)。その点からいうと、前述の『我観小景』では「我」を中心とする同心円構造の中で遠心・求心軸が重要な役割を担っていたのに対して、『王陽明』ではもう一つの重要な軸として東西関係を再確認したかたちになっている。雪嶺のこの立場は、「国粹主義」の主張を文明観の観点から改めて確認して、まさにこの時期に政教社の対外論の基調となっていた「東洋盟主論」を保証するものであった。後年の『宇宙』に続く大著とされる『東西美術の関係』『学術上の東洋西洋』『東洋政対西洋政教』などをみる限り、これ以後も晩年に至るまで彼の思想活動の一半が、常にこの東・西軸をめぐる展開していくことは確かであろう。

さて次に、志賀重昂の『日本風景論』を取り上げてみたい。彼が「明治中期のベストセラール」⁽²⁵⁾といわれる同書を政教社から上梓したのは、日清戦争最中の明治二十七年十月二十七日のことであつた。前述のように、ときあたかも平壤陥落の直後であり、連戦連勝の報に国内は沸き返つていた。もつとも「日本風景論」と題する同名の論説が『亜細亜』第三巻誌上に掲載されたのは前年暮れのことであつたが⁽²⁶⁾、いずれにせよ維新以来初めての対外戦争を背景とする時代に、同書はいかなる意図で書かれ、実際どのように読まれたのか。また、志賀が同書で示した「風景」の視線とは何だつたのか。ここではそれらを、あくまでも政教社の言論活動との関連において考えてみようと思う。

初版二一九頁の同書には、さまざまな図表や樋畑雪湖と海老名明四による挿画が数多く収められている。全編の構成は、日本風景の美しさの根拠を、

- 一、日本には気候、海流の多変多様なる事
- 二、日本には水蒸気が多量なる事
- 三、日本には火山岩の多々なる事
- 四、日本には流水の浸蝕激烈なる事(三頁)

という四つの卓越する自然条件から説明し、とりわけ、日本に多い火山の美を称揚している。ではこれが科学的な記述に終始しているかといえ、全くそうではなくて、百編を越える古今東西の詩歌、文章を随所に掲げること、観賞の方法まで教えているのである。

このような構成と特質をもつ同書がいかに江湖の歓迎を受けたかということは、初版刊行後四か月で八十二編もの書評が寄せられ、十年間に十五版を重ねたということから察しがつく⁽²⁷⁾。

今日では、『日本風景論』とそれを書いた志賀に対する評価は、次の三つに代表されるだろう。

一つは、「探険と登山のパイオニア」としての位置づけとその見直しである。これは、小島烏水以来の評価を引き継いだもので、確かに志賀は第三版から「登山の気風を興作すべし」という登山案内風の付録を加えている。三田博雄は、それらをむしろ批判的に継承して、志賀の探険と登山の実態と同書のモデルとなった種本まで明らかにし、「探険の鼓吹者であっても実行家でなかった」⁽¹²⁸⁾といい、さらに「彼の愛国主義は、尊皇ではなしに、もちろん国民愛でもなく、国土愛という形をとるのであった」⁽¹²⁹⁾とみる。

もう一つは、我が国において近代的風景が「発見」される契機としての位置づけである（いわば日本・風景論という分節化）。この場合、柄谷行人が近代文学成立期の作家と作品に即して、「明治二十年代において重要なのは、近代的な制度が確立したこと、そして「風景」がたんに反制度的なものとしてでなく、まさにそれ自体制度として出現したということである」⁽¹³⁰⁾とみているのは示唆的であろう。いわゆる近代的自我なるものも風景（という制度）に対抗する「内面」の発見と制度化によってもたらされたといい、風景論の転倒、倒錯が指摘されている。西欧で十六世紀に「発見」されたといわれる近代的風景とは、ジンメルによれば「地上に拡散した自然現象の並存を、因果論的に思考する学者や宗教的に感受する自然崇拜者や目的論的な態度をとる農夫あるいは戦術家がまさにこの同じ視界を包括するのとは別に、特殊な統一の仕方で統括することによって成立する」⁽¹³¹⁾と説明され、この「特殊な統一の仕方」はあくまでも「人間の心のうち」に求められる性格のものである。ただし、志賀の『日本風景論』がはたして右のような風景論の提示

を著作意図の中に潜ませていたかどうかは、緒論で「日本人が吾が江山の洵美を謂ふは、何ぞ啻に其の吾郷に在るを以てならんや。実に絶対上、吾が江山の洵美なるもの、在るを以てのみ」(二頁)というのをみる限り疑問というほかない。

著作意図という意味では、三つめに、「国粹主義」の代表的著作としての位置付け(いわば日本風景・論という分節化)が、志賀のそれに最も近いだろう。前田愛によれば、「重昂の『日本風景論』は、これまで信仰や物見遊山の対象として個別に観賞されていた日本の風景を、日本全土を包含する広大な空間のもとに統一的に把握しようとする画期的な試みであつた。いいかえれば民衆の生活感覚や郷土感情としてのパトリオティズムと結びついていた風景美を、自然科学的な座標軸をかりて再編成し、国土的なスケールに拡大してみせた風景論なのである」(132)とされ、そのような風景論の果たした機能は、「民衆のパトリオティズムを巧みに支配し、操作しつつ、富国強兵のプログラムの中に組み込んで行つた明治国家の戦略と、ある相似形をかたちづくつていたことはまぎれもない。パトリオティズムの歯止めを持たないからこそ、重昂『日本風景論』は侵略主義、膨張主義を鼓舞する書として有効に機能しえたのである」(133)とまとめられる。だが、志賀の風景論には「パトリオティズムの歯止め」がなかったのか、明治国家の侵略主義を補完する機能しか果たさなかつたのかといえば、なお一層の検討を要する余地が残つていと思う。例えば、「八紘一字」のスローガンと共に風景論が「日本精神」との関連で取り上げられた昭和十年代になつて、保田与重郎が「我々の国土の風景は、つねにわが心の中にある歴史である」(134)と述べて、それを「神ながらの精神」と結びつけたのを見ると、志賀の『日本風景論』とは明らかに異質の地平に立つた風景論だといふほかない。

いずれにせよ、以上三つの評価は密接に関連しながら志賀『日本風景論』の投げ掛ける今日的な課題をほぼ網羅していると思う。なおとくに著作意図に関して二、三付け加えるとしたら、『日本風景論』の構成は、伝統的な名所図会が示す「風景」の視線と志賀の講じる地理学が教える「風景」の視線を交錯させたところに成立しているということである。そもそも志賀にとつての地理学とは「地球ニ関セル万般ノ現象ヲ講究スル学問」(25)とされ、選挙区の票読みから移住植民の振興にまで「必要」な知識とされる。のちにはより明確に、「世界ノ大勢」を知る確たる「標準」と位置づけられ、「苟モ日本人デアレバ必ズ地理学ノ思想ヲ養成シ発達サセテ、四千万人ノ頭ガ名々ニ世界ノ形勢ヲ会得スルヤウニナツテ、列国ノ兵備、貿易ノコトヨリ都テノ得失利害ヲ了解シテ四千万人ノ地理学者、四千万人ノ外交家ヲ作り出セバ、万一ノコトガアリマシテモ狼狽スルヤウナコトハナイ、立派ニ独立スルコトガ出来マス。サレバ、ドウシテモ我国ノ独立ヲ維持シ国力ヲ発達セシムルト云フニハ、地理学思想ノ養成ハ急務トシナケレバナリマセヌ」(26)と述べている。このような地理学観に立つ限り、『日本風景論』は異色ではあるが志賀にとつては地理学書と位置づけられていたのである。

また、志賀の唱える風景保護の発想が彼の独創でないことは、ほかならぬ『亜細亜』誌上に紹介された「風景保護の請願」によって窺い知ることができるといふことである。伊賀上野の銅鉄商田中善助という人物によって提出されたといふこの請願は、風景を我が国「国体の美」とみて、「近来土木の盛なる、世人往々其心目を眩せられ、徒に利便是れ競ひて復風景の如何を顧みず。今にして之が救済の策を為さずむば、十年の後安ぞ名区勝地の遂に俗履の蹂躪する所とならむか」(27)との懸念を示している。一部の思想家や文学

者だけでなく広く一般の国民の間でも、風景観が徐々に変容を始めていたといふべきだろう。この請願が折からの第四議会でどのように取り扱われたかは定かではないけれども、以後の国立公園設置運動の暁鐘といつてよからう。同時に、志賀の『日本風景論』が大きな反響を得た背景をみる思いがする。

このように考えると、どうも従来の評価では、『日本風景論』の影響が日清戦後期を通じていかに拡大波及していったか、ということに重点が置かれすぎているような気がする。前述のように、遅くとも明治二十六年秋までに同書の全体構想はできていたのだし、上梓された二十七年秋の段階では日清戦争の勝敗の帰趨も定かではなかったのだから、余り先を見通した評価というのにもかえって同書を著したときの志賀の主体的動機を隠してしまふのではないだろうか。

私はむしろ、設立直後の政教社において彼が中心となって展開した「国粹主義」との関連を重視してみたい。前章第一節で明らかにしたように、「国粹」とは「日本の開化」の価値基準であるとされ、それを根拠に文明化を推進する思想的立場が「国粹主義」であった。だが、その「国粹」概念の理論化は抽象的な「美術的の観念」とされたまま、いわば保留にされていたのである。この「美術的の観念」が、『日本風景論』として結実したといえよう。しかし逆にいえば、志賀の「国粹主義」は、社会進化論的な発展段階説を前提に新たな文明論として展開する可能性を、いまや全く「日本風景」という「美術的の観念」の中に解消してしまったともいえるのである。そのような意味からいえば、風景論の嚆矢ではあったかもしれないが、彼にとっては「国粹主義」の終焉を内外に宣することになった著作であった。内村鑑三は、『六合雑誌』に寄せた書評で、スペンサーを引用して志

賀の「Patriotic Bias (愛国偏)」を難じたあと、「美術的の観念」を「日本風景」ではなく「万国」に求める理由を次のように述べた。

日本は美なり。園芸的に美なり。公園的に美なり。然れど吾人をして他洲に譲る所あらしめよ(中略)即ち偉大なる美是れ日本風景の欠乏ならずや。我国の風景は人を酔はしむるものなり(細工に過ぎて)。人を高むるの美、即ち自己以上に昇らしむるの美は吾人は汎く之を万国に求めざるべからず。(38)

内村のいう風景は「偉大なる美」を求めて万国へ向け開かれている。志賀が注いだ「風景」の視線は、内村とは別の意味で外延化し、我が国の領土拡大に対応する国民の視圏拡大に寄与して、『日本風景論』はちょうど拡大前の原型を提示する役割を担った。それは「美術的な観念」とされた「国粹」に置換されるもので、実業論のレベルではすでに述べた移住殖民とも対応し、さらに維新以来初めての対外戦争という時宜を得て、領土拡大要求にも応えることのできるような、多分に政治的な意味あいを帯びるものとなったのである。

第五章 註

- (ノ) 「発刊の辞」、『亜細亜』第一号(一八九一年六月二十九日)一頁。
- (ト) 棚橋が郁文館を創立するのが二十二年十一月十三日、中原の成立学舎、井上の哲学館も二十三年の秋には相ついで拡張される。一方、辰巳は第一回の総選挙に浅草区から出馬し、次点で落選している。
- (ク) 「亜細亜」、前掲(註1)二頁。
- (ケ) 『亜細亜』第一号に寄せられた栗原亮一の「日本の亜細亜」の述べるところは、そのような見方を示したものである。「日本人」は一たび之を廃刊するも更に「亜細亜」を発刊す。是れ即ち我日本の版図を拓めて亜細亜全州に及ぼす者ならん(中略)我日本人が亜細亜の主動と為りて其特性を發達せしむるは新刊の「亜細亜」が独り自ら任ずる所ならん。「日本人」も変じて亜細亜と為る、其期する所は蓋し茲に在らん(同誌九〇一頁)。
- (コ) 『亜細亜』第一号には、すでに長沢、畑山、浅水のほか安藤和風の文章が掲載されている。同二〇号(一八九一年十一月九日)には、内藤の従弟にあたる川口恒蔵の名まで見える。政教社編集部が秋田人脈については、千葉三郎『内藤湖南とその時代』一七三頁以下参照。
- 秋田人脈以外では、八戸時代の浅水について紹介されている河西英道「明治青年史についてのノート」(『立命館文学』第五二二号(一九九一年)所収)参照。
- (カ) 「三宅氏の送別会」、『亜細亜』第一三三号(一八九一年九月二十一日)一七頁。

(之) 「岡両」は内藤湖南の雅号の一つで、『日本人』第一五号(一八八八年十一月三日)に「岡両子」という署名のあるのが初出と思われる。ところで、原宗子はこの「岡両窩同人」のメンバーを本稿でいう(第二世代)に限定している(「『亜細亜』の頃」、学習院大学東洋文化研究所『調査研究報告』第一〇号(一九八〇年)六頁)。しかしながら、『亜細亜』第六一号(一八九二年十月十七日)から設けられた「岡両」欄には志賀も執筆しているし、岡両同人の名で畑山が書いた「湘南放笑録」(『亜細亜』第二卷第八、九号(一八九三年八月一、十五日)所収)などから判断すると、「岡両窩同人」は(第一世代)の志賀と三宅も含めた変貌期政教社の新しい(組織)を表す自称とみなすべきであろう。

(8) 三宅の南洋行の日程は『亜細亜』第五一号(一八九二年八月八日)所収。なお、三宅が軍艦比叻に乗船したことは、前述の志賀の南洋行の場合と同じく、防衛研究所及び外交史料館所蔵の記録には見当たらない。

(9) 「明治二十四年」十二月九日付三宅宛志賀書簡(三宅家所蔵)。引用末尾にある「大地震」が濃尾大地震であることから年代は推定できる。

(10) 「明治二十四年」十二月二十八日付三宅宛志賀書簡(三宅家所蔵)。

(11) 今の死については、「政教社の厄」(『亜細亜』第三七号(一八九二年五月二日)一九〜二〇頁)参照。

(12) 前掲(第三章註5)三宅談「『日本人』と『日本新聞』」、一八四頁。

(13) 「神田の大火」、明治二十五年四月十二日付『東京日日新聞付録』。

(14) 別天生「送竹川黙囀子」、『亜細亜』第六二号(一八九二年十月二十四日)六

頁。竹川は名を藤太郎といって、サンフランシスコで『遠征』という雑誌を主宰していた人物である。これ以後『亜細亜』誌上に文章を寄稿している。

(15) 明治二十五年十一月十三日付の三宅宛陸羯南書簡に、「亜細亜も解停二相成り、定而御多用ならん。此際二申上兼候へ伴、紙上余り索莫二御座候間、何か御立筆被成下度様、社員より懇請有之候間、何卒可然願上候」(『陸羯南全集』第十卷(一九八五年、みすず書房)(八六頁)とあることなども窺えよう。

(16) 松下の帰郷理由が単に後輩子弟の教育にとどまるだけではなく、自らの代議士出馬に備える地盤づくりの意味ももっていたことが、遺稿の中から窺える(前掲(第四章註²)『松下雲外遺稿』五七一頁)。この点で松下の志向は政治書生の伝統を引き継いだものだったといえよう。

(17) 前掲(註7)「湘南放笑録」(一)、四九頁。また、志賀の「湘南の植民地」には「札幌在学の旧師宮崎君在り、土井子爵在り、故人雪嶺、呂泣、別天、南八、忘言子皆在り、湖南、木公亦た来り、井蘇、呑龍、熊宜、田秀時々東京より来棲す」(同誌五三頁)とある。このうち、木公は内藤たちとは秋田以来同窓の中村千代松、井蘇は井上蘇吉、呑龍は恩田熊寿郎、熊宜は熊田宣遜、田秀は田村秀雄と思われる。

(18) 松田道雄「日本の知識人」、『近代日本思想史講座』IV(一九五九年、筑摩書房)二七頁。のち、『日本知識人の思想』(一九六五年、筑摩書房)に収録。志賀の実業論として注目される「日本生産略」は、初期『日本人』誌上に四回にわたって掲載された。しかし、未完に終わっている上、彼の実業構想のイメージが十分に展

開されているとはいえない。

- (19) 今「日本殖産策」、『日本人』第一号(一八八八年四月三日)一四頁。
- (20) 今「日本産業の前途」、『日本人』第一七号(一八八八年十二月三日)三頁。
- (21) 今「今日の政治家に望む所あり」、『日本人』第二三号(一八八九年三月三日)一二頁。
- (22) 今「産業社会のために」、『日本人』第三二号(一八八九年九月三日)七頁。
- (23) 今「全国民に一言す」、『日本人』第四二号(一八九〇年三月三日)七頁。
- (24) 今「実業界の大波乱」、『日本人』第五〇号(一八九〇年七月三日)四頁。
- (25) 前掲(註22)今「産業社会のために」、七〇八頁。北海道移住論のもつ精神的な側面に関する位置づけについては、榎本守恵『北海道開拓精神の形成』(一九七六年、雄山閣出版)から示唆を得た。
- (26) 今の経歴については、前掲(註11)「政教社の厄」及び『県立学校職員履歴』学務課(長野県総務部広報文書課所蔵、県立長野図書館保管、F・六)参照。それによると、今は明治六年九月開拓使雨童学校、九年十一月札幌学校、十年札幌農学校予備門を経て同校本科に入学している。
- (27) 今「北門多事なるべし」、『日本人』第二八号(一八八九年七月三日)一一頁。
- (28) 今「北海道移住論」、『日本人』第四〇号(一八九〇年二月三日)一〇頁。
- (29) 伊達藩(亙理、伊達邦成)の移住については渡辺茂編『新稿伊達町史』(一九七二年、三一書房)三六二頁以下、香川県の移住奨励については、北海道庁殖民部『北海道移住者成蹟調』(一九〇五年)三〇八頁をそれぞれ参照。

(50) 北海道庁殖民課編『北海道移住問答』(一八九一年、北海道庁)一六七頁。

(51) 北洋生「読今外三郎君北海道移住論」、『日本人』第四三号(一八九〇年三月十八日)三一〜三二頁。この顛末については、小林宏吉編『新十津川町史』(一九〇六年、十津川町役場)の引用している東武の「北海道移住記」によれば、「当時日の出の勢いであつた『日本新聞』に近外三郎という農学士で文壇にも英名を馳せた男がおり、これが同紙上に一つの論文を発表して、「十津川の間人は実に無智蒙昧だ。北海道の氣候も分らず、十一月の積雪期に多数の老若男女を擁して北海道に移住するとは何たる暴挙であろうぞ……」という意味のことを書き立てた。私どもはこれを読んで義憤やる方なく、早速一文を草して『時事新報』にのせて大いに反駁したものである」(同書一八一頁)といものであつた。

(52) 志賀「我れに「コサツク」軍を編成するの材料あり」(『日本人』第三五号(一八九九年十一月十八日)所収)。

(53) 「社告」、『亜細亜』第一〇号(一八九一年八月三十一日)一九頁。

(54) 「北来の一信」、第二次『日本人』第五号(一八九三年十二月十八日)七九頁。

(55) 阿波国(徳島県)出身の岡本(一八三九〜一九〇四年)は、すでに早く幕末期から「北蝦夷」に興味を抱き、文久三年(一八六三)、実際に蝦夷地たる北海道・樺太まで渡航した経験を持つ、いわば北進論の先駆をなすような人物であつた(徳島県教育委員会編刊『岡本氏自伝 窮北日誌』(一九六四年)参照)。そのような岡本と政教社の接点というものは、彼が明治十四年から東京大学予備門の教諭として「同志」たちの同僚又は恩師であつたということ、二十四年以降は哲学館の講師を

務めていたこと、そしてとくに三宅とは私的な交際が深かったことなどに見い出せよう。

その岡本が、明治二十五年といえばすでに齢五十を過ぎていたにもかかわらず、なお「北」への夢を棄てきれず千島義会を結成する。同会の目的は、「移住会員規則」の第一条によれば、「移住会員は、北海道千島に土着し、日常耕牧又は漁獵に従事し、該島の物産を興し、閑暇の時は武事を講じ、有事の日は国防に当るものとす」（「千島義会移住会員規約」、『亜細亜』第五三号（一八九二年八月二十二日）（一八頁）というものであった。それに先立って岡本は、千島開拓の覚悟を「千島の開拓は有志の男女を移して永住人たらしめ、千島を主とし内地を客とし其地を私として家業を営み、子孫に伝ふるの覚悟あらしめんことを要す」（岡本「千島開拓の事宜十五条」、『亜細亜』第一八号（一八九一年十月二十六日）（二一頁）と述べている。政教社はこのような岡本の計画を支援する。それは、『亜細亜』の誌面をたびたび彼に提供していることや、逆に岡本も近況報告などをこまめに政教社に寄せていることから窺える。それらのうち、同二十五年八月十四日に千島義会が政教社に宛てた書簡によると、同会の一行は二手に分かれて千島に向ったことが知られる。このときのメンバーは次のような人々であった（「千島義会近況」、前掲『亜細亜』第五三号一七頁）。

千島義会々長 東京 岡本監輔 柯太漁業実験者 同 渡辺隆

商業人 同 志賀忠明 高等中学卒業生 茨城 関熊太郎

農商半業者 同 松本新三郎 医学生 山口 永富良三

元戸長 現農商半業者 千葉 木原挂次郎

近衛予備一等軍曹 広島 植本仙吉 同 大分 小野亀齡

同 群馬 須藤元治郎 教導団予備一等軍曹 兵庫 河本伊太郎

同 佐賀 枝国卯三郎 学生 同 徳丸与一

同 高知 松島淳 同 石川 浅井勝太郎

元裁判所吏員 新潟 高橋鐵太郎 慶応義塾卒業生 埼玉 石原正

教導団予備一等軍曹 大分 森勘作

書生、軍人を中心としたメンバーで、政教社が「社会進化」の担い手とした「中等種族」に属する人々とみてよからう。また、この書簡に同封されていたという「千島のまもり」という「軍歌」の歌詞を読むと、千島義会の目的がより一層鮮明になる(同上二八頁)。

千島のおくも樺太の

そのさきまでも我くのに

むかしのひとはおさめしに

いつしかしらすとつ国の

ひとのおさむるところとも

なりにしことは我くのに

おこたりしにはあらざるか

合唱 我同胞よはらからよ

国の為にもつとめよや

一 家の為にもつとめよや

これによれば、北千島も樺太も本来日本の領土なのであって、ロシア領となっているのは我が国の慢心によるものだから、今後は国威や家名を揚げるためにもその回復に努めなければならないという。千島義会の行動基準となった領土観には、単なる冒険心と呼ぶにはあまりに露骨な侵略的発想が包含されていたというべきだろう。しかし、検分の意味あいで行われたこの年の渡航すら持ち船の難破で失敗に帰し、衆議院への請願も却下されるなどの条件が重なって、岡本と千島義会の計画はわずか一年で挫折してしまう。

(36) 「殖民探險の指南針」、『亜細亜』第二卷第三号（一八九三年四月十五日）一四頁。

(37) 「進歩党とは何ぞ、保守党とは何ぞ、在野政党の大醇なるものは宜しく連合せざるべからず」、『亜細亜』第二号（一八九一年七月六日）一―二頁。

(38) 坂野潤治『明治・思想の実像』（一九七七年、創文社）参照。

(39) 志賀『南洋時事』（一八八七年、丸善商社）、志賀富士男編『志賀重昂全集』第三卷（一九二七年、志賀重昂全集刊行会）緒言二頁。

(40) 渡辺克夫「杉浦重剛の「国権論」」、『日本学園高等学校研究紀要』第二集（一九八三年）六二頁。

(41) 福本日南の南進論については、三宅桃子「福本日南論」（『季刊日本思想史』第三〇号（一九八八年）所収）及び広瀬玲子「興亜思想から経済侵略主義へ」（『近代日本研究』第六卷（一九九〇年）所収）を参照。

(42) 菅沼貞風は『新日本の凶南の夢』(一九四二年、岩波文庫版)の中で次のようにいつている。

我国をして永久に其独立の対面を保持せしめんと欲せば、天然の地形が之をして然らしむるが如く、北北極の固によつて南南洋の利を控へ、欧州の諸国と同じく緊要なる植民地を有し、東洋の形勝を扼して之と拵角せざるべからざるべし。詳に之を言ふときは、北は魯領浦潮斯德港、黒龍江の地より「サガレン」「カムサツカ」の諸処に至るまで盡く魯国の日本海に瀕する侵地を復し、天然北極の冰雪を以て我が後面の備へとなして永く北顧の憂を絶ち、南は東印度諸島を経略して英領新嘉坡の峽門を奪ひ、赤道線辺遠く南門の防御線を張つて以て金甕を固守せざるべからず。然れども英魯は俱に天下最強の国、之を挫ぎ之を破る豈容易の業ならんや。是自から自然の順叙あり。究竟の目的を達せんと欲するものは、近急の要務より始めざるべからざる也(同書二八頁)。

(43) 東方問題に関する当時の認識については、有賀長雄『近時外交史』(一八九八年、東京専門学校出版部)第二十一章参照。

(44) 志賀「「東方策」を評す」、『亜細亜』第三号(一八九一年七月十三日)附録四頁。

(45) 「西比利亜の鉄道は何れの日か成功を期せん」、『日本人』第二六号(一八九九年六月三日)一頁。

(46) 「朝鮮の存亡と日本」、『日本人』第七一号(一八九一年四月七日)七頁。

(47) 前掲(第一章註1)三宅『同時代史』第二卷四八五〜四八六頁。

(48) 「亜細亜主義とは何んぞ」、「『亜細亜』第三二号（一八九二年二月一日）一〜二頁。

(49) 同右三頁。

(50) 坂野潤治「東洋盟主論」と「脱亜入欧論」、佐藤誠三郎・R・ディングマン編『近代日本の対外態度』（一九七四年、東京大学出版会）参照。

政教社の「東洋盟主論」が最も明確な姿を現わすのは、『亜細亜』第三卷第二号（一八九四年七月十日）所収の「東亜保安策」であろう。その冒頭では次のように説かれている。

西力の東漸今ま言ふを俟たず、アリアン種族が八荒を挙げて自家の遊戯場若しくは製作場の如くに思ひ做すも、亦た今ま言ふを俟たず。而して蒙古種たる者が、日本と云はず、支那と云はず、朝鮮と云はず、暹羅と云はず、共に与に力を併せ、心を協せて之れに反抗せざる可らざるも亦た固より言ふを俟たず。而して蒙古種中の先覚者たる我が大日本が之れが盟主として運動発縦の任に當らざる可らざるも、亦た固より云ふを俟たざるなり。（同誌一頁）

(51) 「東邦協会設置趣旨」、「『東邦協会報告』第一（一八九一年、東邦協会仮事務所）三頁。東邦協会については、安岡昭男「東邦協会についての基礎的研究」（『法政大学文学部紀要』第二二号（一九七七年）所収）及び同「東邦協会と副島種臣」（『政治経済史学』第一六九号（一九八〇年）所収）参照。

(52) 「会事報告」、「『東邦協会報告』第一（一八九一年）三五〜三六頁。

(53) 同報告の奥付によると、印刷所は日本新聞社となっているほか、発行兼編輯人の

秋間米吉の住所は牛込区矢来町八番地福本誠方寄留となっている。

(54) 『東邦協会報告』第一四(一八九二年)一四三頁。

(55) 今「殖民に就て」、『日本人』第五四号(一八九〇年九月三日)四頁。

(56) 入江寅次『邦人海外発展史』上巻(一九三六年、海外邦人史料会)二頁。

(57) 以下の目的、事業、役員等については、『殖民協会報告』第一号(一八九三年)による。

(58) 前掲「殖民探険の指南針」、一三―一四頁。

(59) 「世の所謂探険なる者」、『亜細亜』第二巻第四号(一八九三年五月一日)四頁。他に同様の趣旨の演説筆記として、「移住及探険ノ方針」(『殖民協会報告』第二二号(一八九五年)所収)がある。その中では、「今日我国ニテ申ス所謂探険ハ唯探険ト云フ名バカリデ、私等モ自分デ申シタコトハ無イ積リデアルガ、探険者トカ何トカ云フ文字ヲ附ケラレル。元来私等ハシドニーノ市ニ居ツテ宿屋ニ階テ折ニハ麦酒ヲモ飲ミ、又「フリー・パス」ヲ呉レタ故上等列車ニ乗ツテ旅行シタノデス」(同誌六六頁)と語られている。

(60) 瀬谷正二郎『布哇国移住民始末』(一八九三年、新井喜平発行)三頁。他に、ハワイ日本人移民史刊行委員会編『ハワイ日本人移民史』(一九六四年、布哇日系人連合協会)参照。

(61) 長沢「北米に赴く者」、『亜細亜』第二六号(一八九一年十二月二十一日)一八頁。

(62) 「第二の征韓論、布哇参政権問題」、『亜細亜』第二巻第六号(一八九三年七月

一日)一三頁。

- (63) 長沢「布哇愈々急なり」、『亜細亜』第二卷第一号(一八九三年九月十五日)二九頁。

- (64) 故伯爵山本海軍大将伝記編纂会編『伯爵山本権兵衛伝』上卷(一九六八年、原書房復刻版)三四四頁。

- (65) 「大世界上に於ける日本人」、『日本人』第六九号(一八九一年三月二十四日)七頁。

- (66) 内藤「所謂日本の天職」、『二十六世紀』第七号(一八九四年)、『内藤湖南全集』第二卷(一九七一年、筑摩書房)一三五頁。増淵龍夫『歴史家の同時代史的考察について』(一九八三年、岩波書店)のとくに五五〜五六頁参照。

- (67) 酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』(一九七八年、東京大学出版会)一一頁。

- (68) 井上哲次郎『内地雜居論』(一八八九年、哲学書院)一〇〜一一頁。

- (69) 同右五〇頁。このような劣等感は志賀も共有していた。「日本生産略」(其三)(『日本人』第一二号(一八八八年九月十八日)所収)では「我人民の緩慢なる腦力と軟弱なる身体にては斯る敢為大胆なる西洋民族と競争して未だ必ず全勝を期し難し」(一九頁)と説かれている。

- (70) 坂野潤治『明治憲法体制の確立』(一九七一年、東京大学出版会)八二頁。

- (71) 「朝野人士意見の撞着」、『亜細亜』第三九号(一八九二年七月十一日)一頁。

- (72) 「今回の内閣」(『亜細亜』第五二号(一八九二年八月十五日)所収)、「藩閥

政府滅亡の時期」(『亜細亜』第二卷第八号(一八九三年八月一日)所収)など。

- (73) 「条約改正研究会規則」第一条、『条約改正研究会報告』第一回(一八九二年)二頁。

- (74) 「内地雜居講究会規則」第二条、『内地雜居講究会報告』第一(一八九二年)目次頁。

- (75) 三宅「和親か破砕か」、『亜細亜』第二卷第一号(一八九三年二月一日)一〇頁。

- (76) 前掲(註87)酒田『近代日本における対外硬運動の研究』第一章第二節、米谷尚子「現行条約勵行をめぐる国民協会の実業派と国権派」(『史学雜誌』第八六編第七号(一九七七年)所収)参照。

- (77) 「大日本協会」、第二次『日本人』第一号(一八九三年十月九日)五七頁。

- (78) 「大日本協会」、明治二十六年十月三日付『東京日日新聞』。

- (79) 「大日本協会及国民協会ニ対スル処分ノ件」、自明治十九年至同三十一年『公文別録』内務省(国立公文書館所蔵、別・一六六)。

- (80) 「外国条約取締法案」、明治二十六年十二月九日付『東京日日新聞』。

- (81) 明治二十六年十二月九日付伊藤博文宛伊東巳代治書簡、『伊藤博文関係文書』二(一九七四年、塙書房)、二六二頁。

- (82) この中で「勵行論者の巨擘たる「日本」と位置づけているように、当時両紙は対外硬問題をめぐって最も激しい論戦を続けていた。朝比奈知泉「君と筆戦の昔を懐心」(『日本及日本人』第八六九号(一九二三年九月一日)所収)では、「予は

明治二十五年東京日日新聞に入り、其時以後君とは立場を異にしてゐた關係上、熾に火花を散らして、社説に論説に相争つて来たものである。当時東京日日新聞は伊東巳代治氏の経営せしもので、当時首相であつた伊藤公とは始終意見を交換して大體に於て其の政策には反対することをせなかつた。従つて政府を擁護するが如き立場にあつたため、羯南君とは連日紙上にて議論を闘はしたこともある」(同誌八八頁)。

(83) 第五回帝国議會『衆議院議事速記録』(国立公文書館所蔵、帝・一二)二五一頁。

(84) 同右二五四頁。

(85) 「紛擾一掃」、第二次『日本人』第六号(一八九四年一月三日)一頁。

(86) 同右五頁。

(87) 三宅「外尊内卑」、明治二十七年一月二十五日付『日本』。

(88) 「前代議士を再選すべし」、第二次『日本人』第八号(一八九四年二月三日)九
一頁。

(89) 三宅『同時代史』第三卷(一九五〇年、岩波書店)五頁。

(90) 升味準之輔『日本政治史』二(一九八八年、東京大学出版会)三二頁。

(91) 後藤狂夫『我郷土の産める世界的先覚者志賀重昂先生』(一九三一年、警眼社)
四二頁。

(92) 同右四四頁。

(93) (94) (95) 「全国同志新聞記者連合団体ヲ政社ト認ムル件」、前掲『公文別録

『所収。同伴添付「全国同志新聞記者連合事務所報告」は結成から六月十二日まで
の動静を逐一伝えているが、これは志賀の起草という。この同盟新聞に対する政府
側の認識は、一貫して大隈の「内囑」を受けた蘇峰の策動という把握だが、むしろ
これら一連の記録を見ると志賀が中心に立っていることは確かである。註(95)に
「目下志賀重昂が閑散云々」とあるように、ちょうどこの時期『日本人』は発行停
止処分を受けていた。一方当時の蘇峰の動向については、梶田明宏「明治二十七年
対外硬運動と徳富蘇峰」(『日本歴史』第四二四号(一九八三年)所収)がある。

(96) 「対外硬同志者の会合(紅葉館に於て)」、明治二十七年四月二十四日付『日本
』。ただしこの日選ばれた発起人には、同盟新聞記者からは羯南、蘇峰ら五人が挙
げられ、志賀は発起人の一人ながら無所属となっている。

(97) 明治二十七年四月二十四日付『東京日日新聞』。

(98) 政教社関係では、辰巳小次郎、浅水又次郎、井上亀六、陸羯南、志賀重昂らが出
席している(明治二十七年五月十日付『日本』)。

(99) (100) 明治二十七年五月十四日付『日本』。主な来会者は次の通りである。

- | | | |
|-------------|-------------|-------------|
| 浅水又二郎(政教社) | 志賀重昂(日本人) | 香川悦(全国同盟) |
| 阿部充家(国民新聞) | 竹内正志(中国民報) | 高橋健三(大坂朝日) |
| 的野半介(福陵新聞) | 長沢説(政教社) | 陸実(日本) |
| 福本誠(日本) | 山田猪太郎(秋田新聞) | 井上亀六(日本) |
| 大橋佐平(博文館) | 三宅雄二郎(日本) | 箕浦勝人(報知新聞) |
| 徳富猪一郎(国民新聞) | 山路弥吉(国民新聞) | 人見一太郎(国民新聞) |

- 深井英五(国民新聞) 青木匡(毎日新聞) 市島謙吉(読売新聞)
- 高田早苗(読売新聞) 末広重恭(国会新聞) 尾崎行雄(報知新聞)
- 大岡育造(中央新聞) 大竹貫一(東北日報) 肥塚龍(毎日新聞)
- 島田三郎(毎日新聞) 国分高胤(日本)
- (101) 第六回帝国議会『衆議院議事速記録』(国立公文書館所蔵、帝・一四)七頁。
- (102) 明治二十七年六月五日付伊藤博文宛伊東巳代治書簡、『伊藤博文関係文書』二(一九七四年)二八八頁。
- (103) 「全国同志新聞記者連合事務所禁止ノ件」、前掲『公文別録』所収。
- (104) 「全国新聞同盟解散を達せらる」、明治二十七年七月二十一日付『日本』。
- (105) 「中央政社常議員会」、明治二十七年七月一日付『日本』。
- (106) 「中央政社」、同右。他にも「中央政社」(『立憲改進黨々報』第三〇号(一八九四年七月二十日)五六頁)など参照。
- (107) 「日清の戦は遂に避く可らず」、第二次『日本人』第一五号(一八九四年七月八日)二頁。
- (108) 「帝国の拡大」、『亜細亜』第三卷第三号(一八九四年十月二十一日)七頁。
- (109) 「支那分割論」、第二次『日本人』第一七号(一八九四年十二月二十五日)五頁。
- (110) 檜山幸夫「日清開戦と国内世論」(上)、『中京法学』第二二卷第二号(一九八八年)四四頁。
- (111) 前掲(註89)三宅『同時代史』第三卷一三頁。

(112) 石河幹明『福沢諭吉伝』第三卷(一九三二年、岩波書店)七一八〜七二二頁。福沢の論理は周知のように日清戦争を文明と野蛮の対決と位置づけて、「直に開戦を布告して以て懲罰の旨を明にすると同時に、彼を支那人をして自から新にするの機を得せしむるは、世界文明の曲面に於て大利益なる可し」(「支那朝鮮両国に向て直に戦を開く可し」、明治二十七年七月二十四日付『時事新報』社説)というものであった。

(113) 明治二十七年八月七日付徳富宛内村書簡、伊藤隆ほか編『徳富蘇峰関係文書』一(一九八二年、山川出版社)五五頁。

(114) 「我党大会」、『立憲改進黨々報』第三二号(一九九四年十月二十日)三〇頁。
(115) 例えば、別天生(長沢)「漢学者を養成せよ」(第二次『日本人』第一八号)一八九五年二月三日)所収)では、「漢土の古文明其のものに至りては、太だ研究すべき価値あるもの」(同誌一九頁)と述べられていることなど。

(116) 明治二十七年九月二十日付伊藤博文宛井上馨書簡、『伊藤博文関係文書』一(一九七三年、塙書房)、二六七頁。

(117) 「明治二十五年」九月十二日付三宅宛畑山芳三書簡(三宅家所蔵)には次のようにある。これによると代筆のあとに「刪正潤色」が加えられた模様である。

拝啓 我観印刷ニ附スル以前、是非内藤ニ刪正潤色サセ被下度、其上ニ御斧正被下度願上申候。内藤ニモ呉々申居候也。

芳三拝

三宅先生侍史

(118) 柳田泉は、「『我観小景』は、いわば大著『宇宙』を小形にちぢめたもの」(前掲(第三章註4)) 『哲人三宅雪嶺先生』八四頁)と位置づけたあとで、同書の結論

を「我は宇宙と共にあり、我が生命は、宇宙と共に不滅」(八八頁)という命題にみている。他にも、「彼の詩的な類推を通じて展開されているこの詩的哲学」(高坂正顕『明治思想史』、『高坂正顕著作集』第七卷(一九六九年、理想社)二二二頁)、「『我観小景』をつらぬく主題、宇宙万有にたいする熱烈な志向」(前掲(序章註38)鹿野「ナシヨナリストたちの肖像」、四七頁)、「すぐれて国粹的な雪嶺の動機がひめられた著作」(本山幸彦「解説」、近代日本思想大系五『三宅雪嶺集』(一九七五年、筑摩書房)三八五頁)などの評価が与えられている。

(119) 同右高坂『明治思想史』、二三四頁。シヨールペンハウエルの影響を指摘した書評には、得能文「三宅君の我観を読む」(『亜細亜』第五八号(一九九二年九月二十六日)所収)がある。

(120) 元良勇次郎「我観小景ヲ読ム」、『哲学会雑誌』第八卷第七号(一九九三年)六〇三〜六〇四頁。

(121) 三宅「智識討究」、『亜細亜』第二卷第三号(一九九三年四月十五日)所収。

(122) 前掲(序章註12)(2)植手「『国民之友』・『日本人』」のとくに一二二頁参照。

(123) 山路愛山「『王陽明』を読む」、『国民之友』第二二一号(一九九三年)四四四頁。

(124) 前掲柳田『哲人三宅雪嶺先生』七八〜七九頁。

(125) 猪瀬直樹『ミカドの肖像』(一九八六年、小学館)四八六頁。

(126) 『亜細亜』第三巻第一号(一八九三年十二月一日)所収。無署名ではあるが刊本『日本風景論』の冒頭部分と合致するので、志賀の執筆であることは間違いない。これに対して、『国民之友』第二一一号は「日本の風景」を掲げ、「是れ実に日本風景上の新観察なり」(同誌六四頁)と論評している。

(127) 黒岩健『山書研究』二一(一九七六年、日本山書の会)参照。同書が丹念に行つた種本からの剽窃の調査は重要であるが、ここではそのことについては触れない。

(128) 三田博雄『山の思想史』(一九七三年、岩波書店)四三頁。

(129) 同右五四～五六頁。

(130) 柄谷行人『日本近代文学の起源』(一九八〇年、講談社)四一頁。

(131) Georg Simmel, Philosophie der Landschaft, 1913. G・シンメル「風景の哲学」(Georg Simmel, Brucke und Tur, 1957. 遺稿集『橋と扉』所収)、『シンメル著作集』一二(一九七六年、白水社)一七四頁。

(132) (133) 前田愛『幻景の明治』(一九七八年、朝日新聞社)一九二頁。

(134) 保田与重郎『風景と歴史』(一九四二年、天理時報社)四一〇頁。

(135) 志賀『地理学講義』(一八八九年、敬業社)参照。

(136) 志賀『内外地理学講義』(一八九九年、谷島書店)三三～三四頁。

(137) 「風景保護の請願」、『亜細亜』第六九号(一八九二年十二月十二日)一八頁。

(138) 内村鑑三「志賀重昂氏著『日本風景論』」、『内村鑑三全集』第三巻(一九八二年、岩波書店)一五四頁。

第六章 日清戦後社会と政教社

第一節 第三次『日本人』の発行

日清戦争が済んだ時、人は皆盃をあげて狗コロの如く躍り上った。そして叫んだ、『帝国の存在は今世界の等しく認むるところとなれり！』当時十歳であった予は、これを聞いて稚心にも情けなく思った。お祭礼の日の肴町の人込で、「ここに居るのは俺様だ」と威張つて、衆人に振向かれて、「なるほどアンナ奴も来ているのか」と思われて、それで何が名誉なのか。当時の予が僅か十歳の小児であつた如く、当時の日本もまた、実に哀れなる小児ではなかつたであろうか。爾後、いわゆる「臥薪嘗胆の十年間」が過ぎて、日露戦争が始まつて、済んで、遂に今日となつた。人は、「日本は一躍して世界の一等国になつた」という。誠にお目出度話である。(ノ)

石川啄木、明治四十年(一九〇七)の述懐である。この前半部分は——日清戦争が済んだ時、東北の片田舎に住んでいたわずか十歳の——小児の同時代観としては出来すぎだが、いわゆる日清・日露戦間期に、「小児」日本が「臥薪嘗胆の十年間」を経て「世界の一等国」に押し上がつていく契機として、日清戦争が国民の精神史に与えた衝撃がいかに大きなものであつたかを、巧みに捉えていると思う。

この「臥薪嘗胆」を最初に唱えたのは、ほかならぬ三宅雪嶺であつた(一)。明治二十八年(一八九五)四月十七日、下関講和条約の調印によつて我が国は清国から朝鮮独立の確認と領土(台湾、遼東半島等)、賠償金を獲ることになつたが、一週間後の二十三日にドイツ・フランス・ロシア三国が遼東半島の還付を求めてきた。西欧列強による干渉は戦争中からすでにある程度予測されていたとはいえ、それが三国干渉による遼東還付というか

たちで現実のものとなると、陸奥宗光によれば我が国を「政治的恐怖」(3)に陥れ、徳富蘇峰を「実に涙さへも出ない程口惜しく覚え」させ「精神的に殆ど別人」(4)としたほか、啄木同様まだ無名の少年だった生方敏郎でさえ「先生やお父さんと一緒になって、泣くほどまでに遼東還附を口惜しがった」(5)ほどの衝撃となつて全国を駆けめぐった。雪嶺はのちに『同時代史』の中で、「清国に勝ちて有頂天となれる官民は、三国干渉にて冷水を熱頭に浴びた」(6)と書いているが、実際に還附が公布されたあとには、新聞『日本』に論説「嘗胆臥薪」を載せて、来るべきロシアとの戦争の覚悟について述べたのである。以後「臥薪嘗胆」は、三国干渉の中心国ロシアに対する民衆の敵愾心を集約する、「日清戦争の直後から日露戦争の開戦まで特別な意味をもつ新しい流行語」(7)となつた。ところが、この「臥薪嘗胆」をいち早く採り上げ、自家菜籠中のものとしてしまったのは、挙国体制によつて日清戦争を乗り切り、戦後も引き続いて政権担当意欲を失つていなかった第二次伊藤内閣と、同内閣支持の姿勢を鮮明にしていた自由党にほかならない。このことは、同内閣が軍備拡張を軸とした「戦後経営」(8)、つまり国家体制再編の主導権を握り続ける意思をなお失っていないことを意味した。明治二十八年十二月二十八日、第九議會冒頭に下された詔書の中に、「止ムヲ得ザル国費ノ増加ハ、朕ガ忠良ナル臣民ノ進デ之ヲ負担スルニ躊躇セザルヲ信ズ」とあるのは、「臥薪嘗胆」と「戦後経営」を結びつけようとする為政者側の意図を如実に示している。事実、翌二十九年になると、葉煙草専売法などによる大幅な増税が実施され、陸海軍の大拡張が図られたのである。このような路線は、第二次伊藤内閣に続く政権によつても基本的に踏襲されていく。

「臥薪嘗胆」のスローガンの下に強行される「戦後経営」を基調とする日清戦後社会の

中で、とりわけ時代思潮の転換と新たな政治情勢への対応という二つの思想的課題に対して政教社はどのような言論活動を展開したのか、それを明らかにしていくのが本章の課題である。

この時期の政教社を、私は「初期政教社」の第Ⅲ期と区分したが、具体的には明治二十八年七月五日に創刊された第三次『日本人』を検討範囲とする。ところで、この年の前半六か月の間に、政教社は第二次『日本人』を一冊しか発行できなかった（二月三日、第一八号発行）。利益を度外視した『日本』でさえ最も発行部数が伸びたという時期なのに（²）、発行停止処分を受けたわけでもない政教社が、なぜ雑誌を発行しなかったかといえ、さしあたり経営状態がかなり悪化していたということくらいしか考えられない（第三章註⁶⁹参照）。志賀は三宅に宛てて「政教社在来の注入資本を定め度と存候」（⁷⁰）と書き送っている。この時期、〈媒体〉をもたない政教社の命脈は尽きかけていたというしかない（⁷¹）。

その半年近いブランクのあとで、態勢も新たに創刊されたのが第三次『日本人』第一号なのである。同号は、神田錦町三丁目一番地政教社発行、発行兼編輯人が香川悦次、印刷人が富井俊三郎で、定価一部八錢であった。冒頭の社説「『日本人』の改刊」によれば、「過去七年有余、其間今日の東方論、及び日清戦争問題の如き皆漸を逐ひて率先者たり」としたあと、「文章即ち事業」との信念から次のようにいう。

然り、此の如くにして余輩の立言聊か世運に小裨益ありたりと自信す。空論と云はば云へ、人の行動に顕はるる所の者自箇が思想の外に出づべからずんば、之を左右するの言論文章誰れか一箇の事業にあらずと謂ふものぞ。（⁷²）

ついで「已にして去年以降、余輩の立言は実際に活動し来れり」と述べ、最後に「又復た余輩が觚を振ひて警告を要するの時到来りと為す。是れ『日本人』を改刊して重ねて一世に見ゆる所因」だという。要するに、対外硬運動以来現実政治に密着していた言論活動を、日清戦後社会の中で軌道修正しようとしていたのである。そういえば、二十五年に『亜細亜』の表紙から消えた蜻蛉の絵が、社説「日本人」欄の飾りかこみに復活している（ただし明治二十九年八月五日第二四号まで）。蜻蛉の絵と共に政教社の「国粹主義」は復活したのか、この問題は第二節で考えてみたい。

〈組織〉についていえば、この頃の政教社は引き続き“志賀・三宅二頭制”といえるものであった。ただし、志賀は戦前の対外硬派（同盟新聞）、中央政社の延長線上で政治活動を続け、二十八年六月十五日には政友同志会を結成、同年秋には新潟県に赴いて越佐会の運動を援けるなど、いわゆる進歩党大合同の一角に地歩を占め、翌年三月一日の進歩党結党に際しては常議員の一人に選ばれる。この志賀を中心とした政教社と進歩党、さらには憲政党との関係は第三節で取り上げたい。一方、三宅の場合は、「人の思想の独立せるや否やは、其の政府に対する判断にて知らる。政治の論評は思想の試金石なり。他の論評の勝劣は多く之より割り出さるべし」(心)というように、あくまでも「政治」にこだわりながらも、そのこだわり方は「論評」として「思想の独立」に関わるものであった。彼の言論姿勢に関しては第四節をその説明にあてたいと考えているが、志賀が進歩党の常議員となった直後に、三宅はわざわざ左のような公告を掲げ『日本人』に立て籠もる覚悟を明らかにしたことは注目される。

『日本人』来月を以て改刊満一年に相成、七月より大に更新之約有之。就ては手順相

整候迄、一切他の雑誌に寄稿仕兼候。

三宅生⁽¹⁴⁾

結成以来政教社の中心となってきた志賀と三宅が、対政治姿勢をめぐって異なる立場を選びつつあったといえよう。一方、二人を支える他の同人たちにも変化が多かった。日清戦前期に「岡西窩同人」制の中核をなし、雑誌編集の実務を担っていたのは畑山、内藤、長沢らであったが、この時期になると、内藤は『大阪朝日新聞』へ、長沢は『山陽新報』へと去り⁽¹⁵⁾、残る畑山もすでに胸を病んでいた。第三次『日本人』の編集実務を担当したのは前述の香川悦次(怪庵)で、さらに八太徳太郎(霞山)らが加わったようだ。また、しだいに新聞『日本』の同人たちとの合体が進んでいくのもこの時期である⁽¹⁶⁾。第三次『日本人』には、日本新聞社の陸羯南、福本日南、国府犀東らが筆を執っている。その他、「文」「つれづれ」などの文芸欄には、田岡嶺雲、笹川臨風、高浜虚子ら『江湖文学』同人の寄稿が目立ってくる。明治三十年当時の政教社のへ組織を推測できるのは、同社の企画になる「東大陸人豪伝」の執筆者一覧である。

- 『伯夷叔斎』(福本日南) 『管仲』(白河鯉洋) 『蘇秦張儀』(香川香菴)
『嬴政(秦始皇)』(田岡嶺雲) 『項籍』『劉邦(漢高祖)』(畑山呂泣)
『劉徹(漢武帝)』(笹川臨風) 『曹操』『謝安』(藤田劍峯)
『諸葛亮』『文天祥』(国府犀東) 『李世民』『郭子儀』(志賀矧川)
『王介甫』(高橋月山) 『岳飛』(浅水南八) 『劉基』(高橋紫燕)
『鐵木真(成吉思可汗)』『忽必烈』『ヌルハチユ(清太祖)』(三宅雪嶺)
『曾國藩』(稻垣木葺) 『(未定)』(陸羯南) 『(未定)』(桂湖村) ⁽¹⁷⁾

結果的にいえば、従来の「岡両窩同人」に帝国大学文科大学の人脈を取り込んでいるようにみえるが、彼らは政教社に定着する社員ではなかった。ついで、政教社の〈組織〉の内部構造を窺うことができるのは、翌三十一年一月二十三日に没した畑山呂泣を追悼する『日本人』所収の記事である。秋田師範学校以来の友人である内藤湖南は、「畑山呂泣逝く」の中で葬儀の模様を次のように伝えている。

葬るの日、杉浦天台、陸羯南、福本日南、宮島春松、田岡嶺雲、白河鯉洋諸士の亦会し、高橋自持は小田原より賻を寄せ、又其の門生をして葬に会せしむ。此日微雨断続、天色凄凉。雪嶺矧川以下同人、徒歩して柩の前後を擁し、予靈牌を捧ぐ。諸友祭文数章、之を柩前に読む。(18)

文中「雪嶺矧川以下同人」というのは、これを書いた内藤のほか、続けて追悼文を寄せている香川悦次（香庵）、奥山千代松（木公）、浅水南八、長沢別天、国府犀東、高浜虚子らを指す。つまり、志賀と三宅を中心とする「岡両窩同人」制は、香川、高浜などを加えたものの基本的に継続していたといえる。この時点ではなお、新聞『日本』のグループとは一線を画していたことも記憶しておきたい。

ところが、同じ三十一年の六月二十二日に憲政党が設立され、三十日にはついに薩長藩閥以外で初めての第一次大隈内閣が成立したところから、政教社の様子も変わり始める。まず、社の事務所が神田区南甲賀町八番地から日本新聞社（同区雉子町二番地）の二階に移り(19)、以後、両社は名実ともに共同活動を展開するようになる。その中であって、志賀は大隈内閣で外務省勅任参事官（のち参与官）に就任したのに対し、主として三宅の筆になると思われる『日本人』の誌面には同内閣と憲政党から距離を措く論調が目立ってく

る。これと同じ時期、政教社の外に目を投じれば、八月十日に『国民之友』が終刊されたのが注意を惹く。立場こそ違え、反藩閥、民党合同を主唱してきた政教社と民友社、その「国粹主義」と「民主主義」がこの頃に最終的な結末を迎えつつあったとはいえないだろうか。この点はさらに次節以下で考えるとして、蘇峰が一連の事業を整理して『国民新聞』に全力を集中したように、政教社もそのへ組織を縮小して新たな言論環境に備えた。三十一年末の『日本人』執筆者予告がそれを示している。

予 告

『日本人』は歳と共に改まると謂はず。然れども多少面目の新なる者もあるべし。初刊には、今上陛下御即位の詳密なる図あるべく、陸羯南尾崎学堂等の論文あるべく、志賀矧川も本号より執筆すべく、江湖の欄は、内藤湖南長沢別天之を担当すべく、風聞録は例に依て例の如くなるべく、新史壇は維新当時の事を説く愈々新にして愈々詳なるべく、且つ『太陽』雑誌登載の『西郷隆盛』下篇は本誌に現れ出づることと為るべし。読者の一顧を煩はす。(一)

こうして、雪嶺を中心とし、社外から陸や尾崎などが、かつての同人として志賀、内藤(三十一年五月から『万朝報』記者)、長沢(同年八月から『東京朝日新聞』記者)らが協力するという、縮小された政教社の新しいへ組織が確立する。雪嶺を支えたのは、香川、八太、稻垣伸太郎(木茸)らの社員だった。ただし政教社の場合、たとえ退社していても、かつて同人だったという意識が強く残っていたことが特徴といえそうである。第三次『日本人』が一〇〇号を迎えたとき、内藤湖南は寄書して次のようにいつている。

僕が別天呂泣等と先輩の後に従て翰を執りしより亦已に十霜を経たり。同人皆一出一

入、常に専ら事に当らずと雖も、今に於て先輩と称し後進と称し、政教社同人と称し、乃ち政教社同人として今夢トを葬り、畑山呂泣を葬るに至れる者、之をかの世間入主出奴一輩の徒に視るに其の相得る者固より同じからざる者あるか。「日本人」が今日に於て四顧索莫、其の好友と勁敵と俱に亡せるの際に孤存する者豈に亦由る所なくして然らんや。然らば則ち風塵奔走、存亡集散、何の常か之あらんと雖も、同人の神「日本人」と俱に在る者終に渝らざる也。(一)

湖南のいう同人意識は、かつての「罔両窩同人」制時代の政教社をいわば結集の原郷とすることで培われたものである。しかし、湖南自身再び政教社に復することはなかったし、三十二年十一月二十四日に長沢が没すると、この意識はもはや帰るべきへ組織への原形を見いだすことができなかつた。そしてさらに、翌三十三年に志賀が伊藤博文を総裁に結成された立憲政友会に入党したとき、『日本人』は雪嶺の個人雑誌としての性格を色濃く帯びることとなり、「初期政教社」は実質的に終焉を迎えたといえよう。第三次『日本人』の発行態勢は、とくに政教社のへ組織へに着目した場合、およそ以上のような変遷を辿つたと考えられるのである。

では、この間の読者あるいは支持母体は、どのような階層に求められるだろうか。設立当初の政教社は、東京と地方の書生社会を背景に、「志士」すなわち何らかの志向性をもつ者を読者に想定して『日本人』を創刊した。しかし、すでに二千人以下にまで減少した読者（第三章第四節表&参照）の質は、日清戦後社会に際して変わったのか、変わらなかったのか。

第三次『日本人』の読者は、投書欄がとくに設けられていなかったことで誌面に現れるこ

とがほとんどなく、具体的な相貌が見えてこない。では、政教社の側がいかなる読者を前提にしていたかといえ、「『日本人』は最も健全なる日本人の意見を發表せんと欲する者なり、政界に於て、財界に於て、教界に於て、芸界に於て、最も健全なる分子を代表せんと欲する者なり。」(中略) 「唯だ最も健全なる日本人を代表せんとするが故に、徒らに多数の粗雑なる読者を貪りて浮華炫耀以て紙上の景氣を添へざるなり」^(一) という「社告」にある通り、それは「天下の剛健なる人士」ということになる。ここでいう「多数の粗雑なる読者」とは、明治二十八年一月五日に博文館から創刊された雑誌『太陽』の読者を想定すればよい。『太陽』は特定の思想的立場に拠らない商業主義が特徴で、創刊の辞では「成るべく平易に成るべく趣味多からしめんと力むる」^(二) と明言している。このような路線は政教社の『日本人』とはおよそ対極にあるものといえよう。発行部数の低迷ともあいまって、以後の政教社と『日本人』は少数の堅実なる読者に支えられて存続したのである。

明治三十年六月、その『太陽』の編集を担当することになったのが高山樗牛(一八七一年一〇三年)であった。東京英語学校に籍を置いたこともあるという彼は、政教社設立の「同志」たちよりも十歳ほど若い世代に属する。樗牛が「批評家」として立ち「日本主義」を唱えたとき、雪嶺、蘇峰らかつての「明治ノ青年」たちはどのような反応を見せたのか。次節ではそれを「国粹主義」の帰趨に焦点を合わせて考えてみたい。

第二節 「世界主義」と「国家主義」

「文明」と「野蛮」の衝突と位置づけられた日清戦争に勝利することによって、我が国を取り巻く国際環境や国内の社会状況に変化が兆したとき、政教社の言論も何らかの転換を余儀なくさせられたと思われる。私のみるところ、最終的にはこの時期を経る中で「初期政教社」としての特色は失われていくのであるが、それがどのような転換だったのか、本節では再び「国粹主義」に注目して、日清戦後社会における政教社の思想活動の基調となった思考方法を主として雪嶺の論調の中に探っていきたい。

明治二十一年、「国粹主義」を掲げて設立された政教社ではあつたけれども、これまでのところで明らかにしてきたように、その後の思想活動では「政治」に関する評論と運動の領域だけが先行し、「宗教、教育、美術、生産」など当初は幅広い範囲で構想されていた。「国粹主義」全体の理論化を図る努力は、いわば放擲されたかたちになっていた。すなわち、国内政治論における反藩閥、民党合同の主張と国際政治論における東洋盟主論とが状況に対する働きかけとして唱えられたものの、それらと「国粹主義」との内在的連関は必ずしも十分には意識化されないまま不問に付されてきたのである。内外二つの政治論は対外硬運動の中で合体し、明治二十七年、日清戦争の直前になると、「責任内閣」「自主的外交」というスローガンに収斂されていくが、日清戦争の勃発はそれらの政治的な争点をすべて曖昧にし去り、それらは戦後、「臥薪嘗胆」の名の下に強行される「戦後経営」路線への批判と、いわゆる在野党合同問題とにかたちを変えて引き継がれることとなる（第三節参照）。政教社の対政治姿勢と思想内容の連関という課題は、このあと第三、四節

で考えたい。

一方、初めての対外戦争によつて、民衆の精神構造の中に国家意識が浸透したことの意味も、時代思潮の転換に及ぼした影響は大きいと思われる。かつて福沢諭吉が『文明論之概略』で強調した——遡れば幕末の先覚的な志士たちの間にその萌芽のみられる——国民国家形成の基盤となる民衆の意識改革は、日清戦争の中で一気に遂行されたのである。「忠君愛国」の精神が「家庭にまで入り来り、町内のどんな者にまでも行き亘つたのは、日清戦争中のことであり、戦争が人々の心の心髄にまでこれを打ち込んだのだつた」⁽²⁾という生方敏郎の回想は、当時のさまざまな事実とも符合する。柳田国男はそのような国家意識浸透のさまを、「故郷の見馴れた人の顔の中では、国が大きくかつ鞏固になつたといふことも、いわば単なる推理上の事実であるが、世間へ出てみればわれわれはすぐに実験する」⁽³⁾と描いてみせた。要するに、戦争に伴う危機意識の醸成と情報の氾濫、そして兵士、軍夫としての出征、徴発は、はしなくも多くの人々に視圏の拡大をもたらし、結果的に自らの「国家」を実感する機会を与えたということであろう。そのような意識が「臥薪嘗胆」のかけ声の下に戦後社会にまで持ち込まれ、日常生活の中に定着していったのである。

このような日清戦後社会に訪れた新たな思想状況に対応するために、政教社はその設立以来抱いてきた「国粹主義」を原理的に再検討する必要に迫られていた。それは、ひとつの思想集団として存続を図る限り避けては通れない課題だつたといえよう。ところが、「国粹主義」の再検討を促す声は、まず社外の寄稿者から寄せられることになつたようである。

その一人は松村介石（一八五九—一九三九年）であった。異色のクリスチャンとして知られる彼の名が最初に『日本人』誌上に現れるは改刊第一号で、同号に寄せた論説「宇内の日本人」の冒頭、「今日は最早や欧州心酔の日本人にてあらしむべからず。然ればとて又国粹保存の日本人にてもあらしむべからず。寧ろ宇内の日本人たらしめよ」と書いている。これを具体的にいえば、次のようになる。

吾人は曰く、日本人をして欧州にのみ心酔せしむべからず。欧州にのみ心酔せば猿猴とならん。然ればとて又国粹保存にのみ熱心ならしむる勿れ。国粹保存にのみ熱心せば偏局不遍の頑僻者とならん。之を要するに、今や日本人をして単に東洋人種たらしむる勿れ。又西洋人種たらしむる勿れ。日本人は元来一種生命的自在の天品を存ず。支那人は儒教に偏して凝滞し、印度人は仏道に偏して寂滅し去りたり。然れども一度日本人が之を活用するときには、即ち忠孝義烈の精神となり、八面玲瓏円滑自在の靈体となり、永く邦家の生命にまで化せしめたるにあらずや。然而して今や亦た之子は西洋文化の知識を求め来りて、直に之を政度文物海陸軍事の上に用ひ、又た其の教師国をも凌がんとす。何たる神通自在の人種ぞや。然則今や吾人をして徒らに西洋と称して自屈せしむること勿れ。又徒らに国粹を叫んで己惚れしむること勿れ。宜く古来日本人種が特色たる神転自在の妙技を揮ふて茲に東西文明の神髓を咀嚼し、天下の粹美を吸収し、茲に宇内の文明の一大新国を形成せしよ。是れ吾人が願ひなり。

介石のいう「宇内の日本人」とは、要するに東西文明を融合した上に実現される新しいタイプの国家の担い手のことである。この基礎をなす文明観が、『哲学涓滴』や『真善美日本人』以来の雪嶺のそれと矛盾するものでないともいえよう。日清戦争では「文明」

の側に立つことで清国を破ることができたのと同時に、三国干渉によって「文明」のもつ「力」の論理を思い知った我が国の思想界は、「欧州心酔」と「国粹保存」をともに排しながら戦後社会を導く思想的原理を模索しなければならなかった。

それがいかに難しい課題であったかは、美学の分野における東西文明の関係をめぐる田岡嶺雲と高山樗牛の見解の相違をみればすぐに判明する。

嶺雲は『日本人』の「文」欄に寄せた「東洋的新美学を造れよ」において、「西欧文物崇拜は既に過去に帰し、国粹保存の論も亦事古りて、今や将に国粹發揮より東亜文明發揮に入らむとする也」と述べ、「国粹發揮」の立場から新美学の創造を図ることを提唱した。この一文は明治美術会でのいわゆる裸体画問題に即して書かれたものだが、嶺雲は西欧の美学を特殊な一類型にすぎないものと限定して、新美学建設のために次のような方針を示している。

西欧の美学は西欧特殊の思想を反映せる美術より歸納せる一特殊の典則のみ。特殊の思想を有するが故に特殊の典則あり。此特殊の典則を以て直ちに之を唯一普遍的のもの視して、之を以て相異なる思想を有せる国民の美術を律せんことは、これ根底に於て既に謬れるものなり。吾人は吾東亜特殊の思想を反映せる美術より其特殊の典則を歸納し来て東洋特殊の新美学を建設し、更に二者の長短得失を計較比量して普遍的世界的の一新美学を造り出ださむことを要す。

これに対して樗牛は、『太陽』誌上に「東洋の新美学」を掲げて、嶺雲のいう「東洋の新美学」を「浅膚杜撰」だとして退ける。樗牛においても、「東西二文明の抵触は漸く政治社会を去りて、文学美術の境域に移りつつあるは、吾れ人の大に注意すべきことなりと

す」(28)と意識されるが、その場合に「二物を調和せむと欲するものは勿論双方に就て十分なる知識を有せざるべからざるなり」という厳しい条件を加える。彼によれば、東西文明を調和し新美学を「独創」するのは容易なことではなく、「忍耐」「精勤」「遠大なる目的」の三つが必要で、具体的な方途としては、歴史主義的な立場から古典研究の必要性を説く。

右の一文の中で樽牛も指摘しているように、当時は、演劇界における新旧二派の競争、美術界における邦画と洋画の対立や前述の裸体画問題、文学界における翻案可否の論争、その他文体や国字等に関する諸説の衝突が相次いで顕在化する情勢であった。日清戦争が日本文化の諸相に与えた影響の背後には、D・キーンがいうように「日本人は、当時の多くの人々が気がついたように、外国ではしばしば過小評価されていた日本の近代化が、実は本物であった事実を、この戦争における文句の付けようのない数々の勝利によって、世界に見せつけたのだ」(29)という意識変革が潜んでいた。日本文化のさまざまな側面で見直しを迫っていた状況とは、国民的な規模で思想の地盤換えが進んでいたことの証左ではなかったか。それを一口でいうならば、日清戦後の我が国の思想界では、開国以来の我が国が模倣に努めてきた西洋文明を肯定しますますの必要性を感じるとともに、それとの一層の同化を企図する「世界主義」(30)の立場と、清国に替わって東洋文明の覇者を意識するようになった日本の独自性を強調する「国家主義」の立場とが常に内面での葛藤を繰り返すことになったのではないだろうか。このとき、明治二十年以来の「欧化主義」と「国粹主義」の対立の構図も最終的な結末を与えられつつあったといえよう。それを「国家主義」の立場から意識的かつ徹底的に行ったのが高山樗牛にはかならない。

明治三十年（一八九七）六月、高山樗牛はちょうど一年間に及んだ仙台の第二高等学校教授の職を辞して上京、博文館に入社して雑誌『太陽』の編集を担当することになった。仙台での彼は、教授とはいっても語学教師に過ぎず、友人の桑木巖翼に宛てて「都こひしくこひしくて日々茫然暮居候。御哀憐被下度候。交友無きには一番閉口に御座候」(21)と書き送っているくらいである。

その樗牛が、批評家とりわけ「文芸批評家」として立つ決意を示したのが「我邦現今の文芸界に於ける批評家の本務」である。その中ではまず、「国民的立脚地に拠りて、衆愚の紛々たるを打破し、公平なる比較的、はた含蓄的批判によりて、国民文学の旗幟を明にする、是れあに今日文芸批評家が最大本務に非ずや」(22)と述べたあと、「文明史的觀察」の下に展開されるべき批評活動の「基準」に彼の専門である審美学つまり美学を据えた。樗牛が批評の対象としたのは「国民文学」である。「国民文学」とは「国民性情に基ける文学」で、従来「我批評家の国民性情を蔑視するを以て最大欠点の一なりと思惟する結果として、「文芸批評家の最大本務」を次のように読み換える。

先づ国民の性情に鞏固なる根柢を与へ、以てそが外来勢力に対する同化の活力を熾盛にし、更に其性の近き所に違ひて補育助成の効を累ぬれば、庶幾くは最も有功にして、且最も多望なる発達を見るを得む。是の如きは一国民が、世界人文の過程に貢献する最大なる効果ならずむばあらず。是を以て文芸批評家が第一の本務は、審に国民の性情を理解するにあり。(23)

こうして、国民性情の理解を自らの課題とする「発道の辞」を掲げた高山樗牛は、主として雑誌『太陽』を舞台として思想活動を展開していくこととなる。この時期の同誌にお

いて事実上の主筆であつた樗牛は、「一九世紀から二〇世紀にかけての時期に、かれはうたがいもなく第一級の影響力をもつた思想家であつた」⁽³⁴⁾という評価が与えられるほどの活発な思想活動を展開した。このとき樗牛が唱えたのが「日本主義」である。その定義は左のようによい。

日本主義とは何ぞや。国民的特性に本ける自主独立の精神に拠りて建国当初の抱負を發揮せむことを目的とする所の道德的原理、即是なり。

そもそも国家の真正なる發達は国民の自覺心に基かざるべからず。(中略)吾等の所謂日本主義は、決して夫の偏に己を樹てて他を排せむとする、狹隘なる主我的反動と日を同うして論ずべきものに者に非ざるなり。⁽³⁵⁾

樗牛によれば、「国家は人類發達の必然なる形式」で、「現実界に於ける一切の活動は其の国家的たることに於て最も有効なりとす。国家は人生寄托の必然形式にして又其上に權力なり」とされる。このように明快な国家主義に立脚した道德的原理たるこの「日本主義の目的綱領」は、「君民一家は我が国体の精華なり」という一点に集約され、具体的に次のような内容をもつ「国民的実行道德の原理」だという。

是を以て日本主義は、平時にありて武備を懈らず、いよいよ国民的團結を鞏固にせむことを努む。然れども妄に己を樹てて他を容れざるものに非ず、国内を修めて海外に臨み、与国と共に永遠の平和を享受せむことを希ふ。是に於てか、日本主義は、世界平和の維持を務め、進みて人類的情誼の發達を期す。而して要は我邦建国の精神を發揮し、我が国民の大抱負を実現せむとすにあり。⁽³⁶⁾

「国家主義」としての「日本主義」の發揮が「世界主義」の実現にも繋がるという主張

である。このような論理構造をより明確に示しているのが、論説「世界主義と国家主義」であろう。その中で樗牛は、国家こそが「生活の必然唯一の形式」であるとした上で、「国家主義の進歩は事実の上に於て世界主義の進歩を意味す。国家主義を以て絶対的に世界主義に反対すると云ふものあらば、之れ全く人文発達の歴史を知らざるものなり」³⁷と
いう。銜いのない国家観の是非はしばらく措くとして、「国家主義」の進歩がとりもなおさず「世界主義」の進歩でもあるという発想方法の基本構造は、すでに述べてきた雪嶺の「国粹主義」のそれともまた類似する一面を有していたといえよう。

樗牛のこの論説に直接応えるかたちで、雪嶺はついに口を開いた。『日本人』第四八号の社説「所謂世界主義と所謂国家主義」がそれである。この中で雪嶺は、当時流行の「所謂世界主義」を、

一、軍備の拡張を説く者（の一部）

二、泰西事物の移入を説く者

三、外人を尊敬する者

四、人類を旨とする者³⁸

の四つに区分し、そのいずれもが主義としては曖昧で行動としても徹底しないといい、「今の所謂世界主義といふの声は全く空に叫ぶの声にして嘗て実在するに非ざる」ものだと断定する。一方、「所謂国家主義」（雪嶺はこれを「個国主義」という）を、

一、政府即国家の意義に於て、国家の権を大にせよといふもの

二、同胞共存の結合体を国家とするの意義に於て、国家の特性を發揮せよといふもの

の二つに区別するが、「本来国家主義といふ語には政府を強大にするの義を含むこと多く、世界主義に対する国家主義即ち個国主義は国家社会主義の自国の特性を發揮するに便なるを見ざる上は、時に或は政府的国家主義に正反対に出づることあり。然れども此の区別は往々にして混ぜらるるなり」(40)という。この区分にしたがえば、樗牛の「日本主義」は「所謂国家主義」の二に該当することとなり、雪嶺がそれを「国家社会主義」と呼んでいることも興味深い。

では、雪嶺は「世界主義」と「国家主義」の矛盾、衝突をどのような操作で調整、回避しようとしたのだろうか。同じ論文の続きの中で次のような考え方が示されている。

凡そ諸般の事理は其の何たるを問はず、世界に活用すべきを見る。然れども之を取捨する所の人は必ず『其国の人』たらざるべからず。船車器具は世界に拡げて可なるも、之を製造する者は一国の風を帯びざるを得ず。学問の考究は世界に通じて可なるも、之を説く者は一国の風を帯びざるを得ず。宗教の振興は世界に亘りて可なるも、之を奉ずる者は亦た一国の風を帯びざるを得ず。宗教は世界に亘るを以て之を奉ずる者は決して一国の風を帯びるべからずといふは妄の極、之と等しく宗教其物を以て一国の風を壊ぶるものと定むるも亦た理を得ず。苟も一国の風を保持して喪はずんば、世界の宗教を奉ずるも何の不可か之れ有らん。夫の學術技芸を輸する者と幾と其趣を同くするなり。(41)

雪嶺の立場は、「日本主義」には安易に同調せず、「真の世界主義は真の個国主義にして、真の個国主義は真の世界主義たるべきなり」という結論に明らかかなように、「真の」という限定つきながらも「世界主義」と「国家主義」の両者を相互補完的なものとして渾

然一体化した中に把握しようというもので、彼一流の常に判断を留保する思考態度はここでも踏襲されている。しかしながら、「真の世界主義」とは何か、「真の国家主義」とは何かという疑問に対しては、具体的なイメージを提示していない。

雪嶺と樗牛二人の意見の交換はこれ一度だけで、論争と呼ぶには雪嶺の超然的態度ばかりが目立って実質的な内容に乏しい。その後、樗牛はむしろ「国粹主義」との相違点を際立たせることによって「日本主義」の確立を図った節がみられる。彼にいわせれば、「雪嶺の文は漫に奇矯を衒ひて事に益なし。時に艱深の文字を用ふる所、やや鬼臉を被て小児を威嚇するの弊あり」(42)ということになる。このことは、それに先立つ「国粹保存主義」と「日本主義」という論説を検討すればさらに明らかである。ここで樗牛は、「国粹主義」に一定の功績を認め、ある点では「日本主義」の先駆をなしたという位置づけを与えながら、結局のところ「国粹」とは何かを明示できず、外来勢力に対する反動思想にすぎなかったと断定する(43)。この一文が、直接的には水城学人こと建部遯吾の「日本主義」批判に対する反批判として書かれたとしても、その実、雪嶺を中心とする政教社の「国粹主義」を総体として過去に葬り去ろうという意図は明白である。「国粹主義」が「幼稚なる独断論」「主我的盲動」として退けられるのに対して、「日本主義」はその「国家主義」と「研究的態度」において称揚される。

これに関連して雪嶺が何らかの発言をした形跡はみられない。しかし、「国粹主義」を理論化するという課題意識は、雪嶺の内面の一遇においてなお持続していたことも確かである。樗牛の批判から一年以上が経った『日本人』第九二号の無署名社説「非国醜保存」は、そのような課題意識が噴出したほとんど最後の例といえる。

本社初め国粹保存を倡道して起ち、後ち更に国粹顕彰を倡道し以て此に継ぎたりぬ。世界に国する者が各々一国の特性を具有し、之を發揮し之を成達するは、即ち世界全般の進歩する所以の道にして、世界に元素の多き丈け其れ丈け多く進化の行はるべきは必然の理たり。乃ち我が日本が日本の国性を保維するは事の当に然るべき所、故らに之が保存を云々し之が顕彰を云々するは益なき事の如く然り。而して敢て之を論じて措かざりしは、洵に当時の情勢に察して已む可らざる者ありしなり。(中略)

国粹保存といひ、国粹顕彰といふ、其の旨とする所は善美の国性を保存し、又は之を顕彰するの謂にして、即ち我が善美なる所を開發し、兼ねて他の善美なる所を同化し、而して之を開發し之を同化すると同時に、其の醜悪なる者あれば極力之を排斥するを要すること、猶ほ水道を疏通して清潔を保全せんが為めに、併せて下水をも疏通せざるべからざると同じ。(44)

政教社の設立から十二年というこの時点で、雪嶺の立論の背景の中には進化論的な発想に支えられた文明観はなお健在であつた。むしろ「世界主義」と「国家主義」の相克を解消するための思想的努力の過程において、彼独自の「哲学」によつて東西文化の融合を目指し、我と宇宙を両極とする関係性の中で人間生活のあらゆるレベルの集団をすべて相対化して把握しようとする思考態度をより鮮明にしていつたようにみえる。ただし、もはや「国粹」すなわちここでいう「善美の国性」とは何かを追求する動機には乏しかったといふしかない。結局雪嶺は、樗牛が指摘したような「国粹」の実質的内容が曖昧であるといふ批判をかわすだけのものは提示できず、「国粹主義」の中心構造はついに未構築のまま終始してしまつたといふべきであらう。

日清戦後の思想界は、「世界主義」の回答としてはまさにその世界の趨勢としての帝国主義を選択して“力”の論理に与し、一方、「国家主義」の回答としてはまさにその国家の中枢に国体論を据えて論理を超える“神性”を付与する方向に転回した。三国干渉によって「精神的に殆ど別人」となった蘇峰が「変節」を経て帝国主義に帰依したことは前者の選択を象徴的に示し、幸徳秋水が明治三十五年に記した次のような述懐は後者の実態を示してくれる。

『国体に害が有る』の一語は実に恐ろしい言葉である。人でも主義でも、若し天下の多数に『アレは国体に害がある』と一たび断定せられたならば、其人、若くは其主義、若くは其議論は全く息の根を止められたと同様である。少くとも当分頭は上らぬのである。(45)

雪嶺のいう「真の世界主義」と「真の国家主義」が帝国主義と国体論を意味するものではないことは確かだが、ではそれらに代わる何かを積極的に提起できたかといえ、もはやそれが「国粹主義」でなかったこともまた確かである。政教社の「国粹主義」を収斂するかたちで雪嶺自身が到達した思想的境位とは、いわば東・西洋軸と我・宇宙軸の交錯する座標面であって、このうちしだいに宇宙に関する意識が自覚化されてくると、彼にとつてその上ではあらゆる現象が絶大なる有機体の一部をなすものとして存在論的に説明可能となり、例えば帝国主義にしても国体論にしても、そこではあらゆる時務的な課題それぞれに適切な位置を与えて批判を加えることもできるが、中心は——「国粹主義」においてはこれが「国粹」になるはずだった——は空洞化したままであったといえよう。こうして以後の雪嶺の思想は、一方では大著『宇宙』へ連なる独自の思索を続けながら、無限の宇宙

という常に流動する大有機体の存在を前提とすることで構造的把握が困難なものとなり、多分に人格と重複する性格を帯びて展開するのである。

第三節 在野党合同と政教社

三国干渉による遼東還付は——陸奥宗光のいう「政治的恐怖」となつて——日清開戦で沈静化していた政界の抗争を再び激化させることになった。「四月二三日の三国干渉が伝えられるや、一年前と似た状況が生まれた。つまり、民論が沸騰し、対外硬派の政府攻撃が活発になった」⁽⁴⁶⁾のである。一年前、「責任内閣」「自主的外交」のスローガンを掲げて第二次伊藤内閣と全面対決を図った対外硬派は中央政社を結成して政府による議会解散に對抗し、この中で政教社は志賀重昂を中心に全国同志新聞雑誌記者（同盟新聞）を拠点として活発な運動を展開していた。政教社の関わった日清戦争前後の政治運動は密接な関連性を有していたと考えられるので、本節では前章第三節に引き続き志賀に焦点を合わせて、戦後政界の再編過程と政教社の思想活動の関連を明らかにしてみたい。

日清戦争の終局を「終天の恨事」⁽⁴⁷⁾とする政教社にとって、外交の失策を衝いて政府の責任を追求するのは当然のことであった。伊藤が政権に居座る限り衝突は避けられない。明治二十八年六月二日、志賀は同志の工藤行幹とともに自由党の河野広中を訪ね、「対外硬」の方針による統一行動を申し入れている⁽⁴⁸⁾。当初は自由党も含めた在野党の大合同が図られたのである。志賀は、同十五日に芝愛宕館において対外硬派の議員が集合する（政友同志会・十九日結社禁止）と三宅とともにそれに参加して運動実行委員となり、さらに二十八日には末広重恭らと同志会を結成している⁽⁴⁹⁾。これら一連の行動が戦前の対外硬運動の延長線上にあったことはいうまでもない。

一方、自由党はこの頃から第二次伊藤内閣との提携関係を明確にする。両者が最終的に

提携の宣言書を發表したのは十一月二十二日であつたが、その間の事情は、「政府と自由党の間の疎通網は錯然としていて、この時期の交渉がどのスジからはじまり、どれが強かつたかはつきりしない。前後の関係から推せば、まず陸奥・伊東と林II土佐派のスジが中心だったのである」⁽⁵⁾とされる。政教社はそのような自由党を「責任不問派」(「非責任派」「無責任派」とも)として退け、自らを含めた対外硬派のことは「問責任派」(「責任派」とも)と呼んだ。そして、「責任」こそ立憲政の骨髓であるという立場から、自由党を次のように批判している。

彼の自由党の如き、多年責任を問ふに熱意する者の、亦た腐敗して政府党と化して、責任を問ふを拒否するに至れるは、私利に旨せる三四の狡童に翻弄せられたるに因るべしと雖も、責任の言辞を等閑視し、或は嘲笑の資に供するが如きあるは、彼れ遂に立憲政の何ものたるかを知らずと謂ふべきのみ。責任とは立憲政道の骨髓也。責任なければ立憲政なき也。彼れ責任を問ふべからずとするは立憲政道を要せずと云ふと異らざる也。⁽⁶⁾

これに対して、政教社が対外硬派内の多数派であつた立憲改進黨を支持していたことは、『立憲改進黨々報』と『日本人』をみればすぐに判る。『立憲改進黨々報』は二十八年七月三日発行の第四四号から誌面を一新する。その改刊初号に雪嶺は「昔の志士と今の政客」なる論説を寄せ、「彼の志士が徳川氏に大政返上を促せしが如く、今の政客が薩長氏に内閣退讓を望むは理なしとせんや、且つ又資格なしとせんや」⁽⁷⁾と述べて、立憲改進黨に反藩閥運動でのより一層の奮起を求めた。右の一節からも窺われるように、雪嶺の場合、薩長いづれをも排して反藩閥の立場に徹したことは、以後の言論活動を評価する上

で引き続き重要になってくる。また、同五日に創刊された第三次『日本人』には、立憲改進黨員の署名論説が毎号のように掲載される。本章で考察範囲とした時期の同誌にみられる論説数は表9の通りである。これによれば、第三次『日本人』は立憲改進黨（のちに進歩党、憲政党進歩派、憲政本党）の主張に大きくその誌面を提供していたことになる。黨員の寄稿に当って政教社の側から執筆依頼をしていたらしいという事実は⁽⁵³⁾、第四章でみたような明治二十二年当時の大隈条約改正反対運動の中で、政教社が立憲改進黨を仇敵視していた状況とは隔世の感がある。二十一年創刊以来の『日本人』をひとつの思想集団の機関誌的な性格の雑誌とみた場合、たとえ一時期にせよ特定の政党の政治的主張に誌面のかなりの部分を提供していたとなると、この時期に到って政教社の思想集団としての機能は決定的に低下していたといわざるをえない。第一節で触れたように、日清戦後の政教社は〈組織〉〈媒体〉ともに設立当初に較べるとかなり縮小していたのであり、在野党合同運動への関わりを通してしだいに「同志」たちの結集の意味あいにもまでも本質的な変化を来していったことが窺えるであろう。

ところで、立憲改進黨を軸とする在野党合同の気運を先取りするかたちで越佐会を結成した新潟県政界の動向に、志賀は重要な役割を演じていたらしい⁽⁵⁴⁾。九月二十五日付の『新潟新聞』には左のような社告が掲示された。

社 告

今や県下の対外硬を主義とし責任内閣の完成を期する者、旧来の党異恩仇を問はず合同し、北方の強を以て天下各派の大合同の率先となり中原の形勢を鼓動せんとするに当り、同志者相謀り東京より志賀重昂氏を招聘し、運動上に関する百般の斡旋を相

表 9 進歩党員の第三次『日本人』への執筆

	明治28	29	30	31	32	33年	合計
島田三郎		6	5	2			13
江藤新三			5	3	3	1	12
市島謙吉	2	3	2	2	1	1	11
尾崎行雄	4	2	1	1	2		10
肥塚龍苗		3	1	2	3	1	10
高田早稜	1			1	3	2	7
金尾巖吉	3	3					6
田口浦勝				4			4
箕犬養毅	1	1	2				3
犬大貫純一	2						2
長谷場孝之		1	2				2
柴島田孝和		1					1
島山重遠			1				1
鳩木重九郎			1				1
鈴木九郎			1				1
菊田彦太郎			1				1
合計	13	21	22	15	12	5	88

補注) 明治29年3月1日に結成されたときの進歩党員で、本名で書かれた論説のみを数えた。上下に分けて掲載されたものは『議会制度百年史』院内会派編衆議院の部〔1990年、大蔵省印刷局〕収録のものを用いた。

協議し兼ねて氏が滞越中は論説所見を新潟新聞に掲載さるる事を約托したるを以て、
来月一、二日頃より読者は連日氏の論説所見を我が紙上に見ることを得べし。(54)

志賀は二十八年九月三十日に新潟に到着、『新潟新聞』の主筆として十月二日の紙面から連日のように論説を発表した。志賀の来新を促したのは坂口仁一郎と市島謙吉であったという(55)。時を同じくして、三宅も同地で発行されていた『東北日報』の客員となって論説を寄稿することになった(56)。政教社を代表する二人が同時に、言論を通して新潟県政界に関わる格好である。志賀はその後、翌十一月一日の越佐会結成に尽力し、発会式の席上「東京同志会を代表して同会(越佐会)の成立を祝し且つ一場の演説を為し」(57)たという。そもそもこの越佐会は、新潟県内の改進黨、国権派の全部と自由党の一部を糾合したもので、発会式では「対外硬」の立場から遼東還付、京城(閔妃暗殺)事件の「責任」を糾すことを決議している。十二月の段階で総数六十五の県会に占める越佐会議員の数は四十余で、優に過半数を超えていた(58)。この月二十日に志賀は帰京の途に就いているが、新潟での経験が彼のその後の政党活動に与えた影響は大きいと思われる。つまり越佐会の結成は、在野党合同運動を全国に先駆けて一地域で行うという、いわば進歩党結成の実験的な位置を占めるものであった。事実翌年進歩党が結成されると、越佐会はその新潟支部になっていたのである。また志賀にとっては、ここでのオルガナイザーとしての経験が彼の政治的キャリアとみなされて、以後の政治活動の資源となったと思われる。確実により一步「職業政治家」に近づいたといえるけれども、志賀の政治運動との関わりがここでも言論——新聞という媒体——を通じたものだったことは記憶に留めておきたい。

翌明治二十九年について、雪嶺はのちに、「本年は国内の民心を衝動せし大戦役の終結

し、一般に戦後経営を慮りつつ、利害得失を清算せず、將に起らんとする種々の運動の第一年と見做すべし」(60)と書いている。一月五日発行の『日本人』第一三号が、その社説「新なる年、新なる気力」で「責任問題開戦の期は来れり。責任問題は即ち対外硬旨義の同義別辞のみ(中略)待ちに待ちたる開戦は目下に在り」(61)と説いているように、年明け早々、在野党合同問題は急展開をみせた。同二十八日には新政党組織事務所が開設され、新政党組織委員となっていた志賀が報じるころによると、二月初めの段階で合同の経過は次のような状況にあった。

却説目下の合同問題に就き最尽瘁せられたるは田口、犬養、大竹、金尾、石原等の諸氏に有之。小生も亦た其の驥尾に附して諸氏と共に發起人となり、公然解党の儀を改進、革新二党に書面を以て申入候処、二党共に右申込に対し代議士並に在京黨員時々集会の上解党合同の事を公答致候。尚中国進歩党、越佐会、同志会も解党合同の事を決議致し、各派夫れ夫れ目下熱心に解党の準備に取掛り居候。(62)

三月一日、進歩党が結成され、総務委員には尾崎行雄、大東義徹、犬養毅、長谷場純孝、柴四郎の五名が当り、志賀は選ばれて常議員(当初三十名)兼幹事(三名)となった。結党式で決議された宣言書には、「我党ハ進歩主義ヲ執リ茲ニ責任内閣ヲ設立シ、茲ニ外政ヲ刷新シテ国權ヲ拡張シ、茲ニ財政ヲ整理シテ民業ノ發達ヲ誘致シ、以テ立憲政治ノ実ヲ挙げ維新興國ノ丕基ヲ完成シ、以テ皇室ノ尊榮ヲ宣揚シ、民人ノ權利幸福ヲ増進シ、以テ宇内ノ文化ヲ大成センコトヲ欲ス」(63)とあり、ついで三か条の政綱を定めた。

政 綱

一 政弊ヲ改革シ責任内閣ノ完成ヲ期ス

一 外政ヲ刷新シ国権ノ拡張ヲ期ス

一 財政ヲ整理シ民業ノ発達ヲ期ス (64)

このうち最初の二つの項目は、対外硬運動以来のスローガンすなわち「責任内閣」「自主的外交」を踏襲しているが、三つめの財政整理は日清戦後経営に絡んだ新しい問題への対応である。

志賀は同党から派出されるかたちで、四月九日より栃木県内を、また同十三日以降は日本海沿岸地方を遊説している。彼が進歩党結成の経緯に深く関与していたことはすでに明らかだし (65)、政教社としても『日本人』の論調を在野党合同で統一した上に、誌面を改進黨系の論客に提供することによって進歩党結成に積極的に関わっていった理由は、いったいどのように説明できるだろうか。それを明快かつ概括的にまとめた発言は見当らないが、いま政教社の思想活動とりわけ『日本人』を中心とした言論内容との関連において考えるならば、次の三つの要因が浮かび上がってくる。

その第一は、対外硬運動の中で築いてきた人脈の存在である。二十六年の第四議会以来第二次伊藤内閣と自由党が徐々に接近を図っていくと、立憲改進黨は国民協会から政教社等の院外の団体までを含めた対外硬運動の側に立って政府・自由党と鋭く対立する。このような構図が日清戦後の進歩党結成まで基本的に引き継がれていた限り、政教社は反藩閥という大前提を堅持しながら立憲改進黨を中心とした在野党合同運動に同調することとなる。『日本人』に改進黨員の執筆が目立つのもこのためであった。これと関連して第二に、進歩党の政策はその「政綱」にみるように対外硬運動の方針をそのまま踏襲したもので、新たな戦後経営の問題に関しても、例えば『日本人』の社説では「軍備の拡張は、帝

国の富力及び帝国民の収入を本拠とし、之れに憑準せざるべからず」(66)とあるように、
際限ない軍拡論とは一線を画した財政整理を提唱しており、要するに進歩党と政教社は政
策的にも一致できたということである。さらに第三に、在野党の合同という発想自体を、
政教社がその設立と同時に大同団結運動、民党合同問題、対外硬運動などに関与してきた
動機と無理なく接続できたということである。志賀が「在野党合同問題は民間の有志者が
多年間夢寐致居候事」(67)と述べているように、彼らにとって進歩党結成はまさしく「夢
」としてきたものが実現されたごとくであった。対外硬運動以来同じ陣営にあつた徳富蘇
峰が志賀に宛てた書簡体の文章の中で、「矧川兄足下、余をして真率に語らしめよ。大合
同は、余が政治上の初恋なりしを」(68)と書いているが、蘇峰だけでなく志賀や雪嶺にと
つても、大合同は「政治上の初恋」だったといえるのではないか。しかしここでは、かつ
ての「民党(進歩党)合同」の「夢」を「在野党合同」にスリカエていることに留意すべ
きであろう。したがって彼らが「夢」といったのは、「国粹主義」の政治論がその出発点
においてもついていた社会進化論の立場に立つて「合同」を正当化する次のような政治的初
心のことであつたはずである。

能く藩閥政府員をしてコハガラしむるの方策は何ぞ。曰く先づ反政府的各政党の大
合同を謀り、今の政党に加盟せざる所謂無所属の徒をも続々之れに投入せしめ、以て
一新大政党を団成し、以て伏見鳥羽の一戦の如く断じ、以て天下の大機を茲に一決す
るに在り。諸君子中動もすれば輒ち拘々として主義の異同を称へ以て大合同の事を排
斥す。然れども知れ宇宙には生物進化(亦た社会進化)の大主義の外に復た他に所謂
主義なるもの有るなきことを。「保守」と云ひ「改進」、「革新」と称へ、刻々とし

て鑄型中に投じ相削み相角立して自から小にし自から弱くするが如きは、哲理上學問
上より觀下せば真個に一咲にだも値せざるもの（後略）。⁶⁹

政教社が進歩党結成に積極的に関わつた理由とは、進歩党の政策が政教社の政治構想
の三つの柱であつた反藩閥、責任内閣・自主外交・財政整理、民党合同と一致したからだ
が、その背景にはなお健在であつた進化論に基づく政治觀があつたといえる。それはかつ
て志賀が明快に述べていた総併力すなわちリザルトという思考方法に基づくものであ
つた。ところが、進歩党が伊藤内閣の後を承けて九月十八日に成立した第二次松方内閣の
与党として行動するようになると、事情は複雑になつてくる。なぜならば、松方内閣は基
本的に薩派系の藩閥内閣であつて、もし具体的な政策面で内閣と進歩党の折り合いがつか
なければ、政教社が進歩党を支持した第一、第二の理由は成立し難く、結局第三の在野党
大合同という「夢」あるいは「初恋」だけしか残らないからである。そこで次に、進歩党
と松方内閣の提携経過と政教社との関係を、志賀の動向に注目して同じように三つの側面
から瞥見しておこう。

まず第一に、第二次松方内閣の成立直後に発表した「政綱」（十月十二日の地方長官等
に対する松方首相の演説）といわゆる二十六世紀事件である。この「政綱」の準備を担当
したのは内閣書記官長の高橋健三で、実際には彼が内藤湖南を伴つて陸羯南の自宅に二晩
籠もり、この三人で起草したのであつた⁷⁰。湖南は晩年になつてもなお、「元來この政
綱は当時にあつては非常に進歩したもので、言論とか結社とかいふものの自由を認める、
その他あらゆる当時の官僚政治の弊害を打破つたことも皆その中に含んだのであつて、最
初書いたのは余程立派なものであつたと思つてをる」⁷¹と回想しているが、その草案は

長派山県系官僚出身の司法大臣清浦奎吾らの要求で徹底的に修正されてしまったらしい。「政綱」が内藤ら政教社周辺の人たちによって作成されたという事実は、この内閣と政教社の深い関係を示唆しているけれども、同時に、清浦の修正にみるような藩閥や官僚勢力による厚い壁の存在をも暗示している。

このような支持基盤の微妙な権衡関係の上に築かれた松方内閣を揺るがせたのが二十世紀事件であった。事件の詳細は他に譲るしかないが、要するに高橋の主宰する雑誌『二十世紀』が論説「宮内大臣論」によつて発行停止処分を受け、それを転載した新聞『日本』なども同様の処分を受けた事件である。これが、先の「政綱」で「言論出版集会等、憲法上人民の享有すべき権利自由は、政府厚く之を尊重し、其保障を図らしめんことを計るべし」(2)と表明したわずか一か月後のことだったので、政府と進歩党を巻き込んだ政治問題に発展した。志賀の日記によれば、事件が表沙汰になった直後の十一月十四日にはさまざまな動きがみられた。

此日『二十世紀』件に付閣臣の議論紛々内外の攻撃矢の如く集り一日中に松樺二大臣の変説、隈伯の辞職沙汰、伊藤派のヤツキ運動、同志の奔走、高橋、神鞭二氏辞職断念の事の忠告、松樺二伯の参内、各大臣間の訪問、『二十世紀』の発行停止、『日本』の停止、土方宮内大臣の辞職勧告、宮内大臣夜十時後まで辞表を差出さざるを以て催促の件、宮内大臣後任者の選定並に松方伯と協議の件々其他数事件あり。(3)

志賀はこのとき、高橋や法制局長官の神鞭知常、進歩党総務委員の柴四郎、犬養毅、大東義徹らと共に後任宮内大臣の件を相談するほど政権の中心近くにいた。しかしこのときも、藩閥と官僚勢力の厚い壁をみた進歩党の中には、政府とは一線を画して独自の立場を

採ろうという意見の者が増えてきたとしても不思議ではない。肥塚龍が「自由党の前内閣に於けるは屈従なり、進歩党の現内閣に於ける友交なり」(74)といい、島田三郎が「彼の言論の自由を保証すと宣言しながら、反政府党が喧囂紛擾を極めたるに逡巡して、理由なく新聞雑誌の発行を禁停したるが若き、昭かに現内閣の根底鞏からざるを証する者、是れ亦た現内閣の欠点にして、吾人の痛惜する所なり」(75)と明言しているのなど、彼ら「非盲従派」の主張を代表している。政教社も、「禁停止廃止と否とは現内閣の勇怯を判ずべき試金石。若し猶ほ依々して廃止を敢てせずんば、彼は到底国政の改善に堪へざる者なり。毫も前内閣に優る所あらざるべきなり」と、政府の発行停止問題に関する対応姿勢を厳しい眼でみていた(26)。この問題に対する志賀の態度は左のような書簡の内容によつて知ることができよう。

拜啓 昨日府下雑誌社の懇親会之席上五十余人出頭し、農業雑誌社主津田仙翁發議にて満場一致の上痛撃なる議決をなしたり。唯今は新聞同盟の委員拙寓ニ集會し頗る激昂之議出で、全国各社の大決議をなさんとの評議あり。政府ニして停止全廃案を提出せずんば全国の同盟新聞雑誌は一斉にすべく、又進歩党中ニも少くも十名の代議士の脱党者あらん。小生に在りても記者としては政府反対の議決をなし、進歩黨員としては政府と提携するなどは到底氷炭相容れざる所ニ付、固より去就を決せざるべからずと心痛仕居り候也。明日更ニ此事に関し閣議を開く由、然らば此所にて大隈伯の去就進退を賭して最後の決心を以て行為あらずんば復た如何ともすべからずと存候也。此の如き内閣二伯の永在せらりたりとも別段見込もあるまじくも存候。故に伊板一派の手を拍ちて笑を考ふれば残懷千万とは存候共、大義名分の存る処明日の閣議に伯の

進退を賭して言動あらん古とを切望仕候。

十二月

二十日

志賀生

犬養老台侍史

小生参堂致し右義可申上心得之処、昨日以来風邪にて万安の新聞記者会、三河屋の雑誌記者会にも出席せず在宅致し居り候二付、書面にて申上候。(27)

閣議での強硬姿勢を大限に求める趣旨で書かれたものだが、ここでは志賀の立場を考え、
るのに、「記者」としての対応と「進歩黨員」としての対応の矛盾に対する内面の葛藤が正直に語られている点がより重要であろう。今後さらに政界に接近すればこの矛盾はますます増大するはずである。

結局、「政綱」で宣言され、さらに二十六世紀事件でその必要が痛感された新聞紙条例中改正が公布されたのは、第十議會（明治二十九年十二月二十五日）三十年三月二十四日（）の最終日であった。この議會を進歩党の協力で乗り切った松方内閣は、閉会後に黨員を官吏に登用することによつて提携の実を挙げようと図った。一方進歩党では党報の発行を企てたが、志賀はこれらのいずれにも深く関与していたのである。

『進歩党々報』は三十年五月一日、「党報は党の口なり、党論政情の発現器なり」(28)との役割を担つて創刊された。政教社はこの創刊号をみて、「其趣味に於て、或は濃厚を欠くが如きは吾人をして少しく遺憾とせしむる所。殊に党論として厘に一頁に満たざる発刊の辞を掲げたるは、大政党として余り其口の小なるを疑はしむ。党報洵に党の口ならしめば、進歩党たる者須らく全力を此に注がんことを要す」(29)と評した。逆にいえば、進

歩党は結党以来このときまで「党の口」をもたなかったことになる。その間にあって「党論政情」を代弁していたのが、『日本人』をはじめとする新聞、雑誌だったのである。前述したように『日本人』に進歩党員の署名論説が目立つ背景にはこのような事情もあったのである。

ところで、この『進歩党々報』の主務はほかならぬ志賀重昂その人であった。奥付の記載をみると、発行兼印刷人は工藤寛造（党の事務員として名前が見える）、編輯人は高橋秀臣（青年急進黨幹事として名前が見える）となっていて、志賀の名前はどこにも出てこないのであるが、実質的に同党報を取り仕切っていたのは彼とみて差し支えあるまい。志賀は常議員のまま「党の口」としていわば広報担当の責任者となったのである。それが政教社での雑誌発行の経験を買われた結果であつたことは想像に難くないし、彼自身の政治運動との関わり方がこれまでも常に言論を足場にしたものに限られるという姿勢がここでも貫かれたともいえる。しかし、ときの政府と提携している政党の機関誌主務のことであるから、『日本人』の編集のように周囲の何ものにも拘束されないというわけにはいかなくつたのもまた確かであろう。前掲の犬養あての書簡の内容がそのことを示唆している。

志賀の前途を祝すというよりも、その多難を予測するような二本の論文が党報創刊号の「寄書」欄には載っている。一つは陸羯南の「政界の技術及批評」であり、もう一つは三宅雪嶺の「与党報主務論職分書」である。羯南は、進歩党が「政界の技術家」として「実際の事情に基きて経綸の方法を選択」⁸⁰すべき位置に立ったという認識を示したあと、それとは別に「批評家」が存在することを述べている。羯南自身が後者に属するのは当然として、志賀が「技術家」としての一面を帯びざるをえなくなつたことを教唆する一文と

も読める。一方雪嶺は党報主務の難しい立場を予見しながらも、志賀が党からの独自性を發揮して是々非々の言論を旨とすべきことを求めている。

主務足下、足下固より党報を活用するの伎倆あり、党論として示す所、評論として掲ぐる所、能く五万人の心を均一にするを得べし。則ち能く五万人の心を均一にするを得べくんば、將た如何なる順序を以て如何なる思想を鼓吹せんとするか。主務足下、是れ足下の頭脳に在る事なり。足下は虚心坦懷以て党の輿論を聴納すべきも、又徒らに衆に従ふべき者にあらず。既已に委任せられたる上は、必ずや自家の是とする所を掲げ非とする所を抑へ以て衆を同化せんとする有らん。足下の主張冀くば党報に因て聞くを得んか。(8)

この党報創刊問題と並行して、進歩党では松方内閣との閣内協力問題が、党員を各省の次官、局長、勅任参事官や知事に登用するというかたちで急速に具体化しつつあった。四月七日に高田早苗が外務省通商局長になったのを皮切りに、同日には大石正巳が農商務次官、肥塚龍が同省鉱山局長に就任したほか、この日公布された勅令第八二号をもって各省に勅任参事官が新設され、またこの前後には古参知事が更迭されて進歩党員の大量獵官の準備が整った。志賀が農商務省山林局長に、徳富蘇峰が内務省勅任参事官に就官したのは、やや遅れて八月二十六日のことである。『国民之友』はこれをもって「政事上の進歩」(9)と手ばなしの評価をした。志賀や徳富の仕事ぶりというものは、政教社の同人には次のように映っていた。

徳富蘇峰、志賀矧川と親み善し。一日内務省の使丁公用書を携え来る。封表には官庁の制規に遵ひて「農商務省志賀山林局長殿、内務省参事官徳富猪一郎」と書す。而し

て披き見れば相変らず書末に「矧川兄、蘇峰生」と記し、旧態依然。⁸³⁾

とはいえ、二人の官等は高等官二等（勅任）であり、志賀が札幌農学校を卒業したのと同じ明治十七年に東京大学を首席で卒業して大蔵省に入省した阪谷芳郎が、同じ三十年に同省主計局長（高等官二等）に昇任していることと比較すれば、やはり異例の抜擢といえる。もつとも、志賀が免官となる十一月二日までのわずか二か月余の間に、彼が何らかの施策を実行に移したとは考えにくい。おそらくはこの年の四月六日に公布された森林法（法律第四六号）の施行事務を処理したくらいだろう。志賀自身の高等官としての感想は、「新分子は大に注入せざるべからず。予は吾党より愈々益々政府に入る者の多々ならんことを切に望む」⁸⁴⁾というものであった。その他の猟官者の実態がどのようなものであつたかといえば、例えばこのとき登用されて富山県知事になつていた石田貫之助などは、自由党の壮士が一躍大名気分となつて、同郷の三上参次（当時、帝国大学史料編纂掛）が訪問したときにも「以前に会つた石田貫之助とまるで違つた者になつて居て、傲然と構へて居り、同国の旧知人であると思つて居るのかどうか判らぬと云ふやうな待遇の仕方であつた」⁸⁵⁾という。これ以後一般に政黨員の猟官が権勢欲の対象とされ、感情的な反発を受けることにもなつた。ちなみに、政黨員の猟官に危機意識を抱いた藩閥・官僚勢力が文官任用令を改正して自らの基盤に防護線を張るのは、これより二年のちである。

同人の志賀や社交格の高橋が任官したのに対して、政教社では現実の政治過程に近接して言論を展開する場合の自己の立場を厳しく規定することで対応した。

『日本人』は自ら本領の在るあり。一一の社員の官吏と為るも、一二の社友の政府党と為るも、毫末も変更するある莫し。本領の在るあり。主張の在るあり。前既に

十年一日の如くなりし若く、今後と雖も猶ほ依然として独立独行し、依然として勇往直進し、依然として政弊を弾劾し、依然として陋俗を打撃せん。官癖、吏臭、我に於て何か在らん。乞ふ事実の有無を誌上に徴せよ。問ふ者あり、故に聊か茲に弁ずと云爾。(86)

政教社にとつての「本領」「主張」が何だったのかは次節で考察するとして、要するに「批評家」に徹し言論に忠実であることを宣言したのである。いずれにせよ、政教社設立当初からの中心的存在であった志賀重昂にとっては、このときの任官によつて雪嶺らの残留組との間に容易には埋められない距離が生じてしまったということであろう。明治二十一年以来不即不離の関係で雁行してきた志賀と三宅の思想活動の軌跡が、在野党合同運動と志賀の任官を契機として明確に遊離していくのである。

第四節 「初期政教社」の終焉

進歩党と第二次松方内閣との関係は、提携からほぼ一年を経た明治三十年十月になると急速に破綻へと向かう。破綻に到る一連の経緯は『進歩党党報』第一四号（明治三十年十一月十五日）の論説「吾党が現内閣と絶つの理由」及び党報「提携断絶に関する顛末」に詳しいが、その原因は三十一年度予算や台湾統治をめぐる問題のほかに、進歩党が黨員の獵官を拡大してより徹底した政党内閣の実現を要求したのに対し、藩閥・官僚勢力がそれを拒絶したことに求められる。十月三十一日の同党常議員会で、犬養毅の提出した「我党は断然政府と提携を絶つ」という案が可決され、この会議に出席した志賀重昂は、同じく決議に加わった尾崎行雄（外務省勅任参事官）、箕浦勝人（農商務省商務局長）及び肥塚龍（同鉱山局長）と共に、十一月二日に免官処分——依願免官ではなく、事実上の懲戒処分——を受けた。閣内にあつてこの処分を主張したのは上述の「政綱」に手を入れた清浦法相だったという。志賀もさすがにこのときは藩閥との提携に懲りたらしく、次のようなエピソードが伝えられている。

志賀矧川、松方正作と会す。正作曰く、近況如何んかあると。矧川曰く、何んでもないサ、誠が君、僕は到底藩閥とは無縁のものだ。曾て学校の教師に雇れてヤツト飯が喰へる様になると、長州出身の木梨精一郎の為にボイ出され、今度は又君のオトツツアン等に免官せられた。之で藩閥とはイヨイヨ絶縁だ。帰つてオトツツアンに告げ給へ、此の後は決して藩閥の門には行かナイと。正作苦笑して分る。 87

提携破綻の経緯を報じた党報の「寄書」欄には、雪嶺の「再び藩閥と提携する勿れ」も

掲載されている。冒頭いきなり「進歩党の藩閥と提携せる、党の爲めには寔に一大失計なりき」(87)と断じるこの一文では、採るべき方策として「全国を一打して大団と爲し、速に藩閥を倒すの策を講ずるある、乃ち小党を合一して多数を制すべし」(88)というかつての民党合同の理想が説かれている。同じ時期の『日本人』にも、無署名ながら、「藩閥と結託して内部より改善するを得策とするに至りしも強ち無理と爲すべからざれども、其の一時の謬信にして決して得策に非ざる事の知れ渡りたりし以上、過を再びするは洵に愚の至りなるべし」(89)と、党報の寄書と同内容の社説が掲げられ、藩閥との提携に代るに「今日の務は只だ国民全体を以て政府を組織するの決意を以て事に当るべきのみ」(90)という構想が示される。政教社は反藩閥の初心に帰るとともに、新たに「国民全体」という概念を藩閥政府に対置したのである。進歩党の結成準備以来遊離しはじめたかみえた志賀と三宅二人の軌跡は、この時点ではなお修復できる距離にあつたといえそうである。

だが、結論的にいえば、やはり二人は、これよりわずか三年ののちには全く対立する地点に立つてしまう。それは必然的に「初期政教社」の終焉を意味することになったと私は考えている。その過程では、第一、二節で述べたように、日清戦後における「世界主義」と「国家主義」の対立にみる思想状況の構造変化をはじめ、同人の進退に伴う組織変化、ジャーナリズム市場における雑誌媒体の役割変化及び読者層の交替による質的变化など、さまざまな変化要因が複雑かつ重層的に作用して全体として政教社の思想活動は初期の特質を失つていったのだが、この場合何よりもまず政教社を代表するかたちの二人が政界再編の中でどのような言論姿勢を選択したのかという点に着目する必要がある。まさに明治三十一年から三十三年にかけての三年間は、初期議會以来の政治対立が終息に向かい、

いわゆる明治憲法体制が確立した時期と認識されている。そのような時期に際して、政治と言論の関係において政教社が選んだ立場と思想集団としての自律性の根拠は奈辺に見い出せるのか、それを志賀と三宅が示した社会的発言の姿勢を明らかにすることで探っていくことができるだろう。

そのような観点からみてまず注目されるのは、三宅にとって『我観小景』の「姉妹篇」ともみなされている「人生の両極」であろう。「人生の両極」は、明治二十九年の後半期の『日本人』誌上に七回にわたって連載され、未完のまま止んだ三宅独自の哲学研究で、その全体構想は次のように予告されている。

時局変化の兆あるを以て、内政外政論客多くは実務と実勢とを説くに急なるが如し、然れども時局の変化は転瞬の経理談は暫く之を他の慧敏なる論客に委し、迂疎なる余輩は時に世間の称する空理空論を説道して、悠揚として人世を稽ふるも、亦太だ不可ならずと信ずる也。(2)

進歩党が第二次松方内閣との提携を発表したちようどその前後の時期に、雪嶺は自らを「迂疎」といい、あえて「空理空論」に徹して「人世」の研究をすることを宣しているのである。このことの意味は大きいと思われる。なぜならば、進歩党の常議員兼幹事として政治の世界にさらに一歩踏み込んで「実務と実勢とを説く」志賀に対して、雪嶺は『日本人』に立て籠もり「空理空論を説道」することで、社会的発言の立脚地を原理的に模索しようとしていたことが明らかだからである。

未完に終わったとはいえ、私たちが「人生の両極」から見いだせる雪嶺思想の特質は次の四点にまとめられよう。第一に、「人生」を個的に成立する「人」から「国家」「列国

同盟」までのさまざまな段階のあらゆる局面に顕現するものとし、各段階は有機体構造の一部として把握されていることである。これが雪嶺思想の縦糸になっていた社会有機体説に基づく我・宇宙軸を再確認するものであることはいうまでもない。第二に、ではその「人生の目的」は何かといえ、従来の快樂主義、実利主義、公事尽瘁主義、靈魂不滅主義に批判を加え、そもそも視点に応じて多様に用いられる「目的」の曖昧さをいい、むしろ「其の存在の状を顕かにせば、謂ふ所の人生の目的も明かなるべし」としていることである。ここで「存在」の根拠とされているのが『易経』『孟子』の一節であるのも興味深い。第三に、その「存在」は二理対立（例として進化は結合と分化の対立とされる）を本質的属性とし、「人生の目的」も両極から究明しなければならぬとされていることである。第四に、国家への尽瘁を「人生の目的」とした場合、それを進化主義によつて説明すると、貧富の差が拡大していることにみるように尽瘁の結果が必ずしも社会全体の進化をもたらすとはいえず、むしろ社会全体の力を総合するならば進化主義の分派である「社会主義」が適しているとさえ指摘していることである。ここでいう「社会主義」がいわゆる国家社会主義であることは確かだが、日清戦後によく周知となった社会問題への雪嶺なりの開眼を意味していよう。明治三十年に社会問題研究会⁹⁴が結成されると、雪嶺は陸羯南らとともにその評議員に名を連ねているのである。

以上のような「人生の両極」にみる雪嶺の思想は、進化論に起源する社会有機体説を基本にしながらも、「両極」という概念を意識化することによつて、思想家あるいは言論人としての彼のその後の生涯を支える姿勢を築いた点で重要であると思われる。つまり、常に価値判断を相対化する柔軟な思考方法が、三宅の中に明確にそれと自覚されるかたちで

定着したといえよう。このような思考方法に裏打ちされた彼の言論姿勢というものは、進歩党からの大量獵官に際して自らは「一貫の氣風」を説いたことにはつきりと現れている。

過ちて改むるに憚らざるは君子の美とする所、非を知りて之を遂ぐるは小人の免れざる所、得失固より較著たりと雖も、而も節を売り議を変ずるの太だしき当世の若きに際しては、寧ろ剛愎にして過を改むるに吝なる者を取らざるを得ず。是れ比較的一貫する所あるなり。利害に商りて意見を変更し、而して過ちて改むるに憚らざるに托する者は素より称するに足らず。沉んや主義を二三にし政見を表裏し、猶ほ且つ過ちて改むるに憚らずといふ簡短なる口実さへも求めず、恬然として慙づるなく、意氣揚々として変通を誇るに至りては、実に言語に絶す。須らく鼓を鳴らして其非を責めざるべからざるなり。 95

ここでその節を疑われ非を責められているのは具体的には誰なのだろうか。内務省勅任参事官の地位に固執して変説ぶりが喧伝されていた徳富蘇峰がすぐに思い浮かぶけれども、幾分かは同人の志賀に向けられたものではなかったか。

翌明治三十一年の事実上の第一号といえる『日本人』第五九号の社説で、政教社は松隈内閣のあとに成立した第三次伊藤内閣を「固より藩閥非藩閥の過渡期に彷徨するもの」(96)と規定して批判の対象とした。まさにこの「過渡期」ゆえ、藩閥と民党は離合集散を繰り返し多くの政治家、言論人が去就を左右する中で、志賀は憲政党の結成に参与して「幹部」(97)の一人に納まり、一方ただひとり政教社を代表するかたちとなった雪嶺は「哲学者」という枠を自分自身にはめていく。どちらの選択が正しかったというのではない。

二人の示した軌跡をできるだけ丹念に追って、乖離の生じた理由とその意味を考え、「初期政教社」の終焉を見定めるのが以下の目的である。

松方内閣との提携破綻のあと、より本格的な政党内閣の成立を目指して民党合同の気運は高まり、三十一年六月二十二日に憲政党が結成された⁹⁸。新富座で行われた同党の結党式では、「自由、進歩の両党を解き広く同志を糾合して一大政党を組織し更始一新以て憲政の完成を期せん」という「宣言」のあと、九か条からなる「綱領」が採択された。その中では、「政党内閣を樹立し閣臣の責任を厳明にする事」（責任内閣）、「国権を保全し通商貿易を拡張する事」（対外硬）という項目の他に、「陸海軍は国勢に応じ適度の設備をなす事」という一条が加えられていたことに注目しておきたい。志賀は選挙委員に選ばれ、同党「幹部」の一人と目されるようになった。同党を基盤にできたのが第一次大隈内閣（いわゆる隈板内閣）で、志賀は七月十三日、再び任官して外務省勅任参事官（官制改革によつて十一月一日から参与官と改称。高等官二等）となる。この憲政党は、自由民権運動以来の自由、改進黨（進歩）両党対立を解消するもので、政教社にとつても反藩閥民党の大同団結という政治的初心を実現するものと映つたのは事実であつた。したがつて『日本人』誌上でも、隈板内閣の出現を「或意味に於ける一種の革命」といい、また「第二維新」と呼んでいたのである⁹⁹。

ところが周知のように、憲政党は旧自由、進歩両党派の内訌によつてわずか四か月余で分裂してしまい、隈板内閣も総辞職を余儀なくされる。三十一年の春から秋にかけての一連の政治情勢を横目に見て、三宅は「哲学者」の出処進退について次のように述べる。すなわち、「哲学者に於て能く其任務に負かざらんと欲せば、社会の波瀾に動揺せられず出

処進退総べて自己の意志に頼るを得べき地位に居るを適當とす」(100)というのである。哲学会席上での講演の一節だが、「社会に在て斯の比較上合理的の解釈を与ふるの任務あるものなり」とされる「哲学者」は、彼の自画像にほかならない。ここで思い出されるのは事実上の処女作『哲学涓滴』で初めて示された哲学観で、それ以来社会と密接する姿勢が一貫して懐抱されているのを見ることが出来る。その具体的な一例としては、ちようどこの時期、十一月二日に結成された東亜同文会(101)に参加したことが挙げられよう。近衛篤磨を会長とする同会は、対外硬グループを形成していた「東方問題に関する団体の合一」(102)といえ、三宅は趣意書及び規約書の起草員となっていた。十一月二日の創立大会では、「支那を保全す」「支那の改善を助成す」等の決議をなしたが、支那保全論の立場は列強の中国分割の現実を前にしたとき、きわめて現実的な国際問題への関わりを示すものだったのであり、以後の言論活動の中でいわば三宅の宿論となっていく重要な課題ともいえるのである。

他方、国内政治に関する限り、「哲学者」三宅の処進退はしだいに自らいう社会の波瀾に動揺されない地位に定められつつあったように思われる。彼の場合、志賀のように実際の政治運動に関わることはなく、むしろ距離を措こうと努めていたようだ。憲政党の分裂騒ぎを余所に前述の東亜同文会結成に深く関わっていた様子がそのことを示しているし、ちようどこの時期に地租増徴問題が政治課題となると、『日本人』が増徴論の田口卯吉と非増徴論の谷干城双方の意見を誌面に掲げているのも、そのような三宅の対政治姿勢と関連していたと考えることができる。

では、二人の間に生じた懸隔は憲政党の分裂後にどのように推移するのだろうか。分裂

をもたらした政治過程と第二次山県内閣成立に至る政局の推移については他書に譲るとして、志賀は引き続き進歩党系の憲政本党に属することになり、議会に議席をもたない院外団の一員ながら同党の政務調査委員となっている⁽¹⁰³⁾。十一月三日に本部協議会で採択された憲政本党の綱領は、先の憲政党のそれと全く同じであるから、志賀の政治的立場にもこのときは変動がなかったとひとまず考えておきたい。同党は、山県内閣と「肝胆相照」ことになった憲政党（すなわち星亨に指導された旧自由党系）及び国民協会（三十二年七月五日帝国党と名称を変える）とは対立する立場を採る。一方政教社も同内閣の成立を「藩閥内閣の再興」とみなして對抗姿勢を鮮明にする。反藩閥という一点で二人はいつでも接近できたのである。そういえばこの年の『日本人』最終号で志賀が再び同誌に筆を執ることが予告されている。

だが、明治三十二年の『日本人』をみると、二人の論調は全くかみ合っていない。すなわち、三宅は英雄論に向かい、志賀は風土論を展開したのである。三宅は『日本人』誌上に「西郷隆盛」を連載したが、このような英雄論の背景には彼自身が認めているカーライルなどの影響があると同時に、私はむしろ、第二維新と感じられた民党合同による政党内閣が政権基盤の脆弱性ゆえ十分に成長せず、猟官の跋扈にみるような「官僚社会の競争」⁽¹⁰⁴⁾に堕つってしまった現状の解決手段として、英雄による現実打破に期待をかけたのではないかと思う。これに対して、「地学的論文」と予告された志賀の「風土要論」は、『日本風景論』の一つの展開とも考えられるが、人材の地理的分布を単純な地理決定論で説明したものにすぎず、三回の連載で終わった。この時期の志賀の論説でかえって注目されるのは「軍備緊縮」と題された一篇であろう。この中で彼は、「日本現時の軍備は国力に

適はざるもの」⁽¹⁰⁵⁾と述べ、無限定の軍備増強になお歯止めをかけている。

志賀が「積極主義」に転じる契機としては、同年秋から三か月余に及んだ中国旅行が重視されなければならない。旅行の目的は、憲政本党から派遣されて新領土台湾の実状を調査することであったが⁽¹⁰⁶⁾、志賀にとっては憲政党分裂以後の混沌とした政情から逃避する意味もあつたと思われる。新聞『日本』に送った旅行記の中に、「落剝の書生、失意の政友を代表して秋風を逐ひ、一剣に杖きて言語不通の境に入り云々」⁽¹⁰⁷⁾とあることでも判るように、彼にとっては長年の民党合同の「夢」がわずか四か月で碎かれ、「失意」のうちの出発であつたはずである。ところが、実際に福建を訪ねてみると、「清国の保全を以て旨義となせる日本人の代表者到れり」⁽¹⁰⁸⁾、また「西欧諸国の支那分割を非とせる所の日本大政党より特使来れり」⁽¹⁰⁹⁾という具合に随所で「優遇歓待」され、自分自身の旅行の意味を積極的に意識しはじめる。それは、十一月二十七日に通過した古廟の壁に次のように書き記したことから推測できるだろう。

来伯蓬萊山下小桃源大日本志賀重昂題壁

Shigetaka Shiga, Ex-councillor detat of Japan, visited this place on Nov.

27th 1899. ⁽¹¹⁰⁾

Ex-councillor すなわち「前参事官」と記すことで、志賀は「英米人にして此の地方の鉱山採掘権を得んと北京の総理衙門に要求するの際、日本も亦た是を得んとするクレイムに幾分の理由を加へたる事」⁽¹¹¹⁾ができたと考えるのである。そういえば、旅行中は終始「知府」等の士大夫と筆談の交わりをするだけで、沿道の民衆の印象は「今回の旅行中支那人の食欲には嘔吐を催ふすに至りしこと数ばなり」⁽¹¹²⁾というものであつた。士大夫か

らは「前参事官」ということで二品官の扱いを受けたのに対し、民衆からは探偵とまちがえられ、ときには「国泥棒」⁽¹¹³⁾という言葉さえ浴びせられた。そのような中で志賀は、福建の山中では日本製品がまだ流通していないことを嘆き、英米勢力の及ばない地域への日本の進出を促し、「台湾島と福建省との利害を具さ共にせしめ、且つ彼此交通の途を能く開導せざるべからず」⁽¹¹⁴⁾と調査旅行を総括している。

志賀が清国から帰国した三十三年二月、第十四議會は閉会した。閉会后、第二次山県内閣と憲政党の「肝胆合照」関係は破綻を来し、星亨が指導する憲政党は伊藤との提携を模索する。すでに前年から伊藤は「模範的政党」の結成を目指して地方遊説を始めており、六月一日の両者の会談で新党結成のことが同意されたという。この間の詳細な事情はすでに諸書で論じられているところであるが⁽¹¹⁵⁾、憲政党とは対立する憲政本党の「幹部」であつたはずの志賀は、九月十五日に発会式を挙げた立憲政友会に伊藤の推薦で入会したのである。このとき志賀の他に憲政本党の幹部級で同党を「裏切」つた中には尾崎行雄、望月小太郎らがいる。「裏切」に走らせた動機は何だったのか。そのとき、直前になされた福建の「探険」はどのような意味をもっていたのか。志賀の「私秘書」であつた後藤狂夫によれば、志賀にとって「積極主義」の選択と政友会入党の関係は次のようなものである。

此時分から先生の政治思想は、大分に変化を生じ、漸く積極主義の已むべからざるを覚へた様で、由来進歩党の把持する消極主義を裏切る様になつた。(中略)先生の足は段々憲政本党本部から遠かり、又久しき以前から重大の関係のあつた「日本人」や「日本新聞」等とも其所説を異にする所から、自から其関係が稀薄となつて、其局三

十三年の八月、自から同党の領袖を歴訪すると同時に、全国新聞紙にも明に其理由を發表して、遂に憲政本党を脱会するに至つた。

同年九月伊藤公立憲政友会を組織するに及び、公自から先生の家を訪ねて、邦家の為め大に尽力せんことを勸説せらるるに及び、先生は伊藤公の誠意に感激し、同公の紹介を以て政友会に入り、忽ち其幹部に挙げられ、主として会報の編輯を統督し、僕も亦随て会報の編輯に従事した。(116)

文中にある「脱党理由書」は、八月十八日付けで書かれたもので、その中で志賀は「凡衆を訓練し庸俗を教育し以て布局の濶大にして英爽颯発なる国民を成就する」(117)という目的のために政友会が「順便」だという所信を述べている。また同じく「今や教育社会全般は漸く微志の存する所を諒解せんとするの秋に至り」(118)といい、彼が政教社を中心に行つてきた思想活動が一応所期の目標を果たして終息したとの自覚を抱いていたことも伝わってくる。こうして政友会入りした志賀は、一時は伊藤の「乾児」とも呼ばれ、党報『政友』の編集に携わることとなつたのである。

これに対して、全く同じ時期に政友会と対立する政治勢力が生まれることとなり、三宅はこちらの側に加担することとなつた。それは国民同盟会である。同会の結成から解散までの経緯は国民同盟会残務委員編『国民同盟会始末』(一九〇二年、政文社)に詳しいが、それによれば同会は、三十三年春以降清国各地における義和団蜂起に対する列強の派兵という事態に際して、「支那保全」を唱え、内閣に向かつては朝鮮出兵を促し、ロシアの満州占領をあらかじめ抑止するために行動するには、先の東亜同文会が政治運動に不適切だつたため、当初は「国民的運動」を志向する「無形無名ノ団体」として、近衛篤磨を

中心に犬養毅、佐々友房、頭山満、杉浦重剛ら「同志者」が集会したことに端を発している。九月十一日の発起準備会には発起人の一人として三宅も出席した。この時のメンバーは、近衛の日記によれば「先輩等の一派、頭山を首領としたる青年者の一派と、新聞同盟の一派」⁽¹⁹⁾ということになる。このうち三宅や箕浦勝人、中井喜太郎（錦城）などは「新聞同盟の一派」を形成していたと考えられる。

国民同盟会にとつて最初に問題となつたのは、同じく結成されたばかりの立憲政友会との関係をめぐる鞘あてであつた。同盟会の側では、政友会や政府を攻撃するのが本来の目的ではなく、「過激な運動」を予定していたわけでもないが、政友会の側では、伊藤の指示で九月十八日の総務会で「国民同盟会ノ行動ハ外交上国家ニ不利ナルモノ」⁽²⁰⁾と決議し、またロシア公使からは政府（外務省）に国民同盟会の反露運動に関して「詰問」が寄せられていた。このようなりアクションの中で国民同盟会が成立したのは、このあと九月二十四日である。これによつて、同会は「非政社的無組織的ニシテ而モ有形有名ノ団体」⁽²¹⁾へと脱皮したことになる。このような組織形態が三宅の好みに合致していたことは、従来さまざま行動様式から帰納的に推論して誤りなからう。そのうえ国民同盟会は、政教社がその一翼を担っていた対外硬派の流れを組む憲政本党、帝国党及び中立系の支持によつて成り立っていたことは確かだ、近衛の背後に大隈がいるのではないかと囁かれたりして、逆に政友会にとつては最大の対抗勢力と映り、結果的に両者は「相敵視」する状態に置かれてしまった。

三宅が国民同盟会の中でどれほどの役割を果たしていたのかは、実のところよく判らない。しかし一つだけ確かなことは、初期政教社をその設立以来支えてきた志賀と三宅の二

人が、このとき初めて「相敵視」する陣営に属してしまったということである。すでに「国粹主義」を語らなくなった雑誌『日本人』を抱えて、政教社は思想活動の進路をどこに取ろうとしていたのか。私のみるところ、政教社の性格も徐々にではあるが確実に変化を続け、ちょうどこの時期に明白な転換点にさしかかっていたように思われる。それを一言でいうならば、『日本人』の投書欄にある山本良吉の「日本人は雪嶺先生が世を誨ひらる学校なり」(心)という表現が一番的確であろう。以後の『日本人』は三宅の個人雑誌の様相を帯び、政教社も単に法令上の「発行所」の名称としてのみ残ることとなったのである。

第六章 註

- (1) 石川啄木「林中書」、『時代閉塞の現状・食うべき詩』(一九七八年、岩波文庫版)一三頁。
- (2) 明治二十八年五月十五日、二十七日付『日本』。ただし、上中二回で中絶している。「臥薪嘗胆」の時代像については、大濱徹也『明治の墓標』(一九七〇年、秀英出版、のち、一九九〇年、河出文庫)参照。
- (3) 陸奥宗光『蹇蹇録』(一九四一年改版、岩波文庫版)三〇一頁。
- (4) 徳富『蘇峰自伝』三一〇頁。
- (5) 生方敏郎『明治大正見聞史』(一九七八年、中公文庫版)四五頁。
- (6) 三宅『同時代史』第三卷六六頁。
- (7) 槌田満文『明治大正の新語・流行語』(一九八三年、角川書店)一四四頁。
- (8) 日清「戦後経営」について、中村政則は「絶対主義的天皇制の確立」期の始期と位置づけ、①軍備拡張、②殖産興業、③植民地領有、④教育振興を四つの柱とした。「日本社会の帝国主義的編成替の総体」と捉え、国家論のレベルではその「絶対主義的天皇制」のへ国家類型とへ国家形態の矛盾と一致を統一的に把握することを目指している(中村・鈴木正幸「近代天皇制国家の確立」、原秀三郎ほか編『大系日本国家史』(一九七六年、東京大学出版会)所収)。また、石井寛治は「日本支配層が朝鮮・清国をめぐる帝国主義的諸列強の領土分割競争へ参加するためについた諸政策の総体」とし、とくに日本のアジアを軸とした対外政策と国内産業の発

達との関連に重心を置いて考察している（石井「日清戦後経営」、岩波講座『日本歴史』一六近代三（一九七六年、岩波書店）所収）。

- (9) 昭和十一年に行われた座談会「三宅雪嶺博士と「明治・大正・昭和」を語る」(『日本評論』第一〇巻第一一号(一九三六年)所収)では、次のように回想されている。「古島 一番よく売れたのが戦争後——その時二万も売れたかな? 緒方日清戦争ですか。三宅 さう、その頃は儲つた」(同誌一六四頁)。文中の緒方は聞き役のかたちで出席していた緒方竹虎である。実際のところ、明治二十八年『警視庁統計書』によると、この年の年間発行数が六、八六五、三六四部で、一日にしたら二万を少し超えるくらいであった。

- (10) 明治二十八年四月二十六日付三宅宛志賀書簡(三宅家所蔵)。前文は左の通り。
謹啓 過般陸氏より東海堂へ云々の義は、昨日詳細なる計算を送付致置候。然らば若し同堂にて若干之出金をなし、合資体のものと相成り候様の義なれば、別紙御参考ニ供し候間、此れにて政教社在来の注入資本を定め度と存候ニ付、御意見相伺候。勿々拝具

四月

二十六日

志賀生

三宅大兄侍史

ただしこのときは、次の註(11)の書簡などを見ると、東海堂の出金はなかったようである。

- (11) 実際の資金繰りは、明治二十九年七月二十一日付三宅宛志賀書簡(三宅家所蔵)

によると、次のようであつた。

二〇〇円 創業費並二月々不足補充ノ大凡

二五〇円 岡崎銀行へ返却

五八円余 右元金千四百円ノ本年一月ヨリ同六月マデ利子

一〇〇円 恩田氏へ渡ス

五〇円 井川氏へ返却

二〇円 鈴券氏立換へ返却

二〇円 雑

三〇〇円 残額

(14) 「『日本人』の改刊」、第三次『日本人』第一号(一八九五年七月五日)四頁。

「文章即ち事業」という姿勢が当時の言論人に共通の意識であつたことは、山路愛山「頼襄を論ず」(『国民之友』第一七八号(一八九三年)所収)でも明らかである。

(13) せつれい(三宅)「面棚偶語」(三)、第三次『日本人』第七号(一八九五年十

月五日)四一頁。

(14) 第三次『日本人』第二二号(一八九六年五月二十日)巻末広告頁。

(15) 内藤が高橋健三に従つて大阪朝日に移つたのが明治二十七年七月(実際には前々年暮れには大阪に赴いている。前掲(第一章註¹⁰²)千葉『内藤湖南とその時代』二

一〇頁)、同じ年(月日不明)長沢は鈴木券太郎の推薦で山陽新報主筆となつた(

山陽新聞百年史編集委員会編『山陽新聞百年史』(一九七九年、山陽新聞社)六四

頁)。

(16) 例えば、明治二十八年十二月十八日付三宅宛陸羯南書簡には、「日本」の論説起草日割は左之如く、日曜・陸、月曜・三宅、火曜・福本、水曜・陸、木曜・三宅、金曜・福本、土曜・陸と相定め云々」(『陸羯南全集』第一〇巻八七頁)とあり、逆に第三次『日本人』誌上にも陸の署名論説が目立ちはじめ。

(17) 第三次『日本人』第四二号(一八九七年五月五日)巻末広告一〜二頁。

(18) 内藤「畑山呂泣逝く」、第三次『日本人』第六〇号(一八九八年二月五日)四三頁。葬儀当日の弔辞にいう、「君が政教社に入りしより八年、其の編輯を司り、三宅志賀諸先輩を輔翼せる者、惟だ君最も長く最も勤めたり」(同誌四四頁)。

(19) 第三次『日本人』第七〇号(一八九八年七月五日)の奥付から政教社の住所が日本新聞社と同じになる。

(20) 「予告」、第三次『日本人』第八一号(一八九八年十二月二十日)目次頁。

(21) 湖南生「『日本人』改刊第壹百号」、第三次『日本人』第一〇〇号(一八九九年十月五日)三五頁。書簡体のこの文章の冒頭、「雪嶺先生及び香庵、霞山二兄足下」とあることから、当時の政教社の(組織)を知ることができる。

(22) 「社告」、第三次『日本人』第五七号(一八九七年十二月二十日)五〇頁。

(23) 大橋新太郎「太陽の発刊」、『太陽』第一巻第一号(一八九五年一月五日)二二頁。

(24) 前掲(註5)生方『明治大正見聞記』六二頁。

(25) 柳田国男『明治大正史世相篇』(下)(一八九七六年、講談社学術文庫版)一八二

頁。

(26) 松村介石「宇内的日本人」、第三次『日本人』第一号(一八九五年七月五日)二八〜二九頁。

(27) 田岡嶺雲「東洋的新美学を造れよ」、第三次『日本人』第五号(一八九五年九月五日)二六頁。

(28) 無署名(高山樗牛)「東西二文明の衝突」、『太陽』第一卷第一〇号(一八九五年)四五頁。

(29) Donald Keene, *The Sino-Japanese War of 1894-95 and Japanese Culture*, 1971. 金関寿夫訳『日本人の美意識』(一九九〇年、中央公論社)一二八頁。

(30) 「世界主義」の立場を明快に打ち出したのは、明治二十八年初頭に行われた文部大臣西園寺公望の演説であろう。その中で彼は、「近時に於て、著しく日本人の思想界に變動を与へたるは、日本人が自ら世界の国民中に占むる地位につきて、其自信力の確実となりしに在り」(「教育意見」、『教育時論』第三五〇号(一八九五年)一四頁)と言い、さらに「例えば日本人の教育として、日本魂を養ふと云ふことは、必要なることには相違なけれども、之を宗教的に主張し、此のことの教育の外には、他には教育すべきことなきが如くに言ふは、余の好まざる所なり」(一五頁)という所感を述べている。

また、その西園寺らの支援を受けて民友社出身の竹越三又が創刊した雑誌『世界之日本』は、このような立場に共鳴するものといえよう。同誌第二八号(一八九八年)の中で、久津見息忠は「日本主義が保守主義にして、又動もすれば偏僻固陋に

陥り易きは、明なりと云はざるべからず」(三二頁)と「日本主義」を批判し、「日本主義は自負主義なり、世界主義は謙遜主義なり」(三三頁)とも述べている。

(31) 明治二十九年十月十日付桑木巖翼宛高山樗牛書簡、斉藤信策編『樗牛全集』第五卷(一九〇六年、博文館)三四二頁。

(32) 高山「我邦現今の文芸に於ける批評家の本務」、『太陽』第三卷第一号(一八九七年)三九頁。

(33) 同右、四二頁。

(34) 鹿野政直「『太陽』」、『思想』第四五〇号(一九六一年)一四二頁。

(35) 高山「日本主義を賛す」、『太陽』第三卷第一号(一八九七年)三九頁。

ここでいう「日本主義」は、井上哲二郎、木村鷹太郎らによつて明治三十年五月に設立された大日本協会の「日本主義」とはおのずと違いがある。大日本協会の「日本主義」は湯本武比古によれば、「蓋し国家は元来邦土にあらず、又其住民にあらず、況んや又其政府にあらずして、国家は此等形体の間に存する、国人的品性の主義なり。此の主義を称して国体と曰ふ。此の主義、此の国体を措きて、国家は其の他何処にか存する。我が邦土、我が同胞は、依然として我が邦土、我が同胞たるも、然も其の間に、此の主義、此の国体、所謂和魂あらざる時は、則ち日本国家はなきものなり」(「日本主義を主張す」、第三次『日本人』第六二号(一八九八年三月五日)二九頁)というものであった。

(36) 同右四三〜四四頁。

(37) 高山「世界主義と国家主義」、『太陽』第三卷第一六号(一八九七年)四四頁。

(38) (三宅) 「所謂世界主義と所謂国家主義」、第三次『日本人』第四八号(一八九七年八月五日)七〜九頁。この論説は無署名だが、末尾に『真善美日本人』が引かれているので三宅の執筆とみて差し支えなからう。

(39) (40) (41) 同右一〇頁。

(42) 高山「今の論文家」、『樗牛全集』(一九〇五年、博文館)第三卷五八二頁。

(43) 高山「国粹保存主義と日本主義」、『太陽』第四卷第一〇号(一八九八年)三〇〜四〇頁。

(44) 「非国醜保存」、第三次『日本人』第九二号(一八九九年六月五日)一〜二頁。
この論説も無署名だが、序章註 で紹介した八太徳太郎によれば雪嶺の執筆ということになっている。

(45) 幸徳秋水「社会主義と国体」(『六合雑誌』第二六三号(一九〇二年)所収)、
『社会主義神髓』(一九五三年、岩波文庫版)七〇頁。

(46) 前掲(第四章註²⁰)升味『日本政党史論』第二卷二四七頁。

(47) 前掲(註¹²)「『日本人』の改刊」、四頁。

(48) 志賀「初対面録」(一)、第三次『日本人』第三号(一八九五年八月五日)四一頁。

(49) 「愛宕館有志会禁止ノ件」、自明治十九年至同三十一年『公文別録』内務省(国立公文書館所蔵、別一六六)所収。

(50) 前掲、升味『日本政党史論』第二卷二五〇頁。

(51) 「今年と昨年」、第三次『日本人』第一二号(一八九五年十二月二十日)五頁。

(52) 三宅「昔の志士と今の志士」、『立憲改進黨々報』第四四号（一八九五年七月三日）九頁。

(53) やや時期が下るが、高田早苗は『日本人』に寄せた原稿の冒頭で「久方振にて「日本人」へ何か寄稿せよとの度々の蔽命黙し難く云々」（「大学の教育」、第三次『日本人』第九六号（一八九九年八月五日）一二頁）と書いていることなどから推測できよう。

(54) 阿部恒久「松隈内閣下における進歩党の非盲従運動」、『早稲田大学史記要』第二二卷（一八九九年）五五頁参照。

(55) 「社告」、明治二十八年九月二十五日付『新潟新聞』。

(56) 志賀「北来の趣旨」、十月二日付同右。

(57) 「三宅雄次郎氏」、九月二十五日付同右雜報。

(58) 「越佐会の発会式」、十一月二日付同右（新潟県編刊『新潟県史』資料編一五（一九八二年）四二二頁所収）。永木千代治偏『新潟県政党史』（一九三五年、新潟県政党史刊行会）に、このときの宣言書が志賀の起草であったとの記述がある（同書四六七頁）。

(59) 「越佐会の俱会における活動」、十二月十四日付『新潟新聞』（同右『新潟県史』四二二頁所収）。

(60) 前掲、三宅『同時代史』第三卷一〇三〜一〇四頁。

(61) 「新なる年、新なる気力」、第三次『日本人』第一三号（一八九六年一月五日）四頁。

(62) 志賀「在野党合同問題の顛末」、第三次『日本人』第一五号(一八九六年二月五日)四〇頁。

(63) (64) 「進歩党史」、『進歩党報』第一号(一八九七年五月一日)三九〇四〇頁。

(65) 志賀が進歩党内閣実現のために行なっていた活動の一端は、次のような(明治二十九年)六月二十六日付大隈重信宛書簡によつて明らかであろう(早稲田大学図書館特別資料室所蔵、大隈文書B・一七二〇)。

拝啓 向暑之候御起居如何ニ候哉御見舞申上候。 儲小生義預而より吾党にして果して一党を以て内閣を組織する決心なれば、宜しく同志者の極少なる中国(備前、播磨を除く)及び琵琶湖西、馬関海峡東を大に拓開せざるべからずと存じ居り候折柄、犬養、神鞭、陸之三氏と協議一決之上当地に駐在致し、表記の所に居り候間、此段奉申上候。 出発の際は御別れにも不参甚だ失礼仕候。 右御詫旁々申上候。

勿々拝具

六月

二十六日

志賀 重 昂

大隈伯閣下

(66) 「国防の本拠」、第三次『日本人』第五号(一八九五年九月五日)一頁。

(67) 前掲、志賀「在野党合同問題の顛末」三九頁。

(68) 蘇峰生「大合同に関する管見一二」、第三次『日本人』第一六号(一八九六年二

月二十日日)三九頁。

(69) 「中興の人豪と今の在野党の人豪」、第三次『日本人』第一〇号(一八九五年十一月二十日)九頁。

(70) (71) 内藤「思い出話」、『内藤湖南全集』第二卷七四〇頁。

(72) 「各内閣の公言」、第三次『日本人』第二九号(一八九六年十月二十日)八頁。

湖南は自ら筆を執つて、「言論出版集会等の自由に関して、従前政府、毎々之を明言することを避けたり、今乃ち公然其の保障を固からしめんことを明言す、蓋し世人が新内閣の度胸を試さんと欲せる問題は、一に此の數者に存せり、而して此の如く明言するの勇氣あるは、従前当局に未だ見ざりし所なり。其の細目に涉りては、亦之を他日の実行に察せざるべからず、新聞紙の発行停止、果して全廢することを得るか、集会の処分、果して適法の措置を失はざるを得るか、此等實際作用の如何は、今日の昌言を實にすると否と、焉に繋れり、第十議會に提出せらるべき政府の議案に、先ず新聞紙法、集會政社等の改正案を見るを得んことは、吾人が新内閣に期する所なり」(『内藤湖南全集』第六卷一七五頁)という注文をつけた。

(73) 「鈴江日記」二(志賀家所蔵)。「鈴江日記」は、明治二十九年七月三日、長女鈴江が満一歳を迎えたとき、志賀が鈴江に仮託するかたちで書き始めた身辺日記である。しかし、愛児の養育日記ではなく、進歩党幹部としての彼自身の行動を記した政治日記というべきものである。なお、『跡見学園短期大学紀要』第一六集(一九七九年)に、嗣子故富士男氏によるほぼ正確な翻刻が掲載されている。

(74) 肥塚龍「進歩党と松方内閣、自由党と伊藤内閣」、第三次『日本人』第三二号(

一八九六年十二月五日) 一六頁。

(75) 島田三郎「松方内閣の運命」、第三次『日本人』第三三三号(一八九六年十二月二十日) 二一頁。

(76) 「第十議會、曖昧と曖昧」、同右三頁。

(77) (明治二十九年十二月) 二十日付大隈重信宛志賀書簡(早稲田大学図書館特別資料室所蔵、大隈文書B・一七一九)。

(78) 「発行の辞」、『進歩党党報』第一号(一八九七年) 一頁。

(79) 「進歩党々報第一号」、第三次『日本人』第四二号(一八九七年五月五日) 五一頁。

(80) 陸「政界の技術及批評」、前掲(註78)『進歩党党報』第一号 一九頁。

(81) 三宅「与党報主務論職分書」、同右二一頁。

(82) 「勅任参事官と局長」、『国民之友』第三六一号(一八九七年) 一八頁。

(83) 怪庵(香川)「風聞録」、第三次『日本人』第五〇号(一八九七年九月五日) 五六頁。

(84) 志賀「所謂御役所風を一掃蕩すべし」、『進歩党党報』第一一号(一八九七年) 四頁。『国民之友』第三六二号(一八九七年) 所収の「山林局改革」によると、「今や志賀局長就任以来、銳意改革を勵行し、稍面目を一新したり。其結果如何は予め今日よりトすべからずと雖も、兎に角新しき空気を注入し、割拠の弊風を打破したる功は没すべからず」(一八頁)とある。

(85) 三上参次先生談旧速記録(第十回)「明治三十年の世情」、『日本歴史』第四〇

○号（一九八一年）八四頁。のち、三上参次述『明治時代の歴史学界』（一九九一年、吉川弘文館）所収。

(86) 「〔社告〕」、前掲（註83）第三次『日本人』第五〇号一一頁。

(87) 怪庵「風聞録」、第三次『日本人』第五五号（一九九七年十一月二十日）五四頁。

(88) (89) 三宅「再び藩閥と提携する勿れ」、『進歩党党報』第一四号（一九九七年十一月十五日）九〜一〇頁。

(90) (91) 「非藩閥の大決心を起せ」、第三次『日本人』第五四号（一九九七年十一月五日）七〜八頁。

(92) 「人生の両極〔予告〕」、第三次『日本人』第二四号（一九九六年八月五日）八頁。

(93) 「人生の両極」第二、第三次『日本人』第二六号（一九九六年九月五日）七頁。
ここで根拠とされている『易経』は「易有大極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦」（繫辭上伝）であり、この部分は太極から陰陽の兩儀が生じ、陰陽の組合せから四象、八卦が生れたことを述べている。また『老子』からの引用は「有無相生、難易相成、長短相較、高下相傾、音声相和、前後相隨」（第二章）で、万物の相對を示している部分である。

(94) 「社会問題研究会規約」第一条は「本会ノ目的ハ学理ト實際トニ拠リ社会問題ヲ研究スルニ在リ」と定めている。この「学理ト實際」というアプローチは、政教社の言論を準備した「政談と學術」という問題情況と似ている。

- (95) 「一貫の氣風を養成せよ」、第三次『日本人』第五〇号一一頁。
- (96) 「新内閣を窺る」、第三次『日本人』第五九号(一八九八年一月二十日)七頁。
- (97) 明治三十一年六月二十六日付『東京日日新聞』による。
- (98) 憲政党結成については、大津淳一郎『大日本憲政史』第四卷(一九二七年、宝文館)七八九頁以下及び前掲(第四章註79)『河野磐州伝』下卷四八四頁以下参照。
- (99) 「憲政党内閣」、第三次『日本人』第七〇号(一八九八年七月五日)一一頁。
- (100) 三宅「哲学者とは何ぞや(哲学会講演筆記)」、第三次『日本人』第六六号(一八九八年五月五日)二〇頁。
- (101) 以下創立大会の様子については、明治三十一年十一月五日付『東京日日新聞』の記事による。大学史編纂委員会編『東亜同文書館大学七十年史』(一九八二年、滬友会)四一頁以下参照。
- (102) 内藤「東方問題に関する団体を合一すべし」、第三次『日本人』第一一六号(一九〇〇年六月五日)一六頁。
- (103) 明治三十一年十一月三十日付『東京日日新聞』による。他の六名は、武富時敏、神鞭知常、箕浦勝人、高田早苗、野沢武之助、望月小太郎であった。
- (104) 「甚矣属僚社会の競争」(第三次『日本人』第八九号(一八九九年四月二十日)参照。
- (105) 志賀「軍備緊縮なる故」、第三次『日本人』第九五号(一八九九年七月二十日)一五頁。
- (106) 「進歩黨員の台湾視察」、明治三十二年十月二十日付『日本』。

志賀の渡航前の同年八月末から十一月末にかけて、内藤も中国各地を旅行している。その記録は「游清紀程」「游清瑣談」と題して『万朝報』紙上に断続的に掲載され、翌三十三年に博文館から刊行された『燕山楚水』中に収められた。それを見ると、内藤の訪問地は大都市と名所旧跡であり、士大夫と筆談を交わすだけで、民衆の生活、地域の産業などへは視線が向いていない。この点で次に紹介する志賀の福建内陸視察とは興味深い対比を示している。思うにこの視線の違いは、志賀には以前から実業論的な発想があつたのに対し、内藤においてはむしろ文化論的な関心が卓越していたことに由来するであろう。

(107) (108) (109) 矧川生(志賀)「対岸日抄(一)」、明治三十二年十一月八日付『日本』。

(110) 同右(九)、十二月二十八日付同紙。

(111) 同右(一一)、十二月三十一日付同紙。

(112) 同右(八)、十二月二十五日付同紙。

(113) 同右(一〇)、十二月三十日付同紙。

(114) 同右(一三)、明治三十三年一月六日付同紙。

(115) 升味前掲書のほか、山本四郎『初期政友会の研究』(一九七五年、清文堂出版)等参照。

(116) 後藤『我郷土の産める世界的先覚者志賀重昂先生』四七―四九頁。明治三十三年

九月二十九日付『東京日日新聞』の伝えるところによれば、政友会の機関新聞発行計画は西園寺公望を主幹に、志賀、朝比奈知泉、蘇峰などまで巻き込んで進められ

たという。

(117) (118) 明治三十三年八月十九日付『東京日日新聞』掲載。

(119) 明治三十三年八月三十日の条、近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』第三卷（一九六八年、鹿島研究所出版会）二九一頁。当該期の近衛については、坂井雄吉「近衛篤磨日記と明治三十年代の対外硬派」（『国家学会雑誌』第八三卷第三・四号「一九七〇年」所収）参照。

(120) 国民同盟会残務委員編『国民同盟会始末』（一九〇二年、政文社）九頁。

(121) 同右一七頁。

(122) 山本良吉「理想より見たる我新聞紙」、第三次『日本人』第一一九号（一九〇〇年七月二十日）一八頁。

終章 政教社の思想的境位

十九世紀最後の年でもある明治三十三年は、国内政治にも国際関係にも新しい秩序が生まれた年と記憶されている。政友会の成立と北清事変の勃発がそれを象徴していたといえるだろう。政教社についていえば、設立以来の「同志」的な結集の意味と雑誌『日本人』の性格が徐々に変化して、ついにこの年、当初から一貫して中心メンバーだった二人のうち志賀は政界に進出し、『日本人』が残った三宅の「学校」と見なされるようになったとき、「誓約」に基づく思想集団としての特質は完全に失われたのである。それは「初期政教社」の終焉とみることができよう。この時点で明治二十一年の設立からすでに十二年が経っていた。書生社会の中に「同志」組織の原核と「国粹主義」思想の培養基が形成され始めたときから数えれば、二十年近い歳月が流れたことになる。

本稿は、序章で掲げた三つの課題に即して、この間における政教社「国粹主義」の全体像を歴史的に解明することを目指したものであるが、最後に、明治三十三年という時点における終焉の意味を問うことを通して、改めてその思想的境位というものを見定めておく必要がある。この前後の時期には、『日本人』以外の雑誌にも消長がみられ、よく知られているように徳富蘇峰の『国民之友』も明治三十一年八月に廃刊となっている⁽¹⁾。『日本人』そして『国民之友』という、明治二十年代を代表する雑誌ジャーナリズムの変質あるいは廃刊という事実は、中、長期的な時代思潮の変化を告げる意味がある。それらの意味するところをどのように読み取ることができるのか、明治三十四年(一九〇一)第三次『日本人』が一五〇号を迎えたときの次のような所感を手がかりとするならば、つづく四点にまとめられることができると思う。

其後に至り政界の腐敗は少なくとも世をして政治熱を減ぜしむる重なる一の原因と

なり、加ふるに日清戦役後は経済界の不振否塞につれて、国民は自家生活に干係なき政治論に快を買ふの心的余裕なく、却て之れを無用の空文虚辞の如くに見做すに至り、世を挙げて実利主義の潮流に掉せりき。而して学窓に浮世を隔つる青年もまた時勢に伴ふて変化せざる能はず。下宿屋楼上、焼芋を嚙りて疎技大葉の政治論に四隣を驚かせたる書生氣質は杳として今尋ぬべからず。(中略)而して政治雑誌の萎靡として振はずなれる、三四年來殊に彰著なる現象に属すと言ふべし。是の間にありて『日本人』は装釘の巧なく、体裁の美なく、時好に投ずる用意なく、流行を趁ふの趣向なく、丈夫昂々の意気、自ら野人の野態に安んじ敢て雅人の雅、粹人の粹を慕ふて脂粉の気、淫冶の風を学ぶを屑しとせず、恃む所は只剛骨一片操守を変せず、本領を守り、頂天立地独立独歩眼中王侯の威なく、匹夫の卑なく、富貴の権なく、書生の賤なく、侃々としてその信ずる所を言ひ諤々として其の思ふ所を論じて憚らざる是れのみ。斯の如くにして百五十号を重ね未だ江湖の捨つる所とならざる、是れ焉んぞ大方の俠骨義氣に由らざるなからんや。(一)

ここに描かれた自画像は、「学窓に浮世を隔つる青年もまた時勢に伴ふて変化せざる能はず」、すなわち「書生氣質」の変化に政教社自身の変貌を重ねて見ている。つまり、政教社設立の基盤であった書生社会の解体が、政教社の思想集団としての特質に終焉をもたらした第一の理由として考えられる。当時一般に、学術の専門化に伴う書生社会の制度化が進み、その一方で一部書生の墮落が喧伝されるという状況が生まれていた。

それと密接に関連して第二に、政教社の言論がその出発点において、政談と学術のいづれにも属さない曖昧な領域を立脚地としていたのに対し、明治二十年代を通して両者の分

化が進み、『日本人』のような雑誌メディアの存立する余地がしだいに狭くなってきたということが挙げられよう。とくに政友会の成立は藩閥と政党の癒着を決定的とし、反藩閥という批判の有効性が失われることよって、国内政治に関する従来までの言論姿勢は抜本的な改編を迫られるに至った。加えるに、アジア地域において北清事変にみる新しい国際関係が生まれつつあったとき、複雑に絡み合った国内問題と対外問題を同時に視野に入れることのできる立論が、以後の言論においては必要条件とされたのである。

この結果、明治三十年代になると急速に広まった思想界全体の「不振」感をもって、時代思潮の変化を告げる第三の指標と考えることができる。それは「近時精神界の事は総て不振の境に沈淪せりと為すべし」⁽³⁾ という意識で、内藤湖南によれば「戦役以後、宜しく沈酔すべくして、而して未だ沈酔せざる者、已に三四年。嗚呼大沈酔はそれ將さに来らんとするか」⁽⁴⁾ と予測され、幸徳秋水には「我日本国民の腐敗墮落は、今や殆ど其極に達す」⁽⁵⁾ とみえるものであった。このような「不振」感の渦に埋もれて、政教社の言論もしだいに生産力を失っていったとみることができる。

ところが、「不振」感の一方で「新思想」は確実に到来していた。すなわち、日清戦後に我が国の思想界に訪れた変動が政教社の「国粹主義」の思想内容に及ぼした影響を四番目に数えることができよう。政教社は、「世界主義」と「国家主義」の対立という新しい思想解読の枠組みの中で、自己の「国粹主義」を活性化していくことができなかつた。「新思想」とされたのは「帝国主義」「社会主義」「個人主義」等であったが、思考方法の基盤を進化論的発想に置く「国粹主義」ではそれらに対応していくのは難しかったのである⁽⁶⁾。

「初期政教社」の終焉を明治三十三年をもつて画することの意味は、以上述べた四点から捉えることができるであろう。設立当初の政教社が有していた言論集団としての思想性は、このような歴史状況の中に解消してしまつたと考えられる。

本稿の考察で明らかにできたことは、この間政教社が、同人であつた湖南の言を借りれば「現実勢力」に対抗する「思潮勢力」として、一貫して在野の言論という立場に留まつて活発な思想活動を展開したということである。その意味で政教社は、「明治国家体制」の確立期における政治史の重要なファクターの一つと位置づけることができる。それは、やはり湖南によれば、「国粹主義の思潮は、一たび発してより十年、自由党を問はず、改進黨を問はず、悉く其の渦中に没却して、端を改め緒に触れて、強力なる抗衡を藩閥政府に試み、能く其をして刀折れ矢尽きて、胄を民間党に脱するに至らしめたり」(7)と評価しうるものであつた。したがつて本稿は、政教社の全体像を、「国粹主義」が辿つたそのような過程に即して、とくに思想集団としての存在形態と思想内容との相互連関に重点をおいて検討したもの、ということができる。

全体像の解明とはいつても、「初期政教社」に関するあらゆる事項を網羅的に取り上げたわけではない。設立当初は「宗教、教育、美術、政治、生産」などさまざまな分野に向つてなされた政教社の言論活動は、しだいに「政治」に限定され、最終的には雪嶺個人の意見表出の場に局限されるに至つた。結果的にいえば、本稿では以上のような過程で三宅と志賀が示した思想的葛藤の軌跡を二人の内面に入り込んで捉えることに務め、それを政教社「国粹主義」の“幅”として措定することとなつた。二人の描いた軌跡は、常に知的緊張を孕みながら雁行し、この間も変貌を続ける政教社は、確立されつつある「明治国家

体制」へ向けてカウンター・ヴァリュエーを供給しつづけることにより、思想集団としての存立の意義を保持したのである。

しかし、「政教社の研究」としては当然何らかの言及があつて然るべき問題群のうち、仏教改革運動、俳句・短歌革新運動、明治漢詩文学等、さまざまな伝統文化の再生を促す風潮に火を点じた役割については触れることができなかった。また、同時代における地域的な国粹主義運動の個別的解明も必要であろう。これらの点については、個人研究の一層の深化を図ることとともに、改めて具体的な問題を設定をする中で考えていきたい。

もつとも、伝統文化の再生に根拠を与える役割を担った政教社の「国粹主義」ではあつたが、その淵源は我が国の伝統思想の中に見いだせるものではなく、むしろ専門の学術を通して西洋文明と出会うことによつて“発見”されたものであつた。「同志」たちは、「伝統」とも「西洋」とも——「伝統」と「西洋」を適宜使い分けて明治国家の確立を図る時代の指導理念とも——対立しながら、「国粹」の理論化を軸に自前の「文明」を創造するといふ思想的課題を背負つていたのである。この点からいえば、明治政府に対する批判的姿勢の堅持と独自の文明観の創出とは、政教社の思想活動において一体のものであつたといえる。そのような文明観は、進化論的発想に依拠して構成され、我が国に適する文明化の方向を改良的、調和的に選択する価値基準として、西洋文明を相対化しながら世界人類の進歩に資していこうとする思想の枠組みであつた。政教社による「国粹主義」の主張は、開国以来の物心両面にわたる「西洋の衝撃」を克服するために行われたさまざまな思想的営為の中で、そのための思考方法を最もドラスティックに提示し、最も広範な影響を同時代と後世とに及ぼした思想運動であつたと評価できる。主として日清戦争を経る中で

「それら「国粹」と「西洋」の間にあつた緊張意識がしだいに消滅し、かつ新たに視野に入つた「亜細亜」への転回を梃子に「国粹」の活性化をなしえなかつたとき、「国粹主義」の創造意欲もまた減退を余儀なくされたといえよう。

- (1) 『国民之友』の廃刊に対して『日本人』は意外と冷淡だったようにみえる。すなわち、香川怪庵が「風聞録」の中で廃刊の事実を伝えるほかに（第三次『日本人』第七三号（一八九八年八月二十日）三四頁）、「田口鼎軒曰く、「国民の友」が廃刊したので、「日本人」は丁度上杉謙信死した時の、信玄の感があるでしやうと。風聞子曰く、否敢て当らず。我れ不敏、未だ曾て謙信を視居らざりし也」（同第七四号〔同年九月五日〕三七〜三八頁）というエピソードを紹介するだけである。
- (2) 「『日本人』の百五十号」、第三次『日本人』第一五〇号（一九〇一年十一月五日）五七頁。
- (3) 「睡眠時代」、第三次『日本人』第六八号（一八九八年六月五日）一〇頁。
- (4) 内藤「沈酔時期来らんとす」、第三次『日本人』第九二号（一八九九年六月五日）一五頁。
- (5) 幸徳秋水「革命乎亡国乎」、第三次『日本人』第一〇三号（一八九九年十一月二十日）二〇頁。
- (6) 三宅の執筆と推測できる「如何に新思想と旧思想を覩ん」（第三次『日本人』第一一四号、一九〇〇年五月五日所収）では、「新思想」に対する次のような態度が示されている。

謂ゆる進歩、謂ゆる保守、謂ゆる新思想、謂ゆる旧思想、皆な敢て差別に拘はるを要せず。ただ国家社会の発達より觀て之に裨益あるもの則ち良しとすべ

く、之に裨益なきものの渾べて衰滅に就くとすべし。豈に独り進歩と新思想とのみを言はん、又た独り保守と旧思想とのみを謂はんや。要は之を按排整齊して全局の発達を期するにあるのみ。(同誌五頁)

右にいう「全局」とは「国家社会」のことで、ここでも三宅の社会進化論に起源をもつ国家有機体説の存在が認められるが、「新思想」はそのような枠組みには納まりきれないものだったといえよう。

(7) 内藤「現実勢力と思潮勢力」、明治三十一年十一月五日付『万朝報』。

關
連
年
表

小引

一、本稿で扱った「初期政教社」の範囲に属する事項を、政教社に関連するもの（上段）、その他のもの（下段）に分けて掲げる。採録に当っては、書生社会、言論社会周辺のことを中心に選別する。

一、事項は各年ごとに月日順に並べ、日付の判らないものはその月の最後にまとめる。

一、当該期間の雑誌『日本人』及びその後継誌はすべて掲げ、それぞれの巻頭論説名を挙げる。

明治一五年（一八八二）

この年三宅、杉江、棚橋、井上は東京大学文学部学生、加藤は東京大学予備門生徒、志賀、菊池、今は札幌農学校生徒、辰巳は予備門教諭、松下は予備門属、島地は仏教改革者として運動中であった。前年来、東京大学と札幌農学校には修交社と北振社という団体があつて、学生・生徒間で通信を交す。棚橋と志賀も加わる。

一月

四日 軍人勅諭

八日 札幌教会建堂

〓四月

主権論争

三月

一日 『時事新報』創刊

八日 札幌農学校、農商務省へ所管換え。一〇月二八日付「卒業生の誓約書解約の旨報告」が提出される

一四日 伊藤博文、憲法調査に出発

一六日 立憲改進黨、一八日 立憲帝政党結成

二九日 渡辺安積ら、万八楼にて学術演説会

一四日 フェノロサ、「美術真説」講演

四月

五月

一六日 志賀、自由党本多新を訪ねる

六月

三日 集会条例改正公布

二一、二二日 『東京日々新聞』社説「政談卜学

術ノ区別」

七月

東京大学文学部古典講習科開業式

七月〓八月

壬午事変

八月二六日 棚橋、三宅にフェノロサのノートを貸す

一〇月二八日 東京大学学位授与式。フェノロサ、「学生の政治関与を諫める演説」

加藤弘之『人権新説』

十一月一〇日 棚橋『人権新説』閲覧

福島事件

一二月

一九日 佐田介石没

内藤、秋田師範入学のための受験勉強をはじめ

明治一六年（一八八三）

二月一日 棚橋、井上と孔孟学を論ず

三月 二〇日 高田事件

四月 内藤、秋田師範入学。岸田（畑山）、後藤らと知る

二一日 書生親睦会開催

東京大学ドイツ学採用

モース『動物進化論』

七月 二日 『官報』創刊

夏 志賀、福島事件の法廷傍聴

八月一三日 棚橋、井上、父と進化論を論ず

九月二八日 三宅、東京大学准判任御用掛。編纂所で日本仏教史研究

鹿鳴館開館式

一〇月二七日 東京大学学位授与式、三宅文学士。学生・生徒の大量退学事件発生

有賀長雄『社会学』卷一

一一月 三宅、「寄高僧諸師書」

志賀、支笏川の水源地調査

一二月 六日 棚橋、杉浦と面会、哲学の事を論ず

明治一七年（一八八四）

一月一九日 棚橋、三宅と雑談、哲学会規則議定

二九日 スペンサー著、乗竹幸太郎訳『社会学之原理』

二六日 哲学会発会（学習院）、辰巳、三宅、棚橋、井上ら参加

二月一日 哲学会で島地演説、棚橋、井上書記

四月 一三日 書生親睦会

五月 群馬事件

六月 清仏戦争勃発

七月 九日 札幌農学校卒業式、志賀、菊池農学士。志賀、卒業演説

東京大学本郷へ移転

九月二五日 志賀、長野県中学校出仕

加波山事件、一〇月 秩父事件、名古屋事件

三宅、秩父事件取材

一〇月二五日 東京大学学位授与式、棚橋、杉江文学士

二九日 自由党解党

志賀、戸隠山登山報告書提出

一二月 四日 甲申事変

明治一八年（一八八五）

一月二七日 内藤、哲学への関心を父あてに書き送る

二七日 第一回官約ハワイ移民

三月 一六日 福沢諭吉「脱亜論」

四月一八日 日清天津条約調印

巨文島事件

六月 九日 清仏天津条約調印

徳富蘇峰『第一九世紀日本ノ青年及其教育』

坪内逍遙『当世書生氣質』第一冊

七月 四日 今、札幌農学校卒業、農学士となる 八月一四日 長野県中学校出仕

杉浦重剛、増島六一郎、松下丈吉ら東京英語学校設立

内藤、畑山たち、秋田師範学校卒業 内藤は九月綴子小学校赴任

『女学雑誌』創刊

九月二二日 志賀、長野県中学校辞職願提出、二四日 依願免本職

一〇月 志賀、海軍筑波艦で対馬へ

三二日 東京大学 学位授与式、井上文学士。新学士総代として謝辞を述べる

一二月 大阪事件

二二日 内閣制度創始、第一次伊藤内閣成立。森有礼、文部大臣就任

明治一九年〔一八八六〕

二月 志賀、筑波艦に便乗して南洋航海出発

三月 一日 帝国大学令公布

一 二日 三宅、文部省雇申付らる（編輯局）

四月 一〇日 師範学校令、中学校令、小学校令公布

二 八日 帝国大学詰襟制服採用

二 九日 東京大学予備門を第一高等中学校と改称

五月二五日 志賀「南洋巡航日記」（『時事新報』）

六月 三宅『基督教小史』『日本仏教史』

七月 井上『哲学一夕話』

九月か一〇月頃 杉浦、宮崎ら一八名、乾坤社同盟結成

一〇月 二 四日 全国有志懇親会席上、星亨「大同団結」の演説

ノルマントン号事件

一 一月 井上『真理金針』

明治二〇年〔一八八七〕

一月 八日か 井上、哲学書院設立

一 七日 皇后、婦人に洋装を勧告する思召書下付

志賀、東京地学協会会員

二月 五日 哲学会『哲学雑誌』創刊

徳富、民友社設立、一 五日 『国民之友』創刊

二月 杉浦『日本教育原論』

四月 二〇日 首相官邸仮装舞踏会、二 六日 井上外相邸行幸

辰巳『斯氏哲学要義』 西村茂樹『日本道徳論』 徳富『新日本之青年』

志賀『南洋時事』

五月二〇日 日本赤十字社設立、島地黙雷常議員に

学位令公布、実際の発令は翌二十一年五月七日

六月

一日 伊藤博文ら、憲法草案の検討開始
『日本大家論集』創刊

七月

二日 井上、哲学館設立願提出
三日 谷、条約改正反対の意見書提出、二六日 辞任

二三日 文官試験試補及見習規則

『学』『以良都女』創刊

八月二五日

杉浦ら『出版月評』創刊

八月

内藤上京、九月 「綴子良友諸君ニ留別ス」

九月一六日

哲学館開校式

一七日 井上外相、伊藤宮相（兼任）辞任

一〇月 三日

丁亥俱樂部設立、杉浦、松下参加。三大事件建白運動へ

二二日 志賀、「如何ニシテ日本国ヲシテ日本国タラシム可キヤ」（『国民之友』

一〇）

三宅、井上ほか『哲学汎論』

バックル著、辰巳訳『文明要論』

一一月一八日

志賀、『国民之友』特別寄書家

『少年園』創刊

一二月 八日

乾坤社会、杉浦の「備忘録」に初出

以後 二〇年 12/21

二一年 1/27 3/9 4/9 4/28 5/28 6/15 8/2 10/1 11/8

二二年 2/8 4/11 5/8 8/4

二三年 5/13 8/22

一四日 志賀、芳野丸にて鳥島渡航

二五日 保安条例公布、二九日 新聞紙条例改正公布

明治二十一年（一八八八）

一月

四日 時事通信社創立

三〇日 政教雑誌会

内藤、『万報一覽』編集

鳥尾小弥太 日本国教大道社設立

二月

一日 大隈重信外相就任

二八日 新誌会

井上『仏教活論序論』

敬業社改革

三月一三日 政教社届出、(住所)京橋区宗十郎町一番地、二一日付『官報』掲載

一四日 政教社会

四月 三日 政教社の祝宴

『日本人』一 志賀「『日本人』の上途を餞す」

九日 『東京電報』創刊

一八日 『日本人』二 志賀「『日本人』が懐抱する処の旨を告白す」

三宅「薩長の前途を占ふ」

三〇日 黒田内閣成立

五月 三日 『日本人』三 志賀「日本前途の国是は「国粹保存旨義」に撰定せざる可からず」

八日 東京洋紙会社開業

一八日 『日本人』四 志賀「日本国裡の事大党」

一八日 徳富宛志賀書簡(国粹主義を保守とみなす誤解につき弁明)

六月 三日 『日本人』五 志賀「日本国裡の理想的事大党」

一〇日 田辺龍子『藪の鶯』

一七日 辰巳、三宅、棚橋、島地「日本旨義」の演説会(於麻布の高等普通学校)

一八日 『日本人』六 志賀「日本前途の二大党派」

〽翌年六月 井上洋行

七月 三日 『日本人』七 志賀「大和民族の潜勢力」

四日 杉浦、文部省参事官兼専門学務局次長に任官

一〇日 『東京朝日新聞』創刊

一八日 『日本人』八 志賀「日本生産略(緒論)」

東京英語学校校舍新築

『文』創刊

八月 後藤象二郎、信越・東北地方遊説

八月 三日 『日本人』九 「輿論は何にが故に高島炭礦の惨状を冷眼視するや」

一八日 『日本人』一〇 「藩閥政治」

九月 三日 『日本人』一一 「余輩同志は何如なる主義を執りてか運動すべき」

七日 高島炭坑坑夫虐待問題で松岡好夫、犬養毅に決闘申込み。三宅、志賀介添

八日 徳富蘇峰、文学会結成。志賀参加

一八日 『日本人』一二 「誣言の流行」

一〇月 三日 『日本人』一三 「日本をして無民の国土たらしむ勿れ」

一八日 『日本人』一四 「政治家の徳義を養成せよ」

馬場辰猪 The Political Condition in Japan

二九日 スエズ運河条約

一二月 三日 『日本人』一五 「天長節を賀し日本人に望て所懐を述べ」

一八日 『日本人』一六 菊池「国粹主義の本拠如何」

二六日 各国別条約改正交渉開始

鳥尾小弥太、保守党中正派立憲党大意発表

一二月 三日 『日本人』一七 今「日本産業の前途」

一八日 『日本人』一八 松下「国会及び弾劾権」

乾坤社の面々しばしば谷干城と新聞の事に付相談

二八日 名称は『日本』と決まる

翌年一月 後藤、東海・北陸地方遊説

明治二十二年（一八八九）

一月 三日 『日本人』一九 「明治二十二年の新航路」

五日 志賀、谷干城を訪問

七日 『日本人』盛業祝宴

一八日 『日本人』二〇 「新皇居御移転を祝して」

三一日 三宅『論理学』

大内青巒、辰巳小次郎ら尊皇奉仏大同団活動開始

- 二月 三日 『日本人』二一 「官吏の演説」
 一〇日 『風俗面報』創刊
 一日 大日本帝国憲法発布
 森文相暗殺される
 新聞『日本』創刊、祝宴
 一五日 「日本」発刊祝宴
 一八日 『日本人』二二 「日本国民は明治二十二年一月を以て生れたり」
 三宅「大日本帝国憲法を評す」
 三日 『日本人』二三、発行停止 「伊藤伯に演説の注意を望む」
 志賀「日本民族独立の方針」
 一九日 大同団結派、火曜会発足。三宅、後藤入閣反対演説
 二二日 後藤、逋信大臣として入閣
 二六日 大同派、弁解委員派遣。松下、近畿へ出発
 三月 志賀、三宅、井上角五郎、綾井武夫、福島県須賀川町の河野広中出獄慰問
 招待会に出向き、上京を促す
 二日 「日本」祝宴
 三〇日 大同派主義綱領起草委員会で政社派と非政社派が
 対立
 四月
 五月 七日 『日本人』二四 「発行解停の感」
 一〇日 大同倶楽部、大同協和会結成
 一五日 『筆の力』創刊、三宅「我国古代の人民の世界開
 關に関する意想」
 一八日 『日本人』二五 「余輩国粹主義を唱道する豈に偶然ならんや」
 三一日、六月二日 『日本』に大隈条約改正案掲載
 六月 三日 『日本人』二六 「西比利亜の鉄道は何れの日にか成功を期せん」
 一八日 『日本人』二七 「条約改正將に成らんとす大隈伯に頌辭を呈せんか」
 三日 『日本人』二八 「条約改正に就て大方の注意を促す」
 七日 杉浦ら谷を訪ね、条約改正断固反対申入れ
 一八日 『日本人』二九 「条約改正、秘密と輿論」
 二七日 今、谷干城を訪ね五〇〇円受領

八月 三日 『日本人』三〇 「条約改正に就いて」

三宅、杉江「小生儀為海水浴旅行致候」(広告)

一五日 大同派非改正委員会に日本・日本人社友から五名参加
日本倶楽部

一八日 『日本人』三一 「擬外人上日本皇帝書」

二五、二七日 条約改正反対派全国連合大演説会

辰巳「日本帝国は独立国なり」、杉江「終に吾が国を如何せん」

二六日 東京開市三百年祭

二七日 今、谷を訪ね五〇〇円受取

三一日 杉浦、宮崎、谷を訪ね二、五〇〇円受領

志賀『地理学講義』

九月 三日 『日本人』三二、発行停止 「条約改正に就き大隈伯に望む」

七日 『日本』発行停止

九日 政教社移転

三〇日 松下、日本倶楽部の事で谷を訪ねる

井上哲次郎『内地雑居論』

井上『日本政教論』

一〇月

一九日 棚橋一郎、郁文館設立。十一月三日 郁文館開業式

二四日 黒田首相辞表提出

二七日 『日本人』三三 「解停の辞」

三〇日 日本倶楽部解散、十一月三日 解散祝宴

ハクスレー著『進化原論』

『国華』創刊

十一月 三日 『日本人』三四 「明宮殿下御肖像」

立太子式

八日 三宅『哲学涓滴』

一八日 『日本人』三五 「支那人の内地雑居を論ず」

一二月 三日 『日本人』三六 「失錯を悔ひて同志の士に告ぐ」

七日 好友会組織、三宅、志賀ら参加

一八日 『日本人』三七 「内閣の模様について」

二四日 第一次山県内閣成立

谷千城の帰郷に志賀同行

明治二十三年（一九〇）

一月 三日 『日本人』三八 「明治二十三年元旦の歌」

一八日 『日本人』三九 今「本年を視察して世人に望む」

二一日 自由党結党式

二月 一日 三宅主筆『江湖新聞』創刊準備号、一一日 創刊

東京文學院開院

『国民新聞』創刊

三日 『日本人』四〇 「北海道の離宮と開墾」

今「北海道移住論」

一八日 『日本人』四一 辰巳「適任の国会議員を選挙せよ」

三月 三日 『日本人』四二 「教員の政談演説と衆議院議員被選挙権」

一八日 『日本人』四三 「亜細亜経綸策」

四月 三日 『日本人』四四 「亜細亜経綸策（続稿）」

一三日 哲学館、日曜講義開始

一八日 『日本人』四五 「亜細亜経綸策」

杉浦・宮崎・今、日本新聞社退社

五月 三日 『日本人』四六 「日本国経綸小言」

一八日 『日本人』四七 棚橋「貧民の救済其策如何」

二八日 『江湖新聞』発行停止 三宅は六月中に退社

六月 三日 『日本人』四八 中原「議員選挙の心得を論じて選挙人諸君に告ぐ」

一八日 『日本人』四九 棚橋「政党内閣の組織其れ何れの日をか期せん」

七月 一三日 第一回総選挙

杉浦 当選、辰巳 落選

一日 東京英語学校、杉浦の主宰に

三日 『日本人』五〇 井上「我邦宗教社会にありて当路事を執る人の参考迄に」

六日 哲学研究会結成、井上・副会長

一八日 『日本人』五一 加賀「衆議院議員諸氏の上途を錢す」

フェノロサ帰国

八月 三日 『日本人』五二 杉浦「衆議院議長候補者は宜く在官の履歴を有せざるものを択むべし」

一八日 『日本人』五三 棚橋「衆議院の勢力を墜す勿れ」

二五日 立憲自由党結成

九月 三日 『日本人』五四 辰巳「帝国議会の顧問員」

一八日 『日本人』五五 志賀「亜細亜に於ける仏蘭西」

内藤、「三河新聞」主筆として赴く

一〇月 三日 『日本人』五六 中原「学令は帝国議会に附すべし」

七日 岡倉天心、東京美術学校長就任

一八日 『日本人』五七 辰巳「国会議員の苦楽」

三〇日 教育勅語下賜

十一月 三日 『日本人』五八 「天長節」

二五日 『国会』創刊

二五日 『日本人』五九・週刊化 「『日本人』の革新」

二九日 第一議會開会

井上、地方巡回開始。政教社との関係しだいに薄れる

一二月 二日 『日本人』六〇 「亜細亜に於ける日本と魯西亜（上）」

九日 『日本人』六一 「亜細亜に於ける日本と魯西亜（下）」

一六日 『日本人』六二 「内閣は取て代り得べきか」

雪嶺翁「伊藤春畝を送る」

二三日 『日本人』六三 「大政治家の経綸あるか」

三〇日 『日本人』六四 「衆議院議員にして政府並に会社より賄賂を受け志操を

変じて人民を売るもの多し」

内藤、東京に戻り『日本人』記者となる

明治二四年（一八九一）

一月 六日 『日本人』六五 「新年に臨んで日本人の地位を論ず」

九日 内村鑑三「不敬」事件

一三日 『日本人』六六 「権略家と新聞雑誌」

二〇日 『日本人』六七 「再び満州問題を論ず」

二七日 『日本人』六八・発行停止「衆議院の豪傑奚ぞ軍人の心を収攬せざる」

二月 二四日 土佐派、立憲自由党脱党 三月二日 予算案可決

二七日 三宅、陸ら醜業者の公権利剝脱に関する請願書を衆議院へ提出

三月 三日 杉浦、衆議院議員辞職

三宅『真善美日本人』

五日 『国会』拡張広告、志賀客員、社友に井上、棚橋、松下、今、島地、杉浦

二四日 『日本人』六九 「帝国議会と「日本人」」

三一日 『日本人』七〇 「条約改正実行の時機正に熟す」

四月 七日 『日本人』七一・発行停止「兵備の拡張を欲せば大に軍人を讓責すべし」

「朝鮮の存亡と日本」

九日 福富孝季自殺

汎ドイツ連盟結成

五月 六日 第一次松方内閣成立

七日 三宅、尚武学校開校に助力

一日 大津事件

二六日 『日本人』七二 「国難を機として異主義者を擠陋する鄙劣無耻漢」

三〇日 三宅『偽悪醜日本人』

三宅、『国会』入社

三一日 ロシア、シベリア鉄道着工

この頃 「東方問題」

六月 二日 『日本人』七三・発行停止「大勢を達観すと謂ふ妄語」

二九日 『亜細亜』創刊 「発刊の辞」

陸『近時政論考』

稻垣満次郎『東方策』第一編

七月 六日 『亜細亜』二 「進歩党とは何ぞ、保守党とは何ぞ、在野政党の大醇なるものは宜しく聯合せざるべからず」

七日 東邦協会設立。陸、杉浦、志賀、三宅、杉江ら評議員

一日 清国艦隊、横浜来航

一三日 『亜細亜』三 「長直路奥」

二〇日 『亜細亜』四 「所謂黒幕なる者」

二七日 『亜細亜』五 「帝国大学の学生」

二九日 私学大連盟結成、辰巳・中原・棚橋参加

八月 三日 『亜細亜』六 「大学出身の官吏」

一〇日 『亜細亜』七 「北見国猿間湖」

一七日 『亜細亜』八 「特命全権公使」

二四日 『亜細亜』九 「武臣と財欲」

三一日 『亜細亜』一〇 「帝国大学と新博士」

穂積八束「民法出でて忠孝亡ぶ」

九月 七日 『亜細亜』一一 「千島」。「拡大乎哉」欄開始

三宅「我觀緒言」

一四日 『亜細亜』一二 「一たび追懐せよ」

一八日 三宅南洋航海送別会

二〇日 三宅、海軍練習艦比叡で南洋航海へ 一月二日 オーストラリア着

二一日 『亜細亜』一三 「政治上の新陳代謝」

二八日 『亜細亜』一四 「経済的奨励法」

一〇月 五日 『亜細亜』一五 「北海道殖民政策」

一二日 『亜細亜』一六 「内外論」

一九日 『亜細亜』一七 「東邦問題はれ好餌のみ」

二六日 『亜細亜』一八 「第二議会に対する余輩の大希望、政府党並に民間党の

警省留心を促がす」

二八日 濃尾地震発生

一一月 二日 『亜細亜』一九 「中等学校論」

九日 『亜細亜』二〇 「美術の保護振興」

一〇日 長沢説、米国スタンフォード大学留学

一六日 『亜細亜』二一 「自由改進黨の聯合」
二三日 『亜細亜』二二 「政海の觀象」

『大日本』創刊

二六日 第二議會開會 一二月二五日 解散

三〇日 『亜細亜』二三 「島帝國の中原」

井上円了『哲学一朝話』第一編

井上哲次郎「教育と宗教の衝突」

一二月 七日 『亜細亜』二四 「議院外の委員」

九日 三宅宛志賀書簡（政教社の様子） 二八日 同上（同上）

一四日 『亜細亜』二五 「台閣諸公に勇退を促がす」

二一日 『亜細亜』二六 「予算案に対する余輩の企望」

二二日 樺山海相「蛮勇演説」

二八日 『亜細亜』二七 「嗚呼明治二十四年の歳晚哉」

この年 井上、妖怪研究会結成

明治二五年（一八九二）

一月 四日 『亜細亜』二八 「新年に臨みて日本人の脳力肉体を解明す」

一一日 『亜細亜』二九 「薩長の末路と勢力の蓄積」

一八日 『亜細亜』三〇 「今の政府は取りて代り得べきか」

二五日 『亜細亜』三一 「現政府の餘命救ふを得べきか」

久米「神道は祭天の古俗」事件

二月 一日 『亜細亜』三二 「亜細亜旨義とは何んぞ」 挿画登場

八日 『亜細亜』三三 「強大なる内閣」

一五日 第二回臨時総選挙

一五日 『亜細亜』三四 「不平社会」

二二日 『亜細亜』三五 「六万金東都の百万家を購ふ」

二八日 『亜細亜』三六「発行停止」内閣に反対する者は国賊を以て目すべきか」

二七日 今外三郎没

四月 九日 神田大火。政教社、熊田活版所、敬業社、東京英語学校焼失
一〇日 三宅帰国
二八日 『臨淵言行録』

二三日 条約改正研究会発会
二八日 畑山、『亜細亜』の記事で禁錮九〇日
五月 二日 『亜細亜』三七 「言論の自由と国患隠諱」
六日 第三議會開会

九日 『亜細亜』三八 「官吏と代議士とに啓迪す」
一六日 『亜細亜』三九 「朝野人士意見の撞着」
二三日 『亜細亜』四〇 「政府自から敗を取るか」
三〇日 『亜細亜』四一 「伯爵大隈重信氏と西郷隆盛氏」
六月 六日 『亜細亜』四二 「伯爵後藤象二郎氏に教ふ」
一二日 内地雜居講究会、第一回大会

一三日 『亜細亜』四三 「小崎利準氏は政府の大忠臣たる能はざる乎」
二〇日 『亜細亜』四四 「官員風と議員風」
二二日 国民協會成立
二七日 『亜細亜』四五 「五人の品藻」
七月 四日 『亜細亜』四六 「薩長附自由党改進黨」
一日 『亜細亜』四七 「武人の政治干渉」
一八日 『亜細亜』四八 「奸物」

二〇日 東京英語学校、尋常中学校へ変更の届出、校名は日本中学校
二五日 『亜細亜』四九 「加藤弘之、渡辺洪基、井上毅」
八月 一日 『亜細亜』五〇 「俠客、博徒」
八日 第二次伊藤内閣成立
八日 『亜細亜』五一 「武人の虚喝何か有らん」
一五日 『亜細亜』五二 「今回の内閣」
二二日 『亜細亜』五三 「大学総長板垣伯」
二九日 『亜細亜』五四 「吾軒主人「全国収税長の會議に望む」
三宅「我観」一則

九月 五日 『亜細亜』五五 「在香港豊島捨松「清国征途指針」

- 一二月
- 一二日 『亜細亜』五六 「人間の弱点」
 三宅宛畑山書簡（『我觀小景』印刷前に内藤潤色）
- 一九日 『亜細亜』五七 「英雄、君子」
- 二六日 『亜細亜』五八 「好問題」
- 一〇月 三日 『亜細亜』五九 「小人」
- 一〇日 『亜細亜』六〇 「新聞と著者」
- 一三日 三宅『我觀小景』
- 一七日 『亜細亜』六一 「伊藤伯の虚位」、表紙からトンボの絵が消える
- 二四日 『亜細亜』六二 「滔々たる平凡」
- 三一日 『亜細亜』六三 「慷慨の感念」
- 三宅、田辺龍子と結婚
- 一一月 一日 『万朝報』創刊
- 七日 『亜細亜』六四 「大隈伯政治上の職分」
- 一三日 三宅宛陸書簡（『日本』への執筆依頼）
- 一四日 『亜細亜』六五 「演劇的政治家」
- 一八日 畑山刑期終了酒宴
- 二一日 『亜細亜』六六 「偽道德の病癡子」
- 二八日 『亜細亜』六七 「現内閣と後藤某」
- 二九日 第四議會開会
- 三〇日 軍艦千島沈没“千島艦事件”
- 一日 正岡子規、日本新聞社入社
- 一二月 五日 『亜細亜』六八 「自由党を難ず」
- 一二日 『亜細亜』六九 「大学教授の学力」
- 一九日 『亜細亜』七〇 「加藤弘之氏の新著「強者の権利」に係る誤謬」
- 二〇日 『立憲改進黨々報』創刊
- 二六日 『亜細亜』七一 「明治二十五年の歳晚」
 千島義会、千島渡航

明治二六年（一八九三）

- 一月 八日 三宅、新聞紙法案に関する演説会で「妄想」演説
一七日 ハワイ、米国の保護領化（ハワイ革命）
内藤、政教社を去る
- 二月 一日 『亜細亜』二・一 「和親か破碎か」、社屋移転
一五日 『亜細亜』二・二 「官吏的門閥の排除」
- 三月 一日 殖民協会発会。三宅、志賀、杉浦ら評議員
二〇日 郡司大尉一行、千島渡航
一四日 出版法公布
- 四月 一五日 『亜細亜』二・三 「苟安の害毒寝く頭はる」、表紙に三宅と志賀を明記
三宅「智識討究」
後藤祐助（忘言）政教社入社
- 五月 一日 『亜細亜』二・四 「世の所謂探険家なる者」
一五日 『亜細亜』二・五 「頭官の妄想」、発行停止
北村透谷 「内部生命論」
中原、山形県尋常中学校校長へ
政教社同人、内閣諸公及び平沼専蔵に頌徳表を上る
- 六月 二五日 二九日 福島中佐、シベリア単騎横断。帰国
三宅、志賀、新聞『国会』から退く
松下、久留米明善中学校長へ。政教社と日本中学校の關係が事実上終息
- 七月 一日 『亜細亜』二・六 「人物的改革」
八日 第二次伊藤内閣、閣議で条約改正方針決定
一五日 『亜細亜』二・七 「伊藤博文なる者」
二〇日 同人一行、湘南へ避暑旅行
二七日 「私立学校撲滅問題」解決
- 八月 一日 『亜細亜』二・八 「官吏の恐慌と避暑地」
一五日 『亜細亜』二・九 「自由党と現内閣」
長沢『ヤンキー』
樽井藤吉『大東合邦論』
- 九月 一日 『亜細亜』二・一〇 「大隈と伊藤」

- 一五日 『亜細亜』二・一一 「虚偽以て位階を進む」
- 一〇月 一日 大日本協会発会式。志賀、三宅出席
- 九日 『日本人』二・一 「条約改正と自治改進黨自由国権の諸党」
- 三宅『王陽明』
- 二〇日 『日本人』二・二 「伊藤と次期議會」
- 二四日 三宅宛畑山書簡（後藤、明治新聞へ）
- 二六日 『二六新報』創刊
- 一月 三日 『日本人』二・三 「天長節」
- 一八日 『日本人』二・四 「現内閣の威信」
- 二八日 第五議會開會
- 軍艦浪速、ハワイ派遣
- 二月 一日 『亜細亜』三・一 「仏蘭西と暹羅」
- 一〇日 殖民協會第一回總會、志賀参加
- 一八日 『日本人』二・五 「聯立内閣の組織」
- 三〇日 衆議院解散
- 棚橋『万国歴史』

明治二七年（一八九四）

- 一月 三日 『日本人』二・六 「紛擾一掃」
- 七日 三宅宛井上書簡（『王陽明』哲学書院にて発行いたしたく）
- 一八日 『日本人』二・七 「閣員心算ノ齟齬」
- 二五日 三宅「外尊内卑」（『日本』）
- 二月 三日 『日本人』二・八 「日本の本領を失ふ者は西人を尊崇す」
- 一一日 『小日本』創刊
- 一八日 『日本人』二・九 「現内閣員の自負心」
- 三宅宛志賀書簡（政教社資金の事）
- 二四日 志賀、松野鐵千代と結婚式

『二十六世紀』創刊

- 三月 一日 第三回臨時総選挙

二日 井上、東洋哲学会結成
三日 『日本人』二・一〇 「元勳内閣は責任内閣を作るの職分あり」
一八日 『日本人』二・一一 「伊藤陸奥の外交政略」

二七日 全国同志新聞記者連合会合
二八日 金玉均暗殺

四月 三日 『日本人』二・一二 「開国退讓と鎖国進取」

一八日 『日本人』二・一三 「藩閥、超然、政党」

二二日 金玉均事件演説会。志賀、三宅演説

二二日 同盟新聞記者ら対外硬入派連合懇親会。志賀、三宅出席
『馬鹿趙高』（政教社）

五月 三日 『日本人』二・一四 「自由党、板垣伯、河野氏」

八日 全国同志懇親会。志賀、「決議事項」読み上げ

一三日 全国同志新聞記者大懇親会。志賀、三宅、浅水、長沢、畑山、杉浦出席
一五日 第六議会開会

六月 二日 衆議院解散
五日 大本営設置

三〇日 中央政社結成。志賀常議員、後藤祐助幹事

七月 二日 志賀、河島醇、柏田盛文、伊藤首相と面談

一〇日 『亜細亜』三・二 「東亜保安策」

一八日 『日本人』二・一五 「日清の戦は遂に避く可らず」

二〇日 同盟新聞解散

三宅、朝鮮視察旅行

内藤、高橋健三とともに『大阪朝日新聞』へ

八月 一日 日清両国宣戦布告。福沢、渋沢ら報国会結成

日 清 戦 争

一一日 内村鑑三 Justification for the Korean War

二五日 内藤「所謂日本の天職」（『二十六世紀』）

一日 第四回臨時総選挙

九月

一〇月 一八日 第七議會開会
一五日 ドレフユス事件

二二日 『亜細亜』三・三 「征清の利害」「帝国の拡大」

二五日 『日本人』二・一六 「戦争と議會」

二七日 志賀『日本風景論』

一二月二四日 第八議會 開会

二五日 『日本人』二・一七 「支那分割論」

大日本海外教育会結成。陸、三宅ら評議員

徳富『大日本膨張論』

この年 長沢は『山陽新報』へ

明治二八年(一八九五)

一月 一三日 辰巳、東京航海学校開校式演説

二〇日 ロシア、極東艦隊の増強決定

西園寺文相、「世界主義」演説

『太陽』『帝国文学』創刊

二月 三日 『日本人』二・一八 「今日誰か戦争を欲し誰か平和を欲するや」

宮崎、片瀬に転居

四月 一七日 下関講和条約 五月一〇日 批准公布

二三日 三國干涉 五月一〇日 還付の詔勅

二六日 三宅宛志賀書簡(『日本人』創業費の件)

五月一五日 三宅「嘗胆臥薪」上(『日本』) 二七日 同下

六月 二日 志賀、工藤行幹と自由党の河野広中を訪ねる

一五日 志賀、三宅、政友同志会参加

二八日 志賀、末広重恭らと同志会結成

七月 三日 『立憲改進黨々報』四四 誌面一新

三宅「昔の志士と今の志士」

五日 『日本人』三・一 「『日本人』の改刊」

- 二〇日 『日本人』三・二 「所謂三国同盟今如何」
- 八月 五日 『日本人』三・三 「台湾開拓の第一手段」
三宅「面棚偶語」
- 二〇日 『日本人』三・四 「代議士の萎縮」
二七日 松方蔵相辞任
棚橋『東洋歴史』
- 八月
- 九月 五日 『日本人』三・五 「国防の本據」
二〇日 『日本人』三・六 「人心の萎靡」
志賀、東京専門学校講師
- 一〇月～一二月 志賀、『新潟新聞』主筆として赴く
三宅、『東北日報』（新潟）客員
- 二日 志賀「北來の趣旨」（『新潟新聞』）
五日 『日本人』三・七 「明治政府の外交史」
八日 閔妃殺害事件
- 二〇日 『日本人』三・八 「天定て人に勝つ」
一日 越佐会発会式
- 一二月
- 五日 『日本人』三・九 「朝鮮事変」
一五日 『東洋經濟新報』創刊
- 二〇日 『日本人』三・一〇 「在朝の私党」
二二日 第二次伊藤内閣、自由党と提携
- 一二月 五日 『日本人』三・一一 「私心を挾て自ら小にす」
二〇日 『日本人』三・一二 「昨年と今年」
志賀「越閔論」（『新潟新聞』） 帰京
- 二八日 三宅宛陸書簡（『日本』論説起草日割の件）
二八日 第九議會開会

明治二十九年（一八九六）

- 一月 五日 『日本人』三・一三 「本年の政界」
三宅「大学沿革考」
- 二〇日 『日本人』三・一四 「節、無節、変節」
- 二五日 志賀、島地ら、三浦梧楼の帰京を出迎え
- 二八日 新政党组织事務所開設。志賀、新政党组织委員
- 二月 五日 『日本人』三・一五 「今の在野党合同問題と維新中業の二大問題」
- 二〇日 『日本人』三・一六 蘇峰初出 「在野党の群豪如何」
- 三月 一日 進歩党結成。志賀、常議員兼幹事
- 五日 『日本人』三・一七 「進歩党と自由党」
- 二〇日 『日本人』三・一八 「帝国議会の効能」
- 二八日 登録税法、酒造税法等公布
- 四月 五日 『日本人』三・一九 「根本的改革」
- 八日 移民保護法公布
- 九日、志賀、栃木県内遊説 一三日、日本海沿岸地方遊説
- 一四日 板垣退助、内相就任
- 二〇日 『日本人』三・二〇 「超然的政党内閣」
- 五日 『日本人』三・二一 「政治家の自堕落」
- 二〇日 『日本人』三・二二 「権臣自衛の手段」
- 二五日 三宅、志賀述『断雲流水』
- 三日 ロシア、東清鉄道敷設権獲得
- 五月 五日 『日本人』三・二三・發行停止「空言と凶器」
- 一五日 三陸大津波
- 七月 三日 志賀、「鈴江日記」を書きはじめる
『世界之日本』創刊
- 八月 五日 『日本人』三・二四 「自然の制裁」
- 二〇日 『日本人』三・二五 （三宅）「人生の両極」
- 二一日 内藤、田口郁子と結婚
- 九月 五日 『日本人』三・二六 「刻下の変動を何と観るべき」

一八日 第二次松方内閣成立、内閣書記官長高橋健三
二〇日 『日本人』三・二七 「新内閣は何の状ぞ」

二二日 大隈、外相就任

一〇月 五日 『日本人』三・二八 「藩閥打破に於ける急進漸進派」

一二日 松方内閣、「政綱」発表。高橋、陸、内藤起草

一九日 第一回農商工高等会議開催

二〇日 『日本人』三・二九 「内閣の危機進歩党の危機自由党の危機」

二九日 三宅、志賀述『小絃集』

一二月 一日 進歩党大会、松方内閣との提携決議

五日 『日本人』三・三〇 「自由党の改革」

一四日 二十六世紀事件

一五日 「近来の失策と云べし」(近衛日記)

二〇日 『日本人』三・三一 「逸話一則」

『江湖文学』創刊

一二月 五日 『日本人』三・三二 「美名の下に醜奴あり」

一三日 哲学館、郁文館焼失

二〇日 『日本人』三・三三 「第十議會、曖昧と曖昧」

犬養宛志賀書簡(新聞紙条例改正、大隈の覚悟を促す)

二五日 第一〇議會開会

二九日 三宅、志賀、陸、高橋健三の饗応に招かれる

内藤、大阪朝日退社

明治三〇年(一八九七)

一月 三日 志賀宅で五百メートル会

五日 『日本人』三・三四 「明治三十年」

七日 井上円了、『妖怪学講義』を献納

二〇日 『日本人』三・三五 「吊詩」

二五日 志賀、香川、三宅、四季新雑誌発兌の事を相談

内藤『近世文学史論』

- 七月 五日 『日本人』三・三六 「輓詩」
二〇日 『日本人』三・三七 「大隈伯と陸奥伯」
二三日 志賀、新聞紙法案に付相談のため近衛篤磨と面会
三月 一日 志賀、近衛、高橋、神鞭知常らと民法第二条修正の事に付集会、討議
五日 『日本人』三・三八 「藩閥打破の狭義広義」
二〇日 『日本人』三・三九 「群小政治家の淘汰」
二四日 新聞紙条例改正公布
四月 三日 社会問題研究会結成、三宅、陸評議員
五日 『日本人』三・四〇 「議會閉会後の内閣」
一〇日 各省に勅任参事官設置
一一日 郁文館落成式
一二日 森林法公布
二〇日 『日本人』三・四一 「新登庸の利」
内藤、『台湾日報』主筆
五月 一日 『進歩党々報』創刊、主務志賀。三宅「与党報主務論職分書」
五日 『日本人』三・四二 「文部大臣、文部次官、専門学務局長、普通学務局長」
二〇日 『日本人』三・四三 「文部に関して松方首相に勧告す」
大日本協会、『日本主義』創刊
六月 三日 杉浦、高等教育會議委員
五日 『日本人』三・四四 「内閣統一とは閣員苟合の謂に非ず」
一〇日 古社寺保存法公布
『実業之日本』創刊
一六日 ハワイ併合条約
二〇日 『日本人』三・四五 「薩長再び連合せば則ち之を奈何すべき」
高山樗牛、『太陽』編集担当
七月 五日 『日本人』三・四六 「大政治家たるべき資格」
一七日 哲学館、小石川に移転
二〇日 『日本人』三・四七 「嗚呼是れ藩閥を助長する者」

- 八月 五日 『日本人』三・四八 「所謂軍備拡張と所謂軍備縮小」
 二〇日 『日本人』三・四九 「軍人を厚遇すべし、阿諛すべからず」
 二六日 志賀、農商務省山林局長に任官 一月二日 免官
 九月 五日 『日本人』三・五〇 「薩摩内閣の利弊」 「一貫の氣風を養成すべし」
 二〇日 『日本人』三・五一 「元勳内閣、人材内閣、権衡内閣」
 杉浦、国学院学監となる
 一〇月 一日 近衛篤磨、貴族院議長就任
 金本位制実施

- 五日 『日本人』三・五二 「繁文縟礼と簡易直截」
 二〇日 『日本人』三・五三 「前松方内閣と現松方内閣」
 三一日 進歩党常議員会、第二次松方内閣との提携破棄。志賀出席
 一月 五日 『日本人』三・五四 「英雄人を欺くべきや否や」
 「非藩閥の大決心を起せ」
 一五日 三宅「再び藩閥と提携する勿れ」(『進歩党党報』一四)
 一八日 三宅『冒頓』
 二〇日 『日本人』三・五五 「二分か、三分か、将た四分五裂か」
 一二月 五日 『日本人』三・五六 「藩閥打破は挙国一致に必要なり」
 一五日 ロシア艦隊、旅順港入港
 二〇日 『日本人』三・五七 「現松方内閣は前松方内閣より藩閥的なり」
 二四日 第一一議會開会

明治三一年(一八九八)

- 一月 五日 『日本人』三・五八 「明治三十一年」
 一二日 第三次伊藤内閣成立
 二〇日 『日本人』三・五九 「明治政府の難関、藩閥非藩閥の過渡期」
 二一日 志賀、北海道の近状に付内々相談のため近衛篤磨と面会
 二三日 畑山芳三没

- 二月 五日 『日本人』三・六〇 「国権拡張の二面、殺伐的拡張と平和的拡張」
- 二〇日 『日本人』三・六一 「軍備拡張、外形の壮大と内質の整備」
- 三月 五日 『日本人』三・六二 「現内閣は如何にして倒れるべきか」
- 一五日 第五回臨時総選挙
- 二〇日 『日本人』三・六三 「官吏任用の弊習、政党の関連と私党の関連」
- 四月 五日 『日本人』三・六四 「臨時総選挙の結果」
- 二〇日 『日本人』三・六五 「軍備拡張と外交問題」
- 五月 五日 『日本人』三・六六 「第十二議会」
- 三宅「哲学者とは何ぞや」
- 一九日 第一二議会開会
- 二〇日 『日本人』三・六七 「東亜と南洋」
- 内藤、『万朝報』入社
- 六月 五日 『日本人』三・六八 「政党の首領に要する資格」
- 二〇日 『日本人』三・六九 「第十二議会の解散」
- 二二日 憲政党結成。志賀選挙委員
- 三〇日 第一次大隈内閣成立
- 七月 五日 『日本人』三・七〇 「憲政党の結成」
- 政教社事務所が神田区雉子町二番地日本新聞社二階に移転（同右奥付）
- 一三日 志賀、外務省勅任参事官 十一月一日 参与官就任
- 二〇日 『日本人』三・七一 「第二維新を何と観るべき」
- 二二日 高橋健三没
- 八月 五日 『日本人』三・七二 「施設は時を責ぶ、時なる故、時なる故」
- 一〇日 第六回臨時総選挙
- 『国民之友』終刊
- 二〇日 『日本人』三・七三 「露独仏と英米」
- 二一日 尾崎文相「共和演説」
- 長沢、『東京朝日』入社
- 杉浦、高等教育会議副議長
- 九月 五日 『日本人』三・七四 「支那を如何にすべきや」
- 二〇日 『日本人』三・七五 「殖民問題は何の状ぞ」

大隈邸にて海外教育会集会。三宅、陸出席

二一日 戊戌政変

三〇日 東亜会員、戊戌政変に際する会員の保護を決議。陸、三宅参加

一〇月 五日 『日本人』三・七六 「対外論の二標準、時勢と公道」

一五日 岡倉天心、日本美術院創立

二〇日 『日本人』三・七七 「女性の君主を論ず」

一〇月 二九日 憲政党結成

一二月 二日 東亜同文会創立大会。三宅、池辺三山らとともに「方針」を修正

三日 憲政本党結成。志賀政務調査委員

五日 『日本人』三・七八 「貴族院の現内閣に対する態度」

第二次山県内閣成立

一二日 社会学研究会発会、三宅出席

二〇日 『日本人』三・七九 「藩閥内閣の再興」

一二月 三日 第一三議會開会

五日 『日本人』三・八〇 「現山県首相と前山県首相」

二〇日 『日本人』三・八一 「政黨員須らく自ら修養すべし」

明治三十二年（一八九九）

一月 五日 『日本人』三・八二 「英雄論」

『中央公論』創刊

二〇日 『日本人』三・八三 「王政と幕政とを論じ幕政復古の傾向を難す」

志賀『内外地理学講義』

二月 五日 『日本人』三・八四 「先取の利を弁じて海上領有に及ぶ」

二〇日 『日本人』三・八五 「第十三議會を送り併せて政黨員を規す」

三月 四日 著作権法公布

東亜同文会大会

五日 『日本人』三・八六 「見下の憲政に対する失望及び希望」

一二日 内藤、火災に遭う

二〇日 『日本人』三・八七 「賄賂万能の現況を論じ政治家の功名に及ぶ」
二八日 文官任用令改正

義和団蜂起

四月 五日 『日本人』三・八八 「軍隊的経営よりも寧ろ清韓に雑居すべし」
二〇日 『日本人』三・八九 「藩閥党及び憲政両党の将に出でんとする所」
五月 五日 『日本人』三・九〇 「現代流行の立憲専制比較觀に就て」
二〇日 『日本人』三・九一 「藩閥政府の功罪を叙し現内閣の罪に及ぶ」
六月 五日 『日本人』三・九二 (三宅) 「非国醜保存」
二〇日 『日本人』三・九三 「政党の不振を何と觀るべき」
七月 五日 『日本人』三・九四 「國務大臣辭職後の行動」
一七日 内地雑居実施の初日

二〇日 『日本人』三・九五 「キツプリングの帝國主義」
八月 五日 『日本人』三・九六 「官立大学卒業生の分布」
二〇日 『日本人』三・九七 「元勳諸氏に老後の善行を勤む」
九月 五日 『日本人』三・九八 「政府の鞏固を欲して政弊黙過する勿れ」
二〇日 『日本人』三・九九 「國民一致国力全張の妨害物」
内藤、中国旅行 一二月

一〇月 五日 『日本人』三・一〇〇 「内国に於ける雜誌の変遷」
湖南生 「『日本人』改刊第一百号」

一二日 ボーア戦争はじまる

二〇日 『日本人』三・一〇一 「内国に於ける新聞紙の変遷」
一一月 五日 『日本人』三・一〇二 「聖誕佳節を賀し士風の作興を議す」
八日 志賀「対岸日抄(一)」(『日本』)
二〇日 『日本人』三・一〇三 「第十四議會を予察す」
二二日 第一四議會開会

二四日 長沢説没

志賀、中国福建省方面調査旅行出発

一二月 五日 『日本人』三・一〇四 「トランスヴァールの運命」
二〇日 『日本人』三・一〇五 「勢家託言の変遷、勤王、国家」

東邦協会評議會、三宅出席

明治三十三年（一九〇〇）

一月 五日 『日本人』三・一〇六「『新世紀第一年』人兒の志を論ず」

二〇日 『日本人』三・一〇七「藩閥的觀念を滅殺する二要素」

二八日 社会主義協会発足

丁酉倫理会開催

二月 五日 『日本人』三・一〇八「政変を期待せず唯だ自ら奮へ」

二〇日 『日本人』三・一〇九「現世界の偉男兒ローズの思想」

三月 五日 『日本人』三・一一〇「国庫を頼まず独自経営せよ」

一〇日 治安警察法公布

二〇日 『日本人』三・一一一「文明主義の紀国屋文左衛門」

四月 五日 『日本人』三・一一二「暮春に春服して詠ずべし」

二〇日 『日本人』三・一一三「ビスマルクとグラッドストーン附藤と隈」

五月 五日 『日本人』三・一一四「如何に新思想と旧思想を觀ん」

二〇日 『日本人』三・一一五「如何なるを是れ風流とする」

六月 五日 『日本人』三・一一六「政党の振ふと振はざると」

一八日 東邦協会評議員会。志賀、三宅出席

二〇日 『日本人』三・一一七「旅行の範圍及び其の種類」

二二日 北清事変

内藤『燕山楚水』

七月 五日 『日本人』三・一一八「自由主義の聞こえざる所以」

二〇日 『日本人』三・一一九「北清変乱は何様に進行すべき」

『新人』創刊

内藤、『大阪朝日新聞』再入社

八月 五日 『日本人』三・一二〇「紛々たり帝国主義の解釈」

一八日 志賀、「脱党理由書」発表

二〇日 『日本人』三・一二一「北清事変に促進せられし問題」

三〇日 幸徳秋水「自由党を祭る文」

九月 五日 『日本人』三・一二二「支那保全は元と何の為めか」

内藤、東邦問題に付近衛篤磨と面会

- 一一日 国民同盟会、発起準備会。三宅出席、発起人となる
- 一五日 立憲政友会発会式、『政友』創刊。志賀、会報局入り
- 一八日 政友会総務会、国民同盟会非難決議
- 二〇日 『日本人』三、一二三「朋友を論ず」
- 二四日 国民同盟会発起会
- 三〇日 『聖書之研究』創刊
- 一〇月 五日 『日本人』三、一二四「如今若何か自由を看ん」
- 一九日 第四次伊藤内閣成立
- 二〇日 『日本人』三、一二五「所謂東洋西洋両文明の接触」
- 二一月 五日 『日本人』三、一二六「第四伊藤内閣の成立を査す」
- 二〇日 『日本人』三、一二七「巴里博覧会と我が日本」
- 二一月 五日 『日本人』三、一二八「ハイカラ及び新智識」
- 二〇日 『日本人』三、一二九「瘠我慢の説」を紹介す
- 二二日 第一五議會開会

史料及び参考文献一覧

小引

一、本稿の註記に掲げた史料及び参考文献並びにその他の参考文献を、次のような区分にしたがって配列する。

史料

- 1 個人文書、学校史料等
 - (1) 個人文書
 - a 政教社メンバー
 - b その他
 - (2) 学校史料
 - (3) 公文書等
- 2 雑誌、新聞等
 - (1) 雑誌
 - (2) 新聞
- 3 著作等刊行物
 - (1) 政教社メンバー
 - (2) その他
 - (3) 全集、資料等

参考文献

- 1 政教社とメンバーに関するもの
- 2 その他

一、参考文献の配列は、著者名五十音、刊行順とする。

1 個人文書、学校史料等

(1) 個人文書

a 政教社メンバー

- ・三宅雄二郎（三宅家所蔵）
- ・志賀重昂（志賀家所蔵、「日記」は北海道大学附属図書館北方資料室所蔵）
- ・棚橋一郎（棚橋家・郁文館学園所蔵）
- ・井上円了（東洋大学附属図書館所蔵「井上円了文庫」）
- ・杉浦重剛（称好塾・日本学園資料室所蔵）
- ・宮崎道正（宮崎家所蔵）
- ・内藤虎次郎（関西大学附属図書館所蔵「内藤湖南・伯健文庫」、鹿角市先人顕彰館所蔵）

b その他

- ・佐々友房文書・品川弥二郎文書・河野広中文書・阪谷芳郎文書（国立国会図書館憲政資料室所蔵）
- ・憲政資料室所蔵）
- ・加藤弘之文書（東京大学百年史資料室保管）
- ・佐藤昌介文書（北海道大学附属図書館北方資料室所蔵）
- ・内田漣文書（北海道開拓記念館所蔵）
- ・大隈文書（早稲田大学図書館特別資料室所蔵）
- ・坪内逍遙文書（早稲田大学演劇博物館所蔵）

(2) 学校史料

- ・ 東京英語学校、日本中学校（日本学園資料室所蔵）
- ・ 郁文館（郁文館学園所蔵）
- ・ 哲学館（東洋大学附属図書館、東洋大学井上円了記念学術センター所蔵）
- ・ 東京大学（東京大学百年史資料室保管）
- ・ 札幌農学校（北海道大学附属図書館北方資料室所蔵）
- ・ 秋田師範学校（秋田大学附属図書館所蔵）

(3) 公文書等

- ・ 公文録・公文別録・記録材料・上書建白書・官報・帝国議会議事録・法令全書
- ・ 公文類聚・叙勲等裁可書（国立公文書館所蔵）
- ・ 帝国練習艦隊関係雑纂（外交史料館所蔵）
- ・ 公文備考（防衛研究所図書館所蔵）
- ・ 各種学校書類、願届届録（東京都公文書館所蔵）
- ・ 公文編冊、県立学校職員履歴（長野県総務部広報文書課所蔵、県立長野図書館保管）

2 雑誌、新聞等

(1) 雑誌

- ・ 日本人、亜細亜（日本図書センター複製版）
- ・ 日本及日本人・文・学・学芸志林・東洋学芸雑誌・風俗画報・太陽（筑波大学附属図書館所蔵）
- ・ 国民之友（明治文献複製版）
- ・ 明六雑誌（立体社複製版）
- ・ 少年世界・哲学雑誌・世界之日本・教育時論・明治評論（国立国会図書館所蔵）

- ・少年園（不二出版複製版）
- ・芸術叢誌（東京大学附属総合図書館所蔵）
- ・立憲改進黨党報・進歩党党報（柏書房複製版）
- ・東邦協會報告・殖民協會報告・条約改正研究会報告・内地雜居講究會報告
（内閣文庫所蔵）

(2) 新聞

- ・東京日々新聞・明治日報・国民新聞・京華日報・新潟新聞・政論・江湖新聞
- ・東洋新報・東京横浜毎日新聞（東京大学明治新聞雜誌文庫所蔵）
- ・国会・日本・郵便報知新聞・時事新報（国立国会図書館所蔵）
- ・自由新聞（三一書房複製版）
- ・朝野新聞（ペリかん社複製版）
- ・函館新聞（函館市立図書館所蔵）

3 著作等刊行物

(1) 政教社メンバー

- ・「政教社回顧座談会」（『日本及日本人』第三五九号（一九三八年）所収）
- ・明治文学全集三七『政教社文学集』（一九八〇年、筑摩書房）
- ・三宅雄二郎『同時代史』六卷（一九四九～五四年、岩波書店）
 - 『大学今昔譚』（一九四六年、我觀社）
 - 『自分を語る』（一九五〇年、朝日新聞社）
 - 『日本仏教史』（一八八六年、集成社）
 - 『基督教小史』（同右）
- 『論理学』（一八八九年、東京専門学校講義録、哲学館講義録）
（一八九〇年、文学社）
- 『哲学涓滴』（一八八九年、文海堂）

- 『真善美日本人』（一八九一年、政教社）
- 『偽悪醜日本人』（同右）
- 『我觀小景』（一八九二年、政教社）
- 『王陽明』（一八九三年、政教社）
- 『雪嶺漫筆』（一九〇三年、吉川弘文館）
- 『小泡十種』（一九〇六年、丙午出版社）
- 「故文学博士中村正直君に就て」（全国教育者大集会編『帝国六大教育家』（一九〇七年、博文館）所収）
- 『宇宙』（一九〇九年、政教社）
- 『明治思想小史』（一九一三年、丙午出版社）
- 『想痕』（一九一五年、至誠堂）
- 森田義郎編『壇上より国民へ』（一九一五年、金尾文淵堂）
- 『明治哲学界の回顧（附記）』（岩波講座哲学一八（一九三三年、岩波書店）所収）
- 「内藤湖南君のこと」（『書芸』第四卷第九号（一九三四年）所収）
- 座談会「三宅雪嶺博士と「明治・大正・昭和」を語る」（『日本評論』第一〇卷第一号（一九三六年）所収）
- ※ 三宅の著書については、山野博士「三宅雪嶺著作目録」（関西大学『法学論集』第三六卷第一号（一九八六年）所収）が最も詳しい。
- ※ 完全ではないが、論文まで含めた著作目録としては、昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第五八卷（一九八六年、昭和女子大学近代文化研究所）所収のものがある。
- 現代日本文学全集第五編『三宅雪嶺集』（一九三一年、改造社）
- 『三宅雪嶺選集』（一九四二年、潮文閣）
- 明治文学全集三三『三宅雪嶺集』（一九六七年、筑摩書房）
- 日本の名著三七『陸羯南 三宅雪嶺』（一九七一年、中央公論社）
- 近代日本思想大系五『三宅雪嶺集』（一九七五年、筑摩書房）

・志賀重昂『地理学講義』（一八八九年、敬業社）

『日本風景論』（一八九四年、政教社、一九七九年、飯塚書房複製版）

『内外地理学講義』（一八九九年、谷島書店）
志賀富士男編刊『志賀重昂全集』全八卷（一九二八～一九二九年）

・井上円了『仏教活論序論』（一八八七年、哲学書院）

哲学館講義録『哲学史講義』（出版事情不明、三宅との共著）
座談会「井上円了博士を語る」（『思想と文学』第二卷第三冊（一九三六年）所収）

※ 井上の全著作と参考文献を対象とした『井上円了関係文献年表』（一九八七年、東洋大学井上円了研究会第三部会）参照のこと。

『井上円了選集』全三卷（一九八七年、東洋大学）

・松下文吉 本莊季彦編『松下雲処遺稿』（一九三二年、松下元）

・棚橋一郎訳『英和双解字典』（一八八五年、丸善商社）

『英和字海』（一八八七年、文学社）

・島地黙雷 二葉憲香・福嶋寛隆編『島地黙雷全集』全五卷（一九七三～一九七八年、本願寺出版部） 別冊に解題、著作索引等

・杉浦重剛 猪狩史山・中野刀水『杉浦重剛座談録』（一九四一年、岩波文庫版）

明治教育史研究会編『杉浦重剛全集』全六卷（一九八二～一九八三年 思文閣出版）

回想杉浦重剛編輯委員会編『回想杉浦重剛』（一九八四年、杉浦重剛先生顕彰会）

・内藤虎次郎 神田喜一郎・内藤乾吉編『内藤湖南全集』全一四卷（一九六九～一

九七六年、筑摩書房） 第一四卷に著作目録

『日本文化史研究』（一九七六年、講談社学術文庫版）

(2) その他(著者名五十音順)

- ・秋山銀二郎『安楽之郷国』(一八八九年、有隣堂)
- ・有賀長雄『国家学』(一八八九年、牧野書店)
- 『近時外交史』(一八九八年、東京専門学校出版部)
- ・石川啄木『時代閉塞の現状・食うべき詩』(一九七八年、岩波文庫版)
- ・市島謙吉『回顧録』(一九四一年、中央公論社)
- ・井上哲次郎『内地雜居論』(一八八九年、哲学書院)
- 『明治哲学界の回顧』(岩波講座哲学一〇(一九三二年、岩波書店)所収)
- ・生方敏郎『明治大正見聞史』(一九七八年、中公文庫版)
- ・大島正健『クラーク先生とその弟子たち』(一九七三年、国書刊行会版)
- ・加藤弘之『人權新説』(一八八二年、谷山楼)
- 『弘之自伝』(一九一三年、私家版)
- ・橋南漁郎『大学学生遡源』(一九一〇年、日報社)
- ・幸徳秋水『社会主義神髓』(一九五三年、岩波文庫版)
- ・古島一雄『一老政治家の回想』(一九七五年、中公文庫版)
- ・小谷保太郎『三幅対』(一九〇三年、吉川弘文館)
- ・堺利彦『堺利彦自伝』(一九七八年、中公文庫版)
- ・下出民義編刊『下出隼吉遺稿』(一九三二年)
- ・菅復三編『東京名所指南』(一八九〇年、泛舟楼)
- ・菅沼貞風『新日本の凶南の夢』(一九四二年、岩波文庫版)
- ・H・スペンサー『社会学之原理』(一八八五年、東京経済学講習会)
- ・関直彦『七十七年の回顧』(一九三二年、三省堂)
- ・瀬谷正二郎『布哇国移住民始末』(一八九三年、新井喜平)
- ・高田早苗述『半峰昔ばなし』(一九二七年、早稻田大学出版部)
- ・田山花袋『東京の三十年』(一九八一年、岩波文庫版)
- ・坪内逍遙『当世書生氣質』(一九三七年、岩波文庫版)
- ・徳島県教育委員会編刊『岡本氏自伝 窺北日誌』(一九六四年)
- ・徳富蘇峰『蘇峰自伝』(一九三五年、中央公論社)

—— 『我が交遊録』（一九三八年、中央公論社）
新渡戸稻造『余は如何にして基督教徒となりし乎』（一九五八年改版、岩波文庫版）

- ・長谷川如是閑『ある心の自叙伝』（一九五〇年、朝日新聞社）
- ・細井和喜蔵『女工哀史』（一九五四年、岩波文庫版）
- ・本富安四郎『地方生指針』（一八八七年、嵩山房）
- ・三上参次先生談旧速記録（『日本歴史』連載）
- ・宮崎湖処子『国民之友及日本人』（一八八八年、集成社）
- ・陸奥宗光『蹇蹇録』（一九四一年改版、岩波文庫版）
- ・E・S・モース『日本その日その日』2（一九七〇年、平凡社）
- ・山県悌三郎『児孫の為に余の生涯を語る』（一九八七年、弘隆社）
- ・山路愛山『基督教評論・日本人民史』（一九六六年、岩波文庫版）
- ・横瀬夜雨『太政官時代』（一九二九年、梓書房）
- ・若槻礼次郎『古風庵回顧録』（一九五〇年、読売新聞社）

(3) 全集、資料等

- ・『福沢諭吉全集』・『内村鑑三全集』・『中江兆民全集』・『陸羯南全集』
- ・『新渡戸稻造全集』・『田中正造全集』・『尾崎罇堂全集』・『清澤満之全集』
- ・『樗牛全集』
- ・『伊藤博文関係文書』・『徳富蘇峰関係文書』
- ・『谷干城遺稿』・『近衛篤磨日記』
- ・国民同盟会残務委員編『国民同盟会始末』（一九〇二年、政文社）
- ・明治十二年『秋田県治一覽概表』（一八八〇年、秋田県）
- ・明治二十年『東京府統計書』（一八八八年、東京府）
- ・明治二十年『函館区役所統計概表』（一八八八年、函館区役所）
- ・『〔愛知県英語学校一覽〕』（出版事情不明）

- ・ 東京大学三学部印行『哲学字彙』（一八八一年）
- ・ 『東京大学法理文三学部一覽』一～四（出版事情不明）
- ・ 静岡県学務課編『学務諸達類纂』（一八八五年）
- ・ 札幌農学校学芸会編『札幌農学校』（一九七五年、北海道大学出版会複製版）
- ・ 明治三十六年『秋田県師範学校一覽』（一九〇四年、秋田県師範学校）
- ・ 北海道庁殖民部『北海道移住者成蹟調』（一九〇五年）
- ・ 北海道庁殖民課編『北海道移住問答』（一八九一年、北海道庁）
- ・ 交詢社版『日本紳士録』

参考文献

1 政教社とメンバーに関するもの

- 青江舜二郎『竜の星座』（一九八〇年、中公文庫版）
- 赤松徹真「井上円了における国家と仏教」、『竜谷大学論集』第四二六号（一九八五年）
- 有山輝雄「雑誌「日本人」・「日本及日本人」の変遷」、日本近代史料研究会編刊『雑誌「日本人」・「日本及日本人」目次総覧』I（一九七七年）
- 猪狩史山『杉浦重剛先生小伝』（一九二九年、日本中学校同窓会出版部）
- 『杉浦重剛先生伝』（一九五四年、篠崎書林）
- 郁文館学園九十年史編集委員会編『郁文館学園九十年史』（一九七八年、郁文館学園）
- 郁文館学園百年史編集委員会編『郁文館学園百年史』（一九八九年、郁文館学園）
- 池田誠「内藤湖南の国民的使命感について」、立命館大学『人文科学研究所紀要』第三三号（一九六三年）
- 稻垣伸太郎編刊『雪嶺三宅先生の家系誕生地及び小伝』（一九三六年）
- 井上民雄「祖父 井上円了」、『井上円了研究』第一冊（一九八一年）
- 色川大吉編『岡倉天心 付志賀重昂』日本の名著三九（一九七〇年、中央公論社）
- 植手通有「『国民之友』・『日本人』」、『思想』第四五三号（一九六二年）
- 大久保利謙「三宅雪嶺」、向坂逸郎編『近代日本の思想家』（一九五四年、和光社）
- 『陸羯南・三宅雪嶺・徳富蘇峰』、『中央公論』第七〇巻第一号（一九五五年）
- 『（書評）三宅雪嶺著「同時代史」』、『史学雑誌』第六〇編第六号（一九五一年）
- 岡吉寿編刊『宮崎道正伝』（一九三一年）
- 尾形作吉「回顧五十余年の五もく寸史」、秋田県師範学校編刊『創立六十年』（一九三三年）
- 大町芳衛・猪狩又蔵編『杉浦重剛先生』（一九二四年、政教社）
- 加賀英治『内藤湖南ノート』（一九八七年、東方書店）
- 鹿野政直「ナシヨナリストたちの肖像」、日本の名著三七『陸羯南 三宅雪嶺』（一九七

一年、中央公論社）解説

- 桑原武夫「解説」、内藤湖南『日本文化史研究』下（一九七六年、講談社学術文庫版）
高野静子「徳富蘇峰と志賀重昂」、日本女子大学『史艸』第二五号（一九八四年）
後藤狂夫『我郷土の産める世界的先覚者志賀重昂先生』（一九三一年、警世社）
小村俊三郎「志賀矧川先生を憶ふ」、『日本及日本人』第一二五号（一九二七年）
佐藤能丸「国粹主義地理学の一考察」、早稻田大学『史観』第八六・八七冊（一九七三年）

——「高島炭坑問題と国粹主義」、『史観』第九二冊（一九七五年）

——「真善美の追求者」、『文』第六号（一九八七年）

——「政教社の成立」、『季刊日本思想史』第三〇号（一九八八年）

世良民平「井上円了の人間像」、『井上円了研究』第一冊（一九八一年）

高木宏夫「井上円了の宗教観」、『井上円了研究』第五号（一九八六年）

田中菊次郎「政教社のナシヨナリズムと井上円了の「護国愛理」」、高木宏夫編『井上円了の思想と行動』（一九八七年、東洋大学）

田中浩「三宅雪嶺『同時代史』を読む」、『図書』第四三七号（一九八六年）

秩父威仙「湖南先生の綴子時代」、『湖南』第二号（一九八二年）

千葉三郎『内藤湖南とその時代』（一九八六年、国書刊行会）

塚本三夫「政教社」における組織とイデオロギー」、『東京大学新聞研究所紀要』第一七号（一九六八年）

都築七郎『政教社の人びと』（一九七四年、行政通信社）

東洋大学編刊『東洋大学五十年史』（一九三七年）

東洋大学創立一〇〇年史編纂委員会編『東洋大学百年史』資料編Ⅰ上下（一九八八、八九九年、東洋大学）

東洋大学創立一〇〇周年記念論文集編纂委員会編『井上円了の教育理念』（一九八二年、東洋大学）

「名士の少年時代（内藤湖南）」、『報知新聞秋田版』（一九二九年）

中村和之雄「志賀重昂先生と其家系」、『風景』第一〇巻第六号（一九四三年）

中村不折「内藤君と私」、『書芸』第四巻第九号（一九三四年）

日本中学校『日本中学校五十年史』（一九三七年）

長谷川如是閑「三宅雪嶺の人と哲学」、『長谷川如是閑集』第一巻（一九八九年、岩波書

店、初出は一九五〇年)

林竹太郎編『故井上円了先生』(一九一九年、京北中学校校友会・京北実業学校同窓会)
原宗子「『亜細亜』の頃」、学習院大学東洋文化研究所『調査研究報告』第一〇号(一九八〇年)

針生清人「井上円了の思想」(一)〜(三)、『東洋大学史紀要』第四〜六号(一九八六年、八八年)

J・A・フォーゲル、井上裕正訳『内藤湖南』(一九八九年、平凡社)

藤本尚則『国師杉浦重剛先生』(一九五四年、敬愛会)

仏性誠太郎『杉浦重剛先生』(一九四二、立命館出版部)

松沢弘陽「政教社と札幌農学校」、『日本近代史における札幌農学校の研究』(一九八〇年、昭和五十四年度科学研究費成果報告書)

松本三之介「『日本及日本人』」、『文学』第二四卷第四号(一九五六年)

——「解題」、明治文学全集三七『政教社文学集』(一九八〇年、筑摩書房)

三田村泰助『内藤湖南』(一九七二年、中公新書)

三宅花圃「内藤博士の追憶」、『書芸』第四卷第九号(一九三四年)

本山幸彦「解説」、近代日本思想大系五『三宅雪嶺集』(一九七五年、筑摩書房)

——「生涯貫いた在野精神」、『文』第六号(一九八七年)

柳田泉『哲人三宅雪嶺先生』(一九五六年、実業之世界社)

渡辺克夫「帝国議会と大成会」、『日本学園高等学校研究紀要』第一号(一九八一年)

——「杉浦重剛の「国権論」」(一) (二)、同第二号(一九八三年)

——「杉浦重剛の精神形成」、同第三号(一九八六年)

——「明治後期のナシヨナリズム」、同右

——「杉浦重剛全集」補遺(一)」、同右

——「杉浦重剛の英国留学(一)」、同第四号(一九八八年)

——「杉浦重剛全集」補遺(Ⅱ)」、同右

——「杉浦重剛の英国留学(二)」、同第五号(一九九〇年)

※ 政教社及びそのメンバーに関する参考文献一覧としては、明治文学全集三七『政教社文学集』所収の佐藤能丸編「参考文献」が最も網羅的なものである。

2 その他

- ハンナ・アーレント、大島通義ほか訳『全体主義の起源』二（一九七二年、みすず書房）
- 愛知県教育委員会編刊『愛知県教育史』第三卷（一九七三年）
- 青木保『文化の否定性』（一九八八年、中央公論社）
- 赤沼三郎『菅沼貞風』（一九四一年、博文館）
- 秋田県師範学校編刊『創立六十年』（一九三三年）
- 秋田大学教育学部創立百周年記念会編刊『創立百年史』（一九七三年）
- 秋山ひさ編『フェノロサの社会学講義』（一九八二年、神戸女学院大学研究所）
- 浅井清「ジャーナリズム発展の意味」、『文学』第五四卷第八号（一九八六年）
- 朝日新聞社史編集室編『村山龍平伝』（一九五三年、朝日新聞社）
- 『上野理一伝』（一九五九年、朝日新聞社）
- 飛鳥井雅道編『国民文化の形成』（一九八四年、筑摩書房）
- 麻生三郎『竜の軌跡』第一部（一九七六年、ラテイス）
- 麻生誠『大学と人材養成』（一九七〇年、中公新書）
- 麻生義輝『近世日本哲学史』（一九四二年、近藤書店）
- 阿部恒久「松隈内閣下における進歩党の非盲従運動」、『早稻田大学史記要』第二二卷（一九八九年）
- 天野郁夫『試験の社会史』（一九八三年、東京大学出版会）
- 『近代日本高等教育研究』（一九八九年、玉川大学出版部）
- 荒瀬豊「日本における近代出版業の確立過程」、東京大学『新聞研究所紀要』第二二号（一九七三年）
- 有泉貞夫『星亨』（一九八三年、朝日新聞社）
- 有山輝雄「言論の商業化」、『コミュニケーション紀要』第四輯（一九八六年）
- 安世舟「明治初期におけるドイツ国家思想の受容に関する一考察」、『日本における西欧政治思想』（一九七六年、岩波書店）
- 安在邦夫「一八八七年における国民的要求の位相」、『歴史評論』第四五二号（一九八七年）
- 飯塚一幸「「対外硬」派・憲政本党基盤の変容」、山本四郎編『近代日本の政党と官僚』（一九九一年、東京創元社）

- 飯塚浩二『国土と国民』（一九四四年、古今書院）
- 家永三郎『植木枝盛研究』（一九六〇年、岩波書店）
- 池田英俊『明治の新仏教運動』（一九七六年、吉川弘文館）
- 池田元『長谷川如是閑「国家思想」の研究』（一九八一年、雄山閣出版）
- 池辺一郎・富永健一『池辺三山』（一九八九年、みすず書房）
- 石井寛治『日清戦後経営』、岩波講座『日本歴史』一六近代三（一九七六年、岩波書店）
- 石川幹明『福沢諭吉伝』第三卷（一九三二年、岩波書店）
- 石川県教育史編さん委員会編『石川県教育史』第一卷（一九七四年、石川県教育委員会）
- 石田一良『生活と思想』、伊東多三郎編『国民生活史研究』三（一九五八年、吉川弘文館）
- 磯田光一『鹿鳴館の系譜』（一九八三年、文藝春秋）
- 『遊民』的知識人の水脈』、『文学』第五四卷第八号（一九八六年）
- 板垣退助監修『自由党史』中（一九五八年、岩波文庫版）
- 伊東俊太郎『文明の進化と日本の役割』、『理想』第六〇三号（一九八三年）
- 伊藤整『日本文壇史』二（一九五四年、講談社）
- 伊藤痴遊全集第一五巻『国会開設政党史』（一九三〇年、平凡社）
- 伊東和三郎編刊『岸清一伝』（一九三九年、岸同門会）
- 井上馨侯伝記編纂会編刊『世外井上公伝』第三卷（一九三三年、内外書籍）
- 井上清『条約改正』（一九五五年、岩波新書）
- 猪瀬直樹『ミカドの肖像』（一九八六年、小学館）
- 今井一良『加賀における英学・フランス学の展開』、『稿本加賀洋学資料』（一九八六年、日本英学史学会北陸支部）
- 弥永光長『明治前期のある地方書店の売上帳簿』、弥永光長著作集四『明治時代の出版と人』（一九八二年、日外アソシエーツ）
- 入江寅次『邦人海外発展史』上巻（一九三六年、海外邦人史料会）
- 入沢達吉『赤門懐古』（一九四五年、生活社）
- 色川大吉『明治二十年の文化』、岩波講座『日本歴史』一七近代四（一九六二年、岩波書店）
- 編『岡倉天心 付志賀重昂』日本の名著三九（一九七〇年、中央公論社）
- 『明治の文化』（一九七〇年、岩波書店）

—— 「日本のナシヨナリズム」、岩波講座『日本歴史』一七近代四（一九七六年、岩波書店）

—— 『自由民権』（一九八一年、岩波新書）

岩井忠熊『明治国家主義思想史研究』（一九七二年、青木書店）

岩田龍子『改訂増補版 学歴主義の発展構造』（一九八八年、日本評論社）

植手通有編『徳富蘇峰集』明治文学全集三四（一九七四年、筑摩書房）

—— 「平民主義と国民主義」、岩波講座『日本歴史』一六近代三（一九七六年、岩波書店）

—— 「解説」、近代思想大系四『陸羯南集』（一九八七年、筑摩書房）

上山春平『日本の思想』（一九七一年、サイマル出版会）

上山満之進監修『都筑馨六伝』（一九二六年、馨光会）

宇喜田敬介『明治期日本人の自然観』、同志社女子大学『学術研究年報』第二五巻Ⅰ（一九七四年）

—— 「明治期日本人の自然観の比較文学的研究」、同第二六巻Ⅰ（一九七五年）

内田芳明『地理学考と風景の現象学』、『歴史と社会』第七号（一九八六年）

内田義彦『日本資本主義の思想像』（一九六七年、岩波書店）

宇野俊一『日清・日露』日本の歴史二六（一九七六年、小学館）

鵜浦裕『近代日本における社会ダーウィニズムの受容と展開』、講座『進化』二（一九九一年、東京大学出版会）

榎本守恵『北海道開拓精神の形成』（一九七六年、雄山閣出版）

江村栄一『自由民権運動とその思想』、岩波講座『日本歴史』一五近代二（一九七六年、岩波書店）

大川茂雄・南茂樹編『国学者伝記集成』第二巻（一九三九年、国本出版社）

大久保利謙『明治十四年の政変』、大久保利謙歴史著作集2『明治国家の形成』（一九八六年、吉川弘文館）

大澤博明『天津条約体制の形成と崩壊 一八八五・九四』（一）、東京大学『社会科学研

究』第四三巻第三号（一九九一年）

太田雅夫編『桐生悠々自伝』（一九八〇年、伝統と現代社）

大津淳一郎『大日本憲政史』第四巻（一九二七年、宝文館）

大塚三七雄『新版 明治維新と独逸思想』（一九七七年、長崎出版）

大濱徹也『明治の墓標』（一九七〇年、秀英出版）

——『明治キリスト教会史の研究』（一九七九年、吉川弘文館）

大林正昭「教導職制改革運動における国民啓蒙の論理」、『日本の教育史学』第二九集（一九八六年）

大村弘毅『坪内逍遙』（一九八七年新装版、吉川弘文館）

岡利郎「明治国家体制とジャーナリスト」、田中浩編『近代日本のジャーナリスト』（一九八七年、御茶の水書房）

岡本純『保安条令後日之夢』（一八八八年、『明治文化全集』第二一卷所収）

岡和田忠常「青年論と世代論」、『思想』第五一四号（一九六七年）

興津要『新聞雑誌発生事情』（一九八三年、角川書店）

荻原隆『中村敬宇と明治啓蒙思想』（一九八四年、早稲田大学出版部）

大日方純夫「立憲改進黨における鷗渡会の活動」、『早稲田大学史記要』第一五卷（一九八二年）

E・H・カー、大窪愿二訳『ナシヨナリズムの発展』（一九五二年、みすず書房）

海後宗臣『西村茂樹 杉浦重剛』（一九三七年、北海出版社）

梶田明宏「明治二十七年対外硬運動と徳富蘇峰」、『日本歴史』第四二四号（一九八三年）

——「帝国議會開設以前における徳富蘇峰の政治構想」、同右第四五三号（一九八六年）

柏原祐泉『日本仏教史 近代』（一九九〇年、吉川弘文館）

桂寿一「『哲学会』と『哲学雑誌』」、『日本学士院紀要』第四〇巻第三号（一九八五年）

加藤周一『日本文学史序説』下、加藤周一著作集五（一九八〇年、平凡社）

加藤高明伯伝編纂委員会編刊『加藤高明伝』上（一九二九年）

加藤典洋『日本風景論』（一九九〇年、講談社）

加藤秀俊「明治二〇年代ナシヨナリズムとコミュニケーション」、坂田吉雄編『明治前半期のナシヨナリズム』（一九五八年、未来社）

——・前田愛対談『明治メディア考』（一九八〇年、中央公論社）

金沢市役所編『金沢市史』学事編第二（一九七三年、名著出版）

鹿野政直「『太陽』」、「『思想』第四五〇号（一九六一年）」

- 「一民権私塾の軌跡」、『思想』第五三六号（一九六九年）
 「臣民・市民・国民」、『近代日本政治思想史』第一卷（一九七一年、有斐閣）
 『日本近代化の思想』（一九七二年、研究社）
 「明治時代の思想」「大正・昭和の思想」、石田一良編『思想史』Ⅱ（一九七六年、山川出版社）
 亀井俊介『ナシヨナリズムの文学』（一九七一、研究社）
 『内村鑑三』（一九七七年、中公新書）
 「内村鑑三における「日本」」、『文学』第四七卷第一〇号（一九七九年）
 亀井秀雄「小さな大学の大きなドキュメント」、『文学』第五五卷第五号（一九八七年）
 唐沢富太郎『学生の歴史』（一九五五年、創文社）
 『日本人の履歴書』（一九五七年、読売新聞社）
 柄谷行人『日本近代文学の起源』（一九八〇年、講談社）
 河合栄治郎『明治思想史の一断面』（一九四一年、日本評論社）
 河合良成『明治の一青年像』（一九六九年、講談社）
 河西英道「明治青年史についてのノート」、『立命館文学』第五二二号（一九九一年）
 D・キーン『日本人の美意識』（一九九〇年、中央公論社）
 清原貞雄『明治時代思想史』（一九二一年、大鏡閣）
 錦城学園百年史編纂委員会編『錦城百年史』（一九八四年、錦城学園）
 久野昭「明治期における「哲学」の形成」、『日本学』第一四号（一九八九年）
 熊倉功夫「解説（二）」、日本近代思想大系二三『風俗・性』（一九九〇年、岩波書店）
 クリストイー、矢内原忠雄訳『奉天三十年』上下（一九八二年、岩波新書特装版）
 黒岩健『山書研究』二一（一九七六年、日本山書の会）
 ハンス・コーン、木村靖二訳「ナシヨナリズム」、ヒストリー・オブ・アイディアズ二八
 『国家への視座』（一九八八年、平凡社）
 高坂正顕『明治思想史』、『高坂正顕著作集』第七卷（一九六九年、理想社）
 高野静子『蘇峰とその時代』（一九八八年、中央公論社）
 河野磐州伝編纂会編『河野磐州伝』下巻（一九二三年、河野磐州伝刊行会）
 故阪谷子爵記念事業会編刊『阪谷芳郎伝』（一九五一年）
 小寺正一「陸羯南の「国民旨義」」、『京都教育大学紀要』A第四六号（一九七五年）
 後藤朝太郎『支那の風景と庭園』（一九二八年、雄山閣）

- 故伯爵山本海軍大将伝記編纂会編『伯爵山本権兵衛伝』上巻（一九六八年、原書房版）
- 小林一三『逸翁自叙伝』（一九五三年、産業経済新聞社）
- 小林宏吉編『新天津川町史』（一九六六年、天津川町役場）
- 小牧治『国家の近代化と哲学』（一九七八年、御茶の水書房）
- 小山文雄『陸羯南』（一九九〇年、みすず書房）
- 佐伯有清『札幌農学校と英学』、『北大百年史』通説（一九八二年、ぎょうせい）
- 坂井雄吉『近衛篤磨日記と明治三十年代の対外硬派』、『国家学会雑誌』第八三卷第三・四号（一九七〇年）
- 阪本健一『丸山作楽と福沢諭吉』、『国学院雑誌』第六四卷第五・六号（一九六三年）
- 坂本多加雄『山路愛山』（一九八八年、吉川弘文館）
- 酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』（一九七八年、東京大学出版会）
- 佐々克堂先生遺稿刊行会編『佐々克堂先生遺稿』（一九三六年、改造社）
- 佐々木隆『第一次松方内閣期の新聞操縦問題』東京大学『新聞研究所紀要』第三二号（一九八三年）
- 『明治時代の政治的コミュニケーション』、同右第三二号（一九八四年）
- 札幌市教育委員会編『新札幌市史』第七巻史料編二（一九八六年、札幌市）
- 佐藤能丸『国民意識の形成』、鹿野政直ほか編『近代日本の統合と抵抗』一（一九八二年、日本評論社）
- 『大日本文明協会試論』、『早稲田大学史記要』第二二巻（一九八九年）
- 佐野一夫『静岡県下における国会開設前夜の政治活動素描』、『静岡県近代史研究』第一〇号（一九八四年）
- 三省堂編刊『父の書斎』（一九四三年）
- 山陽新聞百年史編集委員会編『山陽新聞百年史』（一九七九年、山陽新聞社）
- ヴォルフガング・シヴェルブシュ、初見基訳『知識人の黄昏』（一九九〇年、法政大学出版局）
- 柴崎力栄『日清戦争を契機とする徳富蘇峰の転換について』、『大阪工業大学紀要』第三六巻第一号（一九九一年）
- 斯文会編刊『斯文六十年史』（一九二九年）
- 島田厚『「国民之友」と純文学理念』、『文学』第三〇巻第一号（一九六二年）
- 清水幾太郎『コントとスペンサー』、『世界の名著三六』『コント スペンサー』（一九七〇）

年、中央公論社)

鯨光百年史編集委員会編『鯨光百年史』(一九七七年、愛知一中(旭高校)創立百年祭実行委員会)

シユヴェーグラ、谷川徹三・松村一人訳『西洋哲学史』下巻(一九五八年改版、岩波文庫版)

B・I・シユオルツ、平野健一郎訳『中国の近代化と知識人』(一九七八年、東京大学出版会)

新谷恭明「東京大学予備門成立過程の研究」、『東京大学史紀要』第三号(一九八〇年)
新保邦寛「へ郊外」像の発見にそって」、『文学』第五四卷第八号(一九八六年)

『ジンメル著作集』一二(一九七六年、白水社)

菅井鳳展「日露戦争時の第一高等学校」、『立命館文学』第五一〇号(一九八九年)

杉原四郎「フェノロサの東京大学講義」、『季刊社会思想』第二卷第四号(一九七二年)

鈴木範久「内村鑑三とその時代」(一九七五年、日本基督教団出版局)

鈴木三八男『「昌平黌」物語』(一九七三年、斯文会)

M・W・ステイール「議会の政治の誕生」、坂野潤治・宮地正人編『日本近代史における転換期の研究』(一九八五年、山川出版社)

濟々黌百年史編集委員会編『濟々黌百年史』(一九八二年、濟々黌百周年記念事業会)

瀬沼茂樹編『明治哲学思想集』明治文学全集八〇(一九七四年、筑摩書房)

千田稔「「風景」のナシヨナリズム」、『奈良女子大学地理学研究报告』Ⅲ(一九八八年)

惣郷正明・飛田良文『明治のことば辞典』(一九八六年、東京堂出版)

添田知道『演歌の明治大正史』(一九八二年、刀水書房)

園田英弘「(近現代)五」、『史学雑誌』第九三編第五号(一九八四年)

蘇峰会編刊『想い出の蘇峰先生』(一九六九年)

- 大学史編纂委員会編『東亜同文書館大学七十年史』（一九八二年、滬友会）
- 高嶋米峰『高嶋米峰自叙伝』（一九五〇年、学風書院）
- 高根正昭『日本の政治エリート』（一九七六年、中公新書）
- 高橋克三『近世鹿角学統考』（一九七五年、私家版）
- 高橋真司「加藤弘之日記を読む」、『私学研修』第一一三号（一九八九年）
- 竹内好『方法としてのアジア』（一九七八年、創樹社）
- 武内洋『立志・苦学・出世』（一九九一年、講談社現代新書）
- 竹越与三郎『南国記』（一九四二年、日本評論社）
- 武田清子編『日本文化のかくれた形』（一九八四年、岩波書店）
- 多田好問編『岩倉公実記』下巻（一九〇六年、皇后宮職蔵版）
- 田中彰「札幌農学校と米欧文化」、『北大百年史』通説（一九八二年、ぎょうせい）
- 田中浩編『近代日本におけるジャーナリズムの政治的機能』（一九八二年、御茶の水書房）
- 谷本芳郎「神田学生街の発生と変遷について」、『法政』第一〇巻第四号（一九八三）
- 趙景達「朝鮮近代のナシヨナリズムと文明」、『思想』第八〇八号（一九九一年）
- 千代田区役所編刊『千代田区史』中巻（一九六〇年）
- 槌田満文『明治大正の新語・流行語』（一九八三年、角川書店）
- 筒井清忠『昭和期日本の構造』（一九八四年、有斐閣）
- 坪内稔典『正岡子規』（一九九一年、リブポート）
- 坪谷善四郎『大橋佐平翁』（一九七四年、栗田出版会）
- 鶴見俊輔「コミュニケーション史へのおぼえがき」、『講座コミュニケーション史』二（一九七三年、研究社）
- 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』通史一（一九八四年、東京大学）
- 同志社大学人文科学研究所編『民友社の研究』（一九七七年、雄山閣出版）
- 十川信介「故郷・他界」、『文学』第五三巻第一号（一九八五年）
- 利谷信義「日本資本主義と法学エリート」、『思想』第四九六号（一九六五年）
- 富田仁『鹿鳴館』（一九八四年、白水社）
- 富永健一「日本の近代化と欧米の社会学思想」、『思想』第八〇八号（一九九一年）
- 外山滋比古『近代読者論』（一九六九年、みすず書房）
- 永木千代治編『新潟県政党史』（一九三五年、新潟県政党史刊行会）

中野一夫「正岡子規とナシヨナリズム」、『文学』第五二巻第九号（一九八四年）
長野県教育史刊行会編刊『長野県教育史』第一巻（一九七八年）

長野高校八十年史刊行会編『八十年史』（一九八〇年、長野高校同窓会）

中村清二『田中館愛橋先生』（一九四三年、中央公論社）

中村正則「近代天皇制国家の確立」、原秀三郎ほか編『大系日本国家史』（一九七六年、東京大学出版会）

中村良夫『風景学入門』（一九八二年、中公新書）

中山茂『帝国大学の誕生』（一九七八年、中公新書）

新潟県編刊『新潟県史』資料編一五（一九八二年）

西園泉「明治後期におけるドイツ観の転換」、東京女子大学『史論』第四二集（一九八九年）

西田毅「「平民主義」から「自由帝国主義」へ」、年報政治学『近代日本の国家像』（一九八三年、岩波書店）

——「思想と哲学に支えられたジャーナリスト魂」、『文』第六号（一九八七年）

西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』（一九六六年、至文堂）

——『日本ジャーナリズム史研究』（一九八九年、みすず書房）

沼田哲「元田永孚と明治二二年条約改正反対運動」、『日本歴史』第四四四号（一九八五年）

ハーバースマス、細谷貞雄訳『理論と実践』（一九七五年、未来社）

ケネス・B・パイル、五十嵐暁郎訳『新世代の国家像』（一八八六年、社会思想社）

ハウスホーファー、佐藤荘一郎訳『太平洋地政学』（一九四二年、岩波書店）

ハクスリー、長野敬ほか編『進化とは何か』（一九六八年、講談社）

橋川文三『ナシヨナリズム』（一九七八年新装版、紀伊国屋書店）

——「岡倉天心の面影」、年報政治学『近代日本の国家像』（一九八三年、岩波書店）

橋本峰雄「形而上学を支える原理」、岩波講座哲学一八『日本の哲学』（一九七二年、岩波書店）

長谷川如是閑『スペンサー』（一九三九年、岩波書店）

（ドキュメント）「長谷川如是閑氏をかこんで」、東京大学『新聞研究所紀要』第二三号（一九六五年）

長谷川如是閑著作目録編集委員会編『長谷川如是閑』(一九八五年、中央大学出版部)
ハーバード・パッシン、国弘正雄訳『日本近代化と教育』(一九八〇年、サイマル出版
会)

林田亀太郎『日本政党史』上巻(一九二七年、大日本雄弁会講談社)

原口清『日本近代国家の形成』(一九六八年、岩波書店)

ジヨナサン・ハワード、山根正気ほか訳『ダーウィン』(一九九一年、未来社)

ハワイ日本人移民史刊行委員会編『ハワイ日本人移民史』(一九六四年、布哇日系人連合

協会)

坂野潤治「『東洋盟主論』と『脱亜入欧論』」、佐藤誠三郎・R・ディングマン編『近代
日本の対外態度』(一九七四年、東京大学出版会)

『明治・思想の実像』(一九七七年、創文社)

——・宮地正人編『日本近代史における転換期の研究』(一九八五年、山川出版社)
——『近代日本の出発』大系日本の歴史一三(一九八九年、小学館)

檜山幸夫「日清開戦と国内世論」(上)、『中京法学』第二二巻第二号(一九八八年)

平川祐弘『進歩がまだ希望であった頃』(一九八四年、新潮社)

平野一・山田博光編『民友社文学の研究』(一九八五年、三一書房)

平沼騏一郎回顧録編集委員会編刊『平沼騏一郎回顧録』(一九五五年)

広瀬玲子「興亜思想から経済侵略主義へ」、『近代日本研究』第六巻(一九九〇年)

フーコー、田村俣訳『監獄の誕生』(一九七七年、新潮社)

福岡県立明善高等学校編刊『明善校九十年史』(一九七〇年)

藤田省三『第二版 天皇制国家の支配原理』(一九七八年、未来社)

藤田豊「内村鑑三と進化論」、『日本思想史学』第二二号(一九九〇年)

藤村道生『日清戦争』(一九七三年、岩波新書)

藤森照信『明治の東京計画』(一九八二年、岩波書店)

船山信一『日本の観念論者』(一九五六年、英宝社)

——『明治哲学史研究』(一九五九年、ミネルヴァ書房)

ハンス・ベルナー・プラール、山本尤訳『大学制度の社会史』(一九八八年、法政大学出

版局)

オギユスタン・ベルク、篠田勝英訳『日本の風景・西欧の景観』(一九九〇年、講談社)
ベルグソン、真方敬道訳『創造的進化』(一九七九年、岩波文庫版)

フオイヤーほか座談会「知識人・東と西」、『思想の科学』第二五号（一九六一年）
保坂清『フェノロサ』（一九八九年、河出書房新社）

穂積重行『明治一法学者の出発』（一九八八年、岩波書店）

北海道大学編『北大百年史』通説、札幌農学校史料（一）（一九八二年、ぎょうせい）

T・B・ボットモア、綿貫讓治訳『エリートと社会』（一九六五年、岩波書店）

S・ポラード『進歩の思想』（一九七一年、紀伊国屋書店）

本庄栄治郎「解題篇」、『社会経済論』（一九四一年、日本評論社）

本田逸夫「陸羯南の政治思想」（一）、東北大学『法学』第五一卷第一号（一九八七年）

（二）、（三）同第五二卷第二号（一九八八年）

前田愛『幻景の明治』（一九七八年、朝日新聞社）

槇林滉二「H・スペンサー哲学受容の様相」、『文学』第五三巻第一一号（一九八五年）

増田義一『青年処世訓』（一九二五年、実業之日本社）

増淵龍夫『歴史家の同時代史的考察について』（一九八三年、岩波書店）

升味準之輔『日本政党史論』第一、二巻（一九六五、六年、東京大学出版会）

松浦玲『明治の海舟とアジア』（一九八七年、岩波書店）

松尾尊允「大正デモクラシー」、直木孝次郎ほか編『近代日本をどうみるか』（一九六

七、塙書房）

松隈俊子『新渡戸稲造』（一九六九年、みすず書房）

松崎欣一「明治十年代前期における慶応義塾の熟生生活」（上）、『史学』第五二巻第三

・四号、同（下）、同第五三巻第一号（いずれも一九八三年）

松沢弘陽「西欧の文明論と日本の文明論」、徳永恂編『社会思想史』（一九八〇年、弘文

堂）

——「（書評）大濱徹也著『明治キリスト教会史の研究』（『日本宗教史研究年報

』四（一九八一年、佼成出版社）

——「文明論における「始造」「独立」（一）、『北大法学論集』第三一巻第三・

四号Ⅱ（一九八一年）、同（二）、同第三三巻第三号（一九八二年）

——『日本政治思想』（一九八九年、放送大学教育振興会）

——「札幌農学校・トルストイ・日露戦争」、『北大法学論集』第三九巻第五・六号

下巻（一九八九年）

——「社会契約から文明史へ」、同右第四〇巻第五・六号下巻（一九九〇年）

- 「公議輿論と討論のあいだ」、同右第四一巻第五・六号（一九九一年）
- 松田宏一郎 「政論記者」陸羯南の成立」、東京都立大学『法学会雑誌』第二八巻第一号（一九八七年）
- 「陸羯南における《政論》の方法と明治二〇年代の《政治社会》」（一九九〇年東京都立大学提出博士論文、未刊行）
- 松田達郎 『集団の科学』（一九八八年、講談社）
- 松田道雄 『日本知識人の思想』（一九六五年、筑摩書房）
- 松永昌三 「無署名論説認定の方法と基準」（『中江兆民全集』第一四巻（一九八五年、岩波書店））
- 松本健一 『挾撃される現代史』（一九八三年、筑摩書房）
- 松本三之介 「天皇制国家像の一断面」、年報政治学『近代日本の国家像』（一九八三年、岩波書店）
- 間庭充幸 『日本の集団の社会学』（一九九〇年、河出書房新社）
- 丸山真男 「福沢諭吉の哲学」、『国家学会雑誌』第六一巻第三号（一九四七年）
- 「解題」、『福沢諭吉選集』第四巻（一九五二年）
- 『増補版現代政治の思想と行動』（一九六四年、未来社）
- 『戦中と戦後の間』（一九七六年、みずず書房）。
- 「思想史の方法を模索して」、名古屋大学『法学論集』第七七号（一九七八年）
- 丸山正彦編刊『丸山作楽伝』（一九九九年）
- マンハイム、鈴木二郎訳『イデオロギーとユートピア』（一九六八年、未来社）
- 御厨貴『首都計画の政治』（一九八四年、山川出版社）
- 水田洋『知の商人』（一九八五年、筑摩書房）
- 『知の風景』（一九八八年、筑摩書房）
- 三田博雄『山の思想史』（一九七三年、岩波新書）
- 三谷太一郎 「日本近代化とハーバード・スペンサー」、『二つの戦後』（一九八八年、筑摩書房、初出は一九八一年）
- 三谷博 「明治後半期における東京帝国大学と社会移動」（上）、『東京大学史紀要』第一号（一九七八年）
- 三井倉庫編刊『三井倉庫五十年史』（一九六一年）
- 南鷹次郎先生伝記編纂委員会編刊『南鷹次郎』（一九五八年）

源了円「徳富蘇峰と有賀長雄におけるスペンサーの社会思想の受容」、東北大学『日本文
化研究所研究報告』第一四集（一九七八年）

宮川透『近代日本の哲学 増補版』（一九六二年、勁草書房）

——・土方和雄『現代日本思想史』（一九七一年、青木書店）

三宅花圃「内藤博士の追憶」、『書芸』第四卷第九号（一九三四年）

三宅桃子「福本日南論」、『季刊日本思想史』第三〇号（一九八八年）

宮武外骨・西田長寿編『明治新聞雑誌関係者列伝』（一九八五年、みすず書房）

ミルズ、鵜飼信成ほか訳『パワー・エリート』上下（一九六九年、東京大学出版会）

村瀬信一「吏党」大成会の動向」、『日本歴史』第四五四号（一九八六年）

——「第一議会と自由党」、『史学雑誌』第九五編第二号（一九八六年）

——「明治二〇〜三〇年代政治史研究の現状と課題」、年報近代日本研究一〇『近代
日本研究の検討と課題』（一九八八年、山川出版社）

明治功臣録刊行会編輯局編『明治功臣録』地の巻（一九一八年、明治功臣録刊行会）

本山幸彦『明治思想の形成』（一九六九年、福村出版）

森谷秀亮「条約改正」、岩波講座日本歴史（一九三四年、岩波書店）

屋井鍋七編刊『山高水長録』（一九三五年、長岡中学校同窓会）

安岡昭男「東邦協会についての基礎的研究」、『法政大学文学部紀要』第二二号（一九七
七年）

——「東邦協会と副島種臣」、『政治経済史学』第一六九号（一九八〇年）

八杉龍一『近代進化思想史』（一九七二年、中央公論社）

——「進化概念の成立について」、『理想』第六〇三号（一九八三年）

——『進化論の歴史』（一九六九年、岩波書店）

——『ダーウインを読む』（一九八九年、岩波書店）

保田与重郎『風景と歴史』（一九四二年、天理時報社）

安丸良夫『日本ナショナリズムの前世』（一九七七年、朝日新聞社）

柳田泉編『民友社文学集』明治文学全集三六（一九七〇年、筑摩書房）

柳田国男『明治大正史世相編』（一九三一年、朝日新聞社）

柳田国男ほか座談会「進歩 保守 反動」、『展望』第四九号（一九五〇年）

矢野暢『日本の南洋史観』（一九七九年、中公新書）

山口一之「陸羯南の外政論」、『駒沢史学』第三五号（一九八六年）

- 山口静一『フェノロサ』上（一九八二年、三省堂）
- 山口洋児「明治期におけるミクロネシア関係文献」、『参考書誌研究』第三二号（一九八六年）、同追録、同第三五号（一九八九年）
- 山下重一「明治初期におけるスペインサーの受容」、年報政治学『日本における西欧政治思想』（一九七六年、岩波書店）
- 『スペインサーと近代日本』（一九八三年、御茶の水書房）
- 「フェノロサの東京大学教授時代」、『国学院法学』第一二巻第四号（一九七五年）
- 山田央子「ブルンチユリと近代日本政治思想」（上）、東京都立大学『法学会雑誌』第三二巻第二号（一九九一年）
- 山室信一「〔近現代〕六」、『史学雑誌』第九二編第五号（一九八三年）。のち、『近代日本の知と政治』（一九八五年、木鐸社）に収録。
- 『法制官僚の時代』（一九八四年、木鐸社）
- 『近代日本の知と政治』（一九八五年、木鐸社）
- 「解説」、日本近代思想大系一『言論とメディア』（一九九〇年、岩波書店）
- 「国民国家・日本の発現」、『人文学報』第六七号（一九九〇年）
- 山本四郎『初期政友会の研究』（一九七五年、清文堂出版）
- 山本武利『新聞と民衆』（一九七八年、紀伊国屋書店）
- 『近代日本の新聞読者層』（一九八一年、法政大学出版会）
- 『新聞記者の誕生』（一九九〇年、新曜社）
- 横山宏章『清末中国の青年群像』（一九八六年、三省堂）
- 吉馴明子『海老名弾正の政治思想』（一九八二年、東京大学出版会）
- 脇水鉄太郎『日本風景誌』（一九三九年、河出書房）
- 『日本風景の研究』（一九四三年、春陽堂）
- 和田守『近代日本と徳富蘇峰』（一九九〇年、御茶の水書房）
- 渡辺一民『ナシヨナリズムの両義性』（一九八四年、人文書院）
- 渡辺和靖『明治思想史』（一九七八年、ペリかん社）
- 渡辺茂編『新稿伊達町史』（一九七二年、三一書房）
- 渡辺隆喜「大同団結運動と地方政情」、『駿台史学』第五〇号（一九八〇年）